

日本応用心理学会

29回大会

# 発表論文抄録集

1962

慶応義塾大学

# 大会日程表

前日：11月2日（金） 運営委員会午後3時より 於慶応義塾日吉記念館

第 1 日 11月3日(土)						第 2 日 11月4日(日)					
時 間	九・〇〇		一・〇〇		三・〇〇	九・〇〇	一・〇〇		三・〇〇		五・〇〇
	九・〇〇	九・三〇	一・〇〇	一・三〇			一・〇〇	一・三〇	三・〇〇	三・三〇	
第1室		一 般			一 般		社 会			文 化	自 由 集 会
第2室		人 格			人 格		発 達			発 達	
第3室	教 育		記 念 撮 影				教 育			相 職 業 指 導 談 導	
第4室	臨 床			臨 床			臨 床			検 査	
第5室	交 通						犯 罪			犯 罪	
第6室		産 業		産 業			産 人 間 工 業 学			産 業	

## は し が き

日本応用心理学会第 29 回大会は、昭和 37 年 11 月 3 日、4 日の両日にわたり、慶応義塾大学日吉校舎において開催されました。13 部門にわかれる発表の外、5 つの自由集會が開かれました。多数の参加者を得て、活発な討議が重ねられ、誠に盛大でありました。ここに論文抄録を編集して会員各位にお届け致します。

なお、編集にあたっては、次の方針をとりましたので御了承下さい。

- ① 字数の規定以上に多いものは後の頁にまとめること。(題目の前の※印で示してあります)
- ② アンダーラインなどは省くこと。
- ③ 発表者名の順序は抄録原稿のままとすること。
- ④ 題目、氏名は抄録原稿のままとすること。
- ⑤ 図表はすべて省くこと。
- ⑥ 共同研究者として、プログラムに掲載されていない者が附加されている場合はこれを省くこと。

日本応用心理学会第 29 回大会会長

林 銈 蔵



スポーツにおけるアガリの心理学的研究……九州大学	○成瀬 悟策……10
—ピストル選手への自律訓練法の適用—	同 上
(5) スポーツ選手のメンタル・トレーニング	
スポーツ適性のための S. P. I. 作成試案……都立両国高等学校	○飯田 颯男……11
日本大学	○松井 三雄
”	杉本 功介
調息・調心に関する心理学的研究(7)……九州大学	○秋重 義治……11
”	山岡 哲男
”	松本 著基
”	” 博智
”	高山 明亮
福岡県中央児童相談所	阿中 村昭之
調息・調心に関する心理学的研究(8)……福岡県中央児童相談所	○中村 昭之……12
	同 上
知的優秀児の特性に関する基礎研究(第12報告)……東京家政大学	森 重 敏……12
—内田クレペリン検査結果を通して—	港区立三光小学校
	○外村 近
色と形の部分内容視と人格的要因……信州大学	中川 大倫……13
Sensory Deprivation の研究(II)……東北大学	○佐藤 功……13
—とくに、Rorschach Performance を中心として—	北村 晴朗
	” 大山 正博
霊媒の成立過程について……防衛大学校	大谷 宗司……14
不安と intolerance of ambiguity について……茨城大学	林 正 邦……14
児童生徒の価値葛藤の解決基準について(第2報)……日本大学	長谷川 貢……15
Direct Living に就いて……信州大学	原 善 平……15

### III 発 達

顔と名前の記憶(1)……静岡大学	石川 透……16
—幼児、小学校1年生の場合—	
材料の違いによる児童の保存の概念の発達に対する一考察……東京学芸大学	湯本 信夫……17
視知覚の発達の研究 V……大阪市立大学	浅田 ミツ……17
—仮現運動について—	
HORN-HELLERSBERG テストによる正常児の発達の研究……白梅学園短期大学	○大脇 園子……18
	E. ヘロスベルグ
仙台市小児精神衛生相談所	大脇 三恵子
精神薄弱児の描画と色彩(4)……東京都立青島養護学校	○小出 進……18
—色彩概念の発達とその特性—	” 小串 里子
ろう児の社会・情緒性について(I)……東京教育大学	荒川 勇……19
”	○古厩 勝彦
乳児院に於けるホスピタリズムについて……都立八王子乳児院	二木 武……19
”	○鶴田 郁代
養育態度調査の結果について……日本大学	古賀 行義……20
”	” 安藤 公平
”	” 岡本 健健
”	○杉本 功介
青年期の対人関係に関する研究(II)……名古屋大学	久世 敏雄……20
—対人的行動と心理的離乳—	
女子大学生の一次的同一視……津田塾大学	八重島 建二……21

父-母-子関係の分析(8) —出生順位から見た母-子関係—	東京家政大学 東京都立大学 " 東京家政大学 津田塾大学	○島田俊秀……21 山下俊郎 三浦武敏 森重敏二 八重島建二
性成熟加速現象についての一考察	横浜市立岩崎中学校	岡田寅次……22
女兒の心身発達の相関に関する研究 第8報 思春期における成熟の個人差	お茶の水女子大学 "	○平井信義……22 千羽喜代子
女兒の心身発達の相関に関する研究 第9報 二次性徴の発育と精神成熟との関係	お茶の水女子大学 "	平井信義……23 ○千羽喜代子

**IV 教 育**

しつけの類型の研究 I	日本女子大学 "	児玉省……24 ○宮本美沙子 平野ひか
しつけの類型の研究 II	日本女子大学 "	児玉省……25 ○信江裕子 長島良子
しつけの類型の研究 III	日本女子大学 琉球大学	児玉省……25 ○宮里澄子
家庭生活のしつけ的意義	日本女子大学 " " 広島女子短期大学	○平野ひか……26 児玉省 宮本美沙子 信江裕子 鹿股寿美江
しつけと性格の関係	日本女子大学 " "	○増田美津子……26 児玉省 宮本美沙子
大学生の価値観 —両親の価値観との比較研究を中心に—	国際基督教大学 "	○藤田恵璽……27 モリス・E・ト ロイヤー
親子関係の心理—I 子のもつ親のイメージと親のもつ子のイメージ	日本女子大学 " "	○矢崎和子……27 児玉省 藤本紋子
親子関係の心理—II 親子のイメージのくいちがいと不安傾向の関連	日本女子大学 " "	○藤本紋子……28 児玉省 矢崎和子
僻地児童生徒の心理学的研究(II) 第12報 —出稼部落における親子関係について E—	岐阜大学	宮脇二郎……28
教師の資質とその適性について(III) —いわゆる教員タイプについて—	明治学院大学 "	○尾形健……29 小川勝治
教師の児童・生徒観の因子分析	福島大学	菊地章夫……29
音楽鑑賞指導の実験	共立女子大学 千葉市立登戸小学校	○玉岡忍……30 山田保
人間関係を指標とする問題児の指導 —学級集団内の役割の適合による—	港区立神明小学校 東京学芸大学	○佐藤喜美二……30 田中熊次郎
精神薄弱児のコミュニケーション(17) —情報の提示法とその効果—	東京都立青島養護学校 東京教育大学	○林邦雄……31 堅田明義
精神薄弱児のコミュニケーション(18) —情報文の把持に関する考察—	東京都立青島養護学校 " 東京教育大学	○井田範美……31 小出進 清水寛
精神薄弱者の社会適応に関する研究 —最近10年間に於ける精薄施設退園者の社会的予後に関する調査—	国立精神衛生研究所	桜井芳郎……32

精薄児教育に於ける生活訓練盤の使用効果について……………江東区立元加賀小学校	岸 本 英 男…………32
精神薄弱児の言語障害について……………江東区立平久小学校	高 橋 哲 也…………33
心理療法の学級における適用の研究……………田中教育研究所	○品川不二郎…………33
その 1 精神衛生からみた教育指導の実態調査	鈴 木 清 光
	安 富 利 光
心理療法の学級における適用の研究……………田中教育研究所	○安 富 利 光…………34
その 2 教師の心理療法への関心に関する実態調査	鈴 木 清 光
	品 川 不 二 郎
学習雑誌・その他雑誌が児童に及ぼす影響……………日本女子大学	児 玉 省…………34
	○南 坊 満 里 子
	浪 花 公 子 子
	齋 藤 公 子 子
	田 知 本 桂 子
映画による読話テストの試み(VII)……………東京教育大学	○尾 島 碩 心…………35
—無意音節の読み誤りについて—	中 野 善 達
スポーツ練習の中学生の心身に及ぼす影響(第2報)……………藤沢市立第一中学校	植 田 稔…………35
—精神健康度について—	
集団学習の実験的研究……………福島大学	古 旗 安 好…………36
—集団の優位性の問題—	

## V 臨 床

学業不振児の一事例研究……………青山学院大学	原 田 敦 子…………37
—家庭訪問による指導と研究—	
攻撃的な子どもの研究(I)……………東京教育大学	○深 谷 和 子…………38
1-1 研究の目的と計画	上 武 正 二 子
	大 崎 浩 子
攻撃的な子どもの研究(I)……………東京都立立川短期大学	○大 崎 浩 子…………38
1-2 親の養育行動との関係	東 京 教 育 大 学
	大 深 辰 子
	深 野 千 寿
攻撃的な子どもの研究(I)……………東京教育大学	小 林 芳 郎…………39
1-3 攻撃的行動のカテゴリーの検討	南 館 智 重
	野 武 重 文
	多 田 俊 夫
	○相 田 貞 夫
攻撃的な子どもの研究(I)……………東京教育大学	○松 原 達 哉…………39
1-4 遊戯療法による行動の変化	石 原 恒 好
	杉 原 一 昭
Camp 生活に於ける精薄児の行動について……………近 畿 大 学	山 田 久 喜…………40
成人精神薄弱者に関する諸問題……………東京都精神薄弱者	○吉 岡 伸…………40
—東京都精神薄弱者更生相談所で取扱ったケースを中 更生 相 談 所	心 として—
	杉 山 三 郎
その 1. ケースの概要	大 谷 澄 江
成人精神薄弱者に関する諸問題……………東京都精神薄弱者	○杉 山 三 郎…………41
—東京都精神薄弱者更生相談所で取扱った 更生 相 談 所	吉 岡 伸
ケースを中心として—	大 谷 澄 江
その 2. 鈴木ビネー式知能検査の通過率	
成人精神薄弱者に関する諸問題……………東京都精神薄弱者	○大 谷 澄 江…………41
—東京都精神薄弱者更生相談所で取扱った 更生 相 談 所	吉 岡 伸
ケースを中心として—	杉 山 三 郎
その 3. 標準一般職業適性検査結果と IQ との関係	
非行少年の研究(5)……………日本女子大学	児 玉 省…………42
—学童期における問題児—	○長 島 良 子

非行少年の研究(6)…………… —施設児—	日本女子大学 愛媛大学	○児 玉 省……42 越 智 信 子
対人関係の診断治療用具について……………	お茶の水女子大学 "	松 村 康 平……43 ○黒 田 淑 子
関係療法における小集団活動の一考察 II (その 1)	お茶の水女子大学 " " "	○鈴 木 隆 子……43 松 村 康 平 中 村 悦 子 黒 江 静 子 黒 田 淑 子
関係療法における小集団活動の一考察 II (その 2)	お茶の水女子大学	○中 村 悦 子……44 同 上
Horn-Hellersberg Test の臨床例	仙台市精神衛生相談所 東北大学附属病院 白梅学園短期大学	○大 脇 三 恵 子……44 新 井 清 三 郎 大 脇 園 子 E. ヘロスベルグ
ソンディ・テストに関する臨床心理学的研究(第3報) —自殺未遂行為の前後における衝動特徴—	水 口 病 院	大 塚 義 孝……45
Autogene training の臨床的効果(I)……………	群 馬 大 学	内 山 喜 久 雄……45
精神科病棟に於ける対人関係の研究 (第1報)……………	山梨日下部病院 "	松 井 紀 和……46 ○広 瀬 義 彦
ロールシャッハ・テストによる精神分裂病の研究(I) —その臨床像とM反応の関連性—	式 場 病 院 国立国府台病院	○岡 部 祥 平……46 早 川 幸 夫
縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病理学的研究 1. 目的と方法	千葉少年鑑別所 " " "	○桶 口 ひ ろ……47 佐 竹 隆 博 山 川 博 臣 原 山 晶 子 酒 川 靖 一 郎
縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病理学的研究 2. 統計的考察	千葉少年鑑別所	○原 山 晶 子……47 同 上
縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病理学的研究 3. 症例研究	千葉少年鑑別所	○佐 竹 隆 三……48 同 上
縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病理学的研究 4. 総括と結論	千葉少年鑑別所	○酒 川 靖 一 郎……48 同 上
帯回切除前後の Personality の変化に関する一考察……………	井之頭病院	塚 本 三 朗……49
心理テストによる Cingulectomy の効果の測定……………	名古屋大学 " 守山荘病院	○生 田 博 之……49 鈴 木 正 弥 川 島 保 之 助
Body image (特に Inside Color-image について)……………	東 北 大 学	大 山 正 博……50
出産に関する不安の研究……………	河野教育相談所	河 野 良 和……50
ロールシャッハ・カードの知覚過程の分析…………… —特に瞬間露出呈示法による色彩カードについて—	日 本 大 学	内 田 耀 一……51
面接者訓練に関する研究(II)……………	家庭裁判所調査官 研 修 所	岡 堂 哲 雄……51
精研式 SCT の判定特性曲線による検討……………	慶応義塾大学 "	印 東 太 郎……52 ○並 木 博

## VI 相 談

カウンセリンにおける訴えの独自性と一回性……………	新潟県立教育研究所	小 川 敏 通……53
問題児のカウンセリングへ役割演技の導入の仕方……………	東京少年鑑別所	台 利 夫……54



**Ⅶ 検 査**

人格検査における応答態度について……………	防 衛 大 学 校	岩 脇 三 良……………55
YG テキトと加算作業曲線型との関係 (作業性格検査 25)	東 京 都 職 業 適 性 相 談 所	板 倉 善 高……………56
性格の類型について(5)……………	人 間 科 学 研 究 所	○小 牧 玲 子……………56
	"	○安 勢 津 子……………56
	"	原 勝 一……………56
	東 京 工 業 大 学	坂 元 昂……………56
	"	山 貞 登……………56
性格の類型について(6)……………	人 間 科 学 研 究 所	○安 勢 津 子……………57
	"	○小 牧 玲 子……………57
	"	原 勝 一……………57
	東 京 工 業 大 学	坂 元 昂……………57
	"	山 貞 登……………57
鈴木びね一式個別知能測定法について(第1報) —その信頼性の検討—	東 京 都 品 川 児 童 相 談 所	○奥 村 水 沙 子……………57
	"	松 本 忠 久……………57
興味型テストの妥当性に関する研究(第3報) —好む人物と興味型偏差値との関係—	山 梨 大 学	石 川 七 五 三 二……………58

**Ⅷ 産 業**

職務評価に関する研究(I)……………	立 教 大 学	○水 口 礼 治……………59
—評定要素の基準化の試み—	"	小 水 流 勝 行……………59
職務評価に関する研究(II)……………	立 教 大 学	水 口 礼 治……………60
—評定要素の重みづけの検討—	"	○小 水 流 勝 行……………60
職場特性と適性 II……………	早 大 生 産 研 究 所	兼 子 宙……………60
	"	○田 崎 醇 之 助……………60
監督者の指導性に関する研究(3)……………	立 教 大 学	天 野 剛 三 郎……………61
管理監督者の判断力検査について……………	人 事 院	松 浦 健 児……………61
創造性に関する研究……………	東 洋 大 学	恩 田 彰……………62
—創造性を開発する研究管理—	"	"
管理職者と一般社員の職場意識の相違について……………	武 蔵 大 学	渡 辺 勉……………62
等現間隔法による「資本主義」に対する態度測定(I)……………	明 治 大 学 院	○松 井 寶 夫……………63
	人 事 院	寺 井 俊 健……………63
等現間隔法による「資本主義」に対する態度測定(II)……………	明 治 大 学 院	○寺 井 俊 健……………63
	"	松 井 寶 夫……………63
日米労働者の態度の比較研究(第1報告)……………	立 教 大 学	安 藤 瑞 夫……………64
企業体に関する心理学的研究 第4報……………	秋 山 精 鋼 株 式 会 社	○勝 倉 信 雄……………64
	日 本 大 学	浅 井 正 昭……………64
企業体に関する心理学的研究 第5報……………	日 本 大 学	○浅 井 正 昭……………65
	秋 山 精 鋼 株 式 会 社	勝 倉 信 雄……………65
広告に対する態度調査(1) 問題および目的……………	博 報 堂	○松 岡 洋 一 郎……………65
	"	志 津 野 知 文……………65
	"	小 熊 多 恵 子……………65
広告に対する態度調査(2) 結果の処理および結果の説明……………	博 報 堂	○小 熊 多 恵 子……………66
	"	志 津 野 知 文……………66
	"	松 岡 洋 一 郎……………66

広告に対する態度調査(3) まとめ	博 報 堂	○志津野知文	66
	"	松岡洋一郎	
	"	小熊多恵子	
テレビ広告効果の測定(I)	博 報 堂	金子泰雄	67
	"	○小館和隆	
	"	小長妻	
テレビ広告効果の測定(II)	堂 報 堂	小館和隆	67
	"	○金長妻	
	"	町田忠悠	
ステレオスコープの社標テストへの利用について	博 報 堂	町田忠悠	68
視野交替法による疲労測定を試み	日本大学	○岡本健	68
	東京教育大学	小保内虎夫	
	日本大学	山岡淳	
	白梅学園短期大学	大川雅司	
各種作業による疲労測定値(FI)の比較研究(一)	新潟県立教育所教育相談室	畔上久雄	69
反応時間と試行間隔	大阪府立公衆衛生 研究所	石橋富和	69
刺激と反応の対応と複雑反応時間	大阪府立公衆衛生 研究所	大谷璋	70
思考と動作の干渉に関する研究	労働科学研究所	秋庭信夫	70
キイ・パンチ作業の研究	労働科学研究所	○石原康久	71
	"	狩野広之	
ベルト作業者の態度	慶応義塾大学	○金子秀彬	71
	"	横山松三郎	
ベルトコンベア作業の実験的研究—第2報—	労働科学研究所	狩野広之	72

## IX 人 間 工 学

機械記号認識の研究	東京教育大学	小保内虎夫	73
(1) 研究の現況	"	○今井秀雄	
	"	松田隆夫	
	"	尾関育三	
	電気通信研究所	関口茂	
機械記号認識の研究	東京教育大学	小保内虎夫	74
(2) 分割文字の知覚	"	○松田隆夫	
	"	今井秀雄	
	"	尾関育三	
	電気通信研究所	関口茂	
機械記号認識の研究	東京教育大学	○尾関育三	74
(3) 文字形態の数理解析	"	小保内虎夫	
	"	今井秀雄	
	"	松田隆夫	
	電気通信研究所	関口茂	
機械認識のための言語研究	東京教育大学	○小保内虎夫	75
(7) 研究の現況	"	金子隆芳	
	"	永沢幸七	
機械認識のための言語研究	東京教育大学	小保内虎夫	75
(8) 機械記憶装置設計のための言語統計	"	永沢幸七	
	"	○金子隆芳	
機械認識のための言語研究	東京教育大学	○永沢幸七	76
(9) 品詞の統計	"	小保内虎夫	
	"	金子隆芳	

トラッキング動作の人間工学的研究—序論—	東京教育大学	小保内虎夫	76
"	"	金子隆芳	
"	"	○増山英太郎	
キイパンチ作業における一考察	慶応義塾大学	重田定義	77
"	"	佐久間章行	
"	"	○林喜男	
計器読取りに関する研究(8)	立教大学	○正田亘	77
—計器の評価方式についての人間工学的研究(その2)—	"	豊原恒男	
"	"	水口礼治	
"	"	磯部治平	
新幹線列車制御盤に関する人間工学的研究	国鉄労働科学研究室	清宮栄一	78

## X 交 通

自動車運転者の心理テスト(第2次研究)	福島医大	○丸山欣哉	79
(1) バックミラーによる遠近知覚と市員評定テスト	東北大学	大加藤正孝	
"	"	長塚康弘	80
自動車運転者の心理テスト(第2次研究)	東北大学	○長塚康弘	80
(2) 速度見越反応検査および重複作業反応検査	福島医大	丸山欣哉	
自動車運転者の心理テスト(第2次研究)	茨城大学	○菊地哲彦	80
(3) 人格検査テストバッテリーの試作とその成績	東北大学	北村晴朗	
ひき逃げ運転者の性格的特徴について	科学警察研究所	貝沼良行	81
交通事故原因の分析(2)	科学警察研究所	大塚博保	81
—酩酊によるひき逃げる事例二, 三—			
道交違反少年の PAT 適用	大阪少年鑑別所	菅俊夫	82
自動車運転態度検査(試案)の標準化について	富山少年鑑別所	十河一	82
第一報 Lie scale 設定の試み			
自動車運転免許取得後の運転技能の発達過程について	兵庫県警察本部	中尾勢津夫	83
日本の道路標識の情報伝達性について	科学警察研究所	小林実	83
心理的錯語現象について	国鉄労働科学研究室	鶴田正一	84

## XI 職 業 指 導

職業間における対人信頼度の差異について	近畿大学	広井甫	85
中学校卒業生の職業適応に関する事例研究	立教大学	○藤本喜八	86
"	"	牛窪浩	
"	"	土方文一郎	
日本職業指導協会		小松信重	
大学生の職業選択と価値観		北山雅子	86
大学生の職業人としての態度形成に関する基礎的研究(第5報)	金沢大学	○田中富士夫	87
—職業の適応尺度の再検討—	"	鈴木達也	
"	"	多田治夫	
大学生の職業人としての態度形成に関する基礎的研究(第4報)	金沢大学	○鈴木達也	87
—大学卒者の職務と在学中の学修科目並に課外活動について—	"	多田治夫	
"	"	田中富士夫	

## XII 社 会

団地児童の生活に関する一調査	大阪府立大学	○松原慶太郎	88
	帝塚山学院短期大学	沢井幸樹	
	関西学院大学	仲原晶子	

児童集団内における個人間の親和反発反応の偏倚傾向(3) —ダイアディック次元における社会的共感性の役割—	東京学芸大学	田中熊次郎	89
精薄児の証言の責任能力について(1)	東京都立青島養護学校 奈良家庭裁判所	○吉田辰雄 犬馬場晃	89
態度構造と購買行動(1) —保健薬使用に関する考察—	電通大阪支社	山本輝夫	90
テレビコマーシャルの心理的評価について(II)	大阪大学	前田嘉明	90
	"	難波精一郎	
	"	吉田光雄	
	万年社	○小阪久美	
主婦の生活時間とマスコミ接触との構造(調査報告)	セールス・プロモーション・ビューロー	田岡信夫	91
テレビ番組を中心とした媒体間の関係分析	早稲田大学生産研究所	○木下敏	91
	"	兼子宙	
夫婦の態度尺度作成の試み	日本大学	○妻倉昌太郎	92
	"	川口和男	
大学生の宗教的意識と宗教的態度	熊本大学	葛谷隆正	92
埼玉県民の生活意識〔II〕	埼玉大学	山根薫	93

### XIII 文 化

テレビ・ラジオCMの実験的研究(1) —テロップCMにおける呈示の語数と時間について—	順天堂大学 東京教育大学	○加賀秀夫 金子隆芳	94
	"	水野欽司	
	"	服部保田了	
	東京放送	上村平忠	
テレビ・ラジオCMの実験的研究(2) —ラジオのスポットCMの長さとの反復の効果—	東京教育大学	○服部政夫	95
	"	金子隆芳	
	"	水野欽司	
	順天堂大学	加賀秀夫	
	東京放送	久保田了	
	"	上村平忠	
テレビ・ラジオCMの実験的研究(3) —ことばの種類別効果と配列位置効果—	東京教育大学	○水野欽司	95
	"	金子隆芳	
	"	服部保田了	
	順天堂大学	加賀秀夫	
	東京放送	久保田了	
	"	上村平忠	
外国人留学生の日本における生活適応に関する一調査	東京教育大学	入谷敏男	96
舞踊におけるフォーラムの表現的意義について —静的なフォーラムによる表現とその観照—	日本大学 東京学芸大学	○松井三雄 渡辺江津	96
絵画における価値感情の問題	日本大学	岸上幸記	97
音の知覚恒常性の原理に基づく音響堂内の壁の構成方法	宇部短期大学	重永幸男	97

### XIV 犯 罪

少年鑑別所における処遇の研究 —現実場面の分析を中心として—	東京少年鑑別所	○中島武二	98
1. 問題と方法	"	台上利夫	
	"	大島功博	
	"	大山晃一	
	"	山田潤喜	
	"	佐藤和喜	

少年鑑別所における処遇の研究 —現実場面の分析を中心として—	東京少年鑑別所	○三橋潤二	99
2. 情報と認知構造の変容(その1)		同上	
少年鑑別所における処遇の研究 —現実場面の分析を中心として—	東京少年鑑別所	○佐藤和喜雄	99
2. 情報と認知構造の変容(その2)		同上	
少年鑑別所における処遇の研究 —現実場面の分析を中心として—	東京少年鑑別所	○上芝功博	100
3. 各寮の少年と処遇の特質		同上	
少年鑑別所における処遇の研究 —現実場面の分析を中心として—	東京少年鑑別所	○大島勲	100
4. 矯正機能としての処遇		同上	
少年鑑別所における処遇の研究 —現実場面の分析を中心として—	東京少年鑑別所	○山田晃一	101
5. SCT にみられる認知、態度の変化について		同上	
保護少年のものの考え方について(第1報) —非行に対する保護少年自身による動機づけと 自己の非行についての考え方—	大分少年鑑別所	市川定三	101
MMPI による非行少年の研究(第3報)	法務総合研究所	遠藤辰雄	102
	"	○安香宏	
少年受刑者の所内適応に関する研究(第2報) —(その1) 適応状態の縦時的考察—	信州大学	○新井康祐	102
	"	新海安彦	
	"	中川大倫	
	"	五十嵐斉一	
	"	長岡青遠	
少年受刑者の所内適応に関する研究(第2報) —(その2) 適応状態と環境その他の諸要因との関係—	信州大学	○長岡青遠	103
		同上	
少年受刑者の所内適応に関する研究(第2報) —(その3) G. P. 分析による適応状態推移の考察—	信州大学	○五十嵐斉一	103
		同上	
非行少年の SCT にみられた態度変化について	長野少年鑑別所	増田米男	104
	"	○南雲正義	
潜在非行と初発時期について	立教大学	山本晴雄	104
青年期非行の発生類型と現象類型	東北大学	安倍淳吉	105
交通事犯関係少年の心理諸特性について —粗暴非行少年との比較を中心として—	千葉少年鑑別所	○山川博臣	105
	"	佐竹隆三	
	"	原山晶子	
	"	酒川靖一郎	
	"	樋口ひろ	
性格異常(暴力)者の特殊治療	神明医院	赤川今朗	106
	国分寺三中	○岡田光生	
保護観察付執行猶予者の成行調査(第2報告)	法務総合研究所	中河原通之	106
	"	○小池健二	
仮出獄者の所在不明行動について	近畿地方更生 保護委員会	小山忠直	107
当事者証言と目撃者証言の比較内容分析 —役割意識と実験的証言—	科学警察研究所	○西村春夫	107
	"	佐伯茂雄	
虚偽発見における生理的反応に関する研究 2 —被検査者の構えについて—	科学警察研究所	○山下素邦	108
	"	今村義正	

## 1 本川博士の4色曲線に基く表色系

茨城大学 木村俊夫

本川博士の4色曲線即ちRYGB曲線を、YのR、Gへの解入により3色曲線化即ちR'G'B曲線化することの必要性・可能性・妥当性に就いては第28回大会に於いて述べたし、またR'G'B曲線より誘導した波長弁別閾曲線にいかにか近似しているか、またR'G'B曲線より算出された明るさ係数をR', G', Bに乗ずることにより得られるR'', G'', B'曲線から誘導した比視感度曲線が本来の測定法により得られた同種曲線に極めて近似していることに関しては日本心理学会第25回大会で紹介した。以上によれば本川博士の4色曲線より筆者の方法で誘導した3色曲線は基本反応曲線FRCであることが確定的である。

今回は、CIE色度図上に於ける色度弁別閾の歪みの修正を通じて得られたJuddやMacAdamの変換式から誘導したFRCや、CIE色度図上の2色型色覚者の色混同軌跡の収斂点を利用して誘導したPittやWrightのFRCと、上記のR'G'B曲線及びR''G''B'曲線とを比較し、両者がいかにか近似しているかを紹介する。

かくして、本川博士のRYGB曲線より誘導したR'G'B曲線はFRCであることが一層確定的となるであろう。然らば、これから更に誘導されるクロマティックネス・ダイヤグラムはUCSダイヤグラムである、と言えるし、またR'G'B曲線は優に一箇の表色系として今後の測色学界に顧みられてよいものと考えられる。

# I 一 般

## 2 E. E. G. と G. S. R. からみた音楽の聴きとり

お茶の水女子大学 渡辺俊男

これまで精神活動のいろいろなあり方を、G. S. R. を示標として実験的研究を進めてきたが、この度は更に E. E. G. を加え、主として音楽を聴き取る場合の様相を追求した。G. S. R. 及び E. E. G. が果して適確に脳活動の諸要素を示すという保証はなく、また精神活動はそれ程までに複雑である。G. S. R. 及び E. E. G. の実験方法は型の如く行ない、判定は主として観察によった。E. E. G. についても、波形分析及びその他の定量的方法を用いない。

**実験成績** リズミカルで活発な効果音楽を聴取した場合は、G. S. R. の発現が著しいのと同時に、 $\alpha$  波の発現が少ない。陰気な沈んだ効果音楽では、G. S. R. の変化は少なく、 $\alpha$  波の出現が多い。効果音楽をくり返し聴せた場合、G. S. R. の現われ方は途中においてやや増加する傾向をみるが、漸次減少してゆく。しかしながら、この場合、E. E. G. の変化は判然としなかった。そこで思考を伴う作業である暗算のくり返しを試みた。この場合、G. S. R. の変化は効果音楽の場合と同様減少したが、E. E. G. においては $\alpha$  波のブロックが減少してきた。次に聴取者の状態による聴き取りの変化を調べるために、平常時、催眠下及び興奮状態(カフェイン 100 mg を経口投与)で実験した。催眠下においては、特に音楽聴取の暗示を与えない限り、音楽による影響は少ない。また興奮状態の E. E. G. は、音楽によってあまり影響を受けないが、G. S. R. の発現は著しい。

モーツァルトの「EINE KLEINE NACHTMUSIK」は、複合三部形式であるが、被検者にこれを用いた場合、A の部分による G. S. R. の変化は常に同様に現われる。B の部分に対しては、実験の試行による差が認められたが、E. E. G. においては多くの場合、 $\alpha$  波の発現をみた。この場合でも同様に、G. S. R. の変化の少ない場合は $\alpha$  波が多く、G. S. R. の著しい場合は $\alpha$  波の発現が少ない。このことは A の部分から連続してきた聴き取り方が、ある場合には B の部分によって落ち着き、他の場合は新しい自発的な感興に向っているものと推察されて興味深い。かつて同一被検者について、約 1 年間にわたって、Tchaikovsky の Piano concerto No. 1 を聴取せしめた時、次第に理解度が深まり、その音楽を聴いた時は常に、全く一致した G. S. R. の変化を示すようになった。ことに楽曲の聴き始めより、ある程度楽曲の進んだ部分の方がその一致が著しい。B の部分による二様の変化は、こうした習熟の前過程であろう。また読譜と音楽聴取の場合、はじめの部分は読譜による G. S. R. の変化が殆らしいが、曲の後半にいたると、音楽聴取とその読譜とはよく一致している。以上一連の実験を総合すると、聴き取り方の変化及びそれによる記憶の過程がわかり、音楽学習のすすんでゆく状態の推察について示唆をうる。

## 3 脳波と反応時間 (1)

日本大学 ○山岡 淳 松井 三雄  
" 岡本 健 杉本 功介

感覚受容器が刺激を受け取つてから、奏効器がその刺激に対する反応をするまでの時間が反応時間であり、その一連の神経連絡の途中に脳髄という神経中枢が介在していることはいうまでもない。そして、この脳髄、ことに大脳の中で極めて複雑なノイロン連絡を経ていることも疑う余地がない。

他方、反応時間が被験者の態度や刺激の性質・強度などにより異ってくることも従来から知られている。このうち被験者の態度とは、主として大脳が、刺激の受容に対し〔興奮〕状態にあるかどうかということである。

光刺激を与えてから脳波の $\alpha$ 波が消失するまでの潜伏時および反応時間については、すでに 1941 年三田俊定氏が実験を行なっているが、大脳の興奮状態との関係については明確に述べていない。また、Lansing, R. W. (1959) らや Mirsky, A. F. (1961) らは大脳の興奮と反応時間との関係という観点から実験を試みたが、脳波、とくに $\alpha$ 波の出現 pattern と反応時間との間に十分密接な関連を見出すことはできなかった。

われわれは、従来行われたこれらの実験結果に、より密接な関係があるであろうことを予想し、次のような方法で実験を行なった。

**被験者** 体育学専攻の成人男女 7 名

**実験方法** 刺激：ブザー。脳波：前頭・頭頂・後頭の各単極誘導脳波を記録し、あわせて、左頭頂脳波を低周波自動帯域分析器に通して、8~13c/s の $\alpha$ 波と13~20c/s の $\beta$ 波との瞬時値を同時記録した。被験者の状態：坐位、閉眼。試行回数：(イ)  $\alpha$ 波がよく出現してしている時 (good  $\alpha$ ) と (ロ)  $\alpha$ 波がほとんど出現していない時 (poor  $\alpha$ ) に各 30 回ずつ、および (ハ)  $\alpha$ 波の出現状態に関係なく 50 回測定。

**結果** 1 例を挙げれば、good  $\alpha$  の時の平均値が 214ms SD 13.2, poor  $\alpha$  の時の平均値が 190, SD 17.5,  $\alpha$ 波と無関係に測定した値が平均 209, SD 23.7 である。他の 6 例もこれと全く同様の傾向を示しており、7 名とも good  $\alpha$  と poor  $\alpha$  との間には 5% 以下の危険率で有意な差が見られた。すなわち、脳波の $\alpha$ 波を示標とした場合に、大脳の興奮準位の高まっている時には反応時間は速いが、興奮準位が低い時には遅いことがわかった。

#### 4 タキストスコープのコピーテストへの利用について

その(1)注目率との関係について

博報堂 松沢 萌子

従来タキストスコープは言葉の認知閾の測定に多く用いられていたが最近現場でコピーの視覚的な値を測定するために用いられてきた。しかしその測定方法や測定尺度の設定に関しては極めて末分化な段階であり実用化には種々の問題が残されているという現状である。そこで我々はタキストスコープをコピーテストに利用するに先立って現状で考えられる測定尺度の考案を第一の研究目的としさらに得られた結果と注目率との関係を検討することを第二の目的とした。後者は関係ありという論文と関係なしという論文があり両者の関係に対し決定的なデータはまだ見だされていない。したがって後者はこれらの諸結果を検証するという意味も持っているのである。実験手続としては予め注目率のわかっているコピー9種を週刊誌から選びこれをタキストスコープによって呈示し見えたものまたは見えなかったものを被験者に記述させるという手法を用いた。なお呈示時間は1, 2, 4, 8, 16, 32, 62, 126, 251, 500 msecの10段階とした。

1. 測定尺度の考案……各呈示時毎に各要素に対する累積正認率曲線を求め、見えの推移に関するパターンを見出そうとした。第二の手法として阪大心理学研究室から発表された各要素の認知度およびその総和であるコピーの総認知度を求めた。第三として反応の一様性を見出すために各呈示時毎に各要素の見え方の相違度を求めた。これは欠長度の算定方式を仮に適用した。

2. 注目率との関係……四つの尺度を用いて注目率との関係をみたがいずれも正の関係は認めにくいという結果を得た。現段階ではなんともいえないが、これは注目率が習得把持再生という側面を扱っているのに対しこれらの尺度は認知という側面を扱っているのだからこのような結果となったのであろう。つまり、記憶にとって有利な手がかりを提供するコピーは注目率が高く、目立ちやすいコピーは認知度が高くなるのではないかという仮定的な推定が与えられた。

#### 5 女性服装の配色美に関する研究(1)

—白黒チェック柄の場合—

東京教育大学 金子 隆 芳  
横浜国立大学 ○藤井 千枝

目的 有彩色の調和について多くの実験が行われているが、それらは柄を含まない色彩同志に関するものである。衣服においては柄のあるものが多く、この場合、単純な色についての規則性が、そのまま適用できるかどうか疑問である。本研究は、この点を明らかにするための実験である。

実験1 注1細野によれば、有彩色において色彩の明度差の大きい配色ほど調和がよい。これは有彩色に関することで無彩色についてもこれが当てはまるかどうか、内外ともに研究が見当たらないので、なんとも云えない。これを明らかにするために本実験を行った。刺激は、マンセル value 1.5, 2, 3, 4, 5, 6, 9.5の注2 7段階の無彩色毛綾織スカート用生地(三星染工場で染色)を縮尺の $\frac{1}{2}$ の衣服形の上下に用いて作った無彩色相互の配色標本  $n(n-1)=42$ (個)である。被験者は横浜国立大学家政科の学生 55名。刺激標本を被験者に示し、調和の良否評定を行わせた。評定尺度は、調和が最よい、大層よい、可成りよい、ややよい、中立、やや悪い、……予備欄共合計11段階とし、1段の差に対し、1点の評点を与えた。昼間室内北窓光、1米の距離で観察させた。結果 上衣下衣の明度差を横軸、調和度評点をたて軸にとって関係を描くと明度差  $v. 0.5 \sim 8$  の間で、明度差が大になるにつれ、調和度が上昇する。それ故、前記細野が色彩明度差について言ったのと同じことが、本実験の無彩色明度差についてもいえる。一応は、有彩色の調和は、無彩色明度が基礎になるのである。なお、詳細にみると、明度差1以下は不調和、3はよい。白との配色は一般に調和がよいが、白を上衣にした方が一層評点が高いのは、衣服の配色の特徴といい得る。実験2 チェック上衣と無彩色下衣の配色。しま柄の太さ1.5mm, 3mm, 6mm 12mmの4種のテロン・綿混紡平織白黒チェックの各を上衣として固定し、下衣に前記7段階の無彩色を配置して28配色を得、これらをランダムに示し調和の良否評定をさせた。結果 実験1のように上衣と下衣との明度差と、評点との関係を求めればよいが、上衣のチェックの明度が複雑でそれができない。便宜上、近い方法で整理した。その結果、黒との調和が最もよく、次に白、次に中明度の無彩色の順になった。対比との関係の詳細は次回に述べる。

註1 細野尚志, カラーハーモニーの研究, 色彩研究 1954, vo 1.1 p.12~18, 1955, vo 1.2, p. 6~10

註2 小保内, 浅見, 心研, 1956, 393~399に掲載の33段階グレースケールにより比色の後 M. V. に換算



## 6 Lipps 方向錯視に関する実験

東京都立大学 今井省吾

長さが等しい平行線（主線,  $x, y$ ）それぞれの両端に長さが等しい別の平行線（副線）が附加（一方には時計廻りの副線  $x'$ , 他方には反時計廻りの副線  $y'$ , が附加）された屈折平行線の布置において, 主線  $x, y$  は必ずしも平行にみられず,  $x$  の傾斜方向は  $y$  のそれよりも相対的にゆるやかにみられる。(Lipps 方向錯視現象)

**目的** この錯視現象の基本的規定要因を解明するための第1段階として, ここでは, 刺激布置条件と方向錯視量との関係について組織的実験がなされ, optimum 条件が探索される。(なお, 第2段階としての基本的規定要因の実験的吟味については別の機会に発表の予定)

**条件・手続** 刺激布置条件——主線間の隔たり, 副線の長さ  $x', y'$  主線により構成される平行四辺形の内角のうち鋭角  $\theta$ , 副線  $x', y'$  の屈折角  $\alpha, \beta$ , 図形全体をそのままの配置で回転する条件. control 条件, 比較図形は主線のみでの布置. 錯視量は標準, 比較刺激の PSE の差. 極限法. 両眼視. 視察距離 1 m. 被験者 5 名.

**結果** (1) 主線が互いに隔たるにつれ, 錯視量は増大(隔たりすぎると方向の判断が困難).

(2) 副線  $x'$  の長さが大なるにつれ, 錯視量曲線は山型に推移, 極大は副線の長さが主線の長さにほぼ等しいばあいにあられる。

(3) 副線  $y'$  の長さが大なるにつれ, 錯視量曲線は山型に推移, 極大は副線の長さが主線間の隔たりのほぼ  $\frac{1}{2}$  のばあいにあられる。

(4) 主線相互によって構成される平行四辺形が矩形形状から歪むにつれ ( $\theta$  が小なるほど), 錯視量は, 逆に, 増大する。

(5) 副線  $x'$  が時計廻りに折れ曲る ( $\alpha$  が大になる) につれ, 錯視量曲線は山型に推移, 極大は  $\alpha$  が  $20^\circ \sim 30^\circ$  のばあいにあられる。

(6) 副線  $y'$  が反時計廻りに折れ曲る ( $\beta$  が大になる) につれ, 錯視量曲線は山型に推移, 極大は  $\beta$  が  $15^\circ \sim 20^\circ$  のばあいにあられる。

(7) 図形の大きさ布置が一定のまま, 図形全体が回転するばあい, 錯視量の極大は, 主線の方向と鉛直, 水平軸とが一致しない図形のうち, 主線が鉛直軸より  $40^\circ \sim 70^\circ$  傾くばあいにあわれ, 一方, 極小は主線の方向が水平ないし鉛直軸と一致するばあいにあられる。

今後の実験予定は, 以上の optimum 条件の探索実験結果を土台として, さらに進んで, この錯視現象の根底にある基本的規定要因を明らかにし, Lipps, Metzger などによる従来の説明理論に批判を加えることである。

## 7 Decision Making に関する研究 (その1)

科学警察研究所 ○山中 一郎 青木民雄

**目的** 継時的に与えられる等質的情報に基づいて decision をおこなうとき, 同種の先行判断がいかん影響するかを検討する。

**手続** 被検者は当研究所勤務の成年男女 20 名。方法は expanded judgement による。赤青, 2種のカードをある割合にまぜたもの (1組 100枚) を, 被検者はメトロノームに合わせて1枚づつめくり, その1組中, 赤青いずれが多いかを拡張判断する。かつその判断に対する確信度を報告する。呈示カードを構成する赤青の比は次の通りとする。第1系列, 5:5 (第1試行), 5.5:4.5 (第2試行), 5:5 (第3試行), 第2系列, 5:5 (第1試行), 6:4 (第2試行), 5:5 (第3試行) とする。両系列とも第1および第3試行では任意に判断することが許される。第2試行は 40 枚目で判断し, 確信度を報告する。第3試行において, 第2試行の判断がいかん影響するかを第1試行と比較検討する。

**結果** 第1系列においては第1試行と第3試行の枚数の差および確信度の差に有意な差は認められなかったが, 第2系列においては, 第1試行と第3試行の枚数の差の間に 5% の危険率で有意の差が認められた。第1系列においては挿入試行である第2試行において, 赤と青の差が少ないため, 第3試行においてその影響がほとんど認められなかった。

第2系列においては, 弁別度の高い第2試行が先行したため, 第3試行の判断にあたって確信がもてなくなり, decision に必要な枚数が多くなったものと認められる。

確信度が高まった者と, 逆に低くなった者のとった枚数について, その差を第1および第2系列について比較してみると, これらの間には  $P < .01$  で有意の差がみとめられた。第2系列では所要枚数も多い者ほど確信度が高く, また確信度が低いほど枚数も少ないということを示している。コントロールのための実験では, 所要枚数の少ない者ほど確信度が高く, 枚数の多い者は低いという結果が見出されているが, この第2系列ではこれと逆の結果を示した。この点については今後の検討が必要である。

## 8 Decision Making に関する研究 (その2)

科学警察研究所 ○青木 民雄 山中 一郎

**目的** 継時的に与えられる等質の情報に基づいて decision を為す際に於ける、その情報の系列位置効果と、decision に対する確信度について検討する。

**手続き** 被験者は成人男女計20名、方法は forced pace の expanded judgment による。被験者は、赤青2種のカードを或る割合で混ぜた100枚一組のカードを、メトロノームに合わせて1枚ずつめくり、所定の decision point (30枚目及び60枚目)で、その一組中いずれが多いかを拡張判断し、確信度を報告する。呈示カードは10枚を1試行ブロックとし、各ブロックの赤と青の比は、第1系列では夫々、7:3, 5:5, 3:7, 3:7, 5:5, 7:3 ……、第2系列では、8:2, 5:5, 2:8, 2:8, 5:5, 8:2, ……。両系列とも、第3及び第6ブロックの後に判断が為された。いずれの decision point に於ても赤と青の累積枚数は同数であった。従って両系列とも第1判断が赤ならば初頭性効果 (PE) が認められたことになり、青であれば新近性効果 (RE) が認められる。

**結果** 第1系列では PE の認められた者が14名、RE は9名。第2系列は PE が11名、RE が9名。統計的には確かめられなかったが、両系列とも、PE が多いと思われる。

各判断の平均確信度は、赤と青が各ブロックで同数ずつ直線的に増大する場合のそれと比較すると、有意に低いことが認められる。又、第1判断に比べて、第2判断の確信度は両系列とも、PE 群では高まっている。RE 群は第1系列ではやや低下しているが、第2系列では差は認められなかった。

第1、第2系列とも、PE 群は、第2判断で確信度が高まった者の数と平均確信度との間には連関が認められる。然し第2系列の RE 群では、確信度の高まった者6名に対し、低下した者1名でありながら、平均確信度では有意な高まりがみられなかった。つまり、この群の被験者の確信度の変化は極めて小さかった。これは、第2系列の第1判断直前の試行ブロックは8:2で青が多く、これがREの因になっていると考えられるが、第2判断直前では逆転して赤が多いため、これが確信度の高まりを抑えるように作用したと思われる。

## 9 法則発見過程の実験的研究 (6)

—推測の動揺度と非決断度—

慶応義塾大学 齋藤 幸一郎

**目的** ある算術平均 $\hat{X}$ のまわりに標準偏差 $\hat{\sigma}$ をもって大凡正規型に分布している数字の系列が at random の順序で提示された場合、被験者の算術平均についての推定値 $X$ が試行ごとにどの程度の動揺を示すか、そしてまた、 $X$ の値は、試行の初期と後期とでそのバラツキに差が見られるかどうか、等を検討しようとする。

**方法** 100箇の数字からなる4つの random 系列が用意された。

系列I	$\hat{X}=63$	$\hat{\sigma}=8$
系列II	$\hat{X}=37$	$\hat{\sigma}=20$
系列III	$\hat{X}=63$	$\hat{\sigma}=20$
系列IV	$\hat{X}=37$	$\hat{\sigma}=8$

但し、各系列は10箇の数字からなる10箇のBlockにわかれ、Blockごとに大凡正規分布をなすように、しかも全体として見かけ上 random に配列されてある。刺激は5秒間隔で実験者により口頭で提示された。被験者には予め100箇の記入欄のある記入用紙が配布され、刺激が提示されるごとに、系列全体の $\hat{X}$ についての推定値を記入するように指示された。但し第1試行の推定値のみは100とすること、第2試行以後においてはできる限り早く客観的な $\hat{X}$ の値に近い推定値に到達するように努力すること、推定値の動揺を最少限にとどめるように努めること、などが指示された。用いられた被験者は41名(慶応義塾大学2年～4年の男女学生)であった。

**結果**  $\hat{X}$ の推定値 $X$ のBlockごとの算術平均 $\bar{X}$ が算出され、さらに全被験者についての $\bar{X}$ の算術平均 $\bar{\bar{X}}$ と標準偏差 $\sigma_{\bar{X}}$ が算出された。どの系列にあっても $\bar{X}$ の値は第3Blockまでは下降傾向を示しそれ以後は大凡水平となった。 $\sigma_{\bar{X}}$ の値は、どの系列にあっても試行が進むにしたがって減少する傾向を示したが、最終的な第10Blockにおける $\sigma_{\bar{X}}$ の値は、 $\hat{\sigma}$ の小である系列I、IVにおけるものよりも、 $\hat{\sigma}$ の大なる系列II、IIIにおけるものの方が大であった。つぎに第4Block以下において、Blockごとに、隣り合っている推定値間の差 $D$ の絶対値の和 $\sum|D|$ が算出され、さらに全被験者についての $\sum|D|$ のMedian, MeDが算出された。MeDの値も、どの系列にあっても試行が進むにしたがって減少の傾向を示したが、 $\hat{\sigma}$ の値の大なる系列II IIIにおいてのみ、第10Blockにおいてやや急激にハネ上げる傾向のあることが見出された。

## 10※ 同時的二重思考作業の研究 (第2報)

6日間学習による上達度の測定

関西大学 ○大脇義一  
白梅学園短期大学 大脇園子

運動的な同時二重作業は甚だ多くなされている。しかし異なった思考的な作業を殆んど同時に行うことは可能であろうか。ワンマンカーの運転手や航空機のパイロットなどは特にこのような仕事を要求されているが、その他、職業的作業にも甚だ多い。この問題を実験的に研究するために第1実験、第1系列、では、視覚的にクレペリン加算の問題が与えられ、その解答を記録しながら、聴覚的に与えられる加算問題を口頭で答えることを続けさせた。第2系列では視覚的に表示される加算問題と聴覚的に表示される刺激語に対する連想反応、第3系列では視覚的な加算問題と聴覚的な掛け算問題とを同時連続的に3分間与えて行った(個人実験)。13人の大学生の作業成績は単独作業の量を100とすれば中央値で45%しか出来ない。小数の例外があるが一般的には甚だしく困難である。今日発表する第2実験に於ては、このように困難な同時的二重思考作業が若し6日間の学習をなした場合は、どれほど上達するかを問題とした。第1作業としては視覚的に与えられる種々の図形の系列を見ながら、3種類の図形を選んで抹消し続ける選別作業である。始め1分だけ単独作業をする。そして1分休息後に4分の二重作業に入る。二重作業ではこの作業を続けている間に、それを中止しないで第2作業として聴覚的にクレペリン加算問題を連続的に与え、これに口頭で答えつけさせる。この実験を6日つづけた。

被験者は大学生男女計11人である。作業成果の測定は次の式により、第1作業の単独作業の量に対する二重作業での量を比較し阻害率を算出。

$$\text{阻害率} = \frac{\text{単独選別作業量} \times 4 - \text{二重作業時の同作業量}}{\text{単独作業量}} \times 100$$

更に、選別作業の錯誤を単独、二重両作業について比較する。

第三に第二作業の加算作業の量及び錯誤を調査した。以上の結果の数値と図表を省略する。

その実験結果によれば

(1) 二重作業の阻害率は多少の動揺と個人差があるが4日目あたりから甚だ減少する。即ち二重作業が容易となり、単独作業の時の作業量に近づく。2人ほどは殆んど同様になる。

(2) 作業の質もこれに伴って改善される傾向がある。但し必ずしも規則的ではない。

(3) 第二作業の加算作業の量は日を重ねると共に増加するものが多いが、あまり上昇しないものもある。質の変動も同様である。

(4) 二重作業の学習は困難であるため、日による変化が多く、上昇曲線が規則的でない。これは実験者の統制することの出来ない日々の内外の条件に影響され易いことを

## 11 理科学習における化学記号の記憶

東京都杉並区高南中学校 萩生田 忠 昭

目的 中学校の理科で生徒が学習する元素記号や化学式の記憶の状態を調査し、どのような問題が含まれているか明らかにすることにした。被験者と方法 東京都杉並区高南中学校2学年男子201名女子167名計368名を選んだ。また、保護者の職業は全体の7割程度が会社員で占められ、残りは商業である。方法としては、すでに学習した化学記号のなかで、単体および分子式について比較的頻度の高いものを取り上げ、つぎの点を調査した。○元素名を元素記号でどの程度書くことが可能か。○元素記号を元素名でどの程度書くことが可能か。○元素名と元素記号とがどの程度対応し得るものか。○化学式を物質名でどの程度書くことが可能か。○物質名と化学式とがどの程度対応し得るものか。なお教科書は東書の「新しい科学」を使用している。調査の形式は質問紙法で、問題の配置は単元の配列の順序で学習経験を得たものの順序とした。テストのあることは前もって指示せず、学習直後に実施した(15分)。

結果と考察 (元素記号と元素名) 元素記号のなかに含まれている文字の数、すなわち、一字の元素記号と二字の元素記号との間の記憶の差は認められない。元素記号の正答率の高いものはMg, Naである。この場合、元素記号の記憶にはローマ字的な綴りに近いものが、かなりよく記憶されていることが認められた。また、元素名は一般に正答率が高いことが認められた。Mgは80%程度の生徒が記憶しているのにCuやNは26%程度の低い正答率であった。(元素記号と元素名との関連) 一般的に云って元素記号と元素名の記憶との間に密接な関連があると考えられる。したがって、元素記号を記憶させるためにはなるべく元素の名称に接する機会をより多くもつことが必要である。なお、この問題全部の正答者はわずか、男子8名、女子6名でそれぞれ知能偏差値65以上のものであった。(化学式) 被験者の1/3程度の生徒が酸素、水素、塩素の化学式と元素記号の記憶を混同している。これは原子と分子の区別が十分に理解できないためである。化学式を単なる記号として記憶を強いるよりも基本的な原理を教えるほうが、かえって記憶しやすく、誤りも少なくなると考えられる。化学式の内容がわりと複雑な関係にあるものは正答率が低い。(物質名) 略。(化学式と物質名との関連) 化学式の複雑な構成上の問題と物質名の俗称などがからみあって記憶に無理が影響している。物質の命名法ももっと徹底した方法を検討すべきであろう。一般にいつて、教科書に現われる頻度数や記憶による困難さ、時間の経過による記憶のうすれなどについて今後更に研究を深めてゆく考えである。

## 12 図形の美しさに関する心理学的研究Ⅱ

東京都婦人相談所 ○古 牧 節 子  
日 本 大 学 妻 倉 昌 太 郎  
" 浅 井 正 昭

実験美学の研究として、従来多くの実験が行われて来たが、この種の実験の多くは“美しい”と判断された特定の図形の性質を追求することに主眼がおかれて来たように思われる。われわれはこの数年来、実験美学に関連した研究を続けて来た結果、特種の図形が問題とされるべきでなく、美醜判断と図形条件との間には、刺激の変化に対応した一定の関係が認められるのではないかと考えるようになった。そこで前回の報告に引き続き図形の中でもっとも単純なものと思われる二等辺三角形を用い、次のような問題を明らかにするために実験を行った。

(1) 刺激条件と美醜判断との間の相互関係を吟味する。すなわち刺激の変化に対応して美醜得点にも、何らかの変化が認められるか。

(2) 二等辺三角形のような単純な図形の美醜を決定する要因はなにか。

(3) 四辺形の場合認められたような分岐点(閾)が三角形の美的判断の場合にも存在するであろうか。

**実験方法** (被験者) 男子大学生3名, 女子大学生3名, 女子小学生, 高校生各1名, 計9名。(刺激図形) 白いケント紙製の二等辺三角形, (底辺 60mm × 高さ 60mm を最大とし 5mm Step で底辺・高さを縮少して行ったもの) 144 枚, 実験は一対比較法によって行い, 結果は Z' Score に換算し, 各被験者の Z' Score の平均値をもって, 各図形の美醜得点とした。

**結果と考察** 本実験の結果は, 前回報告した四辺形の場合とほぼ一致した傾向が認められた。すなわち(1)二等辺三角形の美醜判断の重要な要因として, 大きさ, プロポーションがあげられる。(2)プロポーション, 大きさ等の刺激条件の変化と, 美醜判断の間には対応した一定の関係が認められた。(3)感覚の場合のような厳密な意味での閾ではないが, 美的判断の場合にも同様に, 全体との関係において分岐点となるような Zone が考えられるのではないかとということが明らかになった。今後, 面積やプロポーションの条件を統御して, 更に厳密な実験を続けて行きたいと考えている。

## 13 価値の二重性

日本大学 木村 禎 司

価値心理学の開祖マイノングは「価値体験とは存在感情, 特に実存感情(判断感情)である。いはば「存在の快」か「不存在の苦」, ないし「存在の苦」か「不存在の快」かのいずれかである」といった。この快と苦は要素的なもので情緒ではない。彼はまた表象, 判断, 感情および欲求にそれぞれ真実なものと想像的なものの区別のあることを指摘した。従って判断に対しては仮定があり, 仮定は判断に特有の「信念」を欠いている。そこで真実の感情と想像の感情との別がでてくる。また判断感情と表象感情の別もある。価値感情とはそうした実在に触れた快苦の情だということである。彼はまた個人的価値のほかに超個人的価値を認めるが, それは対象に尊敬(品位)を感じさせるものがあるということである。

これらの表象, 判断, 感情および欲求は心的内容でなくて作用の区別であり, それにまた実と虚の別を立てることは今日の心理学から見れば煩瑣のようであるが, 臨床心理学では自己欺瞞や自己防衛をいい, 真の同情でない投射のあること, 知覚でも地理的環境と行動的環境の別を立て, 図と地だの再体制化だのと言うのを見れば決して仮空な説でないことが分る。ある神経症者は自分でしていることが「自分でやっているように思えない」ということである。この点からでも実在に触れる価値体験が心的健康に必要なことが分る。

今日の価値心理学は「価値—態度複合」を説く者と, ケーラーの「状況価値説」とに分けられると思う。態度とは期待であり, 準備であって個人的なものである。状況説は力の系としての場で要求されるものが価値だという。場にも大小があり, 体制化の良否があるが前者に較べれば客観的である。また態度は過去の経験に規定されるが, 状況はそこに働き合う現在の力に規定される。この状況説は社会や集団の規範とか当為を説明するには適している。

しかし規範とか態度の一方だけで行動している人はいない。規範は内在化され, 態度となり, 行為となる。いわば両者は人格で統合される。ドイツのワイズツェツカーの一派は行為においてそうした態度(期待)が実現される場合には価値感があることを実証している。いわば内的な価値意識と結果としての物理的過程との間には精神物理的対応があるという(射撃その他)のである。こうした価値感を欠く行為は不毛で進歩発達がなく, しかも不安定である。

## 14 スポーツにおけるアガリの心理学的研究

——ピストル選手への自律訓練法の適用——

### (1) ピストル競技の心理学的特質

東京教育大学○高橋良幸  
順天堂大学 太田哲男  
九州大学 成瀬悟策  
防衛庁技研 林茂男  
順天堂大学 加賀秀夫  
東京教育大学 長谷川浩一  
" 戸田晋

われわれは、1962年1月より、ピストル競技中、フリー・ピストルの選手で全日本代表クラス12名を対象として“自律訓練法”を実施してきた。目的は、選手自身が自己暗示の体系を身につけることによって、自己統制の能力を高め、さらに種々の精神的不調に備えさせようとするにある。

まず、ピストル競技の心理的特質を述べる。

(1) 個人競技である。斗志・ネバリ・競争心は対人競技とくに身体接触のあるばあいに強く発揮される。この競技は、その点きわめて間接的で、さらに斗志を転化する手段も乏しい。(2) 最大筋力の発揮を要しない。きわめて静的な競技である。精神的に過度に緊張すると、身体各部に無駄な力がみなぎることがあるが、これを特に避けねばならない。(3) 競技の進行がかなり自律的である。(4) この競技実施に要求される個々の姿勢・動作・力・方向などは、通常の身体活動中にも含まれているものが多く、この競技に特に求められるのは、それらの個々の運動を適確に体制化し、知覚—判断—動作系を確立し、タイミングをつかむ決定力を養い、リズムカルに競技を進行させる精神力をきたえることなどであろう。

さて、アガリとの関係について述べる。スポーツ一般について、アガリは重要な問題である。とくに、試合が大きい場合(観客・会場が大など)、関係者の期待が大きく、選手の自意識も強い場合、相手に劣等感を持つ場合などに顕著に現われるが、その現われ方は個人によってかなりマチマチである。フリー・ピストルの主要選手についていえば、初弾の成績によって1コースの成績が左右される者が多い。全員が、悪い点を出すと、早く次が射ちたくなり、知覚—判断の方では、まだ的に正中していないとわかりつつも、動作系との協応がくずれて、引金を引いてしまうといっている。このようなことから、意識的に平常心を保ちうるように、自己統制の訓練をすることがとくに有用であるといえる。

## II 人 格

## 15 スポーツにおけるアガリの心理学的研究

——ピストル選手への自律訓練法の適用——

### (2) 自律訓練法のピストル選手への適用

東京教育大学	〇戸田	晋
"	高橋	良幸
順天堂大学	太田	哲男
九州大学	成瀬	悟策
防衛庁技研	林	茂男
順天堂大学	加賀	秀夫
東京教育大学	長谷川	浩一

本年1月から、ピストル競技のオリンピック候補選手に自律訓練法を実施して来たのでその概況を述べる。

#### (1) グループ分け

フリーピストルの選手12名を3グループに分け、3名の訓練者がそれぞれ3～5名ずつ担当した。(なお選手は全て警察官である。)

#### (2) 方法

3ヶ月に1回ずつ、10日間から2週間に亘って行なわれる合宿の期間に、訓練者が合宿所に赴いて2～3回の面接による教示及びコントロールを行ない、選手が勤務地に帰っている間は手紙及び電話による教示及びコントロールを行なった。

#### (3) 経過及び練習効果

一般的に効果は比較的早く現われている。“重い感じ”は早い者で練習開始の日に、最も遅い者でも第11日目に現われ始めて居り、平均すると4.3日である。しかし、選手が勤務地に帰ってからの期間においては、間接的なコントロールになる為と、手紙による為に教示を与えるのに時間がかかり、練習の進捗は遅くなっている。即ち、“両腕両脚に重さ”が現われるようになったのは、最も早い者で第20日目、最も遅い者では第79日目、平均40.0日、特別に遅い2人を除いて平均を求めると31.4日となる。また、進み方に遅速の個人差もこの頃から激しくなっていく。

“温かい感じ”は練習開始後第9日目に既に現われ始めた者もあり、4月の合宿までで全員に近い10名が現われている。

練習がかなり順調に進んだ3名は、4月の合宿中に“心臓の練習”に入った。

7月6日現在で、“両腕両脚が重くて温かい”練習をしている者3名、“心臓”の練習をしている者3名、“呼吸”の練習をしている者3名、“太陽神経叢”の練習をしている者3名となっている。

練習中に、2、3名の選手は、過度に注意を集中しすぎた為に、“しびれ”を訴えたが、これは軽減練習をすることによって解消した。そしてすべての選手が、自律訓練法の練習をすることにより、静かなゆったりとした気持になると報告している。

## 16 スポーツにおけるアガリの心理学的研究

——ピストル選手への自律訓練法の適用——

### (3) アガリ対策としての自律訓練法の評価

東京教育大学	〇長谷川	浩一
"	高橋	良幸
順天堂大学	太田	哲男
九州大学	成瀬	悟策
防衛庁技研	林	茂男
順天堂大学	加賀	秀夫
東京教育大学	戸田	晋

#### I 選手の側からの自律訓練法の評価

射撃(フリー・ピストル)選手に自律訓練法を適用し約160日を経、その間の選手らの自律訓練法の評価を個人面接によって得た。

A 身体的効果＝①熟睡(5名) ②ねがめ爽快(5名)  
③疲労回復：自律訓練法練習直後にあらわれる(7名) ④食欲増進(2名)

B 心理的効果＝①緊張解消(3名) ②射撃場面での落着き(2名) ③射撃中の失点による心理的負担の軽減(2名)

C アガリ対策としての評価＝自己統御の一方法としての有効性を期待、確認(8名)

#### II 訓練者の側からの自律訓練法の評価

A 日常生活における自律訓練法の効果＝①休息効果  
②身体機能の全般的向上 ③精神的健康(心理的安定)の保持

B 射撃競技場面における効果＝①射撃中の休憩効果促進 ②自己のペースで競技を進められる ③失点に対する不安反応の除去 ④筋肉の局部的緊張と弛緩

C 選手のアガリ対策への動機づけとしての効果＝集団カウンセリング的效果：スポーツ・カウンセリングの可能性の示唆。

#### III アガリ対策としての自律訓練法の問題点

①誤解・誤用の問題：個々の訓練段階での練習目的への固執、射撃練習中の誤用 ②自律訓練法実施継続のための動機づけの問題：選手のアガリ対策にたいする動機づけの強弱、全訓練過程を予め示さぬことによる動機づけの減退 ③大競技会での実際の適用の困難：過度の緊張の余り自律訓練法実施のゆとりがない、自律訓練法を実施し各身体部位に効果を起しても心理的安静はともなわぬ ④自己流のアガリ対策に固執する場合 ⑤過度のリラクゼーションの起る場合 ⑥教示と練習のコントロール：以上の問題点のいずれも、訓練者による教示と練習のコントロールの適切なことによって解決されよう ⑦競技種目の特質および選手個人のアガリの特性に応じた特殊公式の適用。⑧他のアガリ対策との併用・連携。

## 17 スポーツにおけるアガリの心理学的研究

—ピストル選手への自律訓練法の適用—

### (4) 事例報告

防衛庁技研○林 茂 男  
東京教育大学 高橋 良 幸  
順天堂大学 太田 哲 男  
九州大学 成瀬 悟 策  
順天堂大学 加賀 秀 夫  
東京教育大学 長谷川 浩 一  
" 戸 田 晋

アガリ対策として自律訓練法を適用した事例を報告する。

#### 事例1 T・M (警察官・35才)

競技歴 昭30年より実用拳銃選手, 31年フリー・ピストル選手。従来の主な成績=35年全日本2位, ローマ・オリンピック12位, 36年全日本2位。

アガリ症状および従来の対策 症状=息苦しさ, 肩コリノボセ, 不眠など。対策=ピストルの点検, 深呼吸, 体の力を努めて抜くなど。

自律訓練の経過 37年1月より練習開始。自律訓練の受け入れはかなり積極的であった。10日目で右腕, 20日目で左腕に重い感じを経験した。爾後, 両腕, 両脚とすすみ, 7月2日(162日目)に両腕・脚の温感に入り現在に到る。この間, 温かい感じがうまく出ないので, 本人の希望で催眠を誘導して弛緩と温感を体験させる。またそれを競技場面で実施するよう教示, 現在実施中。

効果 一般的効果としては練習直後に疲労回復や精神的安定が得られた。上体の弛緩と温感を主とする公式を競技時実施したところ, ほぼ前記と同様の効果があった。ただあまり弛緩しすぎると残効により具合がわるい(点数が下がる)こともあるので, 現在その対策を検討中である。

#### 事例2 Y・Y (警察官・26才)

競技歴 昭32年より実用拳銃選手, 34年フリー・ピストル選手。主な成績=34年全日本優勝, 35年全日本4位, ローマ・オリンピック3位, 36年全日本, 第4回アジア大会優勝, 38回世界選手権2位。

アガリ症状および従来の対策 症状=動悸, 目がかすむ, 足のふるえなど。対策=深呼吸, 肛門を締めるなど。

自律訓練の経過 37年1月より練習開始。5日目で左腕, 13日目右腕の重感を経験し, 爾後脚の重感, 腕温感を経て6月末より心臓の練習に入る。全般に注意が active で反応も強くない。

効果 一般的効果=寝ざめがさわやか。競技時に弛緩と温感(上体)の公式を実施したところ, 弛緩がうまくできて落着き, 点数もよいと報告している。

## 18 スポーツにおけるあがりの心理学的研究

—ピストル選手への自律訓練法の適用—

### (5) スポーツ選手のメンタル・トレーニング

九州大学○成瀬 悟 策  
東京教育大学 高橋 良 幸  
順天堂大学 太田 哲 男  
防衛庁技研 林 茂 男  
順天堂大学 加賀 秀 夫  
東京教育大学 長谷川 浩 一  
" 戸 田 晋

試合の前・中においてスポーツ選手の受ける圧力, および, それから生ずる緊張はひじょうに強烈で, いわゆる“あがり”の現象が生じ, 試合への気力を喪失し, ふだんの実力を十分に発揮することができないことも少なくない。これに対処するための, 長期間にわたる計画的な精神訓練法の開発を企て, 自律訓練法を適用した結果, つぎのような訓練上のねらいの有効なことがわかってきた。

1. 弛緩 これには, 身体的弛緩と精神的弛緩との両者から到達できる。前者は漸進的弛緩法(ジェイコブソンの)を併用し, 後者は自律訓練法の他に, 催眠をも利用した。
2. 現実遮断 これは周囲, ことに試合場内外の場面から遮断し, 精神的な安静と休息をえさせ, エネルギー蓄積させる。
3. 自我強化, 自己観照 これは, 自律訓練中の黙想練習を利用して, 想像によるカタルシス, 退行, 自己観察などを, 精神療法的手法で進められる。
4. 弛緩→平常化の訓練 弛緩だけが有効に進むと, いざ試合というとき, ふだんの状態とは違って, 気力が充実してこない。平常心というような気分までを取り戻してやるのが大切になる。
5. メンタル・リハーサル イマジネーションにより試合場面への desensitization, 試合態度や試合はこびの予想をつけさせ, あるいは技術学習を企てる。
6. メンタル・ウォーミング・アップ これは, 外圧に対する積極的, 能動的克服態度を醸成しようとするもので, 自律訓練中に, 気力の充実感, 観象からの圧力の気構え, 心身の好調感, 相手を呑むの概などを作るよう激励する。

## 21※ 調息・調心に関する心理学的研究(8)

福岡県中央児童相談所○中 村 昭 之  
九州大学 秋重 義治 山岡 哲男  
" 松本 蕃 松本 博基  
" 高山 知明 阿部 義亮

**目的** 石黒法竜氏指導早期見性禪に就いて、ダウニー意志気質検査、S. C. T.、質問紙法、参禅日誌、面接法、等による心理学的調査を行い、その特殊性及び療法的意義について考察した。**結果** (I) 一般参禅者 10 名に、S. C. T. による、性格類型、指向性、力動的側面の把握を試みた所躁鬱性気質 (Z-type) 4、分裂、粘着の混合型 (S. E-type) 2、分裂、神経質の混合型 (S. N.-type) 2、ヒステリー気質 (H) 1、神経質 (N) 1、であり、軽度の強迫神経症、不安神経症傾向を有する者 2、ヒステリー症状を呈する者 1、が確かめられた。Z-type は一般に情意安定度が高く、処世の基礎、人格の向上、といった一般的事由からの宗教的指向性がみられ、他の諸類型では、劣等感の克服 (S. E)、赤面恐怖、吃音の矯正 (S. N)、焦躁感からの脱出 (N) といった、具体的事由からの宗教的指向性が窺われた。尚、見性体験の報告者は Z-type 2、S. N.-type 2、S. E.-type 1 であった。(II) 12 名の参禅者 (一般参禅者 9、研究員 3) について質問紙法により、(イ) 家庭に於ける宗教的雰囲気の有無。(ロ) 過去における宗教的体験の有無を調査した所、(イ) では、全くない 2、普通 8、高い 2、となり、(ロ) では、無い 6、有る 6、で、家庭に於ける宗教的雰囲気の高いもの、過去に宗教的体験を有する者に見性体験者が多く見られた。(III) 13 名の参禅者 (一般 9、研究員 4) について、5 日間の接心期間中、参禅日誌によって(イ) 坐禅中の各段階の成就度の主観的評価、(ロ) 坐禅中各段階に於ける修業の障害になったこと、を記載せしめた所(イ) では、上位の段階に進むにつれて、各段階の成就度は増加して居り、参禅者 13 人中 7 人 (一般 6、研究員 1) が、第三段より第五段にかけて、見性体験を報告して居り又其他の一般参禅者 2 名に「見性体験にやや近い」「只管打座がうまく行く」等の報告があった。(ロ) では、第一段数息観では、身体的苦痛雑念、次の数を考えること、疑問や不安、ねむけ、幻覚、実験器具が気にかかる、等、障害の種、量、共に多いが、上位の段階に移行するにつれ、それらは漸減し、第四段ム字観、第五段勢至の法では、のどが痛い、疲れる、等を主訴とし、障害の内容の変化がみられた。「石黒禪では雑念を気にしている暇がない」「上位の段階に進むにつれて殆んど気にならない」等の面接結果とも併せて、これらの結果は、早期見性禪の有効性を示していると考えられる。(IV) 4 名の見性体験者に面接と質問紙によって、その体験内容を把握すると、時間的に以下の経過を辿る。(1) まず、「段々まわりが消えて行つて目が窓枠等を気にしなくなる」「勢至の法のととき、音が聞えない」「全体がまつくらになつてしまふ」等視覚、聴覚機能の低下を中心とした印象の弱화가みられ (2) ついで、「身体が

## 22※ 知的優秀児の特性に関する基礎研究 (第12報告)

—内田クレペリン検査結果を通して—

東京家政大学 森 重 敏  
東京三光小学校○外 村 近

**目的** 知的優秀児の特性を内田クレペリン検査を通して知的普通児との比較の上でとらえる。

**方法** ①被検者の選定 ア、東京都港区立三光小学校 2 年より 6 年までの児童を対象に集団知能検査を実施した。その結果 S. S. 65 以上の児童を選たくした。次にこれらの児童に WISC 知能診断検査を実施して、I. Q. 130 以上の者 (G) を検出した。イ、これに対して集団知能検査で S. S. 45~54 までの児童 (N) を学年・組・性別等が一致するように同一人数をアトランダムで選定した。

② 被検者の人数 G の 2 年は男子 2 名・女子 3 名、G の 3 年は男子 3 名、女子なし。4 年は男子 1 名。5 年は男子 1 名、女子 1 名計 8 名、6 年は男子 3 名、女子 2 名計 5 名。2 年から 6 年まで総計 22 名が検出された。それに学年・組・性別が同じになるように 22 名の N 児を選定した。

③ 内田クレペリン実施日時 第 1 回 昭和 37. 10. 20、午前 10 時、場所は教室。対象は 2、3 年の G 児と N 児たち。第 2 回 昭和 37. 10. 23. 午前 10 時、場所は教室。対象は 4~6 年までの G・N 児たち。

④ 内田クレペリン実施人数 選定した 44 名中、欠席やその他の理由で検査のできなかった者が 2 名いたので、実際は 42 名に検査を実施した。

⑤ 完全作業人数 行とばせを除いて、完全に作業した児童数は次の通りである。G の 2 年が 2 名、3 年なし。4 年 1 名、5 年 6 名、6 年 5 名。あわせて 14 名であった。これに対して N では、2 年 2 名、3 年 2 名、4 年 1 名、5 年 4 名、6 年 5 名、あわせて 14 名で、G と N を合計して 28 名になった。

⑥ 最終的に選んだ人数 ところが 2 年、3 年の作業量は少なく、6 年の児童と一応省くことにした。また、4 年以上の児童の場合でも、学年・組・性別を同数にしたいので、アトランダムで各々に 10 名、合計して 20 名を選んだ。

**結果** ① 作業量 G の 1 分目の平均は 45.4、2 分目は 41.0、3 分目は 40.6、4 分目は 38.6、5 分目は 38.6、6 分目は 37.9、7 分目は 36.8、9 分目は 39.6、10 分目は 38.1、11 分目は 39.9、12 分目は 40.3、13 分目は 40.5、14 分目は 41.7、15 分目が 43.1 で、前期の平均は、40.0、であった。これに対して N の 1 分目の平均は、37.7、2 分目は 33.8、3 分目は 33.7、4 分目は 31.7、5 分目は 32.1、6 分目は 31.8、7 分目は 32.3、8 分目は 30.0、9 分目は 31.4、10 分目は 31.4、11 分目は 31.3、12 分目は 33.0、13 分目は 33.3、14 分目は 33.3、15 分目は 33.1 で、平均 32.6 であった。後期について述べると、G は 1 分目が 50.7、2 分目が 46.0、3 分目が 44.5、4 分目が



## 19 スポーツ適性のための S. P. I. 作成試案

都立両国高校○飯田 穎男  
日本大学松井 三雄  
" 杉本 功介

ここ数年来 M. M. P. I. による運動選手のパーソナリテイの特性について報告してきた。

運動部相互の間においても、いろいろパーソナリテイの上に差があり、このことを研究することによって、運動適性を知る上に大いに役立つものと思われる。

すなわち

1. 運動の種類によって差がある。
2. 団体競技と個人競技によって差がある。
3. 経験年数の差、優秀な選手とそうでない選手との間に差がある。
4. 同種類の競技でもポジションによって差がある。

その他運動選手の特性を把握するために M. M. P. I. を実施してきたが、① 550 項目では検査時間が長い。原束手引では 30 分—90 分と述べているが 194 名の冊子による所要時間は 38 分—117 分、平均 68 分であり、実施上に困難があり、被験者も不正確になり易い。② 疑問点が高点である。一般大学生 218 名、運動選手 346 名の ? 点の平均は 39.2, 37.1 であった。原版の翻訳版であるので日本人の風俗、習慣と可成りの差異があり、応答理解に無理な点がある。③ M. M. P. I. をスポーツ適性検査として応用して見たい。

この問題点を解決し仮称 S. P. I. を作成するために次のような手続きをとった。

- ① 大学運動部 (19~23才) 121, 対照群として同年令の運動部に所属しないもの 89 名を抽出し比較検討した。
- ② 運動部 50 名、一般大学生 50 名の答えた頻数とその臨界比を求め相互を有意に識別できる項目を選んだ。
- ③ F. K. Mf を削除し 123 項目を 550 中より選択した。

原版と S. P. I. との項目、スケール数は次の通りである。原版, L 15, Hs 33, D 60, Hy 60, Pd 50, Pa 40, Pt 48, Sc 78, Ma 46, Si 70, S. P. I. はそれぞれ 11, 14, 30, 26, 24, 26, 24, 32, 23, 26 である。S. P. I. と原版, 東大版との素点の相関はそれぞれ 0.64 0.77 0.66 0.71 0.64 0.70 0.66 0.65 0.61 0.74 で東大版とは 0.91 0.80 0.87 0.79 0.50 0.67 0.90 0.79 0.86 0.99 で Pd が 0.50 と問題として残るが、スポーツ適性を知る上に S. P. I. は活用できるものと思う。

## 20※ 調息・調心に関する心理学的研究 (7)

九州大学○秋重 義治 山岡 哲男  
" 松本 博基 松本 蕃  
" 高山 智明 阿部 義亮  
福岡県中央児童相談所 中 村 昭之

**研究目的** 調息による調心の心理学的研究の一環として、前回の、日本心理学会に於ける曹洞禪についての研究報告に引継ぎ、今回は石黒法竜老師の早期見性禪を取上げ、その修業法、心理療法的効果等について、考察した。

**方法** 1) 昭和 37 年 8 月 24 日~28 日の 5 日間、石黒老師指導による接心会参加の参禅者 18 名 (男 14 名, 女 4 名) を調査の対象とした。そのうち、11 名は一般参禅者であり、7 名は研究員で参禅を志したもの (研究参禅者) であった。2) 研究参禅者 2 名について、早期見性禪の全段 (第 1 段数息観, 第 2 段ム字観, 第 3 段ム字観, 第 4 段ム字観, 第 5 段観音勢至法, 最後に只管打座,) 施行中の脳波、並に呼吸運動の測定を行った。更に、他の研究参禅者 2 名と一般参禅者 1 名について、只管打座中の上記測定を行った。姿勢は、勢至の法以外は、結跏趺座、若しくは半跏趺座、定印を組んだが、勢至の法では、定印を組まず、両手をひざの上に置く。脳波は頭頂部位より単極誘導を行い、呼吸運動の描記は、硫酸銅電極を用い脳波との同時記録を行った。

**結果** 研究参禅者 A (57才) は、勢至の法以外は閉眼しており、閉眼時脳波の特徴は、低電圧、10 cy/P. S.,  $\alpha$ -dominant type であるが、止静後、 $\alpha$  波出現度は更に良好となった。呼吸数は 5~7 回/分と安定した経過を辿り、吸気と呼気の交替期に屢々筋電図スパイクが混入し、 $\beta$  賦活型の出現を見、呼気相の中期より末期にかけて、 $\alpha$  波の出現が顕著になる過程をくり返した。止静後 21' にして上記の傾向は消失、呼吸の振幅はやや低下し脳波の振幅の増加が見られ、止静後 25', 8cy/P. S. の  $\alpha$ -slow 波が出現した。経行後は、それ迄の頭頂平坦型の呼吸から普通呼吸型への移行が見られ、止静後 50'  $\alpha$  波の連続度が非常に永くなった。第 3 段ム字観では、浅い呼吸と発声による呼吸曲線の変化が認められ、 $\alpha$  波の振幅の増大と 8cy/P. S. 迄の周期の延長が見られた。勢至の方に於ては、低振幅  $\beta$  波と筋電図スパイクが圧倒的に多いが、数個所に於て、極度の筋緊張解放の直後、7~8 cy/P. S. の  $\theta$ , 2 は  $\alpha$ -slow, が見られ、又経行直後の数分間に  $\alpha$ -slow-burst が認められた。研究参禅者 B (34才) は、各段階共閉眼であり、閉眼時脳波は 10cy/P. S. を主体とした、やや高電圧、 $\alpha$ -dominant type であるが、電圧は不安定であった。止静後、呼吸数は 4~12 回/分の範囲で変動し、脳波は第 3 段に於て、 $\alpha$  波の高電圧化連続度の増加がみられた。研究参禅者 C (37才) は、第 3 段無字観で見性体験を得たが、5 日間の接心終了直後、只管打座時の測定を行った。止静直後は  $\beta$  賦活波型の連続であるが、2' 30" にして、開眼にもかかわらず 8cy/P. S. の  $\alpha$  波が出現し、5' 30" には、高

## 23 色と形の部分内容視と人格的要因

信州大学 中川大倫

目的 筆者は、かつて、幼児の色と形の部分内容視に関し、その発達的变化の過程を明らかにした。しかし、同一被験者を8年後、瞬間露出法により調べたところ、その色・形反応は、60%一致することを知った。他方、筆者は、人為的意識もうろう状態の回復過程において、色・形の部分内容視がどう現われるかを吟味した。その場合、色・形の現われは幼児に見られる色・形部分内容視の発達過程によく似ていることがわかった。しかし、出現の初期、色と形のいずれが現われるかについては、個人的恒常性が認められた。かくて、筆者は、色・形部分内容視の傾向と、人格特性との関係を吟味する必要を感じ、まず、追従被験者の作文の分析を試みた。そして、色反応者に、感情感覚語、副詞の使用度が多く、短文の長さも長いことを知った。今回は、同一被験者に性格検査を施行し、色反応者、形反応者に性格上いかなる特性があるかを、明らかにしようとするものである。

方法 1 被験者は幼児期より追従している者、色反応者(C) 29名(男14名、女15名)。形反応者(F) 28名(男13名、女15名)。C中瞬間露出法により色型と見られるもの(C-C) 15名、F中の形型(F-F) 20名。

2 性格検査 Y-G テスト、集団用新々人格診断検査。いずれも集団的に実施。

結果 1 Y-G テスト a 12個の性格特性のいずれにおいても、C、Fの間、ならびに、C-C、F-Fの間に、有意差を認めず。b 質問事項に対する応答の傾向につき、C、F間の弁別力のある項目は、120項中、第71項「退屈な時は何か刺激を求める」だけで、Cが肯定的であった。

2 新々人格診断検査 a Key-, AvFL 値, FL 値のばらつき, F 反応のばらつき, -FL 値,  $M: \sum C, FM + m: Fe + e + C'$ ,  $FC: CF + C$ ,  $FC: CF + C + C_{sym} + C_{des}$ , F, M, 反応領域、のいずれにおいても、C、Fの間に有意差を認めず。M:  $\sum C$ ,  $FC: CF + C$  では、とくに C-C, F-F の比較を試みたが、やはり、同じであった。

3 二種の性格検査を実施したが、C、Fの性格上の特性を特徴づけることは困難であった。ロールシャッハテストに集団法を使用したのは、無理であったかもしれない。また、被験者数が少ない点も、反省されるところである。

## 24 Sensory Deprivation の研究 (II)

—— とくに Rorschach Performance を中心として ——

東北大学○佐藤 功 北村 晴朗

” 大山 正博

Sensory Deprivation 条件に於ける行動の変容を追求する目的で我々が行っている一連の実験のうち、今回は、とくに Rorschach Test の Score の変容を中心に述べる。

被験者は東北大学学生(教養部、学部、大学院学生を含む) 10名で、すべて男子である。最初に実験条件として48時間にわたる S. D. の実験に参加してもらい、その Deprivation 状況から解放された直後に Rorschach Test を行い、対照条件としては、その後約2ヶ月経て常態時で Rorschach の再テストを行った。(方法は日本心理学会第26回抄録参照) 結果は次の如くであった。すなわち、一般的にみて反応態度に極めて無理がなく、しかも自発性に富み、反応の際に表現の途切れが少く、実験者との疎通性はあきらかに常態時よりも良好であるように思われた。各 Score についての検討をみると、S. D. 条件下に於ける F+ % の低下が有意であったほか、R, FC%, CF%, の増加する傾向がうかがわれたが、その他の点については必ずしも大きな変容は見出されなかった。

別の被験者17名よりなる対照群との群間比較からは、S. D. 群に於て、R の増大(10%, Utest), D の増大(1%, Utest), FC 及び CF の増大(1%, 5%, Utest), F+ % の減少(1%, Utest) が特徴的にみられた。

なお、S. D. の効果が必ずしも各人に一樣でない事を考慮して、S. D. 期間の過し方に著しく異りのあった被験者2名をケース・スタディー的に調べてみると、S. D. 中充分に睡眠がとれ、比較的平静、快的に過した I. H. の Score からは、客観的で現実性に富んだ思考能力、外的・内的刺激に対する統制よく、情緒的に Stable な状態にある所謂 Well-integrated な像が推定されたが、一方、S. D. 中始終いらいらし、退屈し、いや気がさし比較的不快な過し方をした F. M. の Score からは、抽象的思考に富んではいるが外的刺激に対する統制が比較的弱い Poor-control な像が推定された。今後 S. D. の研究においては、単に、S. D. の一般的な効果の究明のみならず、被験者のパーソナリティとその状況内の過し方を関連させて究明することが必要であると思われる。

なお、アルコール酩酊時及びラボナ服用後の Rorschach 反応との異同については後の機会に報告したい。

## 25 霊媒の成立過程について

防衛大学校 大谷 宗司

所謂、「霊媒」と言われる人達に直接面接することによって、彼等が霊媒的機能を開發した経過について知ろうとした。調査対象は、職業的宗教人として信者の相談を受けているもの、占者、民間療法の治療師、主婦等であり、現在までに男性2人女性6人について調査をした。面接に際しては、受身的態度で、被調査者の経験を聞く方法をとったので、必ずしも望ましい十分な解答を引出すに至っていないが、今までの面接から推測されるものに下記の如きものがある。

被調査者は、幼時に於て、既に何事かの形においてはっきりした幻覚体験、予知予言等の経験を、多くのものが20、30才台に於て霊媒的現象を現わしている。そして、この間家運の衰微、破産、愛児の死亡等精神的に大きなショックを受けていることが多い。

霊媒は、トランス状態に入ることが特徴とされているが、それには、非常に深いものから、平常の状態とほとんど変わらない状態で予言等を行う浅い場合があるが、何れの場合も副意識的自我の活動がうかがわれ、彼等が霊媒としての安定状態に達するまでには、この副意識的自我の抬頭と主意識的自我との葛藤が経験され、その結果両者の間に妥協が行われる様である。この葛藤にも極めて強く長期にわたるものから、幼時に見出された霊媒的機能を指導によって助長することにより、葛藤を少く経験する場合とがある。

もともと霊媒という概念自体、一義的な定義があるわけではなく、本調査の対象も、その職業、生活環境に相異があり、又調査方法にも徹底を欠く所が多いので、更に方法の改良と共に、今回の不備を補って行きたいと思う。

## 26※ 不安と intolerance of ambiguity について

茨城大学 林 正邦

目的 不安傾向の高い子どもは、依存的傾向がつよいといわれている。このような子どもが、あいまいな問題事態に当面して、独力でその事態における問題解決を期待されているとき、他人からの支持・賞讃・非難等をうけると、かれの intolerance of ambiguity に変動が生ずると考えられる。このような intolerance of ambiguity の変動を実験的条件のもとで現象的に分析し、不安と intolerance of ambiguity の関係を検討しようとする。

方法 被験者 水戸市内某中学校2年生146名(男76・女70)について新制田中B式知能検査および不安傾向尺度(MAS)の結果により、性、IQ、MASを男女、上(105以上)下(99以下)、高(55以上)低(45以下)の2水準に分け、それぞれの水準内で3要因が対応する被験者を対象として、16名ずつの等質に近い2群を抽出した。

実験材料 Smock, C. D の ambiguity task を参考にし、集団的に実施できる intolerance of ambiguity 測定の問題カードを作成した。それは同一の文字または絵について、順次にその形態化が明白になるように描かれた不完全図14枚と完全図1枚とからなる、6系列の問題カードである。描図は文字(ネと5)、絵(鳥、はさみ、牛、魚)の6種である。そのうちの鳥の絵の系列は練習用である。それぞれのカードにはカバーをつけ、形態化の不完全なものから完全なものへ順に番号をつけて、各系列毎にまとめて1冊になっている。被験者は番号順にカバーをはがして、描かれた図を判断して、カードの下欄にその名を記入する。わからないときには、斜線を引いた上次にすすみ全部のカードを終えるようにする。

実験期日 昭和37年5月22日

実験手続 被験者に対しては、1枚目で正答したとき15点、2枚目で正答したとき14点というように、枚数がふえる毎に1点ずつ減点し、誤答の場合には得点を与えないから、出来るだけ少い枚数で正答をするように指示し、一度記入したあとの訂正は誤答とすることを約束する。

2つの群の一方を賞讃群として、練習の後で、その反応を点検してよく出来たと賞讃を与えた。他方の群を非難群として、練習の後で、成績のよくないことを非難した。時間は5系列を終るまで20分とした。

結果 Frenkel-Brunswik にしたがって、intolerance of ambiguity を“ある特定の刺激にもとづいて、飛躍して一般化したり、早まった知覚の中止をする傾向”であるとすれば、intolerance of ambiguity の変動は、最初の反応をするまでにめくったカードの枚数(PS)および正答がはじめてあらわれるまでの枚数とPSとのずれ(d)を測定としてとらえることができる。

まずPSとdについてその変数に影響する要因(実験条件・性・知能・不安傾向)分析を直交表 $L_8(2^7)$ にわりつけて行った結果、PSおよびdに影響のある有意の要

日本大学 長谷川 貢

**目的** 道德教育の効果を、価値葛藤場面における適応行動の見つけかたについて検討しようとする。

**方法** 1) M小学校は4年前から特に道德教育に力を注いで来た。K校とO校とはそれほどでない。M校児童と、K、O校児童との間にどのような差異があるかを比較する。2) 調査用紙は低学年用、中学年用、高学年用の3種。低学年用は5題、中および高学年用は各10題の葛藤場面を含む。児童は各場面に對して、探ろうとする行動と、それを採る理由とを記述する。ただし、低学年は2肢選択法によって行動方向を示す。3) 調査児童数。各校とも1年から6年までを含み、M校567名、K校300名、O校292名計1159名。

**結果** 1) 1つの場面に對して、いく種類もの行動方向が示された。M校はK、O校より行動方向が多様である。例、中学年第1題、放課後の掃除当番をすませてから出発するのは学習塾の時間に間に合わないという場面で、M校では多数のものが代人を立てると解答したのに、他校にはそれがほとんどない。2) 1つの場面に對するいくつかの行動方向に對する児童の分布を見ると、M校は他校より集中性が少ない。例、3年生の10題の平均において集中指数はM校25、K校36、O校29。これらはどういうことを表わすか。

**考察** M校はK、O校より、下記の傾向が多いと解される。1) 適応行動の選択に對して融通性が多い。原則的道德に拘束されることが少なく、場面に應じて一層適応的な行動を発見するものが多い。2) 自信のある行動方向を示すものが多い。例、高学年第3題、デマをとばして中傷している友人2人に対して文句をいうというものが多い。3) 自主性の多い行動方向を示すものが多い。例、高学年第10題、父は球算クラブに入るようにすすめるが、自分の長所をのぼすために絵画クラブに入るというものが多い。4) 他人に對する思いやりのある行動を示すものが多い。例、高学年第7題、家庭学習で忙しい時に母から幼児の子守りを頼まれたという場面において、子守りを引き受けるものが多い。5) 共同作業の方向をとるものが多い。例、中学年第7題、運動場に散っているガラスの破片を協力して片付けるといふものが多い。

信州大学 原 善 平

米国の William H. Mikkessel は Techniques of Living (生活の技術) またの名を The Psychology of Adjustment (適応の心理学) という書物を著わし、その中に Direct Living という一章を設けて、適応の一つのあり方としての Direct Living について述べている。Direct Living とは問題の解決を“理窟づけ”などの防衛機制によって回避することなく問題の困難を克服して、その解決に向って直進することである。ところで問題の困難を克服するにはどうしたらいいかということがこの際の大切なことである。ところがこのためには“自由な表現”と“客観性”と“社会化”との三つの原理に従うことが大切であると、この書物はいつているから、この発表はこの三つの原理が困難な問題の解決にどのように大切だかを述べることに主眼をおくことになる。

いま一人のやや内向的な人間に對して、周りの人々に理解してもらい、同情してもらうことが大変必要になったとする。これは、この人間にとつて大きな問題であつて、彼はこの問題の困難を克服して、これの解決につとめねばならない。まず第一の自由な表現の原理については、これがこの問題の解決に必要な欠くべからざるものであることは自明だから説明の要はない。ただ彼のやや内向的なところが、自由な表現を妨げるから、彼はこの妨害にうちかつだけの外向的なところを示さなくてはならない。次に第二の客観性の原理については、これを書物に出てくる文章を理解し、その理解したところを以て己れを理解してもらい問題にすると、その文章をその文章の意味の通りに理解することが客観性の原理に従つた理解の態度である。ところで理解は表現を助けるから、自由な表現の原理と客観性の原理とは密接な関係にあることがわかる。なお文章の理解には、いくらか内に沈潜することが必要だから、彼のやや内向的なところが有利に関係するのである。

こう考えてくると、彼のやや内向的なところは、この文章の理解のためには有利に関係し、自由な表現のためには一部不利に関係することになるが、その理解は、彼の目的意識に助けられて、彼を勇気づけ、人々の前にその理解を自由に発表するに必要なだけの外向性を彼に示させるだろう。なお次のように考えるならば、このことは一層可能になる。進んだ心理学は、個々の人間は外向一点張りでもなく、内向一点張りでもなくて、両方をもち合せていると説く。すなわち人々は外向型と内向型の二つの類型に分類すべきでなくて、ある外向の程度とある内向の程度とを二つの特性として、他の諸特性とともに兼ねもっていると考えねばならない。彼は文章を内向的に理解し、その理解を外向的に発表するのである。大学の教官にはこういう人が多いだろうとこの書物はいつている。さらに、この書物は、ある対象に自己を投げ入れて自己意識のうすらいでいるのが客観性の原理に従つた態度であるとし、この態度の

## 29 顔と名前の記憶(1)

—幼児、小学校1年生の場合—

静岡大学 石川 透

**問題** 同一クラスの児童が相互の顔と名前を記憶する過程について。

**方法** (1)調査対象 静大教育学部附属幼稚園の4才児3組男女計99名、5才児2組男女計53名、同附小1年1組中の男女計25名(附幼出身でない者)(2)手続 幼児には入園写真を、1年生には実際の顔を見せながら、各組担任教諭が名前をいわせる個別調査。1年の7月分だけは筆答による集団調査。(3)調査時期 4才児A組昭34年5月下旬、B組35・4・下と6・下、C組36・4・下と5・下、5才児D組35・5・10—14日と6・上、E組36・4・下と6・下 1年生36・4・27と5・18—19、と7・10

**結果** (1)何を記憶したか(記憶数)平均人数を男、女、男女平均の順に書く。( )内は%。4才児 4月B組5.4(16.4) 4.8(14.5) 5.1(15.6) C組4.5(13.3) 5.9(17.5) 5.2(15.2) 5月A組10.3(35.5) 10.4(35.9) 10.3(35.6) C組12.4(36.4) 17.0(50.0) 14.5(42.6) 6月B組25.1(76.1) 29.0(87.9) 27.1(82.0) 各月の差は有意。5才児4月E組5.2(20.0) 5.3(20.5) 5.3(20.2) 5月中旬D組7.4(29.6) 9.8(39.2) 8.7(34.8) 5・下E組15.4(59.2) 13.2(50.6) 14.4(55.4) 6・上D組14.6(60.8) 19.4(80.8) 17.1(71.2) 4・下と5・下、5・中と6・上の差は有意。1年生4月13.8(33.8) 16.4(40.0) 15.1(36.8) 5月23.7(57.8) 27.1(66.1) 25.3(61.8) 7月40.5(98.7) 41(100) 40.7(99.3) 各月の差は有意(大体は5%)。

(2)何人に記憶されたか(被記憶数)平均人数を男、女の順に書く。( )内は%。4才児4月B6.0(18.2) 4.2(12.8) C4.2(12.2) 6.4(18.7) 5月A9.7(33.4) 11.1(38.2) C13.5(39.8) 15.6(46.0) 6月B26.1(81.4) 24.8(77.8) 5才児4月E4.9(19.0) 5.7(21.8) 5・中D8.2(32.7) 9.1(36.6) 5・下E14.7(56.7) 14(53.8) 6月D16.8(67.0) 16.1(64.6) 1年生4月18.7(45.6) 16.8(41.1) 5月29.3(71.5) 25.6(62.4) 7月40.9(99.8) 39.8(97.2) 以上は、1月位経過すると、ほとんどすべて有意に増えている。

(3)男女の比較 全体の記憶数では概して女子の方が多く、被記憶数では、1年で男子がやや多い。同性記憶の傾向が明かである。

(4)年令の比較 1年生は幼児より優る。

(5)近接座席との関係 4才児28名(80%) 5才児10(37.0) 1年生9(36.0)が近接の友人を記憶していない。不被記憶も4才児に多い。

# III 発 達

30※ 材料の違いによる児童の保存の概念の発達に対する一考察

東京学芸大学 湯本 信夫

**研究動機** 量や重さの保存の概念の発達は、ピアジェによって水やねんどなどの材料を使って調査されている。しかしそれらの材料によつての概念の発達の相違についてはまだ明らかにされていない。そこで水とねんどを使用して調査のし方も実物だけでなく、ペーパーによる調査を併用してみた。

**調査方法** 実物による調査では水をビーカーに八分目に入れ、それを子どもの目前でシャーレに入れ換える。こぶし大の球状のねんどの塊を同様にソーセージ形に変える。ペーパーによる調査では、実物の場合の調査と全く同じことがらをペーパーに描き、それらの回答を求める。調査対象の児童は、小学3年から6年までの男女で、山間村、農村、小都市の小学校の該当学年のそれぞれ2クラスを取りあげ、一クラスには実物による調査、一クラスにはペーパーによる調査を同時に実施した。実物による調査児童数合計554人(男子280人女子274人)、ペーパー同じく558人(男子286人女子272人)

**調査結果** 実物による調査でも、ペーパーによる調査でも、水とねんどの量と重さの保存の概念の発達の度合に各学年ともそれぞれ相違がみられた。すなわち、

(イ) 量の概念では、ねんどの方が水よりも、実物、ペーパーともに各学年とも良好である。

(ロ) 重さの概念では、実物では学年によって多少の相違が見られるが、ペーパーでは各学年とも水の方がねんどより良好である。

(ハ) 同じ材料の量と重さの概念の発達の相違は、水では実物、ペーパーともに各学年とも重さの方が良好である。しかしねんどでは、実物、ペーパーともに各学年とも量の方が重さよりも良好である。(以下に資料を示す)

A. 実物による調査結果

	水		ねんど	
	量	重さ	量	重さ
3年(143人)	24%	60%	47%	46%
4年(137人)	43	62	71	43
5年(135人)	54	80	73	72
6年(139人)	82	83	90	88

B. ペーパーによる調査結果

	水		ねんど	
	量	重さ	量	重さ
3年(144人)	37%	41%	47%	35%
4年(132人)	51	68	65	55
5年(136人)	59	70	73	66
6年(146人)	82	90	91	86

(注) パーセントは水、ねんどを同量、同じ重さと解答した児童の百分率

31 視知覚の発達の研究 V

—仮現運動について—

大阪市立大学 浅田 ミツ

本研究は、仮現運動知覚における成人と学童の差異を明らかにすることを目的とする。第I~III報告での水平布置での実験は、次のような問題を提起した。即ち(1)仮現運動における同質優位の定説は、発達の大範囲に妥当しない。(2)仮現運動を規定する Korte の法則は C. H. Graham や小保内博士らがいうように、正確な函数関係を示すものでないことを考慮しても、吾々の連続呈示法ではこの法則は妥当しない。(3)ゲシタルト説では、融合は単なる物理的接近に依存せず形態的全体の同一性に依存すると説くが吾々の実験では物理的接近への依存が極めて強い。

第IV報告では、上記の問題が垂直布置においても提起され得るかを検討したが今回は L 型布置について実験した。刺激形態は円(半径 20mm)、色はマツダ色ガラスフィルター V-B 3 B, V-R 2 A, 強度はフィルター面上 145 Lux, P=e=150m. s., 呈示器として KYS 刺激呈示器を採用。呈示方法は垂直間を 60mm に固定、水平間を 20~320mm を 20mm ステップでランダムに移行した。裏向きの L 型、即ち J についても実施。全系列の観察を 10 回繰り返す。実験は 1 日 1 系列。観察時間は被験者の報告をもって終りとする。被験者は色覚正常、視力 1.2~1.5 I. Q. 110 以上の成人、学童各 20 名。被験者の報告の記録、結果の処理法は前回と同様である。

**結果** (1)同色の質的優位性について：一般に同色である方が、異色であるより  $\phi$  の成立を容易にしている。この傾向は学童よりも成人に顕著である。成人と学童の  $\phi$  知覚の差は、水平布置→垂直布置→L 型布置と進むに従い減少する。即ち学童は単純な刺激布置では同質優位の定説に従わないが、布置が複雑になるにつれ次第に成人の反応に近づく。しかし未だ両者の差は大きい。(2)空間的接近の優位性について：移動刺激間に運動を見始めた時の移動刺激間の距離の Cum. % 曲線、固定刺激間の運動を見終った時の移動刺激間の距離の Cum. % 曲線に基づき検討したところ成人、学童ともに物理的距離の接近が  $\phi$  の成立を容易にしていること、またこの傾向は学童に顕著なことが明かにされた。これらは前回迄の報告と一致する。従って、水平、垂直、L 型布置に関しては、上の課題提起が正しいことが証明された。

### 32 HORN-HELLERSBERG テストによる 正常児の発達的研究

白梅学園短期大学○大 脇 園 子  
E・ヘロスベルグ

仙台市小児精神衛生相談所 大 脇 三 恵 子

Horn-Hellersberg テストは絵画完成法による適応検査である。従って文化や年齢を問わずそのまま使用出来るので、日本の児童の発達スケールを作る目的で以下の予備的研究を行った。

**被験者** 宮城県塩釜市桂島在住の全児童 180 名と東北大学附属小学校児童 66 名である。

**結果**(1)構造分析のための発達スケールについては第28回大会(昭和 36 年)に於て報告したが更に改訂したスケールによって全児童の反応を分類した。桂島児童の結果は既報の通りである。仙台市児童の反応は桂島児童に比較すると、技術的には優れているが、発達スケール上では大体に於て同じ程度である。たゞ仙台市児童は 8~9 才に於て B-B 段階から C-C 段階への移行が早い。即ち線の単なる連結の時期が短く、より多く事物を描く傾向がある。

(2)原因分析のために、内容が何に基づいて描かれたかによって 7 種に分類し各カテゴリーの出現頻度を比較した。5 才台では桂島児童の場合、日常生活に基づいた絵が圧倒的に多く(男子 53.8%, 女子 71.3%), 11 才まで年齢と共に減少し男子 26.6%, 女子 32.2%となった。反対に年齢と共に増加したのは、人から聞いたり、本で読んだ或はラジオ・テレビによる知識、物語、想像、空想などに基づく絵があった。又、合理化(地図、後からの命名等)は 8 才頃まで増加しその後減少した。仙台市の児童の傾向もこれと一致しているが、日常生活が少く、空想・物語りが桂島児童よりも多かった。

(3)内容分析に際しては、描かれた対象物によって大きく 7 分類し、その各々を更に細分した。各被験者一人当りの事物数は年齢と共に増加し、絵の内容が豊富になって行く事が知られた。男女を比較すると、5 才と 11 才の他は女子の方が多し。対象別にはあまりはっきりした発達傾向はみられないが、一般的に云って、年齢と共に増加するものは人物、動物、身の廻りの事物、植物等であった。又女子に多いのは、木、草花であり、男子では想像の乗物が僅かながら多い。桂島児童と仙台市児童では環境が異なるので、描かれた内容も大分異なる。従って内容についての出現率の標準をつくるには更に多くの事例研究を要する。

上の結果を総合すると、構造の発達スケールと原因分析の分類は、かなり一般性があり、発達遅滞や適応障碍の発見診断に使用出来る事が知られた。

### 33 精神薄弱児の描画と色彩(4)

——色彩概念の発達とその特性——

東京都立青島養護学校○小 出 進

〃 小 串 里 子

**目的** 具体物についての色彩の認知及び抽象化、概念化の過程を発達的に促えようとする。

**被験者** 精薄児 77 名(C・A 12~17, I・Q 45~80, M・A 6:0~10:10), 普通児 67 名(小学校 1 年生, 保育園児 C・A 5~7)

**材料** 小学校 1, 2 年生用の理科および社会科の教科書のさし絵の中から、具体的な「もの」ないしは場面を 40 余种選び、それを画用紙に線で描いてある。これらの材料を類別すると①全体が、多くの色に分れていないで、色と比較的容易に対応でき、表現できるもの(いちご、くり、ひよこなど)②全体がいくつかの部分に分れており、それに対応したいくつかの色を選ばなければならないもの(草花、竹、樹木など)③色として表現しにくいもの(ガラス、水、太陽、雲など)④社会事象との関連が高いもの(ポスト、信号機、警官の服装など)からなる。

**手続** 上記の材料と 25 色のクレパス(サクラ)を被験者に与えぬり絵の作業をさせる。描いてある各具体物について、名前やぬるべき色を問うことがあっても、それに対する回答はさけた。

**結果** (1)特定の「もの」に対応した色が抽象化され概念化される発達の過程は、普通児および精薄児の両群において認められた。

(2)これを材料別にみると、前述の材料②および③において発達の差が顕著に認められた。

(3)精薄児と普通児とを M・A を同一にして比較してみると、「物」に対応した妥当な色のぬる割合は、精薄児においては、かなり低い。しかし、社会的事象との関連の深い、材料④の場合には、両者の差は必ずしも認められなかった。

(4) M・A がほぼ同じく C・A が異なる精薄児群どうしを比較してみると、C・A が低い群(I・Q がより高い)の方が妥当な色のぬる割合が全般的にやや高い。材料④については結果(4)と同様その差は必ずしも認められなかった。

(5)精薄児を性別に比較してみると、女子の方がこの面の発達がやや高い傾向がみられ、色の好悪の発達についての先の実験結果と一致した。色の概念化ということからだけでなく部分の全体視、全体の部分視といった、知覚の発達の面からも、アプローチすることが今後の課題である。

### 34 ろう児の社会・情緒性について (I)

東京教育大学 荒川 勇  
" ○古 厩 勝 彦

ろう学校在学中のろう児、4才～8才、346名(男172女174)に対して、質問紙を用い、その父兄による評定を行ったものに基づいたものである。質問項目は社会性発達検査、社会成熟尺度その他を参考にして作ったものであって、各年令に対し大体25問前後を含んだもので、これは、自立性、指南性、グループ活動、対人関係、創造性、音声言語の6領域に関する質問であって、すでに2才～9才の幼稚園、保育所、小学校に在籍する幼児・児童856名(男432,女424)によって標準化を行い、その値は平均値を100,1SDを10とする尺度によって変換したもので示すようになっている。

その結果、平均値に関しては、全体についてみると87.6であり、普通児に比して12.4低く、1SD以上の距りをみせており、有意差が認められた。そして、このことは4～8才の各年令それぞれについても認められることであった。標準偏差については、11.25と普通児よりもやや大きい、これは年令によって一様ではなく却って普通児に比べて小さい値を示す年令もあって一定していない。又、この傾向は男、女個々にろう児、普通児を比較しても同様なことが云えるが、しかし男女間の差については、普通児、ろう児ともに女子の方が値は高いけれども、普通児5才の男女間以外には有意差はなかった。以上の諸結果は従来の研究結果と大体同様の傾向を示すものと考えられる。

領域別に分けて比較すると普通児が70%前後の通過率を示すのに対して、ろう児は50%程度であって、特に音声言語の領域において著しく低率であったが、この領域に限らず、交信能力に間接的にも関係する質問項目には通過率の悪いものが多かった。しかし却ってろう児の方が高い通過率を示した項目もわずかながら見られ、これらは特に自立性の領域において見出されるものであった。

以上のことを通して考えられることは、単に言語力、交信能力に止まらず、ろう児の生活領域や各種の経験にも色々制限があるのではないかと、ということ、またろう児をとりまく人間関係の面にも多くの制限があるのではないかと考えるものである。

### 35 乳児院に於けるホスピタリズムについて

郡立八王子乳児院 二木 武  
" ○鶴 田 郁 代

ホスピタリズムについては今世紀の初めから現在まで多くの研究がなされているがその一致した結果は施設児の特徴として無気力さ、刺戟に対する反応の鈍さ、物事に対する関心の不足、集中力の不足、顔色の悪さ、運動機能の遅れ等があげられている。

当院に於ては昭和34年よりホスピタリズムについての観察を続けているがその結果について今回は34年度の結果の一部と37年度の結果の一部の比較を試みあわせて発達状況及び両者の保育内容の比較を試みた。

ホスピタリズムについては池田氏による46項目からなる症候表を用い発達検査は愛育会乳幼児発達検査、八王子乳児院式発達検査(試案)を用いた。

結果 1. 発達状況について。

年度別D. Q. 平均は34年度83, 35年度88, 36年度94で年と共に上昇の傾向が見られるが社会性、言語発達はまだまだかなり遅れており特に言語発達の遅れは著しい。

2. ホスピタリズムについて。

保育内容は栄養面及び日光浴、お遊びの量特に1年以上児の行動範囲がかなり広げられ、経験が豊富になって来ているが1年以下児については目立って改善はなされていない。よって1年以上児は精神面に於ける情緒の項目例えば見慣れぬものをとともこわがる、表情が乏しくうつろな目をしている等が大きく減少しており身体面に於ても顔色が悪く貧血性である、ねつきねおきが悪い等が大きく減少している。しかし対人関係の項目特に子供同志の関係例えば他の子供にしつとする、他人の玩具をいつも取りあげる等はほとんど差が無く興味深い現象と云える。1年以下児に於ては栄養面の改善により顔色が悪く貧血性である。いくらのんだりたべたりしても体重が増加しない等身体面の症候は減少しているが指しゃぶり、玩具を見せてもすぐ取らず取りあげても泣かない等の精神面の症候は差がない。しかし以上の様な結果から一応の結論として云えることは施設児も保育内容の改善によりかなり発達が伸び今後更に改善を加えることにより色々な問題の解決の可能性が得られたことである。



### 36 養育態度調査の結果について

日本大学 古賀 行義 安藤 公平  
" 岡本 健 ○杉本 功介

**調査の目的** 幼児の身体的な発育と養育行動及び養育態度との関係について明らかにする。

**調査方法及び期日** 昭和 37 年 2 月、静岡県保健所の協力をえて、熱海市、伊東市の 3 才児 1022 名について、身体計測及び健康診断を実施した。また養育態度調査についてはあらかじめ用意された 60 項目の質問を 3 才児の保護者 952 名について、面接法によって記録した。

**調査結果及び考察** ①熱海市、伊東市の身体発育値について、静岡県学童期の身体発育値は、全国平均より優れていることはよく知られているが、3 才児についても全国平均より、身長、体重、胸囲とも優れている。熱海市と伊東市の身体発育値については、男子は身長、体重、胸囲とも伊東市が優れている。女子では熱海市がやゝ優れている。熱海、伊東市 3 才児のローレル指数は、いろいろな全国的資料に比較して小さいのではないと思われる。性差については、女子の方がやゝ大きい傾向にある。また地区差については、農漁村地区の幼児がローレル指数は大きい。②熱海市、伊東市の養育態度について。顔を洗らわせる。歯をみがかせる。寒くなってもうすぎをさせる。牛乳、ヤクルト、ビタミン剤をあたえるといった健康は生活の面においてはかなりきびしい態度をとっていると思われる。しかし、定期的な健康診断を受けさせるといった面は少いことからもっと保健所などの利用がのぞまれる。排便食生活及び衣服の面のしつけもかなりきびしい態度をとっている。③養育態度と身体発育。ローレル指数によって上・中・下の 3 つのグループに分け、それと養育態度との関係について考察してみると、下のグループは人工栄養で育てたというのが多く、上のグループは母乳で育てたというのが多い。このことから乳児の栄養は母乳で育てるのが自然で最もよい方法であるということができる。

健康生活及び食生活の面で下グループは特に注意をはらっている。たとえば牛乳、ヤクルト、ビタミン剤など多くあたえている。また偏食や食べ残しをさせない、よくかんで食べるようにやかましくいうといったごとくである。

### 37 青年期の対人関係に関する研究 (II)

——対人的行動と心理的離乳——

名古屋大学 久世 敏雄

われわれは、青年期の対人関係に関する研究(1)において、対人的行動の発達を検討した。この研究では、対人的行動とくに control behavior と心理的離乳の関連を明らかにしたい。われわれは、すでに、青年期の対人関係に関する研究(1)における被験者に、心理的離乳の調査もおこない、これらの質問項目を検討したので、今回は、新しく実施した被験者(大学一年男子 87 名、女子 37 名であり両親健在のもの)に関して結果を報告する。調査は、父母に関する control behavior (これは、父母から control されたくない行動—expressed behavior と、父母から control されたくない行動—wanted behavior に分かれている)と心理的離乳に関するものであり、昭和 37 年 7 月から 10 月にかけておこなった。

結果は、まず、control behavior と心理的離乳の平均ならびに標準偏差について検討がおこなわれた。これらの結果は、青年期の対人関係に関する研究(1)とほぼ同様の結果が示されている。

つぎに、control behavior と心理的離乳の関連を検討するための、control behavior の平均より上、下に二分し、そのおのおのの群の心理的離乳の得点を検討した。この結果によれば、父、母ともに、control behavior の中の wanted behavior と心理的離乳の間に関連がある。すなわち、父母から control されたくないという行動(wanted behavior)と自分自身で判断し、行動しようとする行動(心理的離乳)の間に関連がみられるのである。このことを別の面から検討するため、control behavior と心理的離乳の相関係数を算出したところ、expressed behavior に関しては、ほとんど相関がみられないのに対し wanted behavior に関しては、心理的離乳との間に有意な相関がみられている。

これらの結果から、control behavior の wanted behavior と心理的離乳の間には関連があるものといえよう。

以上は、大学生に関していうことであるが、中学生、高校生に関しても同様の結果がみられるか否か等は、今後の問題である。

### 38 女子大学生の一次的同一視

津田塾大学 八重島 建 二

**目的** 一次的同一視の機能を考察する予備的水準のものとして、女子大学生のそれがどのような様相を示すかを考察する。

**手続** 1) 方法 (A) 質問紙法。項目は、父母が好きか、尊敬しているか、行いの手本にしているか、将来父母のようになりたいと思うかの4問、7件法。7・6・5・4・3・2・1と得点化する。(B) 分析法。F検定、U検定、T検定を内容に応じて行なう。2) 分析対照 筆者担当のクラスの学生187名。

**結果と考察** 1) 一般に、女子学生の母同一視は、父同一視より有意に大きい。2) 同胞内の位置でみると、母同一視が父同一視より有意に大きいのは、同胞数2~3の長子と同胞数3の末子と同胞数4の第三子である。3) 一人子。長子と末子の機能を顕著に持つと予想される一人子は父母同一視共に、同胞数2~4の長子や同胞数2~3の末子より有意に大きい。しかも、父母同一視間には、一般的傾向である有意差がない。4) 長子。同胞数3~4の長子は、同胞数2の長子に比べ、父母同一視共に有意に大きい。5) 中間子。母同一視は、同胞数3の中間子を中に、有意に、同胞数4の第三子がより大きく、同胞数4の第二子がより小さい。これに反し父同一視は、有意に、同胞数3~4の第二子がより大きく、同胞数4の第三子がより小さい。6) 末子。母同一視は、同胞数3の末子が同胞数2の末子より有意に大きい。父同一視はその逆となる。7) 第二子。同胞数を問わず第二子をみると、同胞数3~4の第二子が同胞数2のそれより父母同一視共に有意に大きい。8) 第三子。同胞数の多い方が少ない方より、父同一視共に有意に大きい。9) 同胞数。同胞数2の母同一視は、末子長子間に有意差はないが、父同一視は末子が有意に大きい。同胞数3の母同一視は、同胞数2同様長子中間子末子間の有意差はない。父同一視は、長子を中心に中間子が有意により大きく末子がより小さい。同胞数4の母同一視は、第三子が長子第二子に比べ有意に大きい。父同一視は逆に小さい。10) 過去か現在に祖父母共にいる家庭とない家庭を比べると、一般に一次的同一視に有意差があり前者が大きい。11) 父のいる家庭とない家庭の母同一視は、一般に有意差があり前者が大きいと予想される。

### 39 父一母一子関係の分析(8)

——出生順位から見た母一子関係——

東京家政大学 ○島 田 俊 秀  
東京都立大学 山 下 俊 郎  
" 三 浦 武  
東京家政大学 森 重 敏  
津田塾大学 八重島 建 二

**目的** 前報告で父一母一子関係の分析をおこなうために作った調査項目を用い、東京都を中心に小学校11校4年生1000人について調査をおこない、因子分析の結果子供の認知した母一子間には細部関与、垂直的親愛、情動、水平的親和の4因子の存する事を報告した(日本心理学会26回大会)。本研究は同時に調査した同胞の問題を取り上げ、同胞の数、同胞の性的構成および出生順位と先に抽出した因子とがいかなる関係にあるかを分析した。

**調査・結果整理の方法** 兄・姉・弟・妹の4つの記入欄を設けて各々の実数を記入させた。結果は各因子を構成している全項目に対する該当全被検者の肯定判断数の全判断に対する百分率を計算して各因子の因子価とした。同胞数が4人以上となると組合せによって例数が少くなるため今回の分析は3人までとした。例数は最低8人、最高56人である。

**結果** (1)一人子の場合には男女とも各因子の数値は高く、同胞数が多くなると長子の因子は低く、末子は垂直的親愛は低下し水平的親和が高くなっている。

(2) 同胞数が2人の時には同胞の性的構成による因子の数値および4因子のプロフィールに相違は認められない。同胞数が3人で、それらが同性の場合の長子と末子は、男女とも異性が混じているのに比べて因子の値は低い。

(3) 同胞数3人の中間子は、男子は末子の性に関係なく、長子の性の影響を受ける。女子の中間子は、長子が女子の場合には末子の性には関係なく、男子の場合には末子の性によって因子のプロフィールはちがってくる。

(4) 同胞が2人の場合には男女とも出生順位による差異は認められない。同胞数が3人になると、長子は男子とも中間子や末子に比べて因子の値は一般に低くなり、男子の中間子は細部関与、水平的親和が高く、女子では中間子、末子は同じプロフィールを示している。

(5) 設定された条件によってある一つの因子だけが変動するのではなくて、4因子は各々異った様相を動的に示している。

以上の結果の解釈については今後の研究の結果を待たざるをえない。

#### 40 性成熟加速現象についての一考察

横浜市立岩崎中学校 岡田寅次

性成熟の加速現象について各方面で騒がれているが、それを的確に示したものは、まことに少ない。私は曾て二次性徴出現期を想起法で捉えることについて、その適否を、第24回大会で発表しておいたが、この度は、その時に述べた最も誤差の少ない方法で二次性徴の出現を捉え、その当時の結果と比較して、最近5ヶ年の間に、二次性徴の出現が、いかに早くなったかを示した。しかも、ここでいう二次性徴は、男子については、声が変わり、精漏、恥毛腋毛の出現の四点に限定し女子については、乳房、初潮、恥毛腋毛の出現の四点にしばって考察したものである。

従って昭和32年3月に捉えた二次性徴の出現（対象は中学男女総計747名、小学生70名、高校生261名）と、昭和36年10月から昭和37年3月にかけて捉えた二次性徴の出現（対象は中学女生1022名）を比較して、女子の性成熟の加速現象を論じたもので、地域は横浜市の住宅街で横浜市を代表できるものと思っている。

その結果によると、乳房の出現期は、調査対象の25%に達する点で6ヶ月、50%に達する点でも、同様に6ヶ月、75%に達する点では9ヶ月早くなっている。従って乳房の出現は約6ヶ月早まっていると推定できて、しかも100%になるまでの期間が、短縮されていることに気づく。初潮出現期についても殆ど同様な加速現象が見え、25%に達する点で6ヶ月、50%に達する点で6ヶ月、75%に達する点で7ヶ月早くなっている。恥毛出現については25%の点で6ヶ月、50%の点で9ヶ月、75%の点で13ヶ月も早くなり、前二者と比較して、その加速現象は、より大きく進行したと考えられる。腋毛出現についても同様の傾向、いやもっと早まっている傾向が見え、25%の点で9ヶ月、50%の点で11ヶ月、75%の点で18ヶ月の加速現象を5年前の出現期と比較して捉えることができた。

これを要するに、女子の二次性徴の出現は、この5ヶ年で、約半年から1年半早くなり、なお恥毛腋毛の出現期の曲線は、男子のそれに似てきたようである。いいかえれば男子の発毛は、女子よりも短期間で完成する傾向があるがこの調査で得た女子の発毛期の曲線は、5年前の男子の曲線に著しく類似していて、最近の性問題を、女子の性欲の「男性化」で説こうとする一派に、或ヒントが与えられるかも知れない。

#### 41 女兒の心身発達の相関に関する研究

第8報 思春期における成熟の個人差

お茶の水女子大○平井信義

千羽喜代子

今世紀における児童の体位向上・二次性徴発現の早発化に付き、その原因及び精神的成熟との相関を追究してきた我々は、従来の質問紙法や回顧法に基く調査では正鵠を期し得ないので、follow-up法により、3年間観察し得た256名の女兒に付き、その発育の個人差を追究しながら、初経と乳房成熟の関係につき2・3の新知見を得たので報告する。

手続き 都内某校女兒で、昭和25~27年生れ750名、昭和21~23年生れの706名に付き3年間連続観察し得たもの。初経は年1回質問紙によって出現の時期を確認。乳房の観察はReynoldsの分類段階に従い、2名の熟練した観察者が予め誤差範囲を確認し、90%の一致率を得て観察されたもので年間3回。

結果 (1) 初経時の乳房成熟段階はⅢ又はⅣに多いが、特にⅣが多いとは限らず、Ⅱに属する者も2名ある。

(2) 初経の早い者は遅い者に比較して、乳房の成熟も早い。(連合係数・35)辻氏の研究と略一致するが、Ⅱの段階で初経をみた2名を発見したことは新知見である。但しこの2名もその後3ヶ月以内にⅢとなった。

(3) 初経と乳房Ⅱ及びⅣとの関係を有経累積分布で求めると、初経50%年令は12.56年、乳房Ⅱは10.0年、乳房Ⅳは12.74年。平均的に言えば、乳房Ⅱ発現後約2年半で初経をみ、更に2ヶ月後に乳房Ⅳを迎えている。(Ⅱとの相関は・56、Ⅳとは・64)しかし、個人については必ずしも肯定的でなく、乳房Ⅳとの間には、12才半~13才に交叉点が示されている。むしろ乳房Ⅳの者はその前後に初経をみている。

(4) 乳房Ⅱが9才以前に出現した物は、約1年後に初経をみる可能性がある。また、10才以前に初経をみた者は乳房Ⅱの出現が早く、それまでの期間が平均より短い。

(5) Nicolson及びReynoldsらの研究との比較を行ってみると、いずれも乳房Ⅳの後に初経をみている点で、我々の研究は異った結果を得たこと、我々の場合には乳房Ⅱが早くⅣが遅く、ⅡとⅣの間隔は長いこと——を挙げることができる。これらが、年代差に基くものか、人種差に基くものか、Reynoldsの研究が比較的少数であるためか。

成熟現象も詳細に追究してみると、今後に残された問題が数多い。

## 42 女兒の心身發達の相関に関する研究

### 第9報 二次性徴の發育と精神成熟との關係

お茶の水女子大学 平井信義

〃 〇千羽喜代子

Kretschmer, W. の説く精神身体成熟速度の問題の検討の一連として、乳房發達と初經發來の、すなわち二次性徴の一部に関してではあるが、2つの成熟過程に unbalance をもっているものとその他の成熟過程における動揺性についての調査・研究を行った。対象および研究・調査方法については前回と同様である。

個人における初經發來年令と Reynolds 乳房IV段階成熟年令の差の分布から、乳房IV段階よりも初經發來が1年1カ月以上おくれるもの 5.5% (5/90人)、4カ月から1年おくれるもの 27% (24/90人)、乳房IVに3カ月前後して初經のあらわれるもの 42% (38/90人)、初經の方が6カ月から1年2カ月早いもの 22% (20/90人)、初經發來が1年3カ月以上早いもの 3.4% (3/90人) となっている。初經發來が平均よりも早いものは乳房IVおそく、初經發來の平均より遅いものは乳房IVは早い傾向にある。

初經發來年令と乳房IV段階成熟年令の相異から成熟の同時性・非同時性を決め、(1) Coerper-Hagen 式体型図型 (2) 身長最大増加年令、(3) 青年期身体徴候得点、(4) 青年期精神成熟度得点、(5) Y・G 自己性格診断テストのうちの情緒安定性、(6) Y・G プロフィールの各々につき関係をみたがいずれも有意な関係を認めることができなかつた。

しかし、初經發來が乳房IVより早いもの、ほぼ同じ、初經發來が乳房IVより遅いものの3つのグループに分割したとき、青年期精神成熟度得点の間にのみ5%有意水準をもって有意差を認めた。すなわち乳房IVに比べて初經の遅れる方が青年期精神成熟度得点が低く、初經發來の早い方が得点が高い傾向にある。

すでに第5報において〔青年期精神成熟度得点と乳房發達  $C = \cdot 25$ 〕〔青年期精神成熟度得点と初經  $C = \cdot 45$ 〕の關係を認めたのであるが、乳房發達よりも初經の方が青年期精神成熟度得点との間の結びつきの強いことを認める。なお、現在用いている青年期精神成熟評定尺度は私案の段階であるが、社会的関心・興味傾向・社会と自己との相互関連・将来の予想または理想・身体的関心・交友・異性への関心などの内容から成っている。

### 43 しつけの類型の研究 I

日本女子大学 児玉 省 ○宮本 美沙子  
// 平野ひかる

しつけが子どもの人格形成にどのような関係をもつかについては、すでに多くの研究がある。各研究者は仮説的理論をたて、親子関係を規定する基本的要因をあげている。

例えば、Symonds は、1. 受容—拒否、2. 支配—服従の二因子をあげ、その両面性、矛盾性の上に親の複雑な行動形式が成立するとし、Baldwin によれば、それは、1. 受容—拒否、2. 甘やかし、3. 専制の三角度となり、更にそれから8つの対子供行動の類型が生れる。また Radke は、1. 民主的か専制的か、2. 拘束の厳・寛、3. 罰の厳・寛、4. 親子の愛情的結合の疎密、5. 養育に関する父母の責任の平等・不平等、6. 同胞関係の調和・不調和の6つの角度をあげている。

その他多くの研究があり、いずれも多くの示唆を与え、その研究方法や着眼点など参照すべき諸点を包含するが、必ずしも満足すべき点ばかりでもない。そこで、本研究は従来の文献を参照しつつ追試的こころみと共に総合的な考察を試みた。即ち、1. 親の側からの養育態度 2. 子供の側からみた親の養育態度 3. 養育態度と子供の性格との関係 4. 家族の各構成員の家庭内における役割 5. 親子相互のもつ親また子に対するイメージ、などをとりあげ、多角的に考察をすすめた。

しつけの基本的態度としては、受容・許容に対して拒否強制的対放任的などの因子が考えられるが、実際のしつけは、この基本的態度に附属するものとして、多角的な組合せが予想される。厳格とか過保護とかいっても、必ずしもあらゆる場合を通じて100%にそうあることは殆どない。また厳しさでも絶対に親の思うとおりにやらせる程度から、必ずしもそこまではいかないもの、またある場面にだけやかましいものと、その程度に差がみられる。即ち、厳格であっても、それで一貫していることはあまりないことであり、普通たとえば、厳格であったり、甘やかしたり、放任であったりする厳格さなのである。したがって、実在のしつけは、例えば、厳格+過保護+ $\alpha$  というようになると考えられる。

方法としては、子供のアンケート130問、親のもの85問を項目的にできるだけ対応させた。これは、しつけの生れるのは、親子の態度の接点であるからであって、それにより、親のしつけ態度を子供がどう受取っているかを明らかにしようとした。尚項目は、例えば、厳格であれば、厳格さの程度及びそのいろいろな角度の違いが設定できる項目をおいた。

## IV 教 育

#### 44 しつけの類型の研究 II

日本女子大学 児玉 省 ○信江裕子  
 // 長島 良子

**調査対象** ここに取り上げるものは宮城県仙北の農村小中学生 268 名, 山形県庄内の農村小・中学生 225 名, 同じく東京の 359 名とその両親達である。

**しつけの類型** しつけの類型を各調査地の資料について前演者の述べたような方法により分析したところ, 次のようなしつけの類型が現実に存在する事が分った。即ち(1) 純粋厳格型, (2) 純粋過保護型, (3) 厳格+過保護型, (4) 厳格+過保護+不一致型, (5) 過保護+放任型, (6) 純粋放任型などで, 実にこれらに(7) 偏愛・非民主などが結びついた数類型もある。ただし, この混合型にしても大体に於いて過保護と厳格を2つの大きな軸としたものであって, 各類型の出現頻度からみると, 結局純粋単一的な類型は少なく普通はいろいろな類型が混在している。

**類型の出現頻度** 出現頻度を地域的に見, 且つ親から見た場合と子供から見た場合を対照すると次の通りである。

厳格型—東京・親 8.2%, 子 12.4%。仙北・親 14.0, 子 7.1。庄内・親 8.6, 子 6.2。過保護型—東京・16.0, 14.3。仙北・13.6, 26.3。庄内 14.3, 18.5。厳格+過保護型—東京 8.8, 13.2。仙北・9.6, 16.9。庄内 9.1, 11.0。厳格+過保護+不一致+ $\alpha$ 型—東京 2.0, 1.4。仙北 4.8, 6.0。庄内 8.1, 3.9。放任型—東京 5.1, 5.1。仙北 2.4, 3.0。庄内 1.7, 2.6。過保護+放任型—東京 4.7, 4.7。仙北 3.0, 4.5。庄内 2.3, 3.9。

前述したように, 過保護型は子供から見たら仙北が最も多く東京が最も少ないが, 厳格型では同じように子供から見たら東京が最も多く, 仙北が最も少ない。これらに有意差の見られたものを拾うと, 過保護の類型については, 仙北は「子供の意のままになる」というたちのものであるが, 親からみると東京では「身のまわりの世話・心配」という実生活面に関するものが多い。厳格の型は子供からみて, 東京では「云いつけを絶対させる」が, 親からみれば仙北では「云いつけを絶対させる」「両親の前で子供は自由に発言できぬ」などの型が著しい。

親のしつけ態度と子供の受取り方のずれをみると, 過保護の類型について仙北の親子間にずれを示している項目は「云いつけを絶対させる」「子どもの云う通りになる」などの項目であるのに対し, 東京では「勉強のこ」「身のまわりのこと」「お小遣いのこと」など実生活についての親子間のずれである。又不一致, 偏愛などの類型については親と子の見る角度に有意の差があるずれが多くみられるが農村の現状と思われる。結局農村的しつけは現状においては都会に比し一貫性をかき矛盾をより多く包蔵しているように見える。

#### 45 しつけの類型の研究 III

日本女子大学 児玉 省  
 琉球大学 ○宮里 澄子

**目的と対象** 沖縄那覇市のしつけの実態と類型を東京並に宮城県仙北地方の農村と比較することによって明らかにし, かつその地域差を考察する。那覇市内の小学校五・六年男女児童 204 名とその親 204 名。

**結果** I しつけの類型については大体前の発表者と同じ類型が見られた。II 出現率では「過保護」では子供20% > 親 15% (東 14 < 16 仙 26 > 14) であり「厳格」では沖 6 < 15 (東 12 > 8 仙 7 < 14) で沖縄仙北は親は厳格にしているつもりでも子供は過保護と受けとっており, 東京はその逆。「厳格過保護」は沖 14 > 12, 東 13 > 12 で差なく, 仙 17 > 10 で子供が多い。「過保護+不一致+ $\alpha$ 」は沖 8 > 0, 東 2 = 2, 仙 2 < 3 で差なし。「厳格過保護+不一致+ $\alpha$ 」は沖 5 > 0 東 1 < 2 仙 6 > 5。「厳格過保護+放任+ $\alpha$ 」は沖 29 > 0.5, 東 2 = 2 仙 4 = 4。「過保護+放任+ $\alpha$ 」は沖 3 > 0 東 4.7 = 4.7 仙 5 > 3 で沖縄より高い。「放任」沖 15 > 3 に比べ 5 = 5 で高く, 仙 3 > 2。この類型では混合型の中には共通のものを含むものがあるのでそれを加えて傾向を見ると沖仙では過保護的なものが 56% 64.4% と高く拒否が 63% 4% と東 1.6% より高い。不一致では沖子 20% 仙親 19% と高い。III 単独項目の子供から見た場合, 三地域間の出現率をCR検定による有意差の主なもののみと「口答えをしらすぐ叱られる」沖 > 東 = 仙「親がうたぐり深い」沖 = 仙 > 東「つめたくきらっている」沖 = 仙 > 東「悪い所ばかり取りあげる」沖 = 仙 > 東と沖縄と仙北は東京より拒否的である「子供の面倒を見るのは片親だけ」「両親がよくいいあそび」「叱ったあとで気嫌をとる」など不一致の項目には沖縄と仙北が東京より大きいが「片親が叱ると片親がなだめる」沖 = 仙 < 東である。過保護的な項目では沖と仙はしつこくねだるときような角度が東京より多いが「身のまわりのことをうるさく世話する」は沖 < 東 < 仙となっている。「長男を特に大事にする」「女より男を大事にする」の偏愛傾向は沖 > 東 = 仙である。

**まとめ** 親と子がしつけを見ている見方の差では沖縄の子供は親より過保護的とみており親は厳格と思っている。地方差では沖縄仙北は子供からは過保護的である反面東京より拒否的で不一致的にうつつており偏愛的にもうつつている。沖縄のしつけはこういう事から都会的であるよりも農村的に近い。

## 46 家庭生活のしつけ的意義

日本女子大学 ○平野ひかる 児玉 省  
" 宮本美沙子 信江 裕子  
広島女子短期大学 鹿殿寿美江

**目的** 家族の人々が、家庭生活においてどのような行動をしているかという角度をおさえる事によってしつけの類型を見い出そうとした。

**方法** 家庭における日常生活的な行動を家事、社交、経済の三つの分野に分類し、家事を更に子供の管理と世話(生物的世話、イデオロギー的、学習的、社交的、子供の仕事)と家事(父親、母親、協同の活動分野)社交を対外的と家庭内の社交に、経済を父親、母親、協同、子供の分野とに分けた。これらの分野を中心に日常極めて普通に行われている行動項目を50とりあげて、その行動が誰から提案、命令されて誰が実行しているか、又自発通に行われているか、協同活動として行われているか家族の人々のvectorを見てそれがしつけ的にいかなる意味を持つかを見ようとした。小学生5年～中学2年までの児童生徒について東京(87名)仙北(139名)庄内(64名)の三地域をとりあげて(1)自発活動(2)協同活動(3)命令—実行型活動と分類しそれを子供の管理と世話、家事、社交、経済の四角度について分析した。

**結果・考察** (1)家庭活動においてはどの地域でも自発活動が60%前後で最大であるが、家庭内の人々はいつも命令されて行動していたのでは家庭の活動は円滑に運ばれなくなる事で当然の事と思われる。協同活動と命令—実行型活動では仙北で三活動中後者が男子19%女子28%を占めているが、他の二地域では少くかつ二つの活動の間には差がない。(2)自発活動における行動者の頻度ではいずれの地域も母親が多く50%前後を占めている。家庭生活における母親の役割から当然と考えられる。母親に次いで東京では子供、仙北では父親と子供、庄内では父親となっている。家庭にいる事の多い子供が家庭内で自発活動をする事が多いのは当然であるが、農村では、両親が野良に出て働くと同時にかなり家庭又はその近くで活動する事が多いので父と子は同率に近くなると考えられる。しかし庄内の子供は家庭の仕事としての農業的活動に従事する事が少ないのでこのような結果になったと考えられる。(3)協同活動では農村で父母のそれが70%を占めているが東京では40%である。

誰が命令し誰が実行または協同、自発するかはすぐ子供のしつけとなる事は当然であるが(1)いかなる行動項目を抽出すべきか(2)1行動項目に等価値を与えるかどうかという問題があるが、今後の研究をまつことにする。

## 47 しつけと性格の関係

日本女子大学 ○増田美津子 児玉 省  
" 宮本美沙子

**目標** 家庭環境が子どもの性格形成に及ぼす役割は大きいと考えられるが、親のしつけの態度は、子どもの性格にどんな影響を与えるのであろうか。この問題を考察する為に、家庭環境調査と性格検査を併用して、しつけと性格との関係をみようと試みた。

**対象** 前研究と同じく、東京、仙北、庄内の対象のうちしつけのタイプが親子の組合わせで純粋に厳格型に表われたもの33名、過保護型62名、厳格と過保護の組合わされた混合型77名、民主型34名、純粋ではないが拒否型が含まれたもの23名、計229名について考察を試みた。

**方法** 各対象児に行った矢田部ギルフォード性格検査(YG)の5段階標準点に換算された採点結果を、各しつけ類型ごとにまとめて、12の尺度の類型別の平均点を求め、各しつけの類型の平均的な性格特徴とし、各類型ごとの得点を尺度別t検定を行って比較考察を試みた。さらに全体的プロフィールを描いて、類型ごとに全体的特徴をとらえようとした。

**結果** 12尺度のうち、民主型が神経質でない、協調的、のんき、支配的であるのに反し、拒否型は神経質、非協調的、のんきでない、服従的、と4つの尺度間に有意差がみられた。また過保護型が協調的に反し拒否型が非協調的、混合型が外向的に対し拒否型が内向的と有意差がみられた。②厳格型、過保護型、その混合型の間には大きな差はみられないが、厳格型が抑うつ性が少なく、非活動的。過保護型が抑うつ性大で協調的、混合型が外向的、ということが目立つ。③全体的なプロフィールは民主型が情緒的に安定し社会的に適応的、活動的で外向的と最も安定した好ましい特徴を示している。④厳格型、過保護型、混合型は共にやや安定積極型の傾向がみられ、混合型が比較的好ましいプロフィールを示している。⑤拒否型は情緒的に不安定で非常に主観的であり、非協調的、内向的であり好ましくない特徴を示している。

**まとめ** しつけは、一つの類型にはまるものは少なく、むしろいろいろな態度の組合せによって成されるものが多数である。この調査表によって表わされるしつけの態度を家庭環境であるとするならば、調査表に表われたしつけの態度における民主的要因は子どもの性格形成に好ましい影響を、また拒否的要因が加わると、好ましくない影響をそれぞれ子どもに与えるのではないだろうか、ということが結論される。

## 48※ 大学生の価値観

—両親の価値観との比較—

国際基督教大学 モリスE. トロイヤー

〃 〇藤田 恵 璽

1. 国際基督教大学では5年計画による大学生の価値観の研究が行なわれている。この研究の目的は本学の教育課程の中で学生の価値観を明らかにし、これが4年間の学生生活を通じてどのように変化していくかを研究することである。この価値の研究は一般教育の必修課程としてくり入れられ、学生は一年の一学期、二年の三学期及び四年の二学期にこのコースをとり、種々のテストによる価値抽出記載を行ない、この資料にもとづいて自由な討論をなし、又価値に関する広範囲な読書によって自己及び一般の価値の問題と意義を深めていくことになる。この点において本研究は従来の学生の価値の研究と非常に異なっている。今回の報告は学生(一年生 1962年4月)とその両親の人生観、政治、経済及び宗教の「みかた」に関する資料の一部をまとめたものである。

2. I 人生観についての13の「いきかた」はシカゴ大学のモリスによるものであるが、6つの政治・経済生活及び9つの宗教倫理生活の「みかた」は我々の研究室とその助言委員会によって作成された。各々の「みかた」は標題のない約400字の文章よりなる各分野における代表的な思想を中核にして書かれている。被験者はこれをよく読んで自分の「みかた」に一番近いと思うものから順に順位をつける。価値判断ではいろいろな可能性が相互に比較され相対的な好ましきさによって決定されることから現実的で妥当性のある尺度として撰択順位を重視した。本報告では学生と両親の各「いきかた」につけた順位の分布とその代表値として中間値をとりこれらの統計的有意性と信頼区間を比較検討した。ここで比較される被験者は親から解答が送られて来た学生119名(男59, 女60)とその親201名(父101, 母100)である。親からの回収率は72%であった。

3. 13の「いきかた」順位の中間値の高いものからみると学生では第7の「いきかた」(行為と享楽と思索とを調和させて生きる)が1位で全体の52%が1から3位の上位の順位をあたえている。親の場合はこの「いきかた」は4位にとどまり、分布は平らに拡がって大きい個体差を示している。モリスは1949年の日本人学生の第7の「いきかた」に対する反応は個体差が非常に大きく、好ましきさの尺度が低いことを報告しているが、これは我々の今の資料ではむしろ親の場合にあてはまり、これからも現代学生の価値の変容が考えられる。親の順位の最も高いものは第1の「いきかた」(我々の築きあげたもっともよきものを維持発展さす)であって、66%が1位から3位の高い順位をあたえている。これは世代の特長をよく示している。下位に表われる否定的な「いきかた」は親子とも似た傾向をもつが学生は受身的な「いきかた」をより強く否定し、親は冒険的で行動的な「いきかた」をより強く否定する傾向を

## 49 親子関係の心理 I

子のもつ親のイメージと親のもつ子のイメージ

日本女子大学 〇矢崎 和子 児王 省

藤本 紋子

目的 本研究は子のもつ親のイメージ、父及び母のもつ子のイメージを取りあげて家庭環境の分析を行うとした。質問紙作成：小中高の男女生徒467名に「父」「母」と題する作文を書かせ他学級文庫や市販の作文集から親や子どもに関する表現を拾い作成した。問題は50問で趣味教養親の生活、両親相互間の態度、子どもの教育、躾、親の感情の6つの角度から成り一問は批判的、好意的、無関心的な選択法を持つ。例、私の父はだらしがないと思う。(イ)批判的：どうして大人のくせにもつときちんとしないのだろう。(ロ)好意的：忙しくてそこまで気をつかえないのだろう。(ハ)無関心的：私は気にしない。

結果 小中学生共、概ね好意的イメージを取るが、次の様な間で有意の発達差がある。「成績を気にする」「いつも勉強しなさいという」「将来困った時でも親のめんどうを見る」などで小学生の方が25~35%多く肯定。子どもが親に対し批判的な項目は「自分の欠点をなおそうとしない」「怒るとすぐたたく」「父と母が言い争いをする」「外でいやなことがあると八つ当たりする。」「ちらかすとすぐ怒る。」「父が自分のできることでもお母さんに言いつける。」「勉強中に用事を言いつける。」「兄弟けんかをすると大きい人が悪いと言って叱る。」「お父さんにどなられている。」等である。

考察 親に対する批判、好意、無関心的態度について④中学生の方が批判、無関心が高く、好意が低く。③特に教育、躾、感情の設問で著しい。(母>父)②小学生は女児の方が好意と同時に批判も高いが、男児は無関心に傾く。①この関係は中学生になると逆転し、急激に無関心から批判へ移行する。

父と子、母と子のくいちがい率は、性差、学年差、何れも平均的には25~30%のくいちがい率で有意差はないが個々の項目では有意差がある。(CR検定による) 即ち教育関係の項目は小中学生とも父と子のくいちがい率が母と子より大きい。躾では中学生<小学生、父親>母親、男児<女児の方が親子間のくいちがい率が高い。又親に対する批判、好意、無関心における親子のくいちがいは小学生にのみ顕著な親子差が認められる。即ち、子どもは親自身が感じる程批判的見方をしておらず、むしろ好意的見方を多く持っているのである。



## 50 親子関係の心理 II

親子のイメージのくいちがいと不安傾向の関係

日本女子大学 ○藤本 紋子 児玉 省

〃 矢崎 和子

**目的と方法** 研究 I に続き子のもつ親のイメージ及び親子のイメージのくいちがいと子どもの不安傾向の関係を田研式 GAT を用いて検討すること。

**対象** 研究 I の対象群と同一。

**結果と考察** [I] イメージに於ける母と子及び父と子のくいちがい率と GAT の不安偏差値の相関係数を求めたところ殆ど 0 に近いものから一になった。即親子のイメージのくいちがいは子どもの不安の多少に直接関係ないといえる。但中学女兒の母と子のみ .36 で有意性が認められたことから中学女兒が特に母に依存的であるとの可能性が考えられる。[II] 親に対する批判, 好意, 無関心と不安の関係: 批判が好意, 無関心との関係に於て占める比率と不安偏差との相関係数を求め, 又好意, 無関心についても同様の操作を行ったところ, ①子どもの不安は親への批判の増加, 好意の減少につれ高まる。②この相関は中学生より小学生, 父より母の方に著しい。③無関心は不安の多少とは特に関係ない。[III] 親の態度に対する批判や好意の偏向の仕方を検討した結果 A. 親自身の生活 B. 子に対する親の態度という 2 角度の組合わせから次の類型を得た。即 G (全面的好意型) G<sub>1</sub> (Aのみ好意的) G<sub>2</sub> (Bのみ好意的) GoCo (批判好意とも顕著な傾向をもたぬ, いわば中立型) C (全面的批判型) C<sub>1</sub> (Aのみ批判的) C<sub>2</sub> (Bのみ批判的) 混合型の GC (A に好意的 B に批判的) と CG である。このタイプの出現率をみると, ④母には好意型が多く批判型が少ない。⑤父はこの関係が逆転する。⑥中学生は C が多い。⑦小学生の好意型は, 概ね G に集中するが中学生は G<sub>1</sub> に移行する。次に親子のタイプの出現率を比較すると全体的傾向はほぼ類似している。但親は GoCo が多いのが特徴, 又子どもの発達に相応した発達程度を認めていないことが暗示される。[IV] イメージの類型と不安の関係: ①不安の著しく高い者は明らかに批判型, とくに C を多くとる。②普通程度の不安の者でも個々の不安項目内に異常に不安の高い項目をもつ者はそうでない者より好意型が少なく批判型 (C, C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>) GC が多い。次に親子くいちがいからみると, 不安の高い者は全体的傾向としては類似しており, むしろ普通程度の不安の者が子どもは好意型を多くとり親は批判型を多くとるといふ意味で著しくくいちがう。(CR 検定による)

## 51 僻地児童生徒の心理学的研究 (II) 第 12 報告

—出稼部落における親子関係について E—

岐阜大学 宮 脇 二郎

先に報告した親子関係は心理的離乳, 親の権威, TAT, SCT による親子関係のプロジェクティブ・テクニックなどであるが, これらの結果から, こうした製炭業を主産業とする彼等の部落には或る特殊な親子関係が成立しているとみられる考察が若干なされるに至った。今回は親子関係診断テストを用い Symonds, P. M. の云う親の拒否, 支配, 保護, 服従の態度がどのように形づくられているかをみようとし, 更に, 5 年以前に中学 2 年に対して同一テストを試みた結果と比較して, どのように変化しているかをみようとしたものである。又, これに加えて McCall, W. A. の個人調査票第二形式から両親についての家庭環境の質問項目を取り出し, 質問紙法によって調査したものを本報告としたものである。

対象学年は中学生全員であるが, これらの結果から考察すると, 全体的に標準に比べて親の子に対する態度は低い値となつて, まだ理想的な形には程遠いものと考えられる。特に母親の態度は, 生徒の評価も, 母の自己評価も低いものとなっている。内容的なものでは消極的拒否型, 不安型, 矛盾型にそれが著しいようである。しかし, 5 年前のものに比べると著しく好転していることが父親の態度にみられる。母親も生徒からはその傾向を示されているが自己評価では進転していないようである。

個人調査票による家庭環境では両親とも都市に比べてやや劣っているが, 想定した程大きな差は見られなかった。ただ内部項目を吟味してみると, まだ, 民主的な家庭の運営には, とても到達できない程度のもが多くみられる。この原因は主として彼等の家庭では男子優越であつて, 家長制度の名残りが充分みられることなどであらうと思われる。

中学生ともなると, すでに大人として一人前に扱われるようになるが, これは身体面が大きく, 精神面ではやや疎外されているようである。母親が家を出て仕事をすることが多いということも親子関係のつながりに多少の影響を与えているものであるし, その他, 家の職業などからくる親子の接触の少なさ, 経済的なものからくる労働の強化など, 幾多の困難な面も要因として現われているので, 様相は複雑となつてくる。又, この部落では早老, 早死が都市に比べて多いようで, 生徒もこれに暗に気付き, 健康であることを強調した意味の応答を示していることが多い。このことは健康管理の面でこうした山村の在り方を考察することが大切であると思われる。

## 52 教師の資質とその適性について (III)

——いわゆる教員タイプについて——

明治学院大学 ○尾形 健  
" 小川 勝治

**目的** 厳密な専門的規定とは云えないが、我々は特定の職業における職業的タイプを想定することができる。教員タイプあるいは師範タイプという語は、かつて一般的用語であったが、戦後教育の変動にともない、戦前における、教員タイプの概念が陰をひそめた。最近教員養成制度の改革企図から、再び教員タイプという表現が散見するようになった。

前回の調査——教員志望の動機とその理由——においていわゆる教員タイプに対する好悪を挙げている事例が相当数認められたが、その具体的内容は不明確であった。そこで今回は、教員タイプと呼ばれる職業的特質が、共通概念として考えられているか。もし考えられているとすれば一般にどのような類型化された特質か、ということの調査を意図した。

**方法** 教師の理想像、教員の適応性、不適応性などに関する調査研究と異なり、いわゆる教員タイプと呼ばれる職業人としての類型についての調査研究の事例に極めて少ない。そこで大学生を対象として、中学、高校の教員タイプに関して、自由記述により回答を求め、これを整理し、本調査の質問項目 15 項目を作成、さらに各項目ごとに五つの選択肢を作成した。

被調査者は、次の通りである。

- a. 中・高校教員 214 名
- b. 中・高校の在学生徒の父兄 169 名
- c. 本年度、中・高校において教育実習を経験した大学生 285 名

**結果の要約** 目的で述べたように、いわゆる教員タイプという表現は認められるが、その実態ないし内容は具体的に把握されにくいことは、調査の過程を通して推察された。

しかし、教員タイプとしてそれぞれの項目が該当しないと答えている事例は少ない。

一般に考えられている教員タイプは、複合型をとり、価値的範疇に属すると考えられる事項の場合でも、両極が複合されていることがある。そして全体を通じて、いわゆる教員タイプの存在そのものについては肯定的であり、それが教師の理想像に接近していると推定することができる。

## 53 教師の児童・生徒観の因子分析

福島大学 菊地 章夫

**目的** さきに作成した Minnesota Teacher Attitude Inventory の短縮版 (教育心理学会第 4 回大会発表) を因子分析的に検討することによって、教師のもつ児童・生徒観の構造を問題とする。

**方法** MTAI の原版 (150 項目) から予備テストの結果 30 項目を選び短縮版を構成した。この短縮版は大学生 183 名について原版との  $r = .875$  をえており、MTAI の 5 つの低位領域を代表する項目をほぼ適当に含んでいる。これを学芸学部学生・小中学校教師など計 420 名に実施したが今回はこのうち小学校教師 168 名 (男 88・女 80) の資料を分析対象とした。項目間の四分相関係数を求め、Centroid 法により因子分析を施し第 V 因子までを求めた。第 V 因子までで全分散の 45 % が説明される。この結果をグラフ化することにより図上で直交解を試みた。

**結果** 各因子ごとに正の負荷量の大きな項目、負の負荷量の大きな項目をあげると (数字は原版的項目番号)

- I (123, 132, —77, 83, 89)
- II (50, 83, 99, —23, 52, 123)
- III (23, 100, —7, 52)
- IV (90, 116, — )
- V (57, 77, —20)

などである。各因子は順に、こどもに対する不信心・きびしさをあらわす「不信の因子」、紋切型の態度などを含む「権威主義の因子」、権威や秩序の維持をしめす項目に負の負荷量をもつ「(反形式主義) の因子」、こどもに対する信頼感と放任的態度のまざりあった「(放任) の因子」、こどもに対する教師の責任を問題とする「(責任) の因子」と解釈されるが、第 III 因子以下の因子の性格は必ずしも明確ではない。

**今後の問題** 各因子の解釈が必ずしも容易でないことは 1) MTAI 短縮版の構成のしかたに問題があるのか。2) 小学校教師のもつ児童・生徒観が構造的・一貫性のとばしいものなのか、など今後検討を要する問題である。

## 54 音楽鑑賞指導の実験

共立女子大学 ○玉 岡 忍  
千葉市立登戸小学校 山 田 保

**目的** 心理学的根拠に基づいて、音楽鑑賞の指導を個人教育的に行うこと。

**方法** 4年生の学級全児童（登戸小）について、日常の観察、音楽素質診断テスト、玉岡式音楽鑑識力テスト、学力、クレペリン検査、聴力検査、性格、家庭環境等の結果を総合して5名の児童を選出し、彼らに向う3年間の“個人差”に基づいた音楽鑑賞指導を行うものである。5名 M（男）、A（女）T（男）F（女）E（男）はそれら精しい調査及び検査の結果選出され特に音楽的な選択基礎として ①家庭の音楽的環境及び本人の感情感得力を精しく調べた。身体、精神及び環境的にそれぞれ差異のあるもので、その大要は表に示す通りである。

**結果** 教育それ自身が結果であり、なお継続中のことであるから、決定的なことは云えないが、彼らに4年教材の「軍隊行進曲」と「白鳥」との鑑賞の指導を行い（1）作品についての話し合い、（2）全曲鑑賞、（3）主観の取得、（4）感覚的把握、（特に主題の把握）（5）楽器と演奏形態、（6）テーマ唱と身体反応、（7）階名唱と演奏（8）全曲鑑賞、（9）記譜、などについて指導中である。なお5名についての指導は個人差に基づいてそれぞれ異なるが、大体の傾向を述べると次の通り。M及びA児には、特に感覚と知的理解を考慮に入れる。T及びF児には、リズムの流れ、旋律の流れ及び音色の鑑識に力を入れる。E児には、感覚の芽生えを画り、音楽に興味を持たせること。

## 55 人間関係を指標とする問題児の指導

——学級集団内の役割の適合による——

港区立神明小学校 ○佐 藤 喜美二  
東京学芸大学 田 中 熊次郎

学級における問題児（特に社会的不適応児）の指導を効果的に行うため小集団の編成を工夫し、集団内の役割の適合に加工する試みを小学校3年生 38名を対象に2年間実践した。すなわち小集団編成の工夫として、（1）ソシオメトリック、グルーピングによる小集団編成と再構成の繰り返し、（2）テストの基準は学級会活動における係り活動、その係りを誰と一緒にやりたいか、（3）グルーピング並に係りの決定（役割の適合）には特に問題児の欲求を第一に満足させるように編成した。また実際の指導では学級会活動に重点をおき、話し合い活動において自由に発言できる受容的雰囲気をつくるとか、バズセッション、小集団討議を多くとり入れ小集団内の役割はなるべく交代するように指導するなど工夫した。その結果3年1学期に10名以下の下位集団6つに分かれていたが4年2学期には男女混合20名のA集団と女子8名のB集団の2つの大きな下位集団にかたまり、男女の相互関係も好ましいものになった。

また社会的不適応の問題児数名は集団の中で好ましい性格に治療された。特に男子11は反社会的な問題児だったが彼には特に希望する男子16と組ませると共に壁新聞作りの「役割」を当てることによって暴力的傾向が少くなり男子18との相互選択もでき、学習成績も向上した。また男子17は乱暴、粗雑、注意散漫だったが希望する男子20女子39と組ませると共に掲示係りの「役割」を当てた。彼の性格はやさしい、まじめ、親切、たのもし……の方向に変わると共に学級委員に選出されるまでになった。その他の問題児については省略するが、この研究と実践を通して学級集団のかもしれない出す雰囲気や集団の人間関係が子どもたちの人格形成にいかに大きな影響を及ぼすかを知ると共に35～6名程度の規模の学級の場合、学級内の人間関係を考慮し、特に集団内の役割の適合を加工するならば問題児（特に社会的不適応な児童）の指導が有効に行われると考えられるのである。

56 精神薄弱児のコミュニケーション (17)

—情報の提示法とその効果—

東京都立青島養護学校 ○林 邦 雄  
東京教育大学 堅 田 明 義

**目的** 本研究は精薄児に対し言語情報を与える際にどの感覚器官に訴えた場合にその伝達効果は大きいのか、つまり視覚的、聴覚的、視聴覚同時的の各提示法によって、その効果がどう異なるかをしらべることを行なった。

**方法** 精薄中学男子生徒 13 名 C. A. の平均 14 才、M. A. の平均 8 才 6 月、言語障害、聴力障害などのない者を対象とした。提示法は視覚的(黙読させる)、聴覚的(読んで聞かせる)、視聴覚同時的提示には二種類あって、1つはみせながらよんで聞かせる、他は音読させる。情報材料は清音 4～7 級よりなる無意味綴、各綴毎に 20 個ずつ用意し、それは無作為に 4 群に分け、10×25 cm のカードにひらがなで右横書きした。手続きは、各被験者に対し、50 cm 離れた位置より情報が与えられ、提示時間は 1 字 1 秒の割合で提示順序はでたらめに行なった。伝達直後に口頭で答えさせた。それを記録し、完全に再生された場合に得点として 1 点が与えられ、他は 0 点とした。

**結果と考察** (1) 各提示法と再生の程度 被験者個人々の成績をみると再生程度が各方法によってまちまちで一つの傾向はないが、ただ視聴覚的(音読)方法の場合は多くの被験者に効果が上った。平均でみると視聴覚的(音読)が一番よく、視聴覚(よんできかせる)、視覚、聴覚の順にわるくなっている。有意差検定では、視聴覚的方法と聴覚的方法との間に差が認められた。視聴覚的(音読)が効果的な理由は、みることと発声することとくくことが同時に反応して感覚器官に強く印象づけるからであろう。視聴覚がすぐれていることは文を用いた筆者の実験でも明らかにされている。

(2) 各提示法と誤りについて

各被験者が再生時に犯した誤りの音(字)の数を少い順にいえば、視聴覚(音読)、視聴覚(よんで聞かせる)、視覚、聴覚の順であった。これは上述の再生程度の結果をうらづけている。誤りの内容としては変容と脱落があるが、変容が脱落の 3～4 倍あり、脱落のめだつ提示法は聴覚的方法であった。

57 精神薄弱児のコミュニケーション (18)

—情報文の把持に関する考察—

東京都立青島養護学校 ○井 田 範 美  
" 小 出 進  
東京教育大学 清 水 寛

**目的** 情報文の把持に関して、再生による方法、再認による方法(選択による方法)を用いることによって、その結果を分析考察する。**手続** ① 対象 都立青島養護学校生徒 20 名 MA 6:0～9:11 (平均 7:10) CA 13:0～15:11 (平均 14:1) IQ 50～75 (平均 58.4) ② 方法 能力、性格行動、年令等を考慮した上で、次の等質的な 2 集団をつくる。再生群 10 名 再認群 10 名 情報文の伝達材料 SET 1 15 文例 SET 2 15 文例 SET 3 15 文例 情報文は 4 文節以上 6 文節から作られ、各セット間の情報文は比較的に類似している。

両群ともに、情報文が伝達されてから 10 秒後に再生もしくは再認(選択)させる。再生群では、完全または殆んど完全に再生できた場合に 1 点を与え、再認群では 3 つの選択文の中から正しく選択できたものに 1 点を与える。再認における選択文の中の誤文例は、

SET 1 情報文の 1 文節が変容、脱落、付加。

SET 2 情報文の 2 文節が変容、脱落、付加。

SET 3 情報文の 2 文節以上が変容、脱落、付加。

等の如く構成される。

**結果と考察**

両群における通過得点平均

	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>3</sub>	S <sub>1</sub> +S <sub>2</sub> +S <sub>3</sub>
①再生群 N=10	6.4	6.5	7.1	20.0
②再認群 N=10	10.5	11.8	13.0	35.3

①と②の有意差 0.02>P 0.01>P 0.001>P 0.01>P

① 上表より、全セットを通じて、再生群は再認群よりも成績が良い。② MA における両群の通過平均得点をみると再認群における MA 6:0～7:11 は再生群の MA 8:0～9:11 よりも成績が良い。③ 再生では文節数よりも内容の難易度に結果は左右されている。④ 再認群では誤まって選択した文例については文節の変容、脱落、付加との間に傾向差は発見されず、むしろそれらが文全体の内容を大きく変えているか否かに選択の正誤が左右されている。

## 58 精神薄弱者の社会適応に関する研究

—最近10年間における精薄施設退園者の社会的予後に関する調査—

国立精神衛生研究所 桜井芳郎

**目的** 精薄施設退園者の社会適応の実態を明らかにし、我が国における精薄者福祉対策を進める上の問題解決に役立てる。

**調査対象及び方法** 日本精薄者愛護協会加盟の公私立精薄施設——児童収容施設、児童通園施設、成人援護施設、救護施設、緊急救護施設、自由契約施設——226施設、全施設について過去10年間に退園した精薄者の退園後の状況を出身の施設を通じて調査した。なお本調査は日本精薄者愛護協会との共同調査である。

**調査結果ならびに考察** 調査回答率は70% (158施設)、退園者総数は男子4527名、女子2284名合計6811名で、その80%以上は児童収容施設退園者である。現在年齢は15才～24才が60%以上を占めているが児童通園施設退園者は10才～14才、児童収容施設退園者は15才～24才が多く、一方、救護、緊急救護施設退園者はかなりの高年齢層にまでひろがっている。知能程度は痴愚42%、魯鈍36%、白痴9%、境界線3%、不明10%で知能の低い者が多い。現在状況は就職している者(23%、男子1158名、女子418名)、現状不明(20%、男子920名、女子450名)施設入所(16%、男子756名、女子376名)が多い。児童収容施設では就職している者(26%、男子1086名、女子402名)が多く、魯鈍60%、痴愚32%で白痴も26名就労している。職種は男子では工員、店員、農耕従事者、女子では女中、女工、店員が多くかなり職場に適応している。なお比較的多くの女子が結婚している。児童通園施設では学校在学中(38%、男子138名、女子80名)が多く、特殊学級へ通学して適応している者が多い。知能は痴愚56%、魯鈍37%で白痴も1名みられる。成人援護施設では就職している者(33%、男子10名、女子3名)が多く境界線、痴愚が多い。救護施設では病院入院中25%(男子40名、女子33名)家でぶらぶら17%(男子33名、女子17名)、死亡16%(男子22名、女子27名)で、あまり予後が良くない。緊急救護施設では病院入院50%(男子10名、女子2名)、死亡25%(男子4名、女子2名)で予後は不良である。自由契約施設では就職している者(24%、男子46名、女子7名)が多く、魯鈍50%、痴愚30%で白痴もみられる。以上施設種別によって相違はあるが、精神薄弱と診断された者が、かなり社会で活躍しており、彼等の知能障害の程度と社会適応の状況とは必ずしも平行していない。かかる点から従来の診断方法が、特に予後診断の面で不十分であり、真に診断が将来の可能性を予測し、その処遇方法を指示できる様なものに改善して行く必要が感じられる。それと共に施設に於ける処遇方法も退園者の状況などからみて再検討を加える時期に来ている様に思われる。

## 59 精薄児教育に於ける生活訓練盤の使用効果について

江東区立元加賀小学校 岸本英男

**目的** 精薄児教育の根本目標は、小学校在籍児童に関しては、その年齢相応の心身の発達段階の標準への能うる限りの調和的接近と同時に、その跛行的発達の是正を、如何に行ないその機能障害による能力上のギャップを、如何に埋め、更にその補償的機能を如何に発展させるか。つまり潜在能力の探索陶冶と併行して、顕在能力の陶冶錬磨という積極的方法が、あらゆる機会にとりいれられねばならぬ。そのためには、特殊学級に於ける小集団の構造の実態、及び、その置かれている社会経済的条件や地域性の面から招来される各種のハンデキャップを、科学的に検討し、より合目的な教育内容と方法が、常に考察され又実践される事が必要である。そしてそれを可能ならしめるために、本教具、生活訓練盤は創作され使用されたものである。

**構造** 本教具はスチール黒板の縦に七曜日を、横に在室児童名を記入する軸をとり、月曜は円、火曜はフリー、水曜は正三角形、木曜は正六角形、金曜は正八角形、土曜は正方形のフレームを作り、その中へそれぞれの形をいくつかに分割した磁石付き彩色木片を毎日児童の活動状況に応じた数だけ与えて、各自に貼付させ、その基本形に対する割合を理解させながら、一日分の、又一週間分の業績を点に換算して、日曜の項に合計として記入させ、相互の得点を比較したり、図形や色の配合を総合的にとらえさせながら、コミュニケーション、コントロール、ハブニングの三過程をトレーニングし、計量計算の陶冶材としてのほかに、サイエントロジーの機能をも併せ持たせたものである。

**効果** 本教具の基本原理は既に長年の歴史を持つが、具体的に設計されてからは一年になる。その間その使用によって顕著な態度変容を示し、明らかに本教具の使用効果によるものと見做された生活能力の領域は次の通りである。

1) 分数概念把握 2) 分数計算 3) 数量形の総合的關係把握 4) 整数計量計算 5) グラフ理解 6) 自己洞察(内観) 7) 優秀形態知覚 8) 心身のコントロール 9) 色彩感覚 10) 生活意欲 etc.

**結論** 学童期に於ける精薄児教育の教具としてのみならず、広範囲に使用して有効であると思われる。

## 60 精神薄弱児の言語障害について

江東区立平久小学校 高橋 哲也

精神薄弱児の言語障害の治療研究と調査、まず、一般にそれぞれの子どもについて、知能検査や観察を行い、生育歴調査などを行いますのが通例であります。

コトバの学習という立場から治療教育に入っていくのである。特に特殊学級の場合など、ここで、通常適切な治療的指導を通じて、コトバを育てる、治療について、多少とも可能のある子どもとは次のような点である。

知能発達のおくれ病弱、親の態度等の関連、コトバの発達に必要な望ましい種類の刺激環境に恵まれなかった子、ことばの学習が不十分である子、コトバの潜在能力をもっている子、発声、発音器音に運動機能障害がある子、コトバの障害が目立っている子自分の発語器官を使いこなす働きに混乱があるために普通の子どもと同じ方法では効果的な学習ができない子、言語中枢に異常があり、耳や眼からはいる刺激を受けとってその意味や価値を判断する働きに混乱がある子。以上の点から、話しことばの機能障害という観点などから精薄児を見なおすといくつかに分けることができるのである。これらは、調査と検査によって、えたので、はじめてその子どもについて、コトバの教育の可能性や、方針や技術を考へ出すことができるものであると思う。

なお次のようなこともある。現在まで、ちょうどその子どもの力に合った指導をうけており、子どもの潜在能力がその子なりに充分に発揮されない子、なをかつ指導法を工夫してもこれ以上の急速な進歩を期待することできない子適切な指導を行えば、著しい進歩を期待しうる子、子どもの特性に合わせてやれば、伸びる子、なども上記に関連するものである。

検査と調査であるが、次のように行くとよいのではないかと思う。

まず、子どもの生育歴調査、身体の発達について、内科、精神科、耳鼻科、整形外科医などの診断によること、ようするに、耳の病気について、発語器音の病気および呼吸困難、脳の病気等の診断で、出生等について、「母親の身体」分べん当時のようすなど、言語に関する発達発生育の調査である。此々で、調査について、問題になるのは、知能面、身体面、心理面、環境等における変遷とコトバの発達である。

次に現症の検査 知能、聴力、理解、発声、発音器音の形と機能、行動の観察、以上で、十分な治療資料が出るので、これにもとずいて、治療指導を行うとよいと思われる。なを、言語治療では、遊戯療法、絵本読法、心理療法これらが、もっとも言語療法によいと思う。なお斉読法、言語療法は児童の心理によくマッチした点、自然な治療方法が良いのではないかと思う。かつ、発音(構音)障害児は発音について、自由に話をするように行くとよい結果が出る。

## 61 心理療法の学級における適用の研究

その1 精神衛生からみた教育指導の実態調査

田中教育研究所 ○品川 不二郎

” 鈴木 清

” 安富利 光

**研究の目的** 心現療法を学級に適用する場合の可能性とその限界を研究するための基礎資料として、学級における教育指導の傾向を知ること。

**方法** チェクリスト式の質問紙法を用いた。質問の内容は、学習指導(6問)、生活指導(5問)、学級会(3問)、問題行動(9問)の4項目とし、教師が精神衛生的な指導をどの程度実施しているかを調べた。

**対象** 対象は小学校教師41名、中学校教師20名であるが、教育心理学に関する向学心のあるものといつてよい。

### 結果

#### 1. 学習指導について

学習指導については特に精神衛生上問題となる傾向はみられないが、積極的に個性に応じた指導に強い関心を示しているとも云われぬ。たとえば学級内で特に優れた者又は劣った者について他の子どもと同様に扱っていると答えたものが、小学校36.6%、中学校45%もいる。

#### 2. 生活指導について

生活指導においては学級会にかけて討議させる方式が多いようであるが、まだ個別の扱いに多少欠ける傾向がみられる。たとえば、つげ口をした子どもに対する扱いにおいて、聞き流すと答えたものが、小学校56%、中学校40%もあった。

#### 3. 学級会について

概して問題はないが、小・中で多少の差がみられた。たとえば学級委員の選出について、小学校では選挙が80%に対し中学校では教師が決めるが70%であった。

#### 4. 問題行動について

問題行動は、盗み、けんか、落書、弱い者いじめ、でしゃばり、ひっこみ思案、反抗、授業中のいたずら、常習的つげ口の9項目であるが、問題行動の原因を追求して適切な処置をするものが多いが、多少問題点もある。たとえば弱い者いじめについて、教師が本人に注意するが小学校で48.8%、中学校で35%あった。

## 62 心理療法の学級における適用の研究

その2 教師の心理療法への関心に関する実態調査  
田中教育研究所 ○安 富 利 光  
" 鈴 木 清  
" 品 川 不二郎

**調査目的** 学級に適用するのに効果のある心理療法はどのようなものであるかを探索するために、この実態調査を行ったのである。

**調査年月** 昭和 37 年 7 月

**調査対照** 全国の小中学校教師を対象として、小学校91  
中学校 68 の回答を得た。

### 調査結果

#### 1. 学級における問題発生の子防法

小・中学校を通じて、反省会の利用が多くみられる。その内容をみると、小学校では毎日行われているのが普通であるが中学校では週に一回行う傾向がみられる。その他小学校ではグループ日記、グループ指導、投書箱、家庭連絡帳、日記の利用などがみられ、中学校ではグループ日誌、交友調査、家庭訪問、学級委員会、生活記録、放課後面接などが利用されているようである。

#### 2. 担任クラスの子どものわるいことをした場合の扱い方

(イ) 一人でのわるいことをした場合 (小学校) 理由をきく、面接、反省させる。(中学校) 話し分う、注意、反省を求める。

(ロ) 数人のグループでのわるいことをした場合 (小学校) 理由をきき反省させる、集団討議にかける、一人一人事情を調べる、心理劇。(中学校) 反省させる、学級会をひらく、話し合う、生徒の話し合い、注意を与える。

(ハ) 学級の大半でのわるいことをした場合 (小学校) 学級会、話し合う、説得、学級経営上の反省をする、事情をきく。(中学校) 反省会、一般的注意、話し合い、学級討議、説教。

#### 3. 問題児取扱上の苦心

全体的に、方法、家庭、指導時間の不足が多くあげられている。その他、小学校では、費用、診断上。中学校では同僚、設備に多く支障があるようである。

#### 4. 問題児治療に利用している方法

全体を通じて、面接、討議、スポーツが多く利用されている。その他、小学校では劇化、居残り。中学校では作業、罰としての当番が目立っている。

いわゆる、心理療法を用いている割合は、小学校で78.9%、中学校で73.9%となっている。

## 63 学習雑誌、その他雑誌が児童に及ぼす影響

日本女子大学 児玉 省 ○南坊満里子  
" 浪花 公子 斎藤 みき  
" 田知本桂子

**目的** 子どもはどういう雑誌、どういふ記事を読んでいるか。それが子どもにどういふ影響を与えているかを検討しようとした。本発表では特にその学習効果について報告する。学習誌の内容は学校直売の「六年の学習」でみると総数180頁、マンガ6頁(3%)、小説などの読み物40頁(25%)、学習頁100頁(60%)、また娯楽誌の一例「少年」は、総数320頁、マンガ200頁(68%)、読み物50頁(50%)学習頁零。

**対象** 東京山手・下町の小学校5年生各160名。山手で学習誌を読んでいる者は54%、そのうち読んでいるのは「五年の学習」72%、「小学五年生」27%、「科学の教室」13%、その他。読んでいる部分—全部42%、学習頁22%テスト問題8%、小説・物語47%、マンガ55%、ニュース42%、グラビア22%。

**問題作成** 学校で使っている教科書と学習誌の内容を項目ごとに分類比較して後、教科書の内容ののっとして、国語、算数、社会、理科の問題を作成した。

**結果** 学習誌購読者と非購読者の成績差をC.R. 検定にかけて検討しました。国語—男子には両者間に差なし。女子は“ふりがな”に3/10問、書取り2/10問に有意の差。には差なし。女子は“種子の発芽発育状態”4/7問に有意理科—男子の差社会科—男女共“地形”の問題に2/10問有意の差。“気候”では男子に差なし。女子に2/4問有意の差。“人口密度”は男子に3/7問、女子は5/7問に有意の差。算数—全問題10問中男子に3問、女子は1問有意の差。結局国語については男子では両者間に全然差なし。女子は購読組が多少優位。理科も同様。算数は男女共多少の差。社会科は男女共差があったがいずれの教科でも女子の方に差の多い傾向がある。児童の素質については知能検査をすることができなかったが、大体購読組、非購読組のなかに学校の成績の上位、下位の者が含まれている。

**考察** 児童は学習誌について、アンケートで次のように答えた。大変役に立つ20%、少し役にたつ70%、ほとんど役に立たない10%。しかしためになると答えたものが必ずしも、成績がよかったわけではないからして、ためになるといっているのはある児童にとっては心理的なものだけで、実質的なものではない。問題なのは学習誌がもたらす効果は長期に至って評価することが必要であることと、その影響は単なる成績だけではないかも知れないということである。学習誌はマンガ、小説なども多くあり、そのいずれの部分もよきにつけ悪しきにつけ影響を与える可能性がある。

## 64 映画による読話テストの試み (VII)

—無意音節の読み誤りについて—

東京教育大学 ○尾 島 碩 心  
" 中 野 善 達

**目的** 映画による読話研究の一部として、無意音節の読み誤りについて検討する。

**方法** 送話者は大学女子学生。材料無意百音節。被験者はろう学校児童(小学部5年以上)および生徒、第一系列74人、第二系列77人。聴力正常の大学生、第二系列のみ31人。

**結果** (1) 音節明瞭度の高いものには、清音、直音が多く、低いものには濁音、拗音が多い。この傾向はろう児も大学生も同様であって、明瞭度上位群と下位群における清音、直音、濁音、拗音の分布はろう児と大学生と酷似している。

(2) 音節の読み誤りについて10%以上のものをもって図示した。ろう児についてはスモクマメケサシキノヨブム等の音節がよく誤りに現れて、図で中心核をなしている。又多数の音節は二つの音節と間違えられている。例へばルはス、クと、ジはシ、キと、ゾはソ、ヨと、ブはプ、ムと誤られている。大学生では目立つ中心核がすくなく、二つの音節と間違えられるものはろう児の半数以下である。

(3) 音節を母音と子音に分けて、子音のみについて誤りを計算し、10%以上の読み誤りについて図示すると、音節の場合よりも中心核が目立って、図はいくつかの放射状の図形にわかれる。例えばろう児の場合は、F t ts kj tʃ gi dʒ z rj dz d j の12の子音は全部sと読み誤られることが最も多い。同様に m g s r n h g の7はkと誤られることが最も多い。

(4) 比較のため Heider のあげた英語の場合を考察すると誤りの形式は我々の場合と全くことなる。相互によみ誤られる3の子音が三角形の一群をなして、それをつなげた形になっている。

(5) この読み誤られる中心核となっている子音は、それ自身明瞭度の高いものが多い例へば m s k j t 等である。

## 65 スポーツ練習の中学生の心身に及ぼす影響 (第2報)

—精神健康度について—

藤沢市立第一中学校 植 田 稔

前報告において、中学生の運動クラブの夏期合宿が心身の機能を低下させるということを観察した。この心身の機能低下の集積が、中学生の精神的な面に悪影響を及ぼしていないかを考察するために次のような仮説を設定して検証した。「中学の運動クラブはクラブ活動を通して社会性の育成ということを目標として指導されているのであるから3年間運動のクラブ活動をした生徒は、全く、その経験のない生徒に比較して精神健康度は健全である。」

**方法** S群、バスケット部員、(男)5名。バレー部員(男)6名。野球部員、8名。計19名。NS群、中学3年(男)18名。(S群と同一学校で11学級の中から運動クラブに入ったことのない生徒を無作為抽出。)1962年2月両群に精神健康度診断検査、(田中教育研究所編)を施行した。

**結果と考察** 両群の精神健康度診断検査の各項の粗点の平均値の差の検定(t検定)の結果、いずれも統計的に有意差を認めることはできなかった。(S群、長所55パーセントイル。短所35パーセントイル。総得点45パーセントイル。NS群、長所60パーセントイル。短所50パーセントイル。総得点55パーセントイル。)3年間運動クラブの生活経験をした生徒も、全く、その経験のない生徒も精神健康度診断検査で測定される範囲内での精神健康の健全さに差異はないという結果をえた。運動クラブにおいて対人的親和度を向上させて、チームワークを形成することが絶対に必要である。そのための指導が当然なされている。しかるS群の対人的親和度がNS群に比較して劣位ということは何に起因するのであろうか。これは、クラブという所属集団においては精神健康度の長所は養われていると考えられる。

これがクラブにとどまり一般化されていない。すなわちクラブ員が他の集団に入った場合、排他的な考え(態度)が芽生えているのである。クラブ活動の勝負第一主義、選手制度がハードトレーニングを余儀なくし、心身の機能の低下のみならず精神的社会的な面においても悪影響を及ぼしている一面を示していると考えられる。勿論、本実験校が県大会において優秀な成績を示しているといふ特殊性も考慮に入れなければならない。今後純粹にクラブ活動を行っている学校の考察と3年間の追跡的な考察をすすめていきたい。



## 66 集団学習の実験的研究

—集団の優位性の問題—

福島大学 古旗安好

いわゆる社会的学習論の視点から、従来必ずしも判然としない側面がある集団学習の個人学習に対する優位性を検証する。さきに行なった予備的実験(小学5・6年8学級32 gr.)の結果からは、集団と個人の平均の差は0.049以下の水準で有意で集団学習の方が優る。だが個人学習における Best member より優るとはいえないと結論された。今回は被験者小4—9年学級22(学校22)、集団102、成員306人についてやや詳細な検討を加える。実験手続 無意味語系列の第1系列個人、等価の第11系列集団学習、次にこの逆。Ind.→Gr.の組とGr.→Ind.の組、男女別に個人、集団および Best Member の各平均、第1日～第5日にわたる Performance、作業所要時間、創作語(誤)数、行動観察などをとりあげる。gr.編成は同一学級内の男女各2 gr.、学力・知能・性・年齢を出来るだけ等質にした。集団学習とは自由な話し合いをすすめる。grとして正しいと決定した1語ずつを報告させる。メンバーで分担してはいけない、という条件下の学習であるが、個人学習は私語・話し合いを禁止され単独で学習することである。結果は次のようである。

(1) Performance の Sign Test —個人と集団ではどの学年でも1%以下の信頼水準で集団が優る。集団と Best Memb. とでは、対応する対の数118の検定では  $CR = 4.10$   $P < .01$ 。しかし学年毎の優位性では5%以下の信頼水準を示さない学年は5年のみである。そして、Best Member の平均は彼らを含む個人の平均より、どの学年でも1%以下で“事実上”Bestであることを示す。

(2) 全体としての Ind. < Best Memb. < gr. という仮説のジョークヒア検定によると5年以外のどの学年でも支持しうる、 $P < .05$ 。しかしこの学級別検定で同じ主張が許されるは22学級中  $P < .05$ , 4学級。  $P < .01$ , 4学級。すなわち全体として gr. が他の二者に優る傾向を示しながら、Poor な学習の学級が存在する。これを II テストではどの学年も三者間に有意の差がある。4, 5, 6, 7—9年の II の値はそれぞれ  $10.27 < .01$ ,  $6.62 < .05$ ,  $6.26 < 0.5$ ,  $7.08 < .05$ 。

(3) 時間では  $N = 180$  で  $CR = 5.96 < .01$  で gr. 優る。

(4) 練習効果でも gr. は個人にも B.M. にも決して劣ないといえる。

67 学業不振児の一事例研究  
——家庭訪問による指導と研究——

青山学院大学 原田 敦子

この研究は私が過去1年4カ月間家庭教師をしてきた小学校6年のH子について行ったものです。私が引き受けたきっかけは、H子が母親にともなわれ児童相談所へ来所したので始まります。その時の主訴は学業不振とひきつけでありました。従って私は学習指導と相談員の二つの役割を受け持ったわけです。過去1年4カ月を特徴的4時期に分け各時期における外的条件と人格の変化の関係をみようとするものです。又それに対する心理学的解決も考えました。それを時期別に推移をたどって行くと、

第一期（自由教育期）—この時期は平穏な時期で、家族関係の問題がなく、本人は自由な気持で楽しく勉強した。私にすっかり親しみ、しばしば誇張された自慢話をした。

第二期（期待過剰期）—母親だけでなく父親もH子の教育に参加するようになり、期待過剰から、H子にも、私にも、圧力がかかってきた。H子はよく父親に怒られたと不平をいった。落着いて勉強に身が入らなくなった。

第三期（受験勉強期）いよいよ6年生になり、私立中学受験を目指して受験体制に入った。それによりH子の問題行動が多くなってきた。母親は妹ばかり可愛いがあると、妹は自分をばかにするとか、家出をしたいなどと口ばしるようになった。

第四期（問題解決期）—第三期の行動が引続いてより悪化してきた。妹に対する攻撃が激しくなり、しかられて興奮すると泣きわめいた。自殺したいと口ばしるようになる。そこで親自身からも、私自身からも問題解決への動きが見られ、多くの力動的分析の結果テンカン気質の影響と親の態度即ち期待過剰、矛盾的态度、厳格、偏愛の問題が明らかにされた。この科学的データを一両親に報告し、それをもとに、今後の方針として、(1)H子に対する期待過剰を止め、H子のあるがままの姿を認めて上げる。(2)子供に対する偏愛を止める。(3)受験期にあたり、特にH子の情緒的安定をはかる、の点について決めた。現在H子は、このような両親の配慮によって、だんだんと不満をいうことが少くなり、気持も安定しつつあるように見受けられる。このケースは、今までの家庭教師の仕事の中で余り配慮されなかった。心理学的相談の技術を導入することにより成功へと導いた一つの例となるものと思います。

V 臨 床

## 68 攻撃的な子どもの研究 (I)

### 1-1 研究の目的と計画

東京教育大学 ○深谷和子  
" 上武正二  
都立立川短期大学 大崎浩子

われわれは、昨年まで、非社会性児に、集団遊戯療法を適用して来た。今年からは、あらたに“攻撃的な子ども”を対象に加え、かつ“攻撃的な子ども”の総合的研究に着手した。これはその第一報である。

昨年までの非社会性児の研究中、しばしば反社会性をもつ非社会性児の例が見出された。そこで、もし、反社会性児が一面において、非社会性をもつものなら、ある種の“攻撃的な子ども”の治療には、集団遊戯療法が大きな効果をもたらさだろうと、予想した。またその他にも、多くの効果を果が予想されるが、ここでは省略する。

集団遊戯療法を適用したのは、非社会性児 15 名。攻撃的な子ども 10 名について、週一度、一時間の play を行った。とくに、通常行われている方法と異なるのは、セラピストが、二、三名加わって、事態が非常に危険になった場合にそなえたことである。

また、本研究では、“攻撃性”ということばを、次のように限定した。

「他の人間や物体にむけて、意図をもって、言語的身体的に行われる、破壊的行動のすべてを云う」すなわち、doll play などではかられる fantasy aggression は、含まない。

「1-2 親の養育行動との関係」について。攻撃的な子どもはなぜ生ずるか。それには種々の factor が考えられる。そのうちわれわれは、今回、親の養育行動との関係をとらえようとした。

集団遊戯療法を受けている子どもの母親から得られたデータにもとずいて、親の養育行動をしらべる質問紙を作り、東京、山の手、ホワイトカラー上層の母親に配布した。有効回答 148 通。子どもは男児のみで、平均年齢は、五才三月。また、攻撃性、非社会性について、幼稚園の教諭に評定を求めた。

結果 ① 多くの場合、非社会的な子どもは攻撃性が低く、攻撃的な子どもは非社会的でない。しかし、数例ではあるが、極端な攻撃性と非社会性を共有するものがある。これは、集団遊戯療法に、もっとも適するケースであろう。

② 母親の子どもの攻撃性に対する認知度には、大きなゆがみのあるケースがある。

## 69 攻撃的な子どもの研究 (I)

### 1-2 親の養育行動との関係

都立立川短期大学 ○大崎浩子  
東京教育大学 深谷和子  
" 辰野千寿

③ 日常の親の養育行動が子どもの攻撃性に影響すると思われる面はいくつか考えられるが、我々は Sears, R. R. らが親の養育行動と子どもの攻撃的行動について研究した際に得た (1a) 親が子の攻撃的行動の表出に対して与える制限大→子どもの攻撃的行動小 (1b) 制限小→攻撃的行動大 (2a) 親が子の攻撃的行動に対して与える罰大→子どもの攻撃的行動大 (2b) 罰小→攻撃的行動小 という結果を検討することから出発した。(1a) (1b) については同じ予想をたて (2a) (2b) の罰の効果については、我々は罰大→子どもの攻撃性小、罰小→攻撃性大と考えてデータの分析を行なった。結果は Sears らの予想とも我々の予想とも一致しなかった。これは罰と制限を独立に考えたことから生じた結果と思われる。④そこで罰と制限を総合して、“攻撃的行動の表出の制限”とした。さて個人が表にあらわさないで内部にもっている攻撃的傾向の大小は、親が子どもの一時的行動をどの位制限するか (すなわちフラストレーションの大小) に関係し、それが表にあらわれるかどうかは、その攻撃的傾向の表出を許すか許さぬかによって規定されると考えられる。そこで (3a) 攻撃的行動の表出の制限大→子どもの攻撃的行動小 (3b) 制限小→攻撃的行動大 (4a) 一般的行動の制限大 (フラストレーション大) →子どもの攻撃的行動大 (4b) 制限小 (フラストレーション小) →攻撃的行動小という予想をたて、この2つのファクターの大小の場合の組合せについてデータの分析を行なった。結果は予想と一致した。すなわち親が子どもの攻撃的行動の表出をゆるし、子どもの一般的行動に対する制限がきびしい時、攻撃的な子どもが多くなり、親が子どもの攻撃的行動の表出をゆるさず、一般的行動に対する制限がゆるやかな時、攻撃的な子どもは少くなるという結果を得た。⑤攻撃的な親には攻撃的な子どもが多かった。

ここでは子供の攻撃的行動に影響すると思われる親の養育行動のうち、主として親が与える制限の面をのべたが、その他の面についても今後さらに検討が必要である。

## 70 攻撃的な子どもの研究 (I)

### 1-3 攻撃的行動のカテゴリーの検討

東京教育大学 小林 芳郎 南館 忠智  
" 呷野 武重 多田 俊文  
" ○相田 貞夫

集団遊戯の治療機制を利用して、攻撃的児童の遊戯療法を行う場合に、遊戯を媒介として攻撃的な行動が改善される過程を把えることは治療上の指針或いは治療技術の改善に重要な手掛りを与える。そこで、攻撃的行動の治療目的の場面に適した行動分析法を考えた。

行動観察場面は、10名の攻撃的な児童を10m四方の遊戯室で自由に遊ばせる(2~3名のTherapist同室)。50分の遊戯時間内で15, 15, 10分記録し、間に5分の休憩を入れる。一方視ミラーを通して一人の児童の言動を二名が逐次記録する。記録した言動は、カテゴリー表による種類と頻数とに分類する。言動のカテゴリー表は、①記録分析するのは表出されたovertな言動に限定。②治療の進展に伴い、(1)行動の量と言語の量の変化、(2)各種の行動の型の推移、(3)言動の対象、行動の手段の変化に一定の関係或いは傾向がみられる。という観点から作った。まず、全ての言動を行動と言語に分ける。次に行動は、一読きの同一の行動ごとに、言語は意味上の一文ごとに区切り、更に、破壊的なもの(他の児童、物に対して意図をもってとられた行動のうち、遊戯の進行発展を中断、阻止し、児童が互いに離反するような行動)、建設的なもの(他の児童、物に対して、意図をもって向けられた行動のうち、児童と児童の結びつき、遊戯を促進させる行動)、その他の行動。次に、各々を対象により、児童、治療者、道具に分け、それを更に、その対象に働きかける手段により、道具、身体に分ける。又それを言動の強度によって2~3段階に分ける。

治療の進展に伴い、破壊的行動が減少し、建設的行動が増加する。児童に対する破壊的行動は減少し、Therapistに対する破壊的行動は増加する。建設的な行動は児童に対しても、道具に対しても増加する。これらの傾向が一応見られたが、適用例が少ないので、言語と行動の変化について仮定していた全般については確めることは出来なかった。

## 71 攻撃的な子どもの研究 (I)

### 1-4 遊戯療法による行動の変化

東京教育大学 ○松 原 達 哉  
" 石 田 恒 好  
" 杉 原 一 昭

**目的** 子どもの集団遊戯療法と母親の集団面接によって子どもの社会生活能力・基本的習慣・社会的行動の変化および親のしつけ態度の変化がどのようであったかを調査研究すること。

**方法** 攻撃的な子と非社会的な子とを別々に集団遊戯療法を5カ月間、17回(1回1時間)実施した。それと平行して、母親に集団面接を毎週1回1時間実施した。この療法の開始前と終了後に社会成熟度診断検査(Social Maturity Scale)・親子関係診断検査・社会的行動調査を両親に実施し、5カ月間の変化(効果)を両親について比較検討した。なお、被験者は、各群7人である。

**結果** (1) 社会生活能力は、5カ月間に、攻撃的な子では、「集団への参加」が社会成熟年齢(S.A.)で1:3「からだのこなし」1:1、「仕事の能力」0:9、「ことば」が0:7、「自己統制」0:6、「自発性」0:6、の進歩が認められた。全体ではS.A.に1:1の進歩があった。社会成熟度指数(S.Q)は、93.4→104.9になり11.5の進歩があった。非社会性の子については、「自発性」「仕事の能力」を除いてほぼ類似した傾向がみられ、全体のS.Aに0:9、S.Qは74.9→89.1で14.2の進歩が認められた。

(2) 基本的習慣(清潔・排泄・着衣・睡眠・食事)については、非社会性の子よりも攻撃的な子に大きな進歩があった。

(3) 両親のしつけの態度は、母親の治療前M=143.1 SD=18.0、治療後159.7、14.5で16.6点の改善が、父親は151.8、15.0から163.9、12.0で12.1点の改善が認められた。非社会性の子の場合は、母親は141.7、24.0から150.1、25.5で8.4点、父親は152.2、14.1から158.5、14.0で6.3点の改善が認められ、攻撃的な子の親に大きな改善態度が認められた。傾向として、両親に不安が減少し、干渉、厳格、拒否的態度に改善が認められ、父親だけには、期待、溺愛的傾向が若干増加した。

(4) 社会的行動として改善されものには、人と協調、協力ができる、新しい環境になじめる、教室でさわいたり横をむいたりしない、爪かみ大食が減少したなどである。(研究助力者、曾田知子、斉藤敏子、吉盛慶子)

## 72※ Camp 生活に於ける精薄児の行動について

近畿大学 山田久喜

教育 Camp 場である生駒朝日 Camp center に精薄児と3泊4日の生活を送り、その間の児童の行動の変化について報告する。

期日は昭和37年8月21日より24日まで、対象児は男27名、女子11名、学年は小学校6年以上中学3年までである。参加者のIQはCamp未経験者15名では39以上78の間にあり(鈴木、ビネー法による)、Camp経験者23名では29から77(田中B式による)の間にあった。

各児童は6班に分れ、1班5～7人で、各班には指導者として、Camp counselor と junior Camp counselor がつき、子どもと生活しつつ、人間関係の改善、社会性の向上、自立性の高揚へと努めた。この研究はこれら Camp counselor の record を基にした。

結果並びに考察 人間関係を group のまとまりという面からみると、その強さには各班毎に相当な差はあったとはいえ、group member であるとの意識が生れ、group としての活動が期待出来るところまで高まった。Camp counselor の努力が大きく影響しているとは云え、精薄児といっても、可成りIQの高い児童を中心としての集団としてのまとまり、協力的な態度が3泊4日の間に現われて来た。然し普通児のCampに比較するとその現われ方は明らかに遅いが、それは精薄児をとりまく日常の環境が、そのようなgroupを構成することが少く、groupとしてまとまらねば生活出来ないという場に未経験であるということが一因となっていると考えられる。

個人の行動の変化をみると、対称者が少いため、どの様な行動が増加し、減少したかということまでは云えぬまでも、消極的であった者が積極的に、小心無口であった者が自己を主張し、或いは大声で唱えるようになり、孤立的であった者が協調的になった等好ましい変化を顕著に見せたものが38名中19名、恰度半数に表われた。僅か3泊4日の生活の中に於ける変化であるので、それがそのままCamp後の生活に影響を残しているか否かは未調査であるため、何とも云えないが、精薄児と雖も、Camp生活により、日常生活にない経験を通じて、そのpersonalityに何等かの影響を残していくだろうことは疑えない。而しそれも、Camp後のafter careが旨く行われぬ時には何等効果がなく、単にCampのことはしっているぞといった優越感のみが強くなってしまふ逆効果の遅れがないでもない。過去のCamp経験が逆に働いているcaseが数名見受けられたことは注意しなければならない。

要する所、精薄児にとって、精薄児のために準備されたスタッフと、programでもって生活するならば、3泊4日の少日数のCampでも相当な効果があると考えてよいであろう。

## 73 成人精神薄弱者に関する諸問題

東京都精神薄弱者更生相談所で

取扱ったケースを中心として

その1 ケースの概要

東京都精神薄弱者更生相談所 ○吉岡 伸  
" 杉山 三郎  
" 大谷 澄江

精神薄弱者福祉法(昭和35年法律第37号)に基づき、昭和35年10月に当更生相談所が設置されてより同37年9月末までの間に来所した903ケース中から、来所時年齢、IQ、異常発見時、教育歴、精薄児施設入所経験の有無、就職経験の有無の全事項について記載のある391ケースについての集計である。ただこの結果は、当然偏りがあるので、直ちに成人精神薄弱者全般については適用できない。

性別は男子が57%と多いが、以下の結果にはこれによる差はみられない。法的には18才以上を成人とするので年齢は18才～57才の中でそのうち30才未満が75%に達している。IQは検査不能～70の中で、20以下15%21～50が56%である。異常発見が就学時までの者は、IQ51以上では50%なのに50以下では80%前後と高い。教育歴では不就学者は全体では27%だが、IQ20以下では68%、21～50では28%と大差である。他方教育の場としては特殊課程の比重は著しく小さく、普通課程が圧倒的なのは、少くとも10年前の特殊学級数の少なさと反面にはそこには比較的能力の高い者が多いことから当然であろう。IQ別に小中学各課程終了者をみると、程度の高くなるにつれて多くなつてはいるが、それにしてもその教育効果は疑問とされよう。ところで学校以外に精薄児訓練の場として精薄児施設があるが、その利用度は、年齢と教育歴とを関連させてみると20才未満で不就学者中69%小学中退者中80%小卒者中46%と相当の高率であるが、30才未満ではそれはいずれも30%前後に低下する。これは過去の施設数にも大いに関係するが、他方20才未満でそのような高率を示すのは、児童施設から成人施設へ移るための手続きとして来所する者が多いことも意味する。年齢をIQに置き換えてみると、不就学、小学中退小卒の順に利用度の低下傾向がみられる。就職経験者は年齢の高い程高いが50%に過ぎず、IQ別では51～70の55%が最高で20以下の4%へ低下する。以上より、成長期の訓練不十分なケースが多いと云えよう。

## 74 成人精神薄弱者に関する諸問題

東京都精神薄弱者更生相談所で

取扱ったケースを中心として

その2 鈴木ビネー式知能検査の通過率

東京都精神薄弱者更生相談所 ○杉山三郎

〃 〃 吉岡伸

〃 〃 大谷澄江

**目的** 成人精神薄弱者の精神構造についての研究は今までほとんど手がつけられていない。本研究は当相談所に来所した成人精薄者を実施した知能検査の結果をとおしてその知的構造の一端を明らかにしようとするものである。

**被験者** 来所者のうち純粹の精神薄弱者と思われる 287 名を対象とする。年齢構成は次のとおり。

16~19才 100名 30~39才 46名

20~29才 132名 40才以上 9名

**方法** 3才から 11才まで各精神年齢について鈴木ビネー式知能検査の通過率を求め、同一生活年齢の正常児(註)についての通過率と比較しその差異の傾向をみる。

**結果及び考察** 両群間に差異がみられた問題項目は次の通りである。

成人精薄者>正常児

11. 正方形の模写

14. 3つの仕事

17. 長方形の構成

20. 四種の貨幣の名

29. 絵の中の敘述

35. 用途以上の定義

37. 時日

42. 類似の名称

45. 混乱文章の整理

成人精薄者<正常児

7. 短文反唱

16. 4数の反唱

23. 左右の區別

28. 文章の反唱

30. 差異をあげる

31. 5数の反唱

32. 20から1まで逆唱

33. つり銭計算

39. 4数の逆唱

43. 記憶の為の読み方

44. 記憶図形の描写

46. 6数の反唱

50. 5数の逆唱

この結果から精薄者は数的および言語的記憶、数的処理、関係把握などの抽象的推理面の能力においてそれと同一精神年齢にある正常児に劣り、逆に一般的知識、一般的理解力、動作的知的作業など行動的・生活的知能に関してはむしろ同一精神年齢の正常児を上まわっている傾向がみられる。この傾向は年齢が高くなるに従い顕著になっていくことが予想されるが今回は資料不足の為此の点についての検討はできなかった。(註) 鈴木治太郎著知能測定法の通過率表による。

## 75 成人精神薄弱者に関する諸問題

東京都精神薄弱者更生相談所で

取扱ったケースを中心として

その3 標準一般職業適性検査結果と I. Q. との関係

東京都精神薄弱者更生相談所 ○大谷澄江

〃 〃 吉岡伸

〃 〃 杉山三郎

成人精神薄弱者における広い意味での自立更生にとって最も重要なものの一つは作業能力である。相談所において職業適性検査の一つとして行っている標準一般職業適性検査が、精神薄弱者の職業についての基礎的能力を測定し、適職群を見し、かつ将来の職業上の成否の可能性及びその程度を予見するために、今回は標準一般職業適性検査の低位検査の結果から、一般成人の場合、知能との相関が比較的低いと云われている単純作業能力が、精神薄弱者についても同じように云えるかどうかをみるために、その関係を考察する。資料の収集は昭和 35 年 10 月から昭和 37 年 10 月までに取扱ったケースのうち、標準一般職業適性検査を施行したもの 315 名を対象とした。このうちの性別は男 58 %、女 43 %である。年齢は 18 才~ 57 才の巾にわたり、うち 30 才未満が 76 % をしめている。IQ と各検査間との相関関係を連関係数によってみたところ、すべてについて相関関係がかなりあることがみられた。この結果は、われわれが取扱うケースには訓練不十分なものが多いことから、訓練を十分に行なえば、そうした関係は、一般に云われている相関が低いという関係に変化がでてくるのではないかということ推察させる。訓練を十分に行った後に、なお相関がみられるならば別の理由を考えねばなるまい。

## 76 非行少年の研究 (5)

—学童期における問題児—

日本女子大学 児 玉 省  
○長 島 良 子

**目的** 学童期から中学、高校期へと非行性の発達展開を明かにするために、学童期の問題児と普通児、中学・高校期の非行児の性格と家庭環境を比較検討する。

**方法** 都内の区立三小学校の問題児（非行化し易い問題行動があるとして担任教師から指摘されたもの）47名をWISC知能検査、ロールシャッハ、日女大式家庭環境調査票を用いて調査した。調査票はまた、都内の中学三校、小学二校の普通児約360名、及び横浜の非行傾向の強い某中学の生徒約100名にも適用した。

**結果と考察** ロールシャッハによる性格像一児玉は、中学・高校期の非行児約330名に行ったロールシャッハ・テストの反応結果から、同じような反応型式のものを集めて13の類型（犯罪学年報第二巻参照）をたてたが、これに学童期の問題児の反応を当てはめてみると、65%が当てはまったが35%程度のもはこの類型に当てはまらないことが判明した。また、全体的な傾向として、中学・高校の非行児と共に学童期の問題児においても「思考幼稚、社会性欠如、観念活動低調、衝動性強し、不安感情強し」という面がみられるが、「冷淡で無感動、冷血の傾向、内向的で社会反抗性を内蔵する傾向」は、学童期の問題児には殆どみられない。調査票による家庭環境分析（本論文集教育部門の日女大発表参照）—しつけの8つの角度には、正常児の場合、各家庭のしつけの類型差並びに地域差を見出したが、この角度によっては、非行児と普通児の家庭環境の差を見出すことが出来なかった。しかし、調査票の個々の項目によると、相当数の項目に普通児と問題児の家庭環境、しつけ方に有意の差がみられた。例えば、父は自分より他の兄弟をかまいがる、父と母とでは言うことが違う口答えをしたらすぐ叱られる……等では、問題児の方が多くハイと答えている。このように、しつけの類型の角度からみた場合差がみられず、調査票の一項目毎にみた場合差がみられる点について、①対象とした学童期の問題児は、非行前児童であるとはいえ、必ずしも非行化しているわけではないので、自然、こうなるのか、②非行児については別のしつけ分析の角度が必要なのか、などが考えられるが今後更に検討したい。

## 77 非行少年の研究 (6)

—施設児—

日本女子大学 ○児 玉 省  
愛媛大学 越 智 信 子

筆者らは非行少年及び非行前問題児について、警察で街頭補導せられているもの、警視庁で呼出補導を受けているもの、施設に収容中のもの、中・高校在学中のものなどいろいろな問題児について、ロールシャッハ、M.M.P.I.家庭環境調査、態度興味調査などを施行して比較検討したがこれらの問題児は、しばしば性格、態度等の点においてかなり相違している可能性を見出した。従って非行少年といってもそれを一様に同一視することは不適当である。本研究はこういう角度からまず施設児と在学中の非行少年の比較検討を試みた。対象は、地方都市の施設児約100名及び普通児約40名、東京都内の中高校在学中の非行児約100名、同じく普通児200名である。

施設児と在学非行児の不一致点。この比較では、地方の施設児は地方の普通児と東京の在学非行児は東京の普通児と比較したのであるが、この両方の非行児間には勿論共通せる点も見られたのであって、その共通点を項目で拾ってみると、(1)どんな遊びをしても両親は何にもいわない。のような家庭の放任的態度。(2)食事の時その他お行儀などやかましい。小遣いのことがやかましい。などの日常生活的な事についてのげんごさ。(3)父母のどちらかがやかましいなど不一致のなすつけ。(4)嫌いな学科の先生はきらい、学校における不適応。(5)夜なかなか寝つかれない感情的不安の表われ。(6)悪口を言われるとカッとして乱暴したくなる——破壊的衝動性。

くいちがいの点。「家の中ではみんなで話し合う」という項目、その他これに類する項目で、しばしば、施設児の方が普通児よりこれを肯定する者が多い。ちょっと意外の感があるが、施設児に、親や家庭に対する思慕の念が高まっていることを暗示する。そのくせ兄弟仲が悪い」ことに関する数項目では、普通児よりこれを肯定する者が多い。兄弟から、うとまれたうらみなどが、いつまでもこびりついているかのような印象を与える。

家庭のしつけの類型としては、前演者も述べたように、正常児と普通児を単なる類型差において型えることは、非常に困難であったが一つだけ松山の施設児と普通児の家庭のしつけを比較すると、過保護型が多いことだけは有意の差がある。逆に普通児の家庭に厳格型が多いが、ほんの少しで有意の差に達しない。





(その2)

お茶の水女子大学 ○中村 悦子 鈴木 隆子  
 " 黒江 静子 黒田 淑子  
 " 松村 康平

仙台市精神衛生相談所 ○大脇 三恵子  
 東北大学附属病院 新井 清三郎  
 白梅学園短期大学 大脇 園子  
 E. Hellersberg

この研究は、集団活動において使われる技法、集団変革の技法を明かにしようとするものである。変革の技法として成立するには、監督者集団に、次の三点が把握されることが必要である。1. 技法使用によってもたらされる集団状況の変化が、関係弁証法からみた集団発達段階の仮説に対応していること。2. その技法展開が、今この集団に即してたてられる監督者側の目的性に合致しておこなわれていること。3. 技法展開が集団の内的発展に即しておこなわれていること。集団の場面を構成しているのは監督集団、子ども集団、物の三者であり、場面状況の成立には、この三者が相互に関係している。技法も、この三者との関連でとらえられていく。子どもの活動状況を、力の場の布置と関連的に把握し、集団の性質を分類した。その状況へのかかわり合いの仕方から、監督の技法、副監督の技法をとらえて、状況を変革したり、技法を効果あらしめる“もの”の機能と役割、“もの”及び人の場面配置における役割をも合わせて考察する。

第28回大会発表「導入期における監督集団のとする技法」にひきつづいて今回の発表は、展開期における技法に関するものである。展開期における集団状況を五つの位相に分け、各々の状況に対する監督者集団のとする技法を上述の観点から明かにした。紙面の都合で、次に、各位相のとらえ方とそこでの主な技法を列挙する。第一位相—焦点化の技法によって重心凝集化された集団の状況が、放射化の技法によって分裂し、各個人が分散定着点を見出して分散定着化の状況にいたる。第二位相—分散化を示す集団の状況から、“もの”媒介によって一部に局所が形成されるまで。結合の技法における“離隔円形化”と“局所二重自我”の方法が使われる。第三の位相—場面設定による人媒介局所化の状況まで。拡散包括化の技法における領域設営中斷地帯設営の方法が使われる。第四位相—個別化から自発的局所形成まで。局所形成の技法開所の技法が使われる。第五位相—局所分散から、もの中心結集化の技法によって局所間が連結し、点火連結の技法によって局所連結集団化が高まった状況までをさす。今後の課題は転換準備期における技法を明かにすることである。

H-H Test が人格検査として臨床診断上適応異常者の判別、症状診断が可能である見通しを立てる事が目的である。米国で行った分析尺度から現実適応の困乱性の指標は内容分析では曇、煙、地図、垣根、板、網、蔭をつけた網、破壊、恐怖、病的要素、閉鎖、くも、巣、なぐり書きである。これらの要素が現実の転換事、月並みでない意図的象徴、超現実、抽象、現実の歪曲無意味な線、機能的遊戯となる程現実関連度が低下する。形式分析では教示が守られたか、絵の構造、組織化、均整、線の質、影のつけ方、運動の質方向、全体性、創造性等から一般的形式特徴をつかむ。これに加えて、発達段階尺度、新たに作製した小児用の内容分析、原因分析結果から7例のテスト結果を検討した。

第1例 S. K. 8; 9 ♀ 脳障害によるてんかん性性格、鈴木ビネーIQ 92.

①不必要な内部連結線、②対象の描き方が幼稚である。③名前づけが絵と似ていない。④単なる与えられた線をまねた結合が多い。特に①により単なる発育遅滞ではなく、適応障害がある。内容が変化あり、現実的であるからひどくはない。

第2例, M. K. 8; 9 ♀ 脳性小児麻痺による下肢の運動障害、ロールシャッハ検査結果、大体正常だが無意識の葛藤緊張感があった。①閉鎖と線の結合は発達の低段階を示し、強い自閉的傾向である。②線の描き方が硬い。③内容は種類多く、低知能でない。人間が現れないのは対人関係の問題を示す。

第3例 K. C. 9; 10 ♀ 精神薄弱、IQ 68,

①閉鎖は低知能か退行を現す。②無意味で対象と似ていない名前づけは現実性の喪失を示す。

第4例 O. Y. 10; 3 ♀ IQ 119 5才時癡癡あり  
 ①不必要な線が多い。②絵が名前づけと似ていない。③現実性のある絵もあるので、現在の処、大した障害ではない。

第5例 Y. M. 11; 4 ♀ Tic

①何度もなで重ねた線、蔭や模様がある。神経症的傾向を示す。②内容や型態が非現実的な場面多い。③死人がある。抑圧が見られる。

第6例 T. M. 1回目 13; 11 2回目 14; 1 抑うつ傾向

①閉鎖と連結。②名前づけが5つない。③対象と余り似ていない名前づけ。④線が硬い。⑤自由画は抽象画である。治療後の2回目では、①閉鎖傾向はあるが細部が加わり型態がよくなった。②名前づけが絵に似て現実性がある。③自由画は日常生活場面である。

第7例 T. T. 14; 7 ♂ Tic

—自殺未遂行為の前後における衝動特徴—

水口病院 大塚 義孝

今回はソンディ・テストの臨床心理学的応用の一連の研究として先に報告した自殺未遂者、自殺完遂 48 時間前までのソンディ・プロフィールと対応させつつ主として破瓜型精神分裂病と診断された患者の自殺未遂行為についてその前後のソンディ・プロフィールの衝動特徴を検討した。

本例は分裂病独特の幻聴を加味した被害妄想を基調とした電撃ショックに対する極端な強迫観念から逃れるために縊首を試みたものであるが、発見が早かったため一命をとりとめたものである。

ソンディ・プロフィールは通常の 10 回法により自殺未遂 3 ヶ月前に得られたものと未遂直後 3 日目から施行したものと異なる。

自殺未遂前後の各衝動要因及びベクター的意義は極めて興味ある所見を示した。

1.  $S = -$ ,  $-!$ ,  $-!!$  が自殺未遂後には完全に  $S = 0$  となり自虐的、非活動的傾向の明らかな解放状態を認めたこれはすでに報告した自殺完遂者の自殺前  $S = -!$  と自殺未遂者の未遂後の所見  $S = 0$  と明らかに一致するものでこの種の異常行動に関し重要な示唆を与えるものである。

2. 自殺未遂前では、Hypochondrische Mitte 3 回 depressive Syndrom 3 回, Zwangsneurotische Existenz (Sch =  $\pm$ ) 2 回, Existenz von Schuld und Strafangst 2 回, 認めると共に背景像 (Th. K. P.) に 2 回自殺企図パターン ( $k = -$ ,  $p = -$ ,  $d = -$ ,  $m = \pm$ ) を示し強迫的な不安、恐慌と心気症の状態を示唆した。これは  $hy = -!$  の基本要因的意義と共に極めて自殺行為に対する親和性を示している。

3. 自殺未遂後は臨床的に恐怖症の状態が約 2 ヶ月経続したが  $h$ ,  $p$ ,  $d$  において土反応が支配的となり症状群所見として典型的な見捨てられた症状 (Syndrom des abgetrennten, verlassen Partners) を 10 回認めた。

その他数量的処理においても以下の如く自殺未遂前後の衝動学的意義を明らかにしたと云える。

症状反応百分率 27.5% → 72.5%

傾向緊張商  $\left(\frac{\sum 0}{\sum \pm}\right)$  2.1 → 1.1

緊張商 ( $\sum !$ ) 8 → 1

Dur/Moll ; Soz + % 1/1.5 → 1/1.1 ; 26.6 → 42.5

群馬大学 内山 喜久雄

明白な書癡を示す 2 例に対して Autogene training を適用、その臨床経過ならびに効用について観察した。

症例 1. 27 才女子、中卒。手先の熟練を必要とする職場に勤務して 11 年、その間第 6 年目頃から高度の書癡が起り仕方なく左手で書いたり、右手に左手を持ち添えたりして書いていたが、約半年前頃から悪化した。

幼児から我がまま 1 杯に育てられ、職場ではやや粘着性固執傾向を発揮している。小学 1 年のとき、担任教師から「字は心の鏡」と教えられ、肝に銘じていること、下手な字で他から嘲笑されたくない思っていること、また、時折、職務的監査をうけることなどの諸点が強迫的傾向を助長している。

10 週間の治療 (週 1 回) により標準練習を完了、以後、黙想練習、この間症状は 1 進 1 退しながら次第に軽快し、鉛筆を右手にもってすこしづつ書けること、同僚の言動があまり気にならなくなったことなどが観察された。不眠などは全く消失したが、自己鍛錬公式 (Intentional formulae) から、書字動作再訓練 (Graphomotor retraining) の現段階まで、書癡の症状のみはなお軽度ながら残存している。

症例 2. 22 才、女子、高校卒。症例とほぼ類似の職種についているが、症状は軽く、上役や同僚が傍でみているときだけ手が固くなって書けなくなる。そのほか、胃重、臨場恐怖などの neurotic symptoms がみられる。性来、神経質、内向的でいつも職場に出勤するとき漠然とした不安を覚えたという。

治療は症例 1 と同じで、標準練習は 18 週で完成し、neurotic symptoms はほぼ消失したが、職場での不安定感と書癡は軽微ながら残存している。

両症例への適用経験は次の諸点を教える。

1. つねに標準練習を反覆強化し、これを治療の基礎とする。

2. 場合によって、書癡自体よりも neurotic personality の治療に焦点をあわせる。(例えば症例 2 はこれに該当する)

3. 生活態度の改善、客観化を考慮する。

4. 筋肉の cocontraction を防止するためには書字動作再訓練 (Graphomotor retraining) が有効である。



86 縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病  
理学的研究——1. 目的と方法

千葉少年鑑別所 ○樋口 ひろ 佐竹 隆三  
" 山川 博臣 原山 晶子  
" 酒川靖一郎

従来の心理診断テストによる人間理解の方法は、所詮静止的な横断的診断 (statische Querschnittdiagnose) にとどまり、人格の変容、動き及び可塑性に対する考慮が殆んど払われていないか、或は極めて不十分であった。これに反して Dr. Szondi の実験衝動診断法は、力動的な縦断的診断 (dynamische Längsschnittdiagnose) とも言うべきものであり、我々の方法では系列的にテストを 10 回反覆して施行したために、個々の衝動プロフィールは恰も映画のフィルムのように、犯罪者の人格の中で如何に反社会的な危険な衝動や欲求が発生し、次第に飽和状態へと蓄積され、何時その極限に達し、如何に解放され、いつゼロにまで低下するかという変容の様相を我々に与えてくれるのである。このように実験衝動診断法は、犯罪行動の背後にひそむ潜在的な衝動危険性を可視的なものにすると同時に、その個人の深層精神 (Tiefenseele) の何処から個人的並に集団的、社会的危険性が発しているかを、トポロジー心理学的に、その局在を明らかにしてくれる。第 2 にはこの衝動研究は、如何にして我々がこの衝動危険性を時期を失しないで予防することが出来るかという洞察を与えてくれる。第 3 には、少年院、刑務所の如き矯正施設に於ける矯正教育が、この方法でその効果が判定され、更に効果的に行われることになる。例えば、受刑者が刑務所に於いて実際に改善されたのか、それとも依然として犯行当時と同じ程度に危険な衝動を蔵しているのかという課題に対して、この衝動診断法は答えてくれるのである。第 4 にはこの衝動研究は、従来不明確な概念のままに不用意に使用されてきた「非行深度」及び「犯罪性」(《Kriminalität》) なる概念を、或る程度明確化すると共に、可視的なものとして把握することを可能にする。又これに関連して、非行予測や累犯危険性予測に対して Testologie の立場から接近することが出来るのである。我々は現在迄に 2000 例を超える非行少年の衝動プロフィールを完成し、目下分析、検討を加えつつあるが、今回の発表は、この資料の中から再入少年 135 名を無作為に抽出し、初入時の所見と再入時のそれとを比較した結果について述べる。

87 縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病  
理学的研究——2. 統計的考察

千葉少年鑑別所 ○原山 晶子 佐竹 隆三  
" 山川 博臣 酒川靖一郎  
" 樋口 ひろ

135 名の再入非行少年に、初入時及び再入時に夫々 Szondi-Test 10 回プロフィール個別法を施行した結果を、統計的に考察して次の如き知見を得た。

テスト、再テスト所見に於ける一致度は全体としてかなり高く、完全一致 28.1 %、本質的一致 48.1 % で、両者を合すると 76.2 % となり、人格の本質そのものは変化し難いことがわかる。試験観察群では 83 %、保護観察では 80% の一致度を認めるが、少年院送致群では 51.6 % に過ぎず、人格変化を来したものが 48.4 % を占めている。このことから、少年院収容者が好いにせよ悪いにせよ人格変容を来しているが、身柄の拘束を伴わない観察処分に於いては認むべき人格変化がないことが知られる。

社会性指数から非行少年の社会的態度を考察すると、不変群 (57.8%)、変化群 (42.2%) に 2 大別されるが、変化群を更に細分すると軽快群 (24.4%) と悪化群 (17.8%) とに分類される。軽快群では現実との接触生活及び対人関係が好転し、C ヲベクターは sozialnegativ から sozialindifferent となっている。悪化群では感情生活及び自己生活に於いて悪化し、P ヲベクターでは sozialindifferent から sozialnegativ へ、Sch ヲベクターでは両者共 sozialindifferent の範囲内にあるとは言え、positiv から negativ への変動を示している。

別の角度から検討すると、軽快群では C に於いて sozialpositiv の人数が 2 から 15 へと増加し、P でも positiv の人数が 1 から 8 へと増加している。悪化群では P に於いて sozialnegativ の人数が 7 から 18 と増加し、Sch でも negativ の人数が 2 から 13 へと増加している。

再入少年は初入時よりも犯罪性が高まっていると常識的には一般に考えられ、そしてそれ故にこそ短期間に非行が反覆されたと理解されるが、我々の今回の研究結果はこのような皮相的解釈と矛盾対立し、人格構造の本質は殆んど不変であるか、変化するとしても悪化よりはむしろ軽快の方が多いたことが明らかとなった。従って再入少年といえども、社会性指数の変化如何によって hopeless ではなく、教育可能性が残されている。

88 縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病  
理学的研究——3. 症例研究

千葉少年鑑別所 ○佐竹 隆三 山川 博臣  
" 原山 晶子 酒川靖一郎  
" 樋口 ひろ

社会性指数の変化に基いて分類された3群(軽快群・悪化群・不変群)の中から典型例を選び、詳細な分析を行った。

第1例 軽快群(真の改善への傾向)

T. Y. ♂ 16:2(初入期) 18:3(再入時)

1. Haltlose Psychopathie? (臨床診断)
2. Sozialindex 7.3% (stark negativ) → 46.6% (positiv)

3. 再入時所見では Anpassung (Sch - -), Verdrängung (Sch - 0), Hemmung (Sch - +) 等の自我防衛機制が作用し、殺意症状群、意志不定性、類癲癇性格等の所見が消失。

第2例 軽快群(偽性適応)

A. Y. ♂ 17:9(初入時) 19:5(再入時)

1. Hyperthymisch-haltlose, süchtige Kontaktpsycho-pathie mit epileptoider Züge (臨床診断)
2. Sozialindex 37%→80% unglanblich (Tnkp12.5% stark sozialnegativ)

3. Scheinbare Anpassung であることは VGP の所見から明らかで、この例では Hintergänger (EKP) こそが Täter であると考えられる。

EKP 所見では、衝動爆発性格、攻撃的権力人類型、意志不定性の特徴が認められた。

第3例 悪化群

S. Y. ♂ 16:0(初入時) 18:5(再入時)

1. Epileptoide, haltlose Psychopathie (臨床診断)
2. Sozialindex 42.0%→28.3%

3. 再入時所見では、反社会性、非道徳性への素質、攻撃的権力人類型、攻撃・破壊欲求、カイン欲求、激怒の蓄積、虚言・欺瞞傾向、現実との接触障碍、意志不定性等の多彩且重篤な所見がみられた。

第4例 不変群

U. R. ♂ 15:9(初入時) 17:8(再入時)

1. Erregbare schwachsinn (臨床診断)
2. Sozialindex 20.0%→19.4%
3. 衝動構造式、衝動範疇、潜在比は完全に一致し、衝動プロフィルの微細な部分に至るまで驚くべき程度の完全一致を示している。2年間の間隔をへだてて施行されたこの2つのテスト所見の一致は、実験衝動診断法の信頼性を確認している。本研究によって特に印象づけられたことは、全人格の理解の完全性を期するためには、このような mikroskopisch な人間理解が方法論的に不可欠であることをあらためて確認したということである。

89 縦断的人格診断と経過分析に関する衝動病  
理学的研究——4. 総括と結論

千葉少年鑑別所 ○酒川靖一郎 佐竹 隆三  
" 山川 博臣 原山 晶子  
" 樋口 ひろ

先の演者が述べて来たところを要約すると次の如くである。

1) 実験衝動診断法の妥当性及び信頼性そのものを考察した研究ではないが、それらが著しく高いことが今回の研究によっても確認された。

2) 本法は人格の変容・動きを捉えるのに極めて有効な手段であり、我々の行ったような力動的な縦断的診断の方法は、人間理解の新しい方法論を開拓したものと考える。

3) 135名の再入非行少年の経過分析により、人格の本質そのものは変化し難いものであること、再非行により少年鑑別所に再入した少年がすべて悪化への方向に向けられた変化のみを示すのではないことが明らかになった。

4) 少年院収容は身柄の拘束を伴わない観察処分よりも非行少年の人格変容に影響を及ぼしている。

5) 社会性指数 (Sozialindex) は非行少年の社会的態度を克明に表現するものであり、従来不明確な概念のままに不用意に濫用されてきた「非行深度」及び「犯罪性」(Kriminalität) なる概念を、我々は或る程度明確化すると共に、可視的に把握することが可能になったと考える。

6) 非行少年の人格変化が軽快の方向に向う時は、対人関係を主とした現実との接触生活が sozialpositive となり、これに反して悪化の方向にむかうのは、主として自我生活や情緒が sozialnegative となることに由来することが明らかにされた。

7) 非行予測や累犯危険性予測に限らず、実存可能性の検討により、非行少年の将来に於ける運命を testologisch に予見することが可能である。

我々の今回の研究に対する基本的態度は、非行少年の人間理解に於いて、彼らがかって少年院の収容者であったとか、その他の処分を受けたとかいう理由で、彼らの社会的実存に貼りつけられた、何らかの医学的、心理学的診断の担い手に尽きるものではなく、常にそれ以上の含蓄的存在であり、従って我々は単に臨床診断をつけ、治療、教育、訓練による症状の消滅を図るばかりでなく、個々の非行少年の実存可能性 (Existenzmöglichkeiten) の中に踏込もうとするものである。

## 90 帯回切除前後の Personality の変化に関する一考察

井之頭病院 塚本三朗

前頭葉ロボトミーが、手術後患者の衝動行為や爆発性を減少或は消滅させる上において効果をおさめながら、反面自発性を欠かさず、感受性を著しく減退させるといった、顕著な Personality の変化をもたらすといった欠点が、これまで多く指摘、批判されている。それ故、手術後、好ましくない Personality 変化を起さぬような、less extensive な手術方法が要請されて以来、Personality の変化を最小限度に喰い止めながら、しかも所期の治療効果を挙げうるような、いくつかの手術が考案されたが、その中で、帯回切除術は最も有効な手術の一つといえよう。

本研究は、帯回切除後、好ましい Personality 変化を示し、社会に復帰した、一人の精神病質の女子患者の Personality の変化を心理テストを通して把握、考察したものである。

心理テストは、ウエクスラー・ベルヴュー・テスト、クレペリン作業テスト、ロールシャッハ、及び TAT の4種を手術前1回、手術後3週間目、3ヶ月後と計3回施行した。

### (1) ウエクスラー・ベルヴュー・テスト

言語性、動作性及び総成績共、成績が上昇し、総成績でいえば、1Qは68から、79、更に83となっている。

この原因の一つに、練習効果という面も確かに考えられぬが、手術前にみられたように教示を早呑みこみしたりせず、落着いて、理解に努めていた、という点は、見逃せない一つの Personality 変化だと考える。

殊に、順唱・逆唱や共通点の発見、絵の配列などの下位テストに、それがみられた。

### (2) クレペリン作業テスト

作業量の上昇と、初頭努力が手術後にあらわれた、ということが一番大きな特徴である。即ち、今仮に、手術前の総作業量を100とすると、手術後は140、175と上昇し、曲線型も異常型から準々定型まで変化した。

### (3) ロールシャッハ

手術前後において、質量において、逆の関係を示した。即ち、手術前は質がよくない反応が多く、術後は、量は減ったが質が向上し、平凡反応も増えた。殊に平凡反応の増加は社会性のあらわれとみてよい。

### (4) TAT (早稲田版)

全く変りなく、表面的叙述に終始。

## 91 心理テストによる Cingulectomy の効果の測定

名古屋大学 ○生田 博之 鈴木 正弥  
守山荘病院 川島保之助

**問題** 精神疾患に対する外科的治療は、従来ロボトミーがかなり広く行われたが、現今ではロボトミーを含む精神外科全体が冬眠療法の流行と共に一般には捨てられた如き状態となっている。その大きな理由として、ロボトミーが症状の消失、軽快に寄与する一面、知的或は人格の水準の低下を伴う事があると言う事実が挙げられる。即ち、精神外科の研究者はこれまでロボトミーの精神症状及び人格に対する影響について報告検討する一方、精神外科の方法としてここ数年来、ロボトミーに替る所謂制限的、選択的方法を用いて来ている。その意図する所は、好ましくない人格変化を避けて、精神症状に関して最大の効果を期待出来る方法を確立すると共に、大脳生理学における新知見を確立する事である。そこで今回は、私共の行っている制限的手術方法の一つとしてのチングレクトミー施術の前後に施行した心理テスト(ロールシャッハ・テスト及び WAIS)の結果から、この方法の特色を検討したいと考えた。

**症例** 症例はいずれも精神分裂症患者で、16例である。テスト結果の比較のほか、観察された臨床症状の変化、患者の現在の適応状況をもとりあげ、テスト結果との関連性を検討した。

**結果** 結果の処理として、今回はロールシャッハ・テストの場合まず総合的な人格統合水準をとらえるため基礎ロールシャッハ得点(片口の修正 BRS による)を比較し、WAISに於ては言語性テスト、動作性テスト、並びに総合IQの数値を比較し、ともに施術の前後差を問題とした。また、個々のロールシャッハ・サインの面からは、主として精神分裂症に關係のあるものを選びその変化を調べた。その結果、概ね共通に BRS の上昇、WAIS-IQ の値の上昇をみた。また、各サインの変化としては、僅かに form level の上昇、P の増加、introversive な方向への変化等数項目に共通性を認め得た。

**考察** この結果は単に施術前後のテスト結果の比較と言うに留まり、必要な「条件の統制」の点で甚だ不十分である。従って単に数値上の良化がそのまま症状の好転、人格水準の向上を示すと考える事は難しい。ただこの測定結果が、数値の上の悪化を殆ど示さない事から、著しい知的、人格的な低下はない事を推測する事は出来よう。

92 Body-image (特に Inside Color-image  
について)

東北大学 大山 正 博

問題 身体内部器官の色彩イメージを次の4つの点について検討する。

(1) 身体内部器官についての色彩イメージの一般的傾向を知ること。

(2) 一般人(女子大学生)と比較的実際のorganに接する機会の多い職業についている人(看護婦)との間の色彩イメージについてのちがいを知ること。

(3) 身体内部器官の色彩イメージが色彩の好悪の感情によって影響を受けているかどうか確認すること。

(4) 個人の身体内部器官の色彩イメージの明暗が質問紙法による神経症傾向、内外向性格傾向と関係があるかどうか検討すること。

手続き 照準群(女子大学生)21名、比較群(助産婦学校学生)15名。

検査は集団法を用い身体内部器官名(23個)と小保内、松岡氏の色彩象徴検査法から選んだ普通刺激語(17個)計40個を20秒間隔で呈示し、各被験者に予め配布した16色の色彩カードより各々の刺激語の色彩イメージに合致した色彩を選択させた。

更に一対比較法によって16色の好悪をしらべ、神経症傾向、向性についてはモズレーメディカル、インベントリーを用いて調査した。

結果 (1) 身体内器の色彩イメージは、比較群(助産婦学校学生)の方が照準群(女子大学生)より選択が分散しており、これは予想された傾向とは逆の結果を示した。

(2) 色彩好悪と器官の色彩イメージとの関連をみると一般に好まれない色彩が器官の色彩イメージとして選択される傾向が比較的はっきりと示された。

(3) 神経症傾向の高得点群は暗色を明色に比較して優位に選択する傾向がみられる。

93 出産に関する不安の研究

河野教育相談所 河野 良 和

分娩の経験のない妊婦に、初めての分娩に関する不安をペーパーテストにより調査し、このうち、自己催眠法による無痛分娩処置を行った者の不安の消長と比較した。

無痛分娩処置を五回以上受けている妊婦群を実験群。同処置を全然受けていない妊婦群を比較群とする。実験群ではNは16名、比較群では32名この比較群はI 妊娠8ヶ月未満、II 妊娠8ヶ月以降と分け、両群ともに16名づつである。

質問紙はA 出産の苦痛に関する不安10問、B 母親となることについての不安(a)心理的なレディネスの有無(b)育児の上の不安各5問、C 生まれて来る子供に関する不安(a)身体奇形について、(b)知的欠陥について各5問、D 子供が生まれた後の経済問題3問についてのチェックを求めた。

以下はその結果不安としてチェックされたもののパーセンテージである。

	A		B		C		D
	a	b	a	b	a	b	
実験群	1	2	1	25	11	58	
比較I	76	72	68	94	96	43	
比較II	72	38	46	96	90	86	

以上の結果を得た。この数値の中で、比較群IIのA項は不安の大きいものと小さいものが、かなりはっきりと見られた。恐らくは差迫った不安感と、いよいよとなった時の諦めにも似た現実適応が見られるのであろう。

実験群については、著しく不安の低下が見られるが、経済的な問題については比較群全体の平均との間に差が見られない。この点は不安感が、現実的な場面に限定され、不必要な不安は減少するものと考えて良いであろう。これは無痛分娩処置の効果か、あるいは、その手段として用いられた自己催眠状態の持つ心理療法的効果なのか、あるいは同処置の手続き上附帯するカウンセリングの効果によるものか、あるいはその複合の効果によるのかは、現在の資料からは明らかでない。

なお、比較群I、II両群の間には母親となることに関する不安が出産間近のII群では少ないこと、経済問題ではその逆であることが興味深い。これは出産が迫ることで自然に母親としてのレディネスが出来、いよいよ近づいた出産がかなり現実的に本人に認められるようになって来るためと考えられる。

## 94 ロールシャッハカードの知覚過程の分析

一特に瞬間露出呈示法による色彩カードについて一

日本大学 内田 暲 一

今回は特にロールシャッハ色彩カードについて、知覚過程の分析研究を行った。

**方法** 標準ロールシャッハ・カードⅧ, IX, XをTKK式瞬間露出器にて、10<sup>0</sup>, 20<sup>0</sup>, 30<sup>0</sup>, 40<sup>0</sup>, 50<sup>0</sup>の5水準で実験を行った。

被験者はロ・テスト修学中の学生女子4名、未修学の学生女子5名である。なお、ロケーションの指定は片口のみによった。

**結果** カードⅧでは10<sup>0</sup>がD<sub>1</sub>, D<sub>3</sub>, 20<sup>0</sup>ではD<sub>7</sub>, D<sub>2</sub>が加わり、20<sup>0</sup>における知覚領域は50<sup>0</sup>まで変わらず形態・色彩知覚の質がよくなっていく。

未修学者では10<sup>0</sup>で全体知覚をする者が多く、他はD<sub>1</sub>である。20<sup>0</sup>ではW知覚とD<sub>1</sub>, D<sub>3</sub>, D<sub>7</sub>となり、30<sup>0</sup>になるとW知覚は消えD<sub>1</sub>, D<sub>3</sub>, D<sub>7</sub>, D<sub>2</sub>となって50<sup>0</sup>まで継続して知覚される。

カード全体ではD<sub>1</sub>は赤で動物知覚が多く、運動知覚は30<sup>0</sup>から修学者に知覚される。

カードIXでは10<sup>0</sup>がD<sub>3</sub>で20<sup>0</sup>からD<sub>1</sub>, 30<sup>0</sup>がD<sub>2</sub>が加わり、50<sup>0</sup>まで続く。未修学者において10<sup>0</sup>でW知覚とD<sub>3</sub>, D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>であり、20<sup>0</sup>ではW知覚がなくなり、50<sup>0</sup>になるとD<sub>6</sub>, D<sub>5</sub>が増える。未修学者においては色彩知覚は十分でない。

カードIX全体では、修学者、未修学者ともに知覚領域はほぼ同じであるが、色彩知覚は差が認められる。D<sub>3</sub>に動物を知覚するのは一般的な傾向のようである。

カードXは10<sup>0</sup>がD<sub>6</sub>, D<sub>4</sub>, D<sub>1</sub>, 20<sup>0</sup>ではD<sub>7</sub>, D<sub>3</sub>, D<sub>8, 9, 10</sub>(一つの領域), 30<sup>0</sup>になるとD<sub>2</sub>が加わり、40<sup>0</sup>も変りない。50<sup>0</sup>ではD<sub>8</sub>, D<sub>10</sub>, D<sub>5</sub>が増える。未修学者では10<sup>0</sup>がW知覚とD<sub>6</sub>であり、20<sup>0</sup>ではD<sub>1</sub>が増え、30<sup>0</sup>になるとD<sub>3</sub>, D<sub>4</sub>, D<sub>2</sub>, となり、40<sup>0</sup>でD<sub>10</sub>, 50<sup>0</sup>ではD<sub>5</sub>, D<sub>7</sub>とが増える。

このカードでも修学者、未修学者ともに知覚して行く領域は同じであるが、色彩知覚は未修学者に誤認が多いようである。

**結論** カードⅧ, IX, Xとも修学者、未修学者の知覚過程には差はない、といえる。また領域の空間位置の知覚についても同様のことがいえる。(この点、再検討するつもりである。)

## 95 面接者訓練に関する研究(Ⅱ)

家庭裁判所調査官研修所 岡 堂 哲 雄

**研究の目的** 昨年早大での日本心理学会において発表したものの続報である。ケース診断のための面接者を如何に訓練するかの問題についての仮説設定を目的とした。前回には、主として評定、尺度の構成とその信頼性検定、数種の技法間の効果の測定を試みたが、その結果、自己評定法を含む評定尺度の有効性が認められた。その際、ロールプレイングについての被験者の報告は、その効果を十分に認めるほどではなかった。今回は、その方法についての試案的検討を行ったものである。

**方法と対象** 少年係の養成部研修生30名の中から面接者の役割を演ずるもの3名(男2名, 女1名), 被面接者のうち非行少年の役割をとるもの1名(男)母親の役割を演ずるもの1名(女)を抽出し、他は観察者として参加した。

第1回 昭和37.7.5. 少年との第1回面接

第2回 " 7.9. " 2 "

第3回 " 7.9. 母との第1回面接

(全てテープレコーダーによって録音された。)

その後、演技をテーマとして面接に関する討議を10名づつの3グループに分けて実施した。

**考察と要約** ロールプレイング参加者の討議内容報告を検討した結果から次のことが判明し、今後の訓練計画に1つの示唆を得た。

① 各参加者が将来の面接学習へ強く動機づけられたこと。

② 主訴である非行行動に関するアプローチに若干の反省が得られたこと。

③ 具体的かつ実際的な技術が、いかにどのようにして学習されるかの洞察をもった。



## 96 精研式 SCT の判定特性曲線による検討

慶応義塾大学 印東 太郎

〃 〇並木 博

投影法をはじめとして一般に心理診断には、頭を通しての判断過程が不可避免的に介入して来る。そこで心理診断の精度を高める為に、向うべき方向の一つとして、心理診断の過程を何らかの方法により分析し診断内容の客観性をおさえ、各診断者の診断の特性についての測度を得てこれを一助として診断技術を向上せしめる必要がある。そこで、心理診断の精度の向上は診断者の管理の問題となり本研究はこの方向への進歩に資すべく行われたものである。投影法において、診断者が被検査者の反応についてある診断を下す過程を、一つの診断内容についての確率事象として考える時に、判定特性曲線による診断過程の分析の可能性がひらけて来る。判定特性曲線の基本的構想はまず判定内容についての一次元連続体Cの存在を仮定し、判定対象がこの上に分布するものとすれば、判定者*i*が判定内容としての特性の有無を判定対象につき判定する確率  $P_i \cdot c$  は、この連続体上の ogive であるということにある。本研究に於いては、精神医学研究所の協力を得て、精研式 SCT カルテ220枚を用い、熟練者、初心者等9人の診断者に、五つの評価項目 (D. S. E. Z. G. 精研式手引参照) につき診断をこれより各診断項目ごとに各診断者の判定特性曲線を求めた。判定特性曲線求め

$$P_i \cdot c = \frac{1}{\sqrt{2\pi} b_i} \int_{-\infty}^c e^{-\frac{(c-a_i)^2}{2b_i^2}} dc \text{ は二つのパラメータ}$$

$$a_i = \frac{l_i}{P_i} \text{ 及び } b_i = \frac{\sqrt{1-p_i^2}}{P_i} \text{ を有し、ここで } l_i \text{ も } P_i \text{ も}$$

実測値より推定される。特に  $P_i$  は診断者  $i$  の見る診断内容と診断者間に共通に存在する統一の見方Cとの相関であり、これは各診断者の診断の間の相関行列に因子分析を施す際に、single factor の負荷量として推定出来るものである。又、 $a_i$  は各診断者の診断の甘さ辛さ、 $b_i$  は診断のばらつきの測度という意味を持ち、診断過程を二つのパラメータで表示することが出来る。又、各診断者の誤診率も推定可能である。又、次に各診断者の判定特性曲線を総合することにより、診断対象の診断項目別の尺度化が可能となり、これを用いて練習用カルテを適宜、選定し得る。本研究に於いては、総合判定特性曲線の数理により得られるカルテの分布の理論値と実験による実測値との間に高い一致が見られ、本理論の適合の良さが保証された。心理診断の技術の向上は、上述した診断過程の分析によって診断者の管理に留意すると同時に、統一の見方そのものの持つ臨床的妥当性を臨床経験を通じて高めることによって、はじめて期待されよう。

**問題** 当所の教育相談では来談者中心のカウンセリング・遊戯療法を行なっている。子どもの母親が継続的カウンセリングにおいて示す訴え(述懐)の推移、変化を問題とする。カウンセリングは独自の経験であって、その人格と状況の一回性が問題となる。そして母親の態度的価値がカウンセリングに投入されてくるのでここでは、母親の訴えそのものを研究の問題とする。

**方法・結果** 教育相談事例から、4～9才(男子)の幼児、児童で、母親の主訴が、どれも「攻撃的で困る(乱暴喧嘩・物をなげる)」6事例を対象とし、母親自身・子ども家族関係の3項目に訴えを整理し、相談回数ごとにまとめた。(残る問題は除く)そして、6事例ごとにコーネル法によって、尺度分析し、さらに、3項目と6事例間の再現係数についての吟味を行なうため $\chi^2$ -検定を行なった。その結果、再現係数は6事例と全ての各項目についての係数上の変化は、最大1.00～最小0.34に散在し、 $\chi^2$ -検定では有意の差を認められた。(母親の訴えについての分類項目を細分すると再現係数はいちぢるしく低下する)したがって、各事例は個々に独特な様相を呈し、しかも、相互に全く独立した経過を示している。

**考察** カウンセリングは独自の経験であるとロジャーズがいつているが、その一面をこの研究でも確められたと考えられよう。母親自身の意義づけによって全く異なる状況下で訴えがなされる。このようなその場かぎりの反応は、実際の場面でしばしば遭遇することである。母親によっては、相談中終始主訴に執着したり、初回以後は全く主訴を問題にしなかったり、また、幾度か話題として相談中にのぼることがある。さらに、子どもの問題解決にあたって、中核的な問題と周辺的な問題が、母親の態度価値によって個々に存在するようにみうけられる。この相談過程中の推移(転移)の問題は、シエラーがいう「状況価値」的な問題であろう。そして、治療関係における解遁的瞬間的な一回性が問題となる。たとえば、当事者以外にとっては、何んでもないような問題が、当事者では苦悩を生じたり、好転への契機となり、また、以前深刻に考えられた問題が、治療が進むにつれて、全く忘れられたような事態が起ってくる。

## VI 相 談

## 役割演技の導入の仕方

東京少年鑑別所 台 利 夫

**目的** 或る種の問題児のカウンセリングに於ては、役割演技を導入することにより、治療効果を高めることができるように思われる。この点について事例に基づきながら考察した。

**事例 1. 概観**

本事例は小学4年生の男児で東京少年鑑別所がおこなった心情質問診による学校検診の結果変調が大きいことが認められて、鑑別所の外来を訪れた者である。家族は母と二人暮らしで生活は貧困である。父母は本人が7才の時に離婚母は某服飾学院の給食係りをしている。朝8時に家を出て夕方6時にならないと帰宅しない。母は身体が不調であり性格は神経質である。本人も小柄、虚弱でやせている。IQはSSで47であるが幼稚な印象を与える。

**2. 問題行動とカウンセリングによる変化**

学校・家庭からの報告によれば、本人は極めて落ち着きがなく、整理・整頓ができず宿題もよく忘れる。附和雷同しやすく年長の素行不良者と盛り場を徘徊する。人前では概してオドオドしているが母の注意にはとくに烈しく反抗する。これらの問題行動は6ヶ月にわたるカウンセリングの結果、落ち着きのなさを除いて著しく改善された。とくに対人関係における葛藤が減り、時には、昆虫採集教材の作製等に持続的に熱心に従事することも可能となった。

**方法** 最初と最後の回及び中間に1回、母を同伴して来所したが、それ以外は一人で毎週1回訪れてカウンセリングを受け、これを20回つづけた。面接時間は40分～50分で、その間の学校の授業は免除された。カウンセリングは少年の発言を中心にすすめられたが、とくに後半には、できるだけサイコドラマに基づく役割演技が導入された。その方法は、カウンセラーが監督、兼補助自我として少年と共に演じることであった。

**考察 1.** 以上のやり方による役割演技導入の理由は、次の通りである。

(1) カウンセリングにおいて、最初の頃は母—子関係の葛藤がしばしばテーマとなっていたが、これは漸次減少した。然し、洞察は殆ど現れなかった。従って、落ち着きを与え、また三者関係を指向する(二者関係から)ことにより、自己理解をすすめることを意図した。

(2) 母からの報告により、カウンセリングの過程で或る種の同一化が形成されたことを認めたので、カウンセラーと少年が相互に更に積極的に関係に参加することによって、この同一化をすすめるようとした。

(3) 役割転換の場面に於て、少年の演技が、しばしばカウンセラーの言動に近似していたので、転換の技法を活用することによって態度変化が可能であるとみた。

このようにして役割演技場面でなされた幾つかの指示や

東京医科歯科大学 篠 塚 晋

最近学生相談活動が多くの大学や研究所等において、盛んに行なわれるようになりました。そしてこれに対する科学的研究がいろいろの面から行なわれています。

私は「学生相談においては、学生(Client)に対する科学的各分野からの調査が必要であり、その調査結果が学生相談活動を行なううえに基礎資料としてじゅう分活用されなければならない。」ということについて検討してみたいと思います。学生相談を行なう場合それが学生中心のカウンセリング[Client centered counseling (Non-directive counseling)]であれ、指示的カウンセリング[Directive counseling]であれ、またこれ等を折衷させたものであるにせよ、いずれにしても Counselor は常にその学生(Client) = (Counselee) の立場、いわば学生(Client) そのもの自身をじゅう分に認知し、その学生(client) を細部に表裏から、また内からも外からもしっかり把握していなければならないと考えます。そして Client の現時点におかれている心理的環境と地理的環境をもじゅう分に認知しておかなければならないと同時にその学生の生成発展の過程における過去の一さいの事象について認知していなければならないと思います。

各大学等においてはこれ等を満たすために指導要録、加記録等が用意されていると思いますがこれ等のうち特に動いている事項については毎年何回か、ある時点において Catch し、また特に「学生のための心理テストまたは心理調査の結果を常に大学は準備しておく必要がある」と考えます。今まで健康診断が身体的のものに限られていましたが精神衛生の面から性格テスト、興味テスト、適性検査および生活調査等の結果を各個人別に整備し、またその集団としての調査結果も把握しておく必要があると考えます。そこで私はこのうちの「生活調査」を実施し学生の悩める問題を客観的に把握しそれを学生相談の基礎資料とし役立たせています。次に示すのは昭和37年4月東京医科歯科大学進学課程に入学した第1学年学生の悩みを Mooney Problem Check List を基にし中村弘道先生が日本版として改訂されたものにより12の領域に分けて把握しました。調査対照は134名の学生でそのうち特に悩んでいる領域から順序に列らべますと次のとおりです。1. 思想, 2. 修学, 3. 教育内容と方法, 4. 教養, 5. 人生, 6. 経済, 7. 社会性, 8. 性格

テスト項目に対する被検者の応答は項目に対する response set により、影響をうけることが Cronbach により示唆されてから、種々の response set が存在することが明らかにされた。そのうち、特に多くの研究がなされているのは、項目の内容とは関係なく、テスト項目と一致する傾向（「ハイ」と答える傾向）、つまり response acquiescence についてである。最近はこの傾向がまたある人格特性を予測する一指標であることが示唆されている。そのために、純粋 acquiescence 尺度が作成されてきている。Cronbach によればテスト項目が未構造的で、あいまいな程、response set は生じ易いのである。純粋 acquiescence 尺度はこの前提にもとずいて作成されたものが多い。しかしこの尺度が果して、一般的な傾向を測定しているものであるかどうかを検討する必要がある。人格特性の有用な指標として response acquiescence を使用するためにはそれが一般的であることを必要とする。もし、一般性が証明されなければ、人格特性の中心的な表われであるとして使用することは困難であろう。

本研究では、従来使用された pure acquiescence 尺度の代表的なものを6つえらび、さらに MMPI の「ハイ」応答との相関をとり、前記の問題を検討してみた。

結果は、各尺度の信頼性はかなり高いが、尺度間においては顕著に高い相関を見出すことはできなかった。従来の尺度を再検討し、item perception の認知スタイルの一般特性を検出し得る方法が考えられるべきであるという結論をえた。質問紙項目で acquiescent な傾向を示すものが日常の行動においても、同様な傾向を表わすかどうかを検討する必要がある。要は、acquiescence 尺度から人格特性の指標を引き出すには、更に広範な研究を要するということである。ひとつの尺度から、一般化を行う危険性も示唆された。

## VII 検 査

## 101 YG テストと加算作業曲線型との関係

(作業性格検査 25)

東京都職業適性相談所 板倉 善高

対象：家事サービス業希望者・女子 (15~50才) 440 名

YG 性格 特性	速度別		
	平均	分速70以上	30以下
D	2.52	2.58	*2.65
C	2.72	2.58	*2.96
I	3.10	2.83	*3.37
N	2.73	3.50	*3.00
O	2.66	2.66	*2.93
C̄	3.07	2.83	*3.33
Ag	2.86	*3.16	*3.00
G	3.35	*3.58	3.37
R	2.81	*3.33	*2.94
T	2.93	2.73	*3.05
R̄	3.06	3.00	*3.11
S̄	3.10	*3.33	3.15

\* 印は平均以上のもの

(作業曲線型別)

N (正常)……主観・服従・(むら・のんき?)

U (上昇)……劣等・おとなし・客観・活動・非社会

S (平坦)……むらなく楽観的・攻撃なく活動的(指導・社会?)

D (下降)……楽観・神経・外向・非協・活動(服従・非社会・劣等?)

O (突出)……神経・(内向・むらなし?)

I (陥没)……劣等・非協調・非攻撃・のんき・外向

注：(?) は作業性格と一致しないもの。

## 102 性格の類型について (5)

人間科学研究所○小 牧 玲子

〃 安 勢津子

〃 原 勝一

東京工業大学 坂 元 昂

〃 龍 山 貞 登

**目的, 方法** 宮城音弥は, 病理法にもとづき, 性格の分類をするテストを発表しているが, 今回は, 前年度に引きつづきこれについての因子分析研究, さらに基礎的な検討を加える。東京工業大学心理学研究室の性格調査表は, 気質の3類型(分裂質, そううつ質, てんかん質)および性格の3類型(パラノイア性格, ヒステリー性格, 神経質性格)との6類型に対応する6部(各部10づつ合計60の質問からなっている。前回の研究から, 気質の3類型 S, Z, E, と狭義の性格の3類型 P. H. N. は, それぞれ同じ直角二等辺三角形をなし, 二つは直交する, そして全体としては, 正八面体になるとゆうことが推測される。これが同じ結果になるかどうか調査するための都内私立女子高校二年生100名各自に自己診断させ, 6つの下位テストの間の積率相関を求め, これよりセントロイド法による因子分析を行った。

**結果** 因子分析の結果からモデルを作ったところ前回のと外見上は, 相当異つたようにみえるが, いくつかの共通点がみられる。

I : 第一因子で, S, Z と他の四つ, E, P, H, N は直交する。第三因子でも E, P, H, N は, S, Z と直交する。さらに E, P, H, N は軸の両はしに分かれ, S, Z も軸の両はしに分かれる。

II : 前回の研究における $\Delta ZES$  と, 今回の $\Delta ZES$  は, 非常に三角形の型が類似している。このことは, 性格のより基本的構成要素である気質の方は, 被験者の年齢, 性, 評定方法が変っても, 比較的一致した構造を示していることを意味する。ところが狭義の3類型 $\Delta P. H. N$ を比べると, 二つの研究の間にかかなりの差がみられる。このことは性格の方が気質よりも環境の影響をうけることを意味しているのではないかと思われる。

III : 次の分析方法として二つの研究で得られた性格構造の類似度を調べるため, 前回と今回の因子負荷量の相関を求めたところ 0.82 であった。これは, 性格の構造のパターンの類似度が非常に高いことを示すものと思われる。今後又いろいろな被験者で同様な調査を試み, 気質の三角形には変りないこと, 性格の三角形はどんな変り方をするか, もつとも理想的な型として性格の正八面体がみいだせるかどうか検討したい。

### 103 性格の類型について (6)

人間科学研究所○安 勢津子  
" 小 牧 玲 子  
" 原 勝 一  
東京工業大学 坂 元 昂  
" 龜 山 貞 登

東京工業大学心理学研究室性格調査表(性格類型テスト)によって測定される類型間の相互関係についての立体モデルを検証しようとする研究の一つである。この報告の資料は、成人女子100名の自己診断結果であり、質問の通過率が20~80%の25項目を選んで、その項目相互の4分割相関係数を求めて、因子分析を行った。

**結果** ①この資料からは、第4因子まで抽出することができた。なお、この調査表の60項全部についての因子分析を行なった1960年の日本心理学会発表では、第2因子までしか抽出できなかった。これは通過率のかたよりによるものと思われる。

② 直交回転後、第1因子はS・Nの負荷量が大きく、第2因子はPの負荷量が大きく、第3因子はとくに大きな負荷量をもつ項目がなく、第4因子はZEの項目の負荷量が大きい。試みとして、第1因子はSN対ZP因子、第2因子はP対N因子、第4因子はZE因子と考えられる。

③ 25項目のプロットの分布については、SHN、ZEPという2群は決められなくはないが、同一バッテリー毎のまとまりは、Pを除いてあまりはっきりしていない。なおこの結果では、10—S、11—Z、30—Eがはっきりした三角形をなしている。

④ なお、6—S、11—Z、30—E、36—P、49—H、51—Nの6点の相互関係をとりあげると、仮説モデルに似た8面体を形づくると、この場合、E、P、H、Nの4点が同一平面上に位置づけられてはいるが、この面と、S、Z、Eを含む面とが直交していないことと、H—Nの関係が、仮説モデルと逆になっていることで、今後検討したいと思う。この8面体においても、ZEP(a型)とSHN(B型)の2三角形は、仮説通り、平行している。

### 104 鈴木びね一式個別知能測定法について (第一報)

—その信頼性の検討—  
東京都品川児童相談所○奥 村 木沙子  
" 松 本 忠 久

**目的** 鈴木びね一式個別知能測定法の信頼性を測定し、それについて吟味する。

#### 第一実験

**方法** 折半法。鈴木びね一式は、各問が難易の順に排列されているので、奇数番号と偶数番号によって分けその得点の相関をみる。

**被験者** 都内保育所2ヶ所 幼稚園1ヶ所の、当日欠席した以外の全員。性は区別しない。3才群46名、Av CA 3 : 7, Av IQ 100, 4才群128名、Av CA 4 : 6, Av IQ 102, 5才群246名、Av CA 5 : 6, Av IQ 107, 6才群143名、Av CA 6 : 4, Av IQ 106。

**手続** 昭和36年から37年にかけて実施し、テスターは発表者から2名、テスター間の誤差を予め調整しておいた。

**結果** 信頼度係数、3才0.828, 4才0.869, 5才0.844, 6才0.646, なおこの係数はスピアマン・ブラウンの公式を用いて修正してある。

#### 第二実験

**方法** 再検査法

**被験者** 都内保育所2ヶ所、幼稚園1ヶ所、3才群19名、Av CA 3 : 7, 1st Av IQ 99, 2nd Av IQ 102, 4才群65名、Av CA 4 : 5 1st Av IQ 105, 2nd Av IQ 108, 5才群31名、Av CA 5 : 3, 1st Av IQ 110 2nd Av IQ 110。性は区別しない。

**手続** テスターは発表者ら2名。個別に行い、再検査による被験者とテスターとの組み合わせは、無作為にしてある。

**結果** 信頼度係数、3才0.662, 4才0.753, 5才0.794  
**考察** 我々の結果は鈴木の結果より低く、中でも折半法6才群において著しい。そこで通過率を検討したところ、問題全体にわたって通過率が高くなっており、問題がやさしくなっている傾向がみられた。とくに了解(一)(二)四貨幣名、絵の遺漏等社会性、現実適応性と関連する問題の通過率が高く、紐むすび、文章反唱など、生活習慣の変化、教育方法のちがいに関連する問題が低くなっていた。社会情勢の変化がこの知能テストにも、若干の影響を与えているように思われる。

再検査法では年少群ほど信頼度係数が低く、IQの変動も大である。年少児の場合、テスト状況の影響が年長児より大であること、保育所や幼稚園の教育効果が、年少児ほど大きいことが考えられる。しかし、鈴木の結果に幼児群が含まれていないことは問題となろう。我々の結果も被験者数が少ないので、今後も検討を重ねたい。

## 105 興味型テストの妥当性に関する研究 (第3報)

—好む人物と興味型偏差値との関係—

山梨大学 石川 七五三二

Spranger の人格類型をテスト心理学の立場から測定するために興味型テストを標準化し、さらに最近その改訂版として高学年用の第2型式の新基準を設定し、その信頼度と妥当性の一部——好む学科との関係 (第1報) 及び消費対象との関係 (第2報) ——を明らかにすることができたので、このたびは好む人物と興味型偏差値との関係を検討することにした。

被験者は都市農村の小学6年生 159名・中学2年生 194名・高校2年生 121名の男子で、現存する人物・過去の人物・架空の人物のいずれかから最も好む (あこがれる・尊敬する) 人物を選ばせ、これらを研究家 (発明家を含む)・社会事業家 (教育者を含む)・宗教家・芸術家・運動家 (探検家を含む)・政治家 (軍人を含む)・実業家の7群に分類し、それら各群の人物を選んだ被験者群別にその興味型偏差値のMとSDとを算出して、人物選択傾向と興味型特質との関係を検討した結果、運動家を選んだ群においては活動的興味型偏差値の平均が最も高く (小学 55.9, 中学 54.3, 高校 55.9) 他の興味型偏差値の平均との差が大部分5%または1%水準で有意であることが明らかにされた。これに次ぐものは研究家を選んだ群における理論的興味型偏差値の優位で、他の興味型偏差値の平均との差の大部分が有意である。(小学 56.1, 中学 52.9, 高校 54.9)。

芸術家を選んだ群においては、小学の段階ではその一致の傾向が現われていないが、中学及び高校では極めて顕著に現われ、審美的興味型偏差値の平均がともに最高を示し (53.4 と 56.6)、他の興味型の偏差値の平均との差の多くが有意である。社会事業家と実業家を選んだ被験者がともに極めて少数で、それらの群の各興味型偏差値の平均の信頼性が乏しいために、この2群においては好む人物の種類と興味型との関係を結論し得ないが、比較的多数の被験者が選んでいる政治家群において、いずれの学年も興味型的特色を現わさず各型とも平均 (50) に近い値を示していることは、むしろ政治家を好む群には調和的傾向を示すものが多いことを物語るものと思われる。

以上の事実から興味型テスト結果によって示される人格的特質または価値感情の方向と、その人格類型者があこがれる人物の類型との間に密接な関係の存することを知るとともに、興味の類型と人物の選択と投影される人格の基本的特質をこの興味型テストによって検出し得るものと考えられる。

## VIII 産 業

職務分析データから職務評価を実施する際に baias を最小限にとどめるために、分析自体が評価の一部となるような評価方式を展開する。方法 あらゆる職種に関係ある要素を 154 種想定し、それを更に 30 要素に縮小して、各要素について 5 段階スケールを設定することにした。この多項目スケールを用えて、中小企業の一工場内の評価を試みた。1. 学歴～その職務に最低限必要とする学校教育程度を意味する。スケール (例) 1. 教育を殆んど受けていなくてもよい。2. 中学卒程度の学歴を必要とする。3. 高校卒程度の学歴を必要とする。4. 大学卒程度の学歴を必要とする。5. 大学卒業後更に専門的研究機関に属していることが必要。2. 知識～その職務に必要とする専門分野の知識及び作業関係の知識を指す。スケール。1. 特別の知識を必要とせず、自分の仕事のやり方だけを知っておけばよい。2. 簡単な計算、図表、公式など必要とする。関連部所の仕事にも通じていなければならない。3. 中学卒程度の学力内容を完全に習得していなければならない。係又は課内の仕事の概略を知っていなければならない。4. 高校卒程度の学力内容又は簡単な専門知識又は全般的な職務知識を必要とする。5. 大学で習得するような専門分野に関する学理的知識を必要としている。(以下省略して要素名だけにする) 3. 経験・熟練 4. 訓練 5. 物的責任 6. 人的責任 7. 特殊責任 8. 体格 9. 体力 10. 耐久力 11. 器用さ 12. 協応力 13. 機能調節力 14. 目測 15. 知覚弁別力 16. 感覚の鋭さ 17. 平衡感覚 18. 一般知能 19. 抽象記憶 20. 具体記憶 21. 注意力 22. 表現力 23. 知的応用力 24. 情意特性 25. 人格特性 26. 作業場所 27. 作業条件 28. 非衛生性 29. 危険性 30. 人的環境 これらの要素はその内容から資格、責任、身体条件、感覚的努力、精神的努力、人格特性、環境条件にまとめられた。結果 これらについて 5 段階評定した 16 職種間の順位相関では、資格—責任—精神—人格が高く、身体—感覚—環境が密接で且つ前者とは一つの相関を得た。又前者は総点とも高い。一般に高度の職務を担当しているものは、前者の要素に関係しているのものでこの結果は妥当と云える。しかし総点において工作作業 (施盤工) が僅かながら工場長よりも高くなっているが、これは感覚的努力の要素が多いので、工作作業に有利であったからである。このように 5 段階法だけでは、要素の多少によって影響を受けるので、各要素間に重みづけをして、バランスを保たせることにした。



## 107 職務評価に関する研究 (II)

— 評定要素の重みづけの検討 —

立教大学 水口礼治 ○小水流勝行

本研究は職務評価の点数法に於ける評定要素の重みづけについての一考察である。最も適切と思われる④(注・後述)で、研究(I)に於ける職務の評定要素群を Weighting した。研究(I)に於ける5段階評価の順位相関と、④による評点化後の順位相関とを比較すると、殆んど一致している。しかしながら、Weighting 後の各職務の順位を見ると、その職務の重要性により近い順位の様に思える。そこで Weighting した方が良い様である。本研究では30要素について種々の Weighting をしたが、今迄この Weighting は研究者、企業によって一定していない。過去、平均して熟練(資格)約50%、努力(本研究では身体感覚・精神性格)15%、責任25%、環境10%の例がある。この様な過去の研究を考慮しつつ根源的立場で、次の4種の Weighting による総点を比較した。

④は前述の如く最も妥当な Weighting だと考えたものの、(すなわち、資格20%、責任15%、身体感覚25%、精神性格25%、環境15%) ⑤は資格を50%にしたもの、⑥は資格と身体感覚と精神性格を35%づつ、⑦は責任を30%に Weighting したものである。

この4種の Weighting による所要傾向を見ると、次の様な事が云える。①. Weights のかけ方如何を問わずその傾向は殆んど似ている。②. Weighting の差によって影響を受けるのは、5段階評価の高順位の職務で、低順位の職務(この場合は現場作業)は殆んど受けない。③. 各 Weighting による得点の特色は、④の場合、役は、事務系が高位に、現場工が下位に位置し、大体望ましい得点経過と云える。⑤の場合は役付、事務系が上昇する傾向にあるが、一般工は変らない。特に上層部になるに従って増加傾向が大きい。⑥の場合は前2者の中間を動揺しているが、職務順位に大きな変動は見られない。⑦の場合は役付、事務系は高くなるが、現場工は低くなる。しかし、体制の影響はあまり見られない。50%位に責任をしたらもっと役付、事務系と現場工の差がより明確に現れるだろう。

以上、職務評価の点数法に於ける Weighting の問題について述べて来たが、今後の課題として、①. Weighting 化する事は意義があるが、更にこれ以外の Weighting を検討すべきである。②. 段階評定(ここでは5段階評定)によりほぼ評価が決定されるのでこれは非常に重要である。③. 信頼度の高い check list を作成し、職務を分析評価しなければならない。

## 108 職場特性と適性 II

早大生産研究所 兼子 宙 ○田崎醇之助

昭和36年より、都内の百貨店における配置管理問題の研究を続けている。本年の日本心理学会では、このうち適性検査研究の一部を発表した。今回、適性検査による配置後の女子店員の反応につき報告する。適性配置をするために、まず、店内の各職場の特性を調べるため、その職場から抽出した女子店員に心理テストを行い、能力的素質の測面を分析し、同時に、職場管理者に対する職務調査を行なった。これによって、百貨店の複雑な職場を、売場を三つ、他に事務関係、レジスター係、送迎係(案内係)の6職種に分類した。この6職種のそれぞれに関して、最も必要とされる適性を考え、その能力ないし素質を調べるための検査を作成した。この検査は、知能、興味、審美感覚、動作、記憶力、ロール・プレイ(対人場面への適性)の6種である。新人店員は、教育実習期間中にこの6種のテストを受けた。各検査得点は、それぞれの職種との関連の強さによってウェイトをかけられ、配置選別カードに記入される。こうして、個人の6種の職場への総合得点が算出され、適性順位が決定される。こうして配置は、この適性順位を中心に行なわれた。本年度の配置が行なわれてから、約3ヶ月たつて、意見調査を行ない適性配置後の女子店員の反応を見た。この結果によると、配置に対し、著じるしい不満を示したのが、地階食品売場であった。しかし、この場合も、配置決定時の感情的不満が強く、その職場での人間関係、新しい仕事への意欲と云う点では好ましい結果を見せている。これは、適性による配置の一つの効果である。ただ、適性を考えた時に問題にした、6つの職場特性の他に、「きらわれる」「いやがられる」特性があることがわかった。これは一種の損得の意識の上に立てられた職場のランキングである。単なる希望とのずれより以上にきらいな所への配属は不満を生むものと考えられた。この点の解決が、今後の問題である。そこで、職務給制度を取入れ、希望の薄い職場の給与を厚くしてバランスを取ることや、始めから採用を分けることも考えたが、ともに現状では可能性が小さい。それより、適性配置と合せ、適切な異動方式を作り仕事のローテーションによって不満を解決する方策を取りたい。これによって、適性の問題を固定的に考えず、力動的に、職場の中で伸ばし得るようになると云う利点も生れて来る。

**目的** 監督者としての役割遂行と上役および部下による役割期待との間の不一致、ずれは、個人および集団に重要な影響を及ぼすものと考えられる。本研究においては、(1) 上役(係長)の期待と監督者の役割行動との間の懸隔が、人事考課評点や監督者の性格特性と関係があるかどうか。(2) 部下の期待と監督者の役割行動との間の懸隔が監督者の性格特性、年齢、監督経験、モラル、集団規模などと関係があるか、以上の諸点につき吟味する。

**方法** (1) L・T・S 質問紙を係長、部下に対しては役割期待に用い、さらに同紙を監督者(班長)に対しても役割行動記述用として使った。(2) YG 性格検査を監督者に実施。(3) NRK モラル調査。(4) 対象は、J社機械工場の班長10名、その直接の上役たる係長10名、各班長の直属部下計134名。

**結果及び考察** (1) 上役、部下共に民主的指導を期待し、監督者自身も民主的指導を遂行していると認知している。(2) 期待値と遂行値の懸隔値(民主得点について)は、上役一班長で1~9点に、部下一班長の場合にあっては0.5~8.7点にそれぞれ分布。(3) 懸隔値と諸変数との間で相関係数( $\rho$ )を算出した。その結果、有意な関係の認められたものを抽出すれば以下の如くである。i) 上役の期待と監督者の役割遂行の懸隔が大きくなるほど、性格特性において、主観的、衝動的、気分の変化が大となり、人事考課評点が良好となる傾向が認められる。ii) 部下の期待と監督者の役割遂行の懸隔が大きくなるほど、抑うつ性が大となり、非活動的となり、監督者の年齢も上昇する傾向が認められる。また、有意ではないが、モラルとは負相関、集団規模(部下数)とは正相関を示している。(4) 以上の結果から考察すると、監督者の性格、年齢が、監督者一部下の人間関係をかなり強く規定していることが推察されるが一方、部下数の多少が相互認知に関係しており、モラルにも影響を及ぼしていることが窺える。また、上役一監督者の関係において、人事考課評点の低いほど、上役の期待に一致した行動をとっていると、予想に反した事実の発見については、かれらが上役に ego-involved した結果または、誤った自己知覚に基因するものと思われる。

経営体における管理、監督者の選抜方法のうち、筆記テスト形式は、大要次のように分類ができる。

- (1) 管理に関するテスト
- (2) 主題に関するテスト
- (3) 知能に関するテスト
- (4) 特殊型式のテスト
- (5) 性格および興味テスト

以上の各テストの内容、効果を概説し、今回は(1)に分類される「管理監督者の判断力検査」について、その実施結果を考察する。

この検査を金融機関の係長クラス46名に実施し、態度調査との関係をみると、検査上位群では64%の者が会社に対して協調的であるが、下位群では71%の者が非協調的であった。

次に、意見調査との関係では、「職場の人たちがよく協力している」と思っている者は、73%が検査上位群であるが「協力していない」と思っている者は、90%が検査成績下位を示した。また、「自分が職場の人から信頼されている」と思っている者は、80%が検査上位群であるが、「一部の人から信頼されている」と思っている者は、100%が検査成績下位を示した。

また、保健婦長16名の実施結果と精神健康度調査との関係では、健康度「上」では75%のものが上位群であるが、健康度「下」では、わずか20%であった。

その他の基準として、部下職員を持っている者と持っていない者とを金融機関の係長クラスと比較すると、部下を持っている者は68%が平均点以上であるが、部下を持っていない者では43%が平均点以上であった。

また、大学卒と高専卒にわけると、大学卒では70%が平均点以上であるが、高専卒では54%であった。

しかし、この検査を人事管理上、使用するとすれば、管理監督者の判断力を実現させる情意的要素を総合した結果を用うべきである。

## 111 創造性に関する研究

—創造性を開発する研究管理—

東洋大学 恩田 彰

最近企業において新技術開発のため、開発研究のみならず、基礎研究にも力をいれ、独創的研究の開発に努力するようになった。研究者の任務は独創的な研究をすることである。そこでどのようにしたら研究者の創造性を開発し、または独創的研究を促進することができるであろうか。これらの問題を個人または集団としての研究者の側から研究することは可能であり、極めて重要なことと思われる。研究者の活動を分析すると、実質的な研究活動、研究に附随する活動ならびにその他の雑用がある。研究活動の生産性をあげるためには、研究者が研究にとって最も大切な仕事に全力を集中することができるようにすることが心要である。したがって研究本来の仕事以外は、すべて研究管理者の仕事にしていくのである。次にこの研究管理の仕事进行分析して、その一つ一つの仕事を専門化し、その仕事に最も関係のある人が専門家としてその仕事を担当する。しかしこのように仕事が細分化されると、それらの仕事を調整することが必要である。この点研究活動はチームワークによって成立することになる。現在新技術の開発研究は勿論、基礎研究においても単なる個人の能力だけでは困難になりつつある。そこで問題になるのは、どのような研究組織をつくるか、またどのような研究チームを編成するかである。そのためにはそのまとめ役としてどのようなリーダーをつけたらよいか問題になる。その場合リーダーは、次の二つのタイプにわけられる。原則として研究の指導は研究指導者が行い、研究の管理は研究管理者が行うのである。

次に研究管理に関する心理学的な問題として、次のような諸点が考えられる。(1) 研究者の採用方法を決定し、これを実施する。(2) 適性配置を検討する。(3) 適切な研究体制をつくる。(4) 研究環境を構成する。(5) 研究者のグルーピングの方法を検討する。(6) 科学研究についての心理学的研究を行う。(7) 研究者の教育訓練の方法を検討する。(8) 創造性開発訓練の方法を研究する。(9) 研究者の身心の健康管理をする。(10) カウンセリングを実施する。(11) 研究活動への動機づけの研究をする。(12) 研究ならびに研究者の評価法を研究する。(13) 適切なコミュニケーションの方法を検討する。(14) 研究活動の能率化をはかる。

## 112 管理職者と一般社員の職場意識の相違について

武蔵大学 渡辺 勉

**研究目標** 職場における管理職者と一般社員の間には、どの程度に(1)職場意識の高さや明瞭さの相違、(2)それらの相違の内容、(3)共通傾向、などが見られるか。

**研究方法** (1) 使用方法 質問紙法(五段階選択肢)

(2) 調査内容 I. 職務適応(一般適応感、社会的自覚、職務意欲)9項目、II. 経営管理(職務条件、職場配置、諸規定、交信、経営状態、上役の管理能力)20項目、III. 報償・厚生6項目、IV. 人間関係(職場、上役、同僚)4項目、V. 経営者8項目、以上合計46項目

(3) 調査対象 N社の一般管理職者(75名)一般社員(393名)計(468名)〔但し、全社員535名中、上層幹部社員と病欠者を除く〕

(4) 調査の日時・場所 昭和37年8月14日、AM 9.00~10.00、本社及び東・北・西部各地区各支社にて一斉実施。

**結果** 5段階の回答を+(4, 5段階)0(3段階)-(1, 2段階)の3段階に区分して整理。

(1) 一般に管理職者が一般社員よりも、職場意識が極めて高く、又明瞭であること。

(+, 又は、-の段階にて55~60%以上を示す項目数)

	管理職		一般社員	
	55-59%	60%以上	55-59%	60%以上
+段階	7	18	0	4
-段階	1	4	1	5

(0段階にて15%以下を示す項目数：但し上表と重なるものは除く)

管理職者(8) 一般社員(0)

(2) 職場意識の低い項目は、管理職者では、交信に関するものと退職金などであり(広い視野に立つた会社の経営に関するものや、自己の将来に関係するもの)、一般社員では給料に関するもの(個人的なもの)である。

(3) 両者に共通する傾向は、職務条件、職場配置、再教育の希望など、当社内において現在かなり客観的な事情に関するものに認められる。

### 113 等現間隔法による「資本主義」に対する態度測定 (I)

明治大学 ○松井 資夫  
人事院 寺井 俊健

**目的** 人間関係管理の道具の一つとして態度調査がよく行われているが、これらは、労務管理その他企業内の問題点に関する態度の調査であって、企業がよって立つ資本主義そのものに対する態度の測定は、諸外国においてもわが国においても余り行われていない。

この研究は人々の資本主義に対する態度、特にその規定要因を明らかにしようとした。

**態度尺度** 28項目からなる等現間隔法による態度尺度を構成した。

**調査対象** 14社39事業所の従業員(ホワイト・カラー、管理者を含む)約3500名

**測定の信頼性と妥当性** 折半法による信頼性係数は0.873、妥当性に関しては、被調査者の昭和35年度総選挙時の投票結果に基きこれを(イ)自民党投票グループ、(ロ)民社党投票グループ、(ハ)社会党投票グループに分け、各グループの資本主義に対する態度スコアの平均を比較した。結果は、自民党投票グループ、民社党投票グループ、社会党投票グループの順であきらかに資本主義に対する態度は好意的受容的であった。

### 114 等現間隔法による「資本主義」に対する態度測定 (II)

人事院 ○寺井 俊健  
明治大学 松井 資夫

[1] 600名のランダムサンプルについて、(1)世代別、(2)20代の大学卒と高校卒、(3)地位別、(4)30代の管理者と非管理者、(5)年間所得別、(6)生活水準別、(7)不動産の有無、(8)老後の見通し、(9)20代の既・未婚者、(10)20代の職務満足感、(11)10・20代男子の昇進可能性、(12)階層帰属意識、(13)会社の組合別、等に層化して態度スコアの分布および平均の差を求めた。その結果次のような諸点が統計的に実証できたと考えられる。

1. 学歴とは無関係に、20才代が資本主義に対して最も懐疑的である。
2. 年令を固定した場合、管理的地位にある者はそうでない者に比べ資本主義に対してより好意的である。
3. 経済生活における安定度が高いと思われる者ほど、資本主義に対してより受容的である。
4. 自分を「中流の下の階層」以下に属すると見る者と「中流の中」以上と見る者との間にははっきり有意な差がある。
5. 会社の組合が「総評系」・「中立系」の者と、「全労系」の者との間にははっきり有意な差がある。
6. 「職務満足感」も恐らく関係あると思われる。

[2] 因子分析。年令・性別・婚姻・扶養家族・学歴・地位・勤続年数・住居・生活水準・所得・不動産・動産・老後の生活・職務満足感・昇進可能性・会社の組合・組合役員の実験・組合会議出席・階層帰属意識・投票政党の各カテゴリーを、資本主義態度スコアに対してほぼ直線相関をもつように数量化してから、全体を重因子分析して6個の因子を抽出、13回の直交軸回転を行なって一応単純構造と思われる結果を得た。資本主義態度スコアの因子負荷量は因子 I : 0.670, 因子 II 0.380, 因子 III 0.100, 因子 IV~VI 各 0 で、二つの因子だけでほとんど説明できる。因子 I [基本態度] と因子 II [年令的影響] との分散比率は76% 対24%。この因子構成は妥当性基準とした「投票政党」の負荷量: 因子 I 0.600, 因子 II 0.290 と極めて類似している。次に各外的要件の因子 I の負荷量を見ると、「組合会議」0.280, 「職務満足」0.260, 「会社の組合」0.245, 「老後の生活」0.205, 「階層意識」0.175, 「地位」0.110 等のように若干の負荷量をもち、平均の差で得た結果を裏付けている。

## 115 日米労働者の態度の比較研究 (第1報告)

立教大学 安藤 瑞夫

この研究では、日米労働者の態度の差異に関する比較調査の結果が、次の3つの側面から論ぜられる。

- (a) 経営に対する労働者の態度
- (b) 労働組合運動に対する労働者の態度
- (c) 職場における不平の実態

比較資料の分析結果による主なる発見事実は、次の様に要約される。

- 1). 日本人労働者の経営に対する態度は、アメリカ人労働者のそれに較べて明らかに非好意的である。
- 2). 日本人労働者の労働組合運動に対する態度は、アメリカ人労働者のそれに較べて、肯定的・急進的である。
- 3). 上記の事実にも拘らず、日本人労働者の組織との一体感情は、アメリカ人労働者のそれよりも、操作的な手続を介して捉えられる限りにおいては、その強度が高い。

4). 上述の一見矛盾とみられる事態から、日本人労働者の意識構造の重疊的特質を推定することができる。

この特徴的な事実を背景的に規定している社会的風土として、日本の労使関係に介在する諸条件を吟味する必要がある。例えば、企業別労働組合の特質、戦後の新たな価値体系の生起と戦前のその崩壊過程、種々の局面において存在する社会的階層とその断層などがこれである。

これらの諸条件と労働者の態度との機能的諸関係を明らかにするための新たな研究課題と適切なる作業仮説の設定が期待される。

## 116 企業体に関する心理学的研究 第4報

秋山精鋼株式会社 ○勝 倉 信 雄  
日 本 大 学 浅 井 正 昭

われわれは前回 S. D. 法 (セマンティック・ディファレンシャル法) により、企業体の各部・課に所属するひとびとが、それぞれ他の部・課をどのように認知しているかを測定、各部間の認知構造の差異を考察した。

今回は因子総合点とモラール サヴェイとの関係について報告する。

従業員数 250 名の中小企業某メーカーのうち生産担当者として生産部 25 名、営業担当者として 26 名、それぞれ勤続 10 年前後、年齢 25 才~29 才、班長、係長のものうちから抽出、2 群を構成し、調査対象とした。

使用した S. D. 尺度は、前回に報告したものと同一、各因子毎 5 尺度、計 15 尺度を使用した。

コンセプトは次のとおりである。

「自社」「給与」「組織」「義務」「命令」「人間関係」

調査方法は次のとおり。生産部および本社の 2 群に上述のコンセプトを S. D. 尺度上に評定させ、あわせて NRK 従業員態度調査を実施した。S. D. 法は E. P. A 別に因子総合点を算出。モラール サーベイ項目中 S. D. 法のコンセプトに対応する項目を次のように選出した。自社—会社との一対感、給与—給与、組織—地位の安定、および満足感、命令—上役幹部の行なう管理、義務—仕事の負担、人間関係—同僚、上役、幹部との関係。

S. D. 法におけるコンセプト別因子総合点とモラール サーヴェイの対応する項目には全般的に次のような傾向が認められた。

すなわち給料を除いた全コンセプトについて、生産部の因子総合点は、全て+の方向を示しており、本社は-の方向を示している。

またモラール サーヴェイの項目得点についても生産部は、本社に比べて高い数値を示している。

差の有為性についての検定は行なっていないが、因子総合点とそれに対応するモラール サーヴェイ得点との間にはかなり高い関係が認められるように思われる。われわれはコンセプトをよりいっそう慎重に吟味検討し、少ない時間と労力で、しかも従来のモラール サーヴェイのように価値判断が介入することなしに、モラールの水準を測定する方法の研究を継続している。

## 117 企業体に関する心理学的研究 第5報

日本大学 ○浅井正昭  
秋山精鋼株式会社 勝倉信雄

**目的** 企業体内の部課間相互の認知構造の差異を測定する方法の1つとして、S. D. 法の有効性を検討する。

**対象** 第4報と同じ。

**方法** 生産担当者群およびセールス担当者の2群に、第4報と同じS. D. 尺度を用い、組織内の主要な部および課を評定させる。

(管理部、営業部、総務部、生産部、資材課) 2群とも、各コンセプトについて、因子総合点を算出し、E. P. A. のそれぞれの次元上に、部、課をプロットする。さらに、各部課間の認知の類似度に対応するものとしてD値を次式により算出、立体模型を作成、生産担当者群、セールス担当者群の各部、課に対する認知構造の全般的差異を考究する。

$$D_{il} = \sqrt{\sum_j d_{ij}^2}$$

$D_{il}$  は意味空間における部*i*と部*l*との直線的距離。 $d_{il}$  は部*i*と部*l*との間の各因子総合点の差。

**結果の考察** E. P. A. 因子の各軸について、各部・課をプロットすると、生産担当群は、E. P. A. の+の空間へまとまり良く集合し、セールス担当群は主としてE. P. A. の-および+の空間へ離散する。かようなまとまりの良さは、第4報ですでに報告したようにモラル水準と関係があるものと思われる。次に各因子総合点をもとにして、 $D_{il}$  を算出“仮りのZero点”をあわせて設定し2群の比較の基準点とした。 $D_{il}$  に適当な単位を定め、各部・課の認知構造を表わす立体模型を作成した。立体模型についてみると、生産担当群は各部・課間の距離は短かく、かなりコンパクトに結合している。セールス担当群は反対に各部・課間の距離が長く、各部・課は散在的な結合を示している。

また各部・課間の親近性について見ても2群の間にはかなりの差が認められる。これらの差異については、他のいろいろな指標との関係を追求することにより、現在検討中である。

この方法によれば、従来のソシオメトリなどとは異なる次元から、集団間の相互認知構造を分析するてがかりが得られると思われる。

## 118 広告に対する態度調査

### (1) 問題および目的

博報堂 ○松岡洋一郎 小熊多恵子  
" 志津野知文

### 調査の問題点

増大する広告費の効果的な管理運用のために、消費者が企業の広告活動を受容する態度を明らかにする。

### 調査の目的

(1) 広告受容の諸次元として、広告に対する一般的な態度、広告の感情的な受容度、広告に対する漠としたイメージ、広告諸機能に対する評価、などを考え、これらが、消費者の社会的要因、特に、性、年齢、職業によりどのように決定されるかをみる。

(2) 前述の諸次元相互の関連を明らかにする。

### 調査の方法

#### (1) 概要

東京都23区内に居住する個人を対象とし、昭和37年3月、7日間にわたり、標本1347名(有効回答数980名)について、質問紙による面接聴取法で実施された。

(2) 調査対象の割付け(外部変数の統制)性(2水準)年齢(4水準)職業(3水準)の3要因で24の調査対象グループを作り、各グループ内の対象数がほぼ同数となるようにした。調査対象は昭和36年4月～5月に博報堂調査局が東京都23区内で実施したマスターサンプル調査の対象中より選んだ。

#### (3) 調査の項目

広告のもつ内部変数として次の項目を考えた。

##### イ) 広告に対する一般的態度変数

広告に対する態度をあらゆる考えられる数項目の意見を作り、各意見についての賛成、反対の程度を求める。通常のリッカートスケールを用いた。

##### ロ) 広告刺激に対する感情反応変数

広告に接した場合に生じると予想される感情語を呈示し、体験頻度を測定することで求めた。印刷広告、電波広告について求めた。

##### ハ) 広告に対する漠としたイメージ

「広告」「宣伝」等の言葉からの連想内容を測定した。

##### ニ) 広告の機能に対する評価変数

告知、美的、経済的等の諸機能を示す意見を作り、各意見に対する体験頻度を求めて推定した。

## 119 広告に対する態度調査

### (2) 結果の処理および結果の説明

博報堂 ○小 熊 多恵子

〃 志津野 知 文

〃 松 岡 洋一郎

**結果の処理** まず分散分析によって三要因の各変数に働く強さを測定し、因子分析によって得られた変数相互の関係を検出する。反応の変量化は次のような手続きで行われる。(1) 広告に対する態度は、通常のリッカートスケールの方法により得点化される。(2) 広告に対する感情価は、快、不快および快マイナス不快と、電波広告および印刷広告の計6つに分類され、それに応じた変量が系列総平均法の一般的な手法によって得られ、Zスコアで示される。(3) 広告の機能に対する評価は、5つの評価次元が選定され、それぞれの評価の体験度をあらわすスケールによって前記と同様Zスコアが得られ、さらにそれらの得点の平均値として、広告の機能に対する評価平均が算出される。以上13の変数は個人別に算出され、個人の得点として記録される。他に広告に対する感じは「広告」「宣伝」の刺激語によって惹起される反応語を、許容、拒否、中性、無反応の4カテゴリーに分類されて処理される。

**結果** (1) 三要因(性、年齢、職業)と個々の変数との関係

イ) 広告に対する態度 当変数については三要因の効果はみとめられない。

ロ) 広告刺激に対する感情価 電波広告に対する快感情反応に性要因の効果のみとめられる。すなわち女性の方が快の度合が高く、この傾向は特に事務職世帯に強い。また電波広告に対する不快感情については上記の逆がうかがえる。その他職業要因(事務職で高い)、年齢要因(年齢が低いほど高い)の単独効果もある。印刷広告に対しては、快感情反応で年齢要因が効果を示し、(年齢が高くなるにつれてその程度も高くなる)他の効果はみとめられない。

ハ) 広告の機能に対する評価 ここでは二例のみが有意差を示した。広告の告知的機能(速さ)については、年齢×性の交互作用が効果する。(20代では女性の方が男性より高く30代以上はその逆)また経済的機能に対しては、男性より女性の方が大で、「広告があるから商品の値段が高い」という意見に同意するものが男性に多いことを示している。

ニ) 広告に対する感じ ここでは余り三要因は効果せず、「広告」に対して拒否的反応が女性より男性に多く、また「宣伝」に対して拒否的反応が事務職に多くなっている程度である。

## 120 広告に対する態度調査

### (3) まとめ

博報堂 ○志津野知文 小熊多恵子

〃 松岡洋一郎

以上広告の態度に関係あると思われる変数と、性、職業、年齢の3要因との関係が分析されたが、ついで、得られた変数間の関係を吟味すべく因子分析が行われた。第一因子として広告に対する態度、特に許容一拒否の態度、第二因子として広告の実利的機能に関する評価判断、第三因子として広告刺激に対する情動的反応が、それぞれ仮定された。この結果は我々の先の、態度、判断、感情の三つの機能の分類を裏付けしているように思われるが、態度スケールの一次元性および快一不快感情の一次元性には問題があったことが明らかにされた。

以上の結果から、概して男性よりは女性、事務職よりは他の職業、20代よりはそれ以上の年代のものが、比較的広告に対して許容的であるということが明らかになった。これはおそらくホワイトカラーに特徴的な半ば合理的な、半ば感情的なある種の抵抗性とか、現行CMの知的レベルの低さというものに関係があるのではないかということが想定された。また、部分的に、若い世代は広告を前向きに受けとり、また、若い世代の主婦は広告を能動的に受けとっているというようなことを暗示するような傾向がうかがわれた。また、広告があるから物の値段が高くなるのだという見方が男性に極めて高いという興味ある事実がみられた。

## 121 テレビ広告効果の測定 (I)

博報堂 金子泰雄 ○小館和夫 長妻隆夫

1) 広告効果測定の基準——広告効果とは、広告の目的乃至機能に対応して測定されてこそ意味がある。そこで視聴者が最終的に購買行為に至る以前に、広告の目的(機能)に基づく、いくつかの心理的な効果のレベルが予想される。すなわち、広告刺激とその反応の過程として、(1)到達(視聴・注目) Attention→(2)興味(印象) Interest→(3)欲求(関心) Desire→(4)記憶(知名)、確信 Memory or Confidence→(5)購買(選択) 行為 Action などの各レベルが考えられる。但し、ある広告刺激が、購買行為に、どのように作用し、又その間の因果関係がどのようなものであるかを解明するという事は、ここでいう広告効果測定の基準として含まれないことを付言する。

2) 広告効果の「量」と「質」——放送の効果といえ、そこに「どのくらい多くの人々に視聴されたか」という量的要素と同時に、「どんな印象を、どのくらい強く与えたか」という質的要素が考えられる。つまり、広告効果とは、ある広告刺激のもたらす量(拡がり)と質(インパクトの強さ)との積によって規定されるわけである。

3) テレビ広告の特殊性——テレビ媒体(広告)に対する特殊性は、いろいろと考えられるが、ここでは、商業テレビが、(1)視聴者と(2)番組と(3)製品(CM)の三者の一体となったものであること、つまり、テレビ広告は、三位一体となっている三つの要素全部の相互関係として考察されねばならないことを指摘したい。

### 4) 博報堂テレビスポンサー・レイティング調査

i) 調査目的——番組・視聴者・CMという三者の相互関係に於るテレビ広告効果測定上の基本的指標を、特に記憶のレベル、スポンサー、レイティング、知名率の見地から、比較検討し、各指標—①番組視聴率、②番組嗜好度、③CM印象内容及びCM受入態度、④番組イメージ—の間の相関関係を解明すること。

### ii) 調査方法——

イ) 地域：東京都区部(大阪市)

ロ) 対象：テレビ所有世帯の満10才以上の男女(個人)、各1,750 合計3,500名

ハ) 抽出法：副次無作為抽出法(地点、セレクションテーブル)

ニ) 実施時期：昭和37年3月10日～26日

ヘ) 調査方式：調査員による面接聴取法

ト) 実施機関：(株)博報堂調査局広告調査部

## 122 テレビ広告効果の測定 (II)

博報堂 小館和夫 ○金子泰雄 長妻隆夫

博報堂スポンサー・レイティング調査では、テレビ広告の目的及び機能に基づくいくつかの心理的効果のレベルを想定し次のような基本的指標を求める。①視聴習慣率(番組視聴頻度より算出) ②番組嗜好度、③スポンサー知名率(番組視聴者中の提供社又は広告商品を正しく記憶想起した者の割合)、④スポンサー・レイティング(提供社又は商品名を正解した者を総サンプル数で除したものの) ⑤番組イメージ、以上の如き基本的指標の他に固定視聴習慣率、Share of Regular. CM受入態度、CM想起場面等を合わせ測定している。以上の諸指標を調査対象者の特性別に分析してテレビ広告効果を把握診断しようとするものであるが、各指標間の相関関係が問題となる。'62年度博報堂スポンサー・レイティング調査で視聴習慣率ベスト20に入った番組について、各指標間の順位相関係数を算出すると、視聴習慣率と番組嗜好度の間では0.78であり高い相関関係がみられ、視聴者の多い番組は是非視たいという人の率も高いと云える。視聴習慣率とスポンサー知名率では0.28で有意な差があるとは認められず、視聴率が高ければそれだけその番組の提供社(商品)名の正解率も高いとは云い切れない。番組嗜好度とスポンサー知名率の相関度は0.34で、嗜好者が多くても提供社(商品)名を正しく記憶想起する人が多いとは限らない。

このような現象は、テレビが一家に一台という現状での視聴態度より起因するものと考えられる。CM受入許容度を高めるために番組自体が視聴者にどのように受入れられているかの実態を探る必要がある。'62年度調査ではシート法により55ケの形容詞提示による選択法を用い、各形容詞の出現頻度の総数を100とし、それぞれの形容詞の出現率と累積度数分布より各番組のイメージ構造分析を行ない、番組企画制作並びにCM手法の上で実践的に役立てている。

テレビ広告効果は、視聴率という量的指標の他に、質的な指標(番組嗜好度、スポンサー、レイティング・スポンサー知名率、番組イメージ等)の二つの評価次元から統合的に考慮する必要がある、今後の課題として、マスコミの受手である消費者層へのアプローチ、即ち市場調査との有機的結合こそ、真の意味でのテレビ広告効果を究明する方向であると考えられる。



## 123 ステレオスコープの社標テストへの利用について

博報堂 町田 忠 悠

**目的** 従来純粋に実験心理的研究に使われていたステレオスコープを、タキストスコープとは異った応用的側面を捕えるために使うことが最近行なわれはじめた。その主な用途はマークコピーの選定である。応用分野の従来の業跡基礎的研究業跡とちがい、極めて例に乏しいが、最近京都大学を中心として、電気メーカーのマークテストが行われ、S・N 両図形間に視野斗争場面に於て知覚的持続性の差(累積反応時間差)は見られないと結論されている。この様にマークという複雑な構成要素で成立している図形では、有意差が見られないこともあり、また視野斗争が殆んど起らないことも想定される。従って現実場面でマーク選定をするような場合には、左程厳密な水準で帰無仮説を棄却出来なくても充分応用出来るということを前提としておこう。応用場面(社標テストに関する)第一実験 社標テストに於て試作図形(2)、現行マーク(1)、統制刺激図形(1)計四種の実験用マークを使用して実験を行なったところ、刺激対間に利目×刺激、利目×位置、刺激×位置等に、何等の交互作用はみられず、僅かにD-E対間に利目。C-D対間に位置の効果がそれぞれ5%水準で有意であった。前者は被験者中に左右一方の被験者が多く、後者は利目以外の位置効果に及ぼす要因が介入したものと考えられる。次に図形要因を中心に第一次分散分析のマトリックス内細胞の平均値を代表値として、各刺激図形対間の図形・位置にかんする分散分析を行なったところ0.25で有意差は見られなかった。ただE図形のみが、タキストの結果との比較に於て極立った差が見られた。一般に図形強度は Koffkaによれば図地間の明度差図形の密度差輪郭の連続性などであるが、Eと他の図形と最も異っている点、図形密度について $T_1$ 、 $T_2$ (正方形)図形対を用いてその差をみると、予想に反して密度の高い $T_1$ よりも輪郭だけの $T_2$ の方が累積反応時間平均値が高く[(1.5秒)対(21.3秒)危険率1%]他の要因には差がなかった。

AlexanderはKöhlerから引用して、「反応頻度の高い刺激は強度が高い」と述べている。そこで dominance と反応頻数という全く異なった関係について表を作ってみた結果、反応時間 $t$ と頻数 $n$ の間に整一な関係は見られず、黒塗りの図形が反応時間に於てグループを逸脱する傾向が見られた。

このように図形強度の定義一つをとってみても dominance と頻度という二つの側面が考えられ、我々が予想した結果とは一義的に等しい結果を見られるとは限らない事が理解される。

## 124 視野交替法による疲労測定を試み

日本大学 ○岡本 健  
東京教育大学 小保内 虎 夫  
日本大学 山岡 淳  
白梅学園短期大学 大川 雅 司

### 問題

疲労の原因としては種々の仮説が提出されているが、精神疲労であれ身体疲労であれ中枢神経系の関与するところが大きいといわれている。一方、視野交替の現象についても数多くの説明がなされているが、この現象を中枢神経系における交互禁止として説明しようとする説が有力である。小保内・篠原はすでに1942年に、視野交替の現象を疲労測定に適用することの可能性を示唆しているが、今回この可能性を再確認し、今後の研究の指針とするための基礎実験をおこなったので報告する。

### 実験方法

刺激図形としては①直径2cmの円の中心に長さ2mmの縦線と横線とを描いたもの ②同上図形に凝視点をつけたもの ③方3cmの正方形(青・黄) ④同上(赤・緑)を用い、実体鏡を通じて3分間覗かせ、始業前(9時頃)ならびに終業後(21時頃)の2回、交替の頻数とフリッカー値の測定をおこなった。

### 被験者

過激なる計算事務に従事する男子事務職員6名(年令は23才~45才)。

### 結果

全被験者、全図形を通じて始業前と終業後の交替頻数を比較してみると、終業後の測定において交替頻数の減少したものの67%、増加したものが33%であった。また線図形においては75%が減少をみせているのにたいして、色図形においては42%しか減少をみせていない。個々の被験者についてみると、交替頻数の減少の割合はフリッカー値のそれとかなりより対応しており、また高令者ほど減少の割合が著しい。以上のことから視野交替の頻数の減少と疲労との間にはある程度の関連があるのではないかということが推定される。今後、図形ならびに観察時間などを改善して検討を加えたい。

## 125 各種作業による疲労測定値 (F. F.) の比較研究 (1)

新潟県立教育所教育相談室 畔上久雄

**目的** 男子重労働, 女子軽労働, 男女大学生精神作業に現われた疲労測定値を比較研究して, 疲労概念を考察する。

**方法** 被験者は, 男子鉄工所では, 塗工, 組立工, 火造工, 機械工の4種で, 20才 30才 40才各々2名づつで, 測定期間は, 昭和30年7.8月。女子ミシン部部分品工場では, 旋盤工, フライス工, 組立工, 研磨工の4種で, 未熟, 半熟, 熟練各々2名づつで, 測定期間は, 昭和36年8月。男子大学生は5名, 女子大学生は2名で, 測定期間は, 昭和36年9月である。測定器具はフリッカーで区点換算方式による。

**結果考察** 遂時変化では, 男子重労働は, 朝昼夕と漸次疲労度を増してくるが, 女子軽労働は, 朝最も疲労し, 昼は快調の頂上, 午後から夕にかけて疲労してくるが, 朝ほどでない。男子大学生は朝最も疲労し, 昼まで可なり回復してくるし, 午後もゆるやかであるが, 回復の一路を辿り, 夕が最も快調である。女子大学生は朝やや快調の傾向はあるが, 朝昼夕に有意の差はない。

以上男子の重労働の場合は, 従来の疲労の通念「作業は疲労を伴う」にあてはまるが, 女子の軽労働の場合はあてはまらない。女子工員の家庭生活は, 朝晩の料理, 掃除, 洗濯, 使い歩き, おしゃべりなどで, いこいの場となり得ないで, むしろ中労働となるのでなかろうか。それが作業開始と同時に自分のリズムにのって, 同僚と共同作業することによって, 却って疲労が回復してくる。午後になってようやく作業による疲労がでてくる。それが男子大学生になると, 朝昼夕と漸次疲労が回復して, 夕が最高に達する。しかし女子大学生は朝昼夕とも有意の差はなく平坦である。このことから「快い作業は却って疲労を回復する」といえそうである。男女, 年齢, 作業別により自然と生活様式ができて, 心身の機能が遂時的に変化が現われるのかも知れない。今後の問題である。逐日変化では, 男子重労働は, 月が最も疲労少なく土が最も多い。女子軽労働は月火水と漸次快調となり, 木金土と疲労してくる。これは遂時の昼と逐日の水, すなわち作業の中間に快調となる点は同じで, これを山型曲線といわれよう。男女大学生は, むしろ女子の軽労働に近く, 遂時の場合とはやや異なるようである。ここでも疲労か機能かの問題がおきてくる。

## 126 反応時間と試行間隔

大阪府立公衆衛生研究所 石橋富和

**目的** 単純反応時間は試行(刺激)間隔が大きくなるとともに増大する。これは刺激出現を予期する時間的不確かさ time uncertainty が増大して, 反応に対する readiness を最適状態に保持しにくくなるためとされている。そこで刺激間隔を従来の研究よりも更に大きくした場合, 単純反応時間がどのように変化するかを検討する。

**方法** i) 被験者 成人男子 10名

ii) 装置 竹井器機製の連続刺激発生器にて一定間隔で送られた刺激(ネオン管の点灯)に対してなされる反応(キー押し)時間をデカトロン・カウンターにて測定した。

iii) 条件 刺激間隔は, 10, 20, 30, 40, 60秒の5条件, それに10秒の試行間隔で刺激の1秒前に「用意」の合図が与えられるもの(仮に0秒間隔と呼ぶ)を入れて全部で6条件あつた。これらの条件を無作為の順で, それぞれ20試行づつ測定した。以上の操作を, 1日1回, 3日に分けて3回行った。

iv) スコアリング 各条件の初めの5試行を練習とし, 残りの15試行を平均し, この3つの平均を平均して各個人についての各条件のスコアとした。

**結果** 0, 10, 20, 30, 40, 60秒の各刺激間隔の平均反応時間は, それぞれ, 168.4, 189.3, 204.4, 221.1, 236.2, 261.5 (単位は msec.) と, 刺激間隔が大きくなるとともに増大している。この傾向は F で 1% 以下の有意水準であつたので, マクネマー・リンクイスト法によりもでテストすると, 0秒条件は 20, 30, 40, 60秒条件との間に, 10秒条件は 40, 60秒条件との間に, 20及び30秒条件は 60秒条件との間に, それぞれ有意差があつた ( $P < .01$ ), 又各条件の標準偏差も刺激間隔が大きくなれば増大する傾向を示した。

## 127 刺戟と反応の対応と複雑反応時間

大阪府立公衆衛生研究所 大谷 璋

**目的** 従来複雑反応時間は選択刺戟数が多くなると増加すると考えられて居た。しかし筆者は眼球の反応時間においては選択刺戟数に応じて反応時間が増加しない事を見出した。この原因は刺戟が与えられる場所と反応すべき場所が密接に一致して居るものによるものと考え次の実験を行った。

**手続** 刺戟—反応の場所が一致して居る事態として指先に触刺戟をあてえその指で電鍵を押させた。これを触刺戟事態とする。これと対称させる為指に近接したネオン管による視覚刺戟による反応を近視覚事態、視覚刺戟を4m先にはなした場合は遠視覚事態とした。選択刺戟数は1, 2, 4, 及び8の4条件とした。従って反応は1本ないし8本の特定の指によって行われた。複雑反応条件では勿論呈示順は無作為にされた。被験者は12名、年齢は20~30才であった。反応時間はデカトロン計測装置によった。

**結果** 触覚事態の場合は1, 2, 4, 8点それぞれの条件毎に左中指による反応時間は191, 256, 282, 268 msec. であった。近視覚事態ではそれぞれ225, 292, 373, 449 msec. 遠視覚事態では233, 334, 448, 536 msec. であった。分散分析による結果は各刺戟事態間、選択刺戟数条件間、被験者間に1%以上の有意差が見られた。又刺戟事態×選択刺戟数条件の交互作用も1%水準で有意であった。これによると刺戟と反応の対応が疎と考えられる遠視覚事態では選択数の増加にともない反応時間の増大が見られた。又近視覚事態でもそれが認められた。しかし刺戟—反応の場所が一致して居る触覚事態では1点条件と他は反応時間に差があるが刺戟数の増加に対して反応時間の増加が見られなかった。又触覚反応は視覚反応よりも反応時間が少であった。指による反応時間は一般に薬指が大であり、それに次で中指、小であったものは人差指、小指であった。

**結論** 以上の如く刺戟と反応の対応の差によって複雑反応時間が選択刺戟数の函数になるかならないかが決定される。この対応の度合は学習の程度にも左右されるものと思える。緊急の場合に人間が直ちに選択的に反応しなければならない時、手足等に対する振動等の触刺戟の様な求心、遠心両路が同様な緊急信号を送れば人間工学的な効果があると思われる。

## 128 思考と動作の干渉に関する実験

労働科学研究所 秋庭 信夫

**目的** 産業災害において、作業中に考へ事をしていた為動作に正確性を欠いて事故引き起こすということがしばしば見られ、これについて狩野によって動作に正確性がなくなることが確かめられている。又前実験において、自転車エルゴメーターを用いて暗算と動作 Tempo について行ない、暗算と Tempo 共に作業負荷の軽重によってそれぞれに影響のあることがみられた。これについて更に身体の一部に負荷を荷した場合に筋力への様な影響があるかを見ようとした。

**方法** 万能型脳波計を用いて、右上腕、2頭膊筋、3頭膊筋とに表面電極を着け、筋力を比較した。又作業負荷はモツレーのエルゴメーターを改良し、右腕手首に負荷を課し、1, 2, 3, 4, 5kgの錘りを2秒に1回引き上げさせた。又思考課題は2桁と1桁の掛算を暗算を行なわせた。これは15秒毎に提示され、応答がこれ以内で行なへない場合は打ち切り次の問題を行なわせた。手続きは、電極装置後、シールドルーム内の椅子に座らせ、手首にバンドをかけ、これに所定の負荷をかける。そして、メトロノームの1秒の拍節に合せて腕を屈伸する。

開始後40—50秒後に第1問が提示され Tempo を崩さない様にして暗算を行なわせる。1つの作業負荷について5~7問を行なう。3~4分の休憩後次の負荷を行なった。Ss は2名の男子である。

**結果** 結果は Tempo の変化と、筋力として腕を伸ばす時の最大振巾をもって比較した。Tempo については S.A は影響をうける場合は一定していないが S.B は、思考時に Tempo が早まる傾向がみられた。これに対応する筋力の変化は、S.A は伸筋側は4kg迄は暗算課題によって影響をうけて筋力は弱められるが屈筋側はあまり変化はない。S.B は逆に伸筋側には影響はみられないが屈筋側が大きく変動し、主として Tempo の調節が屈筋側にて行なわれていることが見られ、この Tempo の崩れは思考によって筋力の調節がみだされることから生ずることがみられた。

## 129 キイ・パンチ作業の研究

労働科学研 ○石原康久  
" 狩野広之

キイ・パンチ作業の広義の労働負担については最近何度か一般の話題となった。私共はかねてからこの問題を採上げ、事例研究に基く検討の結果を、日本心理学会 23 回大会、日本社会心理学会 3 回大会に報告した。これらを含む研究報告に明らかなように、この作業の負担の軽減が作業時間の至適な長さを求める事のみによって可能でないことは勿論であるが、しかしまたこの作業の特徴の故に、当該事例において作業密度が極めて高い場合には、一連続作業の長さ等が負担の軽減の重要な要因の一つである事も事実である。今回はキイ・パンチ作業で採上げられる幾つかの問題の中、キイ・パンチ一連続作業の至適な長さについて、手元の資料を取りまとめ報告する。

**判定方法** 詳細な作業時間調査の結果及び c. f. f. 変動率によった。この作業の特徴にてらし且つ例数が集められた事故に、機能検査として c. f. f. を採ったが、さらに選択反応時間検査や自律神経系の機能検査その他の結果によってこれを補うべきである事は言うまでもない。判定に際しては、作業員自身の意見も十分に考慮した。c. f. f. 判定は狩野の -4%Q-1 法に依った。<労働科学 36 (5), 36 (11)>

**結果** 1958 年事例研究での実験的調査結果は実働率 99~100% 穿孔作業率 92~95% で 75 分正味穿孔は c. f. f. 基準外頻度 30.4%, 45 分正味穿孔は 20.8%, 15 分正味で 0% であった。

1962 年事例研究での実験的調査はスペル長 75 分, 60 分, 45 分, 30 分の 4 系列を実施。この結果は、実働率はスペル長が長くなるにつれて低くなる。穿孔作業率の推移も同様。穿孔附帯率には余り差異なく、カード運びの離席率は 75 分の場合が一般に多く、また各系列共夕刻のスペルにおいて特に多いことが顕著であった。本事例の実働率は 88~100% 穿孔作業率は 77~92% でこれに対する c. f. f. は 75 分の基準外頻度 22.2%, 60 分以下は 4~13% であった。

また本事例と同一対象者に実施した実態調査結果は実働率 77~91% 穿孔作業率 55~74% で 70, 80 分の場合 c. f. f. 基準外頻度は 20% 以上, 50, 60 分の場合は 12% 以下であった。

**小括** 上の結果から c. f. f. からみたキイ・パンチ一連続作業の至適な長さは、実働率 85% 以上または穿孔作業率 65% 程度以上のとき 60 分以内であって、70~75 分以上の作業継続は逐時逐目的疲労の累増という点から好ましくないといえよう。

## 130 ベルト作業者の疲労

慶応義塾大学 横山松三郎  
" ○金子秀彬

**目的** 流れ作業の作業者に及ぼす心理的負荷影響を究明するために行なったものである。

**方法** 質問紙法による調査と疲労徴候測定のための機能検査を用いたが、前者は担務作業についての意見調査、生活時間調査、疲労自覚症調査で、後者はフリッカー検査、近点距離検査、脉搏、呼吸記録である。質問紙調査に関しては、196 名を対象とし、機能検査は作業開始前、作業終了後とその間の休憩時に実施し、呼吸、脉搏は全作業時を連続記録した。

**結果** 現場作業員についての調査結果にもとづき、その問題点を更に実験室的研究によって検討し、次の結論に到達した。

1. ベルト作業の影響は身体的でなく心理的情緒的である。第 1 には、作業の細分化が単調感を増大し、担務作業内容と熟練を必要としないものとしたことから、作業者の技能に対する自信を喪失せしめ、作業システムにおいて必要な人間としての認知を否定し労働における安定感を低下せしめた。第 2 は、作業員は作業速度を機械によって強制され、また作業の監督を機械から受ける状態におかれ、人間関係の稀薄化が労働における安定感を低下せしめている。第 3 は作業内容における無意味性が作業者の基本的欲求に逆行する結果として作業に対する満足感を失わせ、これが疲労感を増大せしめている。

2. 心理的疲労は肉体的疲労と全くちがった性質がある。前者は影響の持続が大であり、他の生活感情と結びつくことが多いが個人差が大である。

**結論** 調査の諸結果を総合し、ベルト作業における問題点の解決を考えたものは次の如くである。

1. 単調性に対する適性、ベルト作業の従事員には、作業に満足している者と極度に不満を抱く者とがあり、個人差の開きの多いことが示されているのであるが、これからすると、単調作業に対する耐性、あるいは適応性としての適性が問題解決の一つに考えられる。

2. 技術革新に対しては、技術の革新に相応した生活構造がなければならない。

3. ベルト作業では、相互のコミュニケーションが必然的にすくなくなるためその場と機会を作ることが必要である。

4. 将来に対する希望と期待が持てないということも不満感情発展の大きな要件であることに注目しなければならない。

## 131 ベルトコンベヤ作業の実験的研究—第2報

労働科学研究所 狩野 広之

日本心理学会 26 回大会で、森清によって報告された研究の第2報である。今回の実験のうち error について述べる。

本報告における主なるテーマは、ベルトコンベヤ作業における一連続作業時間を、どうしてきめるかということである。科学的には困難な問題であるが、実際上の要請はかなり多い。

一連続作業時間を決める考へ方としては、

1. 精神機能水準の低下を手掛りとする。
2. Output, error 等の Output data の変化を手がかりとする。
3. Performance を見る。心理学的に種々な Index が考えられる。

**実験** 実験用ベルトコンベヤ (TC式7.000mm×350mm×2p) 2台を用いて、Sub. 女5名、男4名について実験した。作業は図形の模写作業で、方眼紙に単純な市松模様を描いたものを見ながら、同様な図形を、フイードされる方眼紙に模写する作業である。方眼紙のフイード間隔は、10秒、30秒、60秒の三種として、Sub. は、その時間内に、できるだけ多くの 2.5 mm の正方形をかく。一連続作業時間は30分、60分、90分の三種とし、15分毎に C. F. F. をとつた。又各単位動作（正方形一個をかく時間、ベルトから、材料を取上げ、又はベルトへ材料をかへす時間等）を記録した。その他、呼吸、心搏数、G. S. R. などを記録。

**結果** (イ) 時間の経過と共に error は増加する。

(ロ) error のうち、作業の始め頃見られるのは、Perceptual な error ともいふべきもので、Sub が、対象を知覚的に充分把握していないためにおこるものと考えられる。(ハ) 作業の後期に現われる error は Sub が仕事に馴れ、作業対象にも馴れて慣熟して了った結果、対象をよく見ないで動作をするためと思われるので、これは Behavioristic error と考えられる。

## 132 機械記号認識の研究

### (1) 研究の現況

東京教育大学 小保内虎夫 ○今井秀雄  
" 松田隆夫 尾関育三  
電気通信研究所 関口 茂

[内外の研究状況]

近時、電子計算機の発達に伴い、機械記号認識—文字の自動識別装置—の研究が盛んになった。識別に用いる情報要素の型から諸研究を分類すると次のようになる。

- (1) 文字の形・面積の一致度
- (2) 自己相関々数
- (3) 文字を作る線の直線近似とその配置
- (4) 曲線の情報、特異点の存在
- (5) Configurational 又は topological な情報
- (6) 神経系のモデル
- (7) 心理実験から得られる情報
- (8) 文字に制限を加えるもの
- (9) Fourier 解析によるもの

しかし、人間動作の Simulation の研究でありながら、知覚にまで立ち入ってその基礎を求めようとするものはほとんどみられない。

[われわれの研究]

#### 1. 心理学的なアプローチ

文字の視知覚に関する実験から、人間が識別に用いている情報を抽出し、さらに次にはその得られた情報の重要度に従って、識別回路を構成して、人間動作の Simulation を行なわせる。このため本年度は分割文字の知覚実験を行い、文字の一部分からその文字を認識する度合を求め、その部分の識別情報としての重要さの度合を調べた。その結果、文字を作る線の配置によって文字のグループわけができたので、このグループわけに従って情報を順次に取り出して行けば、心理学的なものに対応した識別が可能となる。例えば文字の Scanning の際も、その文字の特徴的なところを詳細に調べればよい。

#### 2. 数理解析的なアプローチ

文字を形作る線のパターンから数学的に invariant な量を求める。文字図形の二重 Fourier 解析を行ない、得られた各成分波の数値から、文字の間の相関係数、距離や、また位置ずれ、伸縮に対する invariant を求めた。また、これらの数値から、逆に再び文字を合成して、それぞれの数値の重要さの度合を検証した。

## IX 人間工学

### 133 機械記号認識の研究

#### (2) 分割文字の知覚

東京教育大学 小保内虎夫 ○松田隆夫  
 " 今井秀雄 尾関育三  
 電気通信研究所 関口 茂

**目的** 文字の機械認識に際して、文字が正確に識別されるためには、information bearing element を知る必要がある。われわれは人間の文字認識の過程からそのような情報を抽出する。

**方法** Century Old Style のアルファベット大文字および数字 (計 35 字) の上下左右から 1/5~4/5 の分割文字を刺激とし、各系列ごとにランダムな順序で 300 msec 呈示して、それがどんな文字の一部であるかを報告させる。文字の完全パターンは、被験者に熟知されており、また実験中でも任意に見ることができる。一刺激への反応は一字に限らず、「x か y か z…」や「？」反応も許容した。被験者は大学生 40 名で、上下左右の各群 10 名ずつである。

**結果** 反応の分布状態を%で算出し作成された confusion matrix から、正反応がステップ (1/5~4/5) の増加に伴っていかに変化するかを文字ごとに検討したが、呈示部分が増加するとそこに含まれている情報 (要素) に応じて正反応を増加するという全般的傾向に反して、正しい認識が妨害される文字が存在したことは注目してよい。上下あるいは左右からの刺激に対する正反応%が一致した点で文字を 2 分割すると、その各々のもつ情報は概ね等しいと見なすことができる。分割のされ方は文字によって当然異なるが、平均的にはほぼ 1:1 で上下に、3:2 で左右に分けられる。次に、ある刺激に対してそれが誤って他の文字に認識される状態 (transition) の分析から、文字が正しく識別されるに至る様相を段階的に知ること、すなわち、文字のグループ分けとその分離の要因がわかる。それによれば、文字は、文字を形づくる特徴的な要素である端点、尖点、分岐点、交又点などの存在およびその配置と、そこからでる線の方向、角度によって transition が減少し、次第に独立していく。従って上記の如き特異点の存在が文字識別のための基本的要素であるといえる。そして、少くとも本実験においては、文字の線の太さや大きさの要素は識別過程に大きな貢献をしていない。また、ステップの増加によって加わった刺激部分が、どの程度の情報をつけ加えたかが、簡便的に求められた。しかしこれは、文字の帯域通過による実験との比較検討が必要であろう。

### 134 機械記号認識の研究

#### (3) 文字形態の数理解析

東京教育大学 小保内虎夫 ○尾関育三  
 " 今井秀雄 松田隆夫  
 電気通信研究所 関口 茂

機械による音声の識別において \*Fourier 級数展開の果す役割は、極めて基本的であるが、文字の識別におけるこの方法の価値については、今尚未知の点が多い。ここでは、この問題の数学的側面を解明する。

#### §1. 文字形態の数学的表現と F 展開

紙面にかかれた文字を F 展開するためには、その形態を代表する函数を定めねばならない。それには紙面に座標を定め、点 (x, y) が黒ならば 1, 白ならば 0, とする函数  $f(x, y)$  を考える。

一般に二変数の函数を F 展開するには、二変数の完全直交系が必要である。それは一変数の完全直交系  $\{\varphi_i(x)\}$ ,  $\{\psi_j(y)\}$  の直積  $\{\varphi_i(x)\psi_j(y)\}$  ( $i+j=0, 1, 2, \dots$ ) として与えられる。

従って、函数  $f(x, y)$  の F 展開は次式で与えられる。

$$(1) \begin{cases} f(x, y) = \sum_{i+j=0}^{\infty} C_{ij} \varphi_i(x) \psi_j(y) \\ \text{但し } C_{ij} = \int_a^b \int_c^d f(x, y) \varphi_i(x) \psi_j(y) dx dy \end{cases}$$

#### §2. 二つの形態の距離及び相関

F 係数を記号の識別に用いるには、それらの距離や相関を調べる方法が考えられる。即ち記号  $f$  の F 係数を  $\{C_i\}$ , 記号  $g$  の F 係数を  $\{d_i\}$  とするとき、 $f$  と  $g$  との距離  $D_{fg}$  は

$$(2) D_{fg} = \{\sum (C_i - d_i)^2\}^{\frac{1}{2}}$$

相関は

$$(3) R_{fg} = \frac{(fg)}{\|f\| \|g\|} \quad \text{但し } fg = \sum_i C_i d_i$$

$$\|f\| = (\sum C_i^2)^{\frac{1}{2}}$$

で与えられる。

これらは二つの形態の幾何学的類似を定量的に表すものである。従って識別の対象が活字である場合には、形態のわずかの違いやずれに影響されないデータが得られるものと考えられる。我々は各種の数字を Haar 関数によって F 展開し、 $D_{fg}$  或は  $R_{fg}$  を計算している。

#### §3. 文字形態の不変量

文字形態のずれや伸縮によって生ずる F 係数の変化は、それぞれ一定の無限行列と係数ベクトルの積としてとらえることができる。我々はこの変換行列を Hermite 多項式による F 係数の場合について算出した。これからずれや伸縮に対して不変な、その形態固有の量を求めることができる。

今後は以上の結果の実用的価値を確めることにも努力したい。

\*以下 Fourier を F で表わす。

### 135 機械翻訳のための言語研究

#### (7) 研究の現況

東京教育大学 ○小保内 虎 夫  
 " 金子 隆 芳  
 " 永 沢 幸 七

わが国で機械翻訳 (MT) の言語面をとりあげたのは、小保内の研究グループが最初であるが、その後、自然科学者の間にこれに関する関心が高まり、著述も現われた (玉木・喜安編, 自動翻訳, みすず書房)。MT の言語心理を簡明に記述したものとしては和田の論文がある (機械翻訳, 情報心理, 1962, 3, 144~154)。小保内の研究グループの成果については文部省総合研究報告を参照されたい。

これらの文献により言語研究者の担当すべき領域やわが国の現状が明らかとなる。

MT は, 1949 年, プースにより仏語英訳が行なわれ, 1954 年, Georgetown 大学においてロシア語の英訳に成功した。その後, 多くの大学や研究所で研究が続けられている。アメリカではロシア語の英訳が主であるが, 支那語, 日本語についても研究が行なわれている。ソ連はアメリカに遅れて出発したが, 逸早く専門家の養成に力めたせいもあり, 現在, 最も多数の研究者を擁し, 研究が盛んである。ソ連では, 対象国語を一旦, 中間語に直し, それを任意の国語に翻訳する方式に力を入れているようである。アメリカ, ソ連を除けば, 他の諸国の研究は規模が小さい。しかしイギリスのように規模は大でなくても着実に前進が続いている国もある。

わが国では電気試験所が, 1958 年, 自動翻訳機 'やまと' の製作に成功した。九州大学工学部も製作できた。これらの製作過程において電子工学者が言語面までも担当し処理してきたのであるが, しかし, それには限度があり, 言語面を専門に取扱う人の出現を痛切に望む段階にいたっている。われわれは, この日の来ることを期して研究を初めたのであるが, しかし若い研究者の地位が保証されていないことが障害となって, 専門家を育てえず, 研究も所期の成果をあげることができなかった。それでも, 要望さえあれば, ある程度, それに応じうる態勢をつくりえた。会員諸氏におかれても, もっとこの研究に関心をもたれることを希望する。

なお, 機械翻訳は Psycho-linguistics の一部をなし, 将来, 外国語, 国語教育にも大きな影響を与えるものであることを記憶されたい。

### 136 機械翻訳のための言語研究

#### (8) 機械記憶装置設計のための言語統計

東京教育大学 小保内 虎 夫  
 " 永 沢 幸 七  
 " ○金子 隆 芳

英語対日本語の自動翻訳機設計上の辞書部記憶容量に關してひとつの量的指針を与えるため, 特に自動翻訳の第一段階として最も実現性の高い科学書を対象として使用単語の頻度を中心に分析をおこなった。語の抽出源は単語・文型の比較的簡単と見られる数学書として (A) O. Veblen and J. Whitehead: The foundation of differential geometry (1932) と, やや一般的英語として科学通俗書であるが風格ある英語で定評のある (B) Scientific American Reader の二書を選び, 前者から延べ語数 15200, 異なり語数 1171, 後者から延べ語数 12900, 異なり語数 2775 を抽出した。延べ語数の増加に対する異なり語数の増加の様様から見ると, この数学書では異なり語数 1400 程度が限界と思われるが, 通俗科学書ではこの抽出範囲では未だ限界の見当はつかない。異なり語の使用頻度順にその文章構成率を累積して行くと, 数学書の場合, 160 語によって約 90% の識訳率に達する。通俗科学書の場合 Dewey (1932) の結果とほとんど一致し, 150 語による識訳率は約 60% にすぎない。通俗科学書から人類学の章だけをとって見ると, 数学書と同じ結果になることから, およそ個別科学の領域だけに関する限り, 数学であるなしに拘らず類似の結果になるものと考えられる。Zipf の曲線をえがいて見ると, 数学書の場合は特定少数語の使用頻度が大きいという傾向は見られるが両者に顕著な差はなく, zipf の係数はかなり普遍的なものであることを示唆している。通俗科学書からの単語抽出は物理, 生理, 心理, 地理等の各分野の 6 ヶ章からおこなわれたが, そのいずれにも使用されている重要単語を 1st order cardinal words, と呼び, 5 ヶ章に共通に使用されている単語を 2nd order cardinal words と呼び, 同様に 3rd order cardinal words 等を定義して語の種類とその数を調べ, 1st order に the, of, a, in など 62 語, 2nd order に was, two, he, its など 50 語その他を得た。語の機能と訳に関する分析は差しあたり前置詞についておこない, 形容詞的用法と副詞的用法はほぼ 55% 対 45% の比で現われ, このうち [名詞]—[前置詞]—[名詞] の配列の場合の 80% は「の」で訳し得ることを見た。なお文章論的統計研究がさらにすすめられている。



東京教育大学 ○永 沢 幸 七

" 小保内 虎 夫

" 金 子 隆 芳

小保内、金子の報告にある資料 A, B について自動翻訳に適するように設定された品詞規準に基づいて統計調査を行なう。

資料 A, B の二つの材料を写真撮影とミメオフアックスにより印刷した。カードには平均 6~7 sentence が印刷されており、語数にして約 120 語である。処理した項目は次の三つである。(1)各品詞別にわけられた単語の出現のべ語数とことなり語数。(2)新に設定された品詞分類基準にもとづく単語出現頻数。(3)同じ単語で二つ以上の品詞にまたがるものの調査。(1)については小保内・金子が報告したので省略する。(2)については Ariadne Lukjanow が Report on some Principle of the Unified Transfer System に報告した Sytax codes を多少改正補足して基準を設定した。0.01-preposition. 0.02-introductory words (前置詞) (従属接続詞) (as, if, that, why, since, etc). 0.03-Conjunctions (and, but, either, for, etc). 0.04-Definite article... (接続詞) (定冠詞) 0.05-participle modifiers (present participle, past participle+N). (分詞修飾) 0.06-participial modifiers (V+present participle, past participle). (分詞修飾) 0.07-here, there, away, out, (adverbs of place). 0.08-period. 以上の品詞分類基準による品詞別単語出現頻度は Noun の項目においては、A ののべ語数 3557 (23%)—ことなり語数 464 (38%), B は 2818 (21%)—1161 (42%)。Pron. の項目においては、A は 768 (5%)—30 (2%) B は 349 (3%)—39 (1%)。Verb の項目においては A は 2574 (17%)—322 (27%)。B は 1698 (13%)—653 (23%)。Adj. の項目においては A は 4405 (29%)—290 (24%)。B は 2454 (19%)—489 (17%)。Con. の項目においては A は 859 (5%)—21 (2%)。B は 624 (5%)—23 (1%)。Prep. の項目においては A は 2507 (18%)—38 (3%)。B は 1465 (11%)—36 (1%)。A, B の両資料を比較すると、のべ語数においては、B が A より多いのは Adv. の項目だけである。ことなり語においては、B が A より多いのは Noun の項目だけである。(3)について主要なるものだけをあげると次のとおりになる。

over	{	Prep. (6).....001.
		Adv. (1).....030.
in	{	Prep. (416) ...001.
		Adv. (1).....032.
on	{	Prep. (50).....001.
		Adv. (2).....032.

東京教育大学 小保内虎夫 金子隆芳

" ○増山英太郎

目的 トラッキング・アナライザーにより人間の周波数応答を研究すること (予備第一実験)

手続 運転免許所有の一女性に振巾はブラウン管面で中心より水平に左右 2.65 種ずつでセットし、周波数は約 0.18, 0.21, 0.26, 0.34, 0.61, 2.9 cps の六種類とし、制御対象が比例と積分の場合で各二回宛制御さす。ある制御対象である周波数の正弦波の数は 10 ケ以上。

故 6 種類×2×2 回×10 ケ以上の波を標本とす。記録紙速度 2 種/秒、ダットサン用ハンドル、回転時の摩擦は 100 gr 重、回転に要する力は約 6 gr 重/度。

結果 目標量の振巾 ( $x$ ) と制御量の振巾 ( $y$ ) が時間と共にどんな変化をするか各周波数毎に位相図に描くと、比例 1 回目では 0.18 から 0.34 cps までは位相遅れのループを描きながらも  $y=x$  の直線の周囲に測定点が散らばるが、0.61 cps で 180° 遅れ、2.9 cps で追従不能。積分 1 回目では 0.18, 0.21 cps でのみ位相遅れのループで  $y=x$  の周囲に散乱、0.26, 0.34 cps で 90° 遅れ、0.61 cps で 180° 遅れ、2.9 cps で追従不能。比例 2 回目では 0.18 から 0.34 cps までは殆んど遅れなしに追従、0.61 cps で遅れを示し、2.9 cps で不能。積分 2 回目では 0.18 cps であまり遅れずに追従、0.21 から 0.34 cps で 90° 遅れ、0.61 cps で 180° 遅れ、2.9 cps で不能。以上は最初の 1 cycle の結果。積分動作 1 回目の結果でボード線図を描くと、位相余裕も増巾度余裕も正で、被験者は安定した制御をしていることがわかる。誤差量の記録データを各周波数毎に 5 mm 間隔で基準線からの垂直距離  $x_i$  を測定し、 $x_i$  の範囲を大体三等分し、 $x_i$  の大きい順に 1, 0, -1 と表わし、それから自己相関を計算しコレログラムを描いた：比例動作では 1, 2 回目とも 0.18 から 0.34 cps に対しては誤差の中に目標量の周波数に近い周期の波と、各周波数毎に違うが 1 回と 2 回目では似たある周期のもう一つの波がある (1 回より 2 回目が分布の尖度大になる為か 2 回目のコレログラムは 1 回目のそれを縮めた形になっている)、0.61 cps では目標量に近い周期の波だけ、2.9 cps では追従不能なので目標量と違う周波数の波 (1 回目 1 cps, 2 回目 1.5 cps...最速反応) 在。積分動作 1 回目では 0.18 から 0.61 cps までは目標量と似た周期の波だけだが、2.9 cps に於ては追従不能なので比例動作 1 回目と同じ 1 cps の周期の波だけがあることがわかった。

### 139 キーパンチ作業における一考察

慶応義塾大学 林 喜 男  
" 重 田 定 義  
" ○佐久間 章 行

キーパンチ作業は、パンチカードシステムの入力部分を受持つ作業で、人間と機械の組合せによってシステムが構成されている。キーパンチ作業の信頼度は、計算システムの信頼度に大きな影響を持つものである。そこで IBM 24 型穿孔機を使用して、キーを打つストローク数、およびミス発生率が、数字を書く場合の桁数の区切り方、インクの色、書体、パンチャーの経験、などの影響をどのように受けるか、およびキーボードのキーの配列とミス率の間にどのような関係があるか、どのようなミスが発生し易いかを求めするために実験を行なった。実験は、2 回行ない、実験 I は、桁数を 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 区切なし、と変化させ 8×8 のラテン方格で実験した。原票は IBM 407 にて乱数を印刷しこれをパンチさせた。結果は、4 桁が一番よく、また偶数区切が良かった。実験 II は、乱数を銀行員に手書をしてもらい。インクの色を黒、青、赤と変化させこれを原票とした。結果は、印刷より手書が良く、色では差がなく、経験年数は有意であった。またキーにより語打率に差があることが判明した。これは、コード化等に応用出来よう。ミスの発生間隔は、指数分布になることも判明した。

### 140 計器読取りに関する研究 (8)

—計器の評価方式についての人間工学的研究  
(その2)—

立教大学 ○正 田 亘 豊原恒男  
" 水口礼治 磯部治平

**目的** 先に (日本心理学会第 26 回大会)、われわれは、計器および計器盤の評価方式を check list 形式でまとめ、これの評価項目および評価基準の構想を提起した。今回は、この check list の妥当性を検証するために、実際に適用した事例の結果を報告し、今後のこの種の check list 形式における評価基準決定の資料を得ることを目的とした。

**方法** われわれの試作した「計器・計器盤に関する check list\*」(第一次～第三次案)による T1-A, T-34 航空機計器および計器盤の評定。参考資料として、Pilots より計器および計器盤に関する評定を得る (第 12 飛行教育団, Pilot 教官および Pilot 19 人)。飛行時における計器の読取り頻度・順序に関する調査の実施 (対象者は同上)。

**結果** 最終案の check list (第四次)に至るまでの評価項目および評価基準のとりきめは、上述の実地検証および Pilots との面接結果などでかなりの修・訂正が加えられた。この種の改訂は、評価基準 (各項目に対し 5 段階評定基準を原則として与えた) における基準段階の移行、評定値の数量的問題、5 段階評定の有意性、項目の weight づけなどであった。当初の案より著しく変更をうけた評価基準は、計器諸項目に対するものも少くないが、計器盤に関するものが多い。たとえば、計器盤の傾斜、これを見る視線の傾斜、指針の齋一性、計器の配列に関する諸項目がこれである。今回の実地検証による改訂の中で一例を挙げるならば、計器盤上の計器配列の問題がある。Pilots の離・着・飛行時における読取りの順序のソシオグラムによると、高度計—速度計の関連性は絶対的なものであり、これを 1 組として、回転計、昇降計などと隣接せしめるような組合せの配列がもつとも望ましいことが判かり、これを評価基準に加味した。しかしながら、この問題でも、客観的評価は困難なので、基準差を大きくせず、3 段階に押えることにした (以下略)。

※ なお、check list の評価項目および評価基準に関する内容、基準作成の理論的根拠については、正田：計器・計器盤についての人間工学的評価方式 (立大、心理学科研究年報 6 号) を参照されたい。

# 141 新幹線列車制御盤に関する人間工学的研究

国鉄労働科学研究室 清 宮 栄 一

**目的** 制御盤の水平作業面高とてこ盤面傾斜角の至適値の組合せを求める。

**方法** 水平作業面高 700 mm, 750 mm, てこ盤面傾斜角 30°, 45° の組合せ 4 種類の条件について実験する。椅子座面高は 420 mm であって, ネコス 220 型を用いる。モデル作業は 0820 時~0910 時に豊橋羽島間を通過する列車を対象とした。列車位置表示灯確認, 列車番号表示灯確認, 進路表示灯または進路てこ表示灯確認, 進路てこ反位または定位操作, 整理ダイヤ記入の 5 作業とする。この作業は想定ダイヤにもとづいてプログラミングされ, 列車位置と列車番号表示灯の操作順序と, 上記操作順序とはダブルトラックのテープ再生音によって操作者と被験者に指示される。至適値の組合せは(1)疲労測定 (FF 値, 選択反応時間値とその変動値, 皮膚抵抗値, 皮膚電気反射度数, 自覚症状, 身体疲労部位), (2)内視報告, (3)作業範囲域, (4)写真判定から総合的に推定される。モデル作業と疲労測定は次の計画に従う。

実験年月日	水平作業面高	傾斜角
37.3.13	700 mm	30° (予催実験)
14	700	30° (本実験)
15	700	45° ( " )
16	750	30° ( " )
17	750	45° ( " )

  

	0800	0900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700
(作業)										
(測定)	△△	△	△	△△	△	△	△	△	△	△

被験者は実験に熟練した心理学科学生 Y. (午前) A. (午後), その身体計測値は次の通りである。

	身長	坐高	腕長	下腿長
Y	165.7 cm	88.0 cm	68.0 cm	45.0 cm
A	167.0	88.6	71.7	45.2

作業面の照度は 250 Lux, 気温は 17°C~20°C

**結果** 疲労測定の結果は 4 条件間に有意差が見出せなかったが, 700 mm—45° の組合せが概して良好な数値を示した。各条件間に有意差が見出せなかったのは作業負荷時間が短かかったためか, このような条件では例え作業負荷時間を長くしても測定結果に差を生じないのか更に検討を要する。内視報告, 作業範囲域の測定, 写真判定によると, 700 mm—45° の組合せが至適値であることが推定された。

**今後の問題** てこの形状, 色彩, 力点と支点との相対関係位置, てこ番号表示法, 表示灯, 電話器の位置, ダイヤル, 押ボタンなどについて検討する予定である。

## 142 自動車運転者の心理テスト (第2次研究)

### (1) バックミラーによる遠近知覚と巾員評定テスト

福島医大 ○丸山欣哉

東北大学 大山正博 加藤孝義

日本心理学会 (1961) において公表した資料は、仙北鉄道 (宮城県) 運転者に試行した第1次調査結果の抜粋であった。幸い同社において第2次調査の機会を与えられたので、本大会ではこの第2次調査の結果を中心とし、かねて第1次調査の未発表資料をも含めて、これを“第2次研究”として発表した。

**受験者の構成** 第2次調査における Ss は 51 名。これを事故点 (33 点) = 年間平均事故件数 (10 点) + 各件平均責任度 (10 点) + 技能・態度 (5 点) + 路線危険度 (3 点) + 病質 (5 点) によって分類し、事故寡少群 (6.4 点内)、中間群 (6.5~14.9 点)、事故群 (15.0 点以上) の 3 群を設けた。

**遠近知覚** 径 11 cm のバックミラーに映る 2 本の棒の遠近を 2.2 m 離れた覗き窓より観察せしめた。棒の一方を固定し、他方を前後に移動して等価点を評定する。バックミラーという限られた視野のしかも歪曲した空間での知覚反応に運転者の特性差がいかに現われるか。測定は上昇・下降を各 3 回ずつ。この 6 個の値より 1 個の平均等価点を求め、その固定棒からのずれを評定誤差量とした。テストは第1次調査において試行したもので、Ss は 69 名。一般に等価点は固定棒よりも手前に定位されがちであった。無事故群と事故群との差は期待に反して大きく現われなかった。(○群平均: 5.6 cm, △群: 6.0 cm) 事故群の方がやや分散が大きい様である。分布の両すそを裁断する査定規準を設けてテストの効果を求めれば当りは 50.0% である。

つぎに、6 個の測定値の絶対値のみを問題として絶対誤差量について作図すると、この指数においては○群と△群との差がはっきり現われる。(○群  $\bar{x}$ : 11.5 cm, △群: 15.4 cm,  $t$  は 5% 水準) 15.0 cm 以上を不良とすれば、63.0% 程度の効率をもってこの指数は両群を識別しうる。

**巾員評定** 2 本の棒を 80 cm にへだてて置き、その 80 cm 巾員を 3 m 離れた手前において横棒の長さを調節することにより評定せしめた。測定は 5 回。Ss は 51 名。○群と△群との評定誤差量を比較すると、評定はいずれも過少評価に傾き、○群  $\bar{x}$ : -10.6 cm, △群  $\bar{x}$ : -10.3 cm に差は認められない。しかし分布の巾に明らかな異なりが現われる ( $F=5.11$ )。△群の散布度は著るしく大きい。+5.1 cm 以上および -15.0 cm 以下を不良とすれば、このテストの効率は 66.7% であった。

# X 交 通

## 143 自動車運転者の心理テスト (第2次研究)

### (2) 速度見越反応検査及び重複作業反応検査

東北大学 ○長塚 康弘  
福島医大 丸山 欣哉

第1次研究の結果は日本心理学会 25 回大会で報告したので、本検査の手續等の詳細とあわせて、同大会発表論文集 486 頁~487 頁を参照されたい。

その後、同様の研究の機会を得、更に 51 名の同じバス会社の運転者について第2次研究を行った所、ある程度迄満足すべき成果を得る事ができたので以下に大要をのべてい。

**速度見越反応検査の結果** この検査は主として、速度の認知と見積りの正確さ、特にそれを筋肉運動として反応する際の良否及び動作反応促進傾向の抑制(焦躁抑制)の良否をみようとするものである。結果は第1次研究の場合と殆んど同じ傾向で、見越反応時間について無事故群と事故群の分布は明かに異質であり、 $1001^{ms}$  以上を合格点とすれば当り率 77.8% ( $\chi^2=9.792$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ ) となった。この検査の前回の当り率は 77.5% であったから、この検査の有効性が再度確められたわけである。動揺度は余り問題にしないで済むことが第1次研究の結果からわかっているから除いた。

**重複作業反応検査の結果** 速度見越反応検査とバッテリーをなすこの検査は、重複する複雑な刺激場面に於いて、統御された反応動作が出来るか否かをみる。前回の検査その他の資料から無事故群と事故群の判別にはブザー挿入系列での誤反応指標だけで十分なことがわかっているが、今回の結果も同様で、その他の指標は有効な判別力をもたないことがわかった。即ち、前回同様に誤反応 3 回迄を合格とすれば、当り率 77.8% ( $\chi^2=7.395$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ ) で、前回の 73.1% にてらしてもこの検査の妥当性が更に確められたといえよう。その他の指標(反応時間、動揺度)では、各々当り率が低いと同時に、事故群の 60% 以上が合格することになるのでテスト指標としては妥当ではないと思われる。最後に速度見越反応検査と重複作業反応検査の結果を組合せてテストバッテリーとして使用する場合の効率をみると 77.8% となった ( $\chi^2=9.282$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ )。この効率は各々単独使用の場合の率と同じであるが、ただその場合の事故者排除率が 70% 程度に止まるのに対し併用では凡そ 90% 以上排除可能な事がわかった。運転不適格者を排除する目的のためには両検査の併用が有効であることが示された。

## 144 自動車運転者の心理テスト (第2次研究)

### (3) 人格検査テストバッテリーの試作とその成績

茨城大学 ○菊地 哲彦  
東北大学 北村 晴朗

これまで行ってきた intensive な研究結果に基き今回質問紙と投影法とからなるテストバッテリーを試作した。

質問紙は TSKPI-Form 2 と仮称するが、非協調的言動のあるもの及びその可能性のあるものの発見を目的とする。項目数 100。三肢選択法。測定尺度は I 群(非協調的態度、興奮性、爆発性)、II 群(粘着性、恨みがましき、ヒステリー性即ち自己中心性自己顕示性等)、III 群(MMPI 中の一般分裂病傾向及び事故多発者が多く選ぶ項目)、IV 群(回帰性対分裂性、気分易変性)、V 群(職場内不適応点、職場家庭間不適応点、家庭内不適応点)、他に虚構尺度、テスト前・後半得点比。最終得点は I~V 群の得点。この総得点の当り率 70%、無事故(○)群と事故多発(△)群の得点は有意(1%)に異なる。不適応得点の和の当り 66% (N.S.)。I+II+III 群得点の和の当り 74%、○と△の得点差 1% で有意。I 群(23 項目)の得点の当り 64%、○と△の得点差 1% で有意。回帰対分裂性はこの群の事故多発対無事故の区分と関係なかった。

投影法は PF を運転者向きの文章完成法に修正したもの(FSCT)と Rorschach テスト及び Levy-M. Cards の各部分を用いた。FSCT の得点のうち O-D % は△群で多く(当り 70%、両群の得点差 1% で有意)、N-P % は△群で少い(当り 74%、同上の差 1% で有意)。又、E' は△群で有意(1%)に多く(当り 78%)、外罰反応全体 E も△群でやや多い(N.S., 当り 70%)。この 4 指標に夫々重みづけ得点を与えその合計点を算出するとその当りは 77% であった。

Rorschach 3, 4, 7, 8 番図版は主に人間の共感性等について M を中心に、情動統制・主観性・認知の失敗を Fail., F-, FC-&CF 等を中心に検討した。被験者中の高年齢者を考慮して M の出易い Levy-M 図版 1, 8 番を併用した。Fail. は Ror. L-M. とも△群に多く、M は Ror で△群に少く、(L-M で異ならず)、c- は△群に多く、勿論、CF, FC- は△群に多かった。これら指標に重みづけ得点を与えて合計点を算出するとその当り 84%、以上三種の得点の組合せの当りは 96% に達した。

## 145 ひき逃げ運転者の性格的特徴について

科学警察研究所 貝 沼 良 行

交通事故を起して、そのまま現場から立ち去ることに、(1) 事故を起したことに気づかない、(2) 事故に気づいている、という二つの場合がある。事故発生時の心理状態及び現場から立ち去った理由を調査することにより、緊急事態における行動及びその際に性格的特徴がどの程度行動を規定し得るものかをみるための手掛りを得ようとするものである。

**調査対象及び方法** (1) ひき逃げ事故の問題点を把握するために、送致書にある被調査者の供述調書を5例について検討した。(2) 3例については、面接して事故発生時及びその後の運転中のことなどについて調査した。(3) 上記の3例について面接後、社会的適応性をみるためにY. G. 性格検査を実施した。8例全部が重傷又は死亡事故。

**調査結果及び考察** (1) 違反で処分された経験が多くなっているが、過去約2年半の事故回数についてみると事故多発運転者とは違う特徴を示すものようである。(2) 何かを踏んだとか、人をはねとばしたということについては、1例を除いて認めている。また事故発生以前には被害者らしき人を一度は見ており、「大丈夫だろう」というような気持で運転を継続する例が多い。急ブレーキで間に合わなかったのが1例である。人身に傷害を与えたことによる驚愕状態は時間的に長くはない。(3) 逃走中には、処分されることによって生じてくる社会的信用の損失、失職などによる今後の生活に対する不安と、自首しようかという考えとで相剋する。家族のことを考えると自首できない、というのは、一度現場から離れた以上はできるだけ知られたくはないと思うからであろう。その他現場から立ち去るという行動を規定する要因としては運転停止処分中などのような不利な条件が重なっている場合や現場附近の地理的環境、アルコールの影響などもあげられる。(4) YG 検査のプロフィールは3名とも社会的適応がうまくいっているタイプに属している。3名に共通していえるのは「普通より(あるいは非常に)神経質でない、及び抑うつ性小」「普通より(あるいは非常に)思考的外向」などの特徴を示していることである。事故についてすべてを話した後に検査をしたことも結果に影響していると考えられるが、思考的外向は注目してよい特徴であるといえよう。なお、ひき逃げ運転者の対照群としては、同一条件の死亡ないし重傷事故を起した運転者がよいのではなかろうか。

## 146 交通事故原因の分析 (2)

— 酩酊によるひき逃げの事例二・三 —

科学警察研究所 大塚 博 保

交通事故原因を種々な面から追求しているが、今回は飲酒・酩酊して自動車を運転し、事故を惹起した事例について考究した。なお、ここにあげた事例は事故の事後処理をせずに逃走したものである。

事例1. 20才の店員が9月、19時頃、下町のにぎやかな都電通りをオート三輪に乗り、停車中のバスの右斜前にいた19才の男子の自転車をはね死亡させ、更に、右の車に接触し逃走した。彼は1.5時間に友人と2人でビール7本をのんだ後、友人と車に乗り、約15分後、約50 km/hで現場にさしかかった。バスには気付き、注意した。バスの横で該自転車に気付きブレーキを踏んだが足に力が入らなかった。無免許と無断借用車が心配になりにつれた。

事例2. 27才の男子事務員が貨客兼用車に乗り、9月、19時頃、暗い広い道を約60 km/hで進行中、横断歩道で横断途中、立止まっている68才の老翁をはねた。彼は日本酒約2合を飲み、10~15分後、現場の道路の中央にいる人に気付いた。その人は車を避けるために位置を変えたので右にハンドルを切って通過しようとしたが、もう一人が同所に立止まっているのに気付かず、はねあげて逃げ去った。

事例3. 会社の社長で53才の男子。10月、21時頃、暗い片側2車線の道路を進行中、横断しようとしていた21才の男子に気付かず、はねとばした。5人の宴会で彼は日本酒を4~5本、ウキスキー、ビールを約1時間40分の間に飲み、おどりをおどった。宴会の席を立ったのを覚えていない。自分で運転していたことはわかっていた。現場直前の信号が赤で停つたらしい。暗い現場にさしかかった時、何かことんと音がしたのは覚えているが、そのまま進行した。

以上の事例及び他の酩酊事故事例についてみると、酩酊の程度にもよるが、

(1) 運転中、前方を見ることができなくなるか、或いは、一つの事象の認知はできるが、他の事象の認知を同時にできなくなるかの所謂、注意の集中・分散が困難になるようである。

(2) 動作をする意志はあっても、動作が緩慢になるか、力が入らず、ブレーキなど踏んでも制動の効果は現れ難いようである。

## 147 道交違反少年の PAT 適用

大阪少年鑑別所 菅 俊 夫

目的 道交違反少年の人格特性をみるため。

方法 PAT という客観的な人格投影法を用う。

昭和37年9月7日より、10月11日の約1ヶ月間、大阪家裁で出張鑑別を行う。(実施を1時間に制限する。他に新制田中B式I型を併用す。)

対象 15才から20才未満の男子8,000名から、100名を任意に抽出し、次の如き、グループに分類する。

- (A) 無資格の無免許違反のもの……………55名
- (B) 有資格のスピード違反のもの……………45名
- (C) 初回違反で、無事故のもの……………69名
- (D) 常習違反か、事故を犯したもの……………31名
- (E) 無資格で、常習違反か、事故のもの……………13名
- (F) 有資格で、常習違反か、事故のもの……………18名

### 結果

① PATの「でたらめ反応」の規定除外者は、0.4%で、大部分のものには適用できる。

② 各グループについて、参考のために、年齢、知能、各別に検討したが、有意な差は認められない。

③ 道交違反少年において、正常な反応者はわずか6%である。

一般的な人格特性として確かに、

D (依存性) 51%

SP (社会関心性) 46%

E (情動性) 37%

OV (あらわな行動) 36%

がみられる。(25%以下は省略す。)

④ 各グループ毎に、有意な差は認められない。けれども、やや次のような傾向がみられる。

① 有資格で常習違反か、事故あるものは、無資格で同様のそれより「作業性的」である。

② 無資格の無免許違反のものは、有資格のスピード違反のものより、「依存的」「作業性的」「楽観的」である。

③ 常習違反か、事故あるものは、そうでないものより「情動的」である。

## 148 自動車運転態度検査(試案)の標準化について

第一報 Lie scale 設定の試み

富山少年鑑別所 十 河 一

目的 questionnaire の欠陥を補う

方法 ① Lie scale の仮り設定

② Lie scale の妥当性の検討

手続及び整理 ① この検査は、68問の質問項目から構成されており、問題反応の出かたにより、被験者の運転態度の特徴を知ろうとするものであるが、問題反応といえども、運転手が当然もっている運転態度に関する質問項目が、幾つかある。それらの項目は、問題反応率が高く(逆にいえば、非問題反応率は低い)問題反応するのが自然で、非問題反応をすれば不自然と考え、検証項目とした。検証項目は、全質問項目の約1割(6項目)を、非問題反応率の低い項目順に上位から選んだ。検証項目に対して非問題反応をした場合1点とすると、0から6の7段階に分布する。これを仮りに Lie score と呼ぶ。被験者は25才未満の一般運転手150名であり、Lie score の累積百分率を求めると、88%が Lie score 3点以内に入る。② 以上の手続で設定した Lie scale の選別力をみるため、正直群(I III V)と、みせかけ群(II IV)に、これを使ってみた。被験者は20才未満の運転手60名。各群の累積百分率を求めると、I III 群とII群とは明らかに分離した。I III 群は90%以上が Lie score 3点以内に入るが、II群は33%であった。

次に、優良運転手が、正直に反応しながら、問題反応が少ないため、Lie scale でも非問題反応が多く、不信頼資料と誤認されないかを検討するため、25才未満の自動車学校教官43名に試してみた。累積百分率を求めると95%が Lie score 3点以内に入った。

結論 収入、談話運転、他の批判、ほかごと、面白くない時、急用、に関する6項目を検証項目として選んだ。

この Lie scale で資料の信頼性をみることができる。

又、この Lie scale で優良運転手の正直な反応を不信頼資料と誤認する心配はない。

149※ 自動車運転免許取得後の運転技能の発達過程について

兵庫県警察本部 中 尾 勢 律 夫

**目的** この調査は免許取得後間もない初心者の運転技能の発達過程を把握することを目的として実施したものであります。

**対照** 調査の対照者は8月中に免許を取得した人を対照として大阪市内とその近郊に住居を有する人で一般の試験合格者を50名、公安委員会指定の自動車教習所卒業生100名を一組とし34年、35年、36年の3組に分けて調査票を作成しました。

その抽出方法は一般者に対しては警察署にある免許交付簿から無作為に50名、更に学校卒業生には学校に備付けの卒業生名簿によって無作為に100名を抽出しました。

**方法** 調査票には調査票の外に依頼文と切手を添付した返信用封筒を同封郵送しました。それを回収集計したものであります。

**調査の内容** 別表Ⅰの通りであります。即ち、

- 1) 免許取得後あなたがハンドルをもって何軒位走っていますか
- 2) 免許取得後単独で市中を走るようになる迄にどんな方法で何時間位実習しましたか
  - (あ) 正規の教師が横に乗って指導を受けながらあなたがハンドルをもって\_\_時間
  - (い) 先輩が横に乗って指導を受けながら、あなたがハンドルをもって\_\_時間
  - (う) 先輩の横に乗せてもらって指導をうけながら、あなたがハンドルをもたないで\_\_時間
  - (え) その他の方法で\_\_時間
  - (お) 最初から単独で市中に出た
  - (か) まだ一人で市中を走れない
- 3) あなたの不注意又は技術未熟によって起した事故は人と\_\_回、車と\_\_回、物体と\_\_回、その他\_\_回、一度もない。
- 4) その事故の主な原因について
  - (あ) ハンドル系の操作不適当\_\_回
  - (い) ブレーキ系の操作不適当\_\_回
  - (う) スピードの出しすぎ\_\_回
  - (え) 信号合図の不適当\_\_回
  - (お) その他\_\_回
- 5) 免許取得後警察官に口答で注意され又は違反として調書をとられ押印させられた内容と回数
- 6) 今迄にうけた処分の内容と回数
  - (あ) 罰金\_\_回、(い) 運転停止\_\_回、(う) 受講命令\_\_回、(え) その他\_\_回、(お) 一度もない

以上が調査標の内容であります。

5. 回収の状況は別表Ⅰのとおりであって、一般者の回収率は48%、学卒者の回収率は27%全体として回収率は

150 日本の道路標識の情報伝達性について

科学警察研究所 小 林 実

現在の日本の道路標識は絵及び抽象図形を主体とし乍らも二ヶ国語による表示を併用している。この一つの過渡的な姿は将来改善すべき余地があろうが、仮に絵及び抽象図形に依存する国連方式の形をとるとするならばそこに使用される絵又は図が出来る限り普遍的なものであり、且っ高い情報伝達性を有するものである事が望ましい。この観点から、日本の道路標識に未知な人にこれを解釈させその標識の持つ情報伝達性を知ろうとしたのである。実験は1960年12月から翌年1月にかけて、米国オハイオ州立大学にて男子学生75名を被験者として行なわれた。用いられた標識は文字の部分を除いた3×3cmで計24個。実験は三つに分かれ、第一実験では全標識をランダムに一ヶづつ5秒間提示、どの様な標識にみえるか判定させた。(N=30)第二実験では、全標識を被験者に渡し自由に5分間研究させ、各標識の意味を判定させた。但し、使用されるカテゴリーは各一回とした。(N=15)第三実験では、各標識の正解を印刷した24枚のカードを刺激カードと同時に渡し、組み合わせによる解答を求めた。(N=30)

**実験の結果** その情報伝達性は意外に低く、正解率の高い標識群は、第一実験では、「速度制限」(100%)、「踏切あり」(96%)、「学校あり」(90%)及び「工事中」(70%で他の標識群殊に禁止を示す規制標識では、ほとんど0%の正解率であった。誤答の主なもの、禁止とする代りにこれを警戒又は案内の意味にとったもので、この事は禁止と赤棒及び斜線とが結びつかぬ事を示す。この傾向は第二実験でも同じであった。第三実験の結果は、禁止を示す規制標識の正解率は著しく高くなったが、「速度制限解除」、「高さ制限」、「警笛鳴らせ」等の正解率は低く、殊に「警笛鳴らせ」ではその絵が適切でない結果と考えられる。これはヨーロッパの警笛がラッパ状の表現であるのに対し、日本のそれは警笛と共に鐘状の音波伝達を加えているが、これが「緊急性」という様な印象を与えている事は一考を要しよう。又「追越し禁止」の標識の追い越される車が静止物体として見られた結果、「前方左カーブあり」という解釈が70%に達し、又「左手病院あり」という様な建造物として見られたのであろう。従ってこの図形の動体化は必要であろう。



## 151 心理的錯誤現象について

国鉄労働科学研究室 鶴田正一

去る5月3日夜に発生した三河島列車衝突事故のきっかけは、貨物の出発信号(赤)と隣りの電車出発信号(緑)とに対する貨物機関士の誤認ではないかと推測されている。その真疑はいまなお不明であるが、問題の貨物列車下り出発信号(左)は電車出発信号(右)より8米遠く、その左右の間隔は3米となっている。この間隔は、出発信号を確認すべき約1,115 軒の距離にある場内信号の位置からは視角度にして9'となる。そして、この二つの信号は、そこから400~300米の間の約100米が、カーブと10本の支柱とのために交互にあるいは同時に、0.5~13秒の時間間隔で見えかくれする死角となっている。この間で、両信号の視角度は18'から34'となる。列車は、この1,115軒を4分25秒、100米の死角間を24秒で通過したことになる。しかも、この際、機関士の視野の中には、遠近、上下さまざまな箇所に、いくつもの緑と黄、赤の信号灯や街の灯が入りまじって9~10個ほど交互に明滅、移動して入ってくる。従って、それには、次のような心理的要因のいくつかが競合しての錯誤現象の介入による誤認が推定される。

1. 遠近反転視。いくつもの支柱、架線、線路等の関係から、その間に明滅する信号灯の遠近が反転する。
  2. 自動運動。信号灯が、いくつも支柱の間に見えかくれしているため、時には、同一信号灯がその位置を移動したように見える。
  3. 仮現運動。異なる二つの信号灯が同一信号灯の移動したものと判断される。
  4. 誘動運動。支柱の移動が信号灯の移動と判断される。
  5. 進出色、後退色及び平面視。前方の遠近さまざまな距離にある信号灯が、同一平面距離上にあるように見えたり、緑色灯より遠い赤色灯が近くに見えたりする。
- そして、進行中は通常緑色は自己の進行方向上にあるため、とかく、他の線路上のものでも、それを自己の進路と思いがちになる。

私自身6回の調査のうち、1回だけではあったが、右側の信号灯を左側の信号灯が移動したものだと思いがちをした。そして、知っておっても、遠方の赤色信号が緑色信号よりも近くに見えたり、その逆に見えたりした。これらの現象は単に注意とか訓練とかによってのみでは防ぎうるものではなく、一般正常人にも生じやすい心理的錯誤現象と思われる。

## 152 職業間における対人信頼度の差異について

近畿大学 広井 甫

本研究は Rosenberg の職業価値感の研究から示唆を得たものである。

**目的** Rosenberg は大学生の職業希望と対人信頼 faith in people との関係調べ、希望職業によって対人信頼度の異なることを認めたが、本研究では、現に従事する職業によって、従事者間に対人信頼度に差異が、あるかどうかを見ようとした。仮りに差異が認められるとすれば、対人信頼も personality の一側面として職業選択の要因となりうるだけでなく、一般に個人の社会生活における対人的行動や対人関係を規制する要因となりうるであろうと考えたからである。

**方法** 神戸市の中学校第1学年生の父兄 486 名に 20 項目よりなる質問紙を配布し、回答を求めた。各項目は 11 段階で評定するようになっている。20 項目中 10 項目は、それぞれの場面で積極的に他人を信じる程度を、残りの 10 項目は逆に他人を信じない程度を回答する。調査は予備調査を昭和 37 年 6 月に大学生 350 名について行い、その結果にもとづいて同年 9 月に中学校父兄に対して行なった。採点は、positive 項目は回答をそのまま加算し negative 項目は、10 から回答の段階点を減じたものを得点として加算した。得点は 160 点台から 40 点台までの広がりを見せている。

**結果** 総得点の分布は正常で、平均は 107.3, S. D. は 23.9 であった。職業別平均を見ると、最高の医師 (M=122.3 S. D.=29.0) から、最低の販売的職業従事者 (M=98.5 S. D.=22.2) までに広がり、かなりの差異のあることが明らかになった。これらを高得点群 (医師、管理職者、銀行員)、中間得点群、低得点群 (販売従事者、運輸従事者、事務員) に分けてみると、各群相互の間に、それぞれ平均に有意差がみとめられた。なお内的緊密性による信頼性は .86 で高得点群では .85、低得点群では .84 が得られた。次に各項目別に回答を検討したが、職業によって、かなりの特長が各項目に認められた。高得点群と低得点群との間では、20 項目中 11 項目の平均に有意差が見られた。なお性別、年齢別にも検討したが、いずれのばあいも有意な差を認めることができなかった。

11 段階の評定はかなり困難な仕事のようなようであるらしく、特に 4, 6 の段階の使用が少く、2, 3, 5, 7, 8 の使用頻度の高さが目立った。

# XI 職業指導

## 153 中学校卒業生の職業適応に関する事例研究

立 教 大 学 ○藤 本 喜 八  
" 牛 窪 浩  
" 土 方 文 一 郎  
日本職業指導協会 小 松 信 重

**目的** 中学校卒業後、直ちに職業についた生徒たちは、それぞれどのような過程を経て、その職業生活に適応していくだろうか。その適応過程においては、どのような問題が生起し、どのように対処し、どのように解決しただろうか。これらの適応過程については、中学校時代にうけた進路指導がどのような効果をもたらしただろうか。

かれらの適応のプロセスを明かにし、進路指導の効果を評価・反省することを通じて、今後の進路指導に対する示唆を得ようとする。

なお、この研究は、総理府中央青少年問題協議会事務局の昭和 36 年度委託調査によって行ったものである。

**調査対象** 東京（2校）福島、秋田、新潟の5校を昭和31年3月～昭和34年3月に卒業し就職したもののうち、就職前「学校教師が、妥当な選択だと判断したものと疑問のある選択だと判断したものと」、就職後「全然転職しなかったか転職1回のみにとどまるものと、転職2回以上のもの」との4つの組み合わせを含めて、男女計 60 名を選んだ。

**調査方法** 在学中の諸記録、雇用主の所見および協力校教師と本人の面接調査（テープ）の三つを分析した。

**結果** ① 職業家庭科の成績と図工の成績は、他の学科に比べて、職業適応のプロセスに関して、かなり有意の関係をもつと思われる。② 職業の選択においては、その決定の主体が本人にあることが肝要だと言える。③ 収入の多い職場とか民主的な企業主や経営者の職場のみが、本人を好ましい状況におくとは言えない。あわせて「仕事そのものに興味や満足をもてるようなところであり、本人の向上心に関して許容性が認められること、まわりの人のタイプが適当であること」も大切である。

**反省** ① 調査対象が 60 ケースという少数なので、上記の結果から直ちに一般化することは危険である。② 出身校と連絡のとれる卒業生が調査対象となったので、適応群が圧倒的に多く、不適応群が少数しか得られなかった。③ 面接担当教師の訓練が不十分で、面接によるデータの心理的レベルが不揃いとなった。

## 154 大学生の職業選択と価値観

北 山 雅 子

ある個人の人生に対する価値観と職業選択の間には彼なりの統一が成されていると考えられる。即ち、人生に於ける個人の生き方を規定する一要因としての価値観と生き方実現の過程で関係のある職業選択に働く職業的価値観との間に何等かの関係がある事が予想される。そこでこの研究では職業指導の一面として個人の職業選択の成功不成功を人生に対する彼の価値観との関係の上で予想する事が必要ではないかという観点から、大学生をとりあげ大学生の生き方に働く価値観と職業価値観及び両者の関係について調べる事を目的とした。これ等の価値観の問題は、ここでは行動そのものとしてではなく実際の行動の支えとなっている認知的レベルに於て扱っている。

調査は 1) Morris の 13 の生き方、2) Rosenberg の職業選択に関する質問紙の二部から成るものを用い、これを国際基督教大学教養学部男子学生 93 名、女子学生 98 名、計 191 名について施行した。

13 の生き方からは Morris が 5 因子—即ち、(A) 社会的自我抑制因子、(B) 社会的活動因子、(C) 内面的精神生活に依る自己満足因子、(D) 受容的協調的同情的因子、(E) 自己耽溺因子—を抽出している。一方、Rosenberg は職業的に関する 10 項目から、(1) 自己表現志向、(2) 他人志向、(3) 物質的社会的報酬志向の 3 つの職業的価値観を分類している。ここでは 5 因子と 3 職業的価値観とを整理の基とし、各々の間の関係を探そうと試みた。

この結果、結論としては (1) ここで用いた sample に関する限り職業的価値観は自己表現志向的であり報酬志向は弱いこと、(2) 生き方に働く価値観の中では社会的活動因子及び受容的・協調的因子が強く働いていること、(3) 生き方に働く価値観で社会的活動因子の強い者にあつては職業的価値観の自己表現志向が強く、生き方の方で自己耽溺因子の強い者にあつては他人志向との関係が低いということ、が得られた。

しかし、これ等の事は、ここで用いた sample の特殊性から導き出されたものであるかもしれない。この研究そのものは、まだ仮説証明の段階には至っておらず、仮説提起の段階にあるから、今後は、もう一歩進んだかつ広範囲の研究が必要だろうと思われる。

155 大学生の職業人としての態度形成に関する基礎的研究 (第5報)

—職業の適応尺度の再検討—

金沢大学 ○田 中 富士夫  
" 鈴木 達 也  
" 多 田 治 夫

金沢大学の第1回から第5回までの各学部卒業生に対して行った就業状況実態調査において、現職への適応水準を測定する尺度を使用するため次のような吟味を行なった。

まず、職業的適応を表す内容として、職業・職場への満足感、職場内対人関係、待遇に対する満足感、主観的適性、興味の有無等の領域を含む25項目を選んだ。これらの項目は夫々適応を表す項目15個と不適応を表す項目10個からなり、各項目内容が自己にあてはまるか否かの二件法で判断させた。

その結果、記入が完全な502名の資料を基礎として、スケログラム分析によって一次元的な累加尺度を構成するように項目を取捨選択した。その手続は、適応項目の肯定と不適応項目の否定が共に適応状態を示すものと解し、夫々適応側に反応した人数の少ない項目ほど高い適応水準を表すとみなして、25個の項目を適応水準の高さについて順位づけた。次に、高い水準の項目に対して適応的に反応しながら、それより低い水準の項目で不適応側に反応するといった誤の数を求め、グリーンの方法で再現性係数を求めたところ、 $Rep=.735$ であった。なるべく誤の数が減り再現性係数が高くなるように項目を除去していった結果、最終的には適応項目、不適応項目夫々7個、計14個で $Rep=.894$ にまで高めることができた。 $Rep.$ の高さ、各項目の反応率などから、この尺度は必ずしもガットマン尺度の基準を満たすものとはいえないが、スケログラム分析によって次元の異なった項目や非単調項目を除くことができたといえよう。

尚、このような項目の取捨選択によって、内容的にある領域の項目だけが残ったということは必ずしも云えないから、一応、職業的適応の水準を一次元的に把えることが可能なように思われる。

いま、適応側の反応を1個1点と数えれば、結局この尺度では適応水準を0点から14点にわたる段階に順位づけることができるわけである。

156 大学生の職業人としての態度形成に関する基礎的研究 (第4報)

—大学卒者の職務と在学中の学修科目並に課外活動について—

金沢大学 ○鈴木 達 也  
多 田 治 夫  
田 中 富士夫

金大卒業生第1回生—5回生を対象にした職業実態調査の中から卒業生の就職している職務の種類と特徴、更にその職務に就いて役立つ在学中の学修科目並に課外活動に関し意見を求めたのを取まとめたものである。比較的人数の多い代表的職務—高、中校教員、工学技師(計画、管理)、土木設計監督、現場技師(作業指導監督)、セールスエンジニア、理工学研究職(会社)、一般事務職(総務、管理)、営業販売、金融関係業務、医師、等—約1000名の資料をまとめた結果は次の通りである。

結果 1. 職務の特性については、夫々の職務の要求に応じて強調されている面が異なる。例えば教員では一般技能(加里版、タイプ、珠算、スポーツ、芸能等)、技術者や研究職、医師では一般的素養(語学その他の基礎学力、一般教養、広い専門知識など)が強調され、また金融関係、技術的管理職では技術的素養(作業管理技術とか会計簿記技術などの専門的テクニック)の要求が強い。

2. 職業生活に役立つ学生時代の課外活動としては、文化、スポーツ等のクラブ活動をあげるものは半数近くあり、殊に教員では高い。また青年団、自治会等の団体活動は多くの大学卒者が実社会(会社学校など)で集団指導の任に当たる場合が多い関係から、それが役立ったと考えられている。殊にその指導的役割の経験は意義があるとされている。また職務或は学部によっては実社会の体験、見学実習、或は碁、麻雀など趣味娯楽の広さが役立っているとしている。

3. 在学中修得しておくよ技能は職務によって特色があるが、教員では書記的特技、スポーツ、芸能に特技をもつこと、会社員では事務系、技術系で共通しているのは自動車運転、それに職務によって会話、珠算、趣味的特技を重視している。医師や研究職営業関係では語学力も重視される。

4. 学修すべき学科としては専門科目を重視すべきは勿論であるが、工学関係でも法経関係でも専攻学科以外の関連科目をもっと学修すべきことを強調している。また産業の進歩に伴い新しい管理技術や他の領域の学科の知識、語学などではロシア語など、もっと取入れるべき学科が指摘されている。

## 157 団地児童の生活に関する一調査

大阪府立大学 ○松原 慶太郎  
帝塚山学院短期大学 沢井 幸樹  
関西学院大学 仲原 晶子

前大会において、われわれは団地の主婦の生活に関する報告をしたが、その一連の研究として、今回は、団地の児童の生活における適応性ならびに生活態度を、都市の一般児童（即ち非団地）と僻地の児童との比較において調査しその特性をとらえようとした。

調査方法としては、牛島義友氏による適応性検査の劣等感 (A)、情緒性 (B)、家庭関係 (C)、学校関係 (D)、友人関係 (E) の5検査および生活態度調査として同じく、民主的態度と西洋的・西洋的心性のいずれも質問紙法による。

被験者は、西宮市内某小学校生徒5年、男子72名、女子72名（うち団地居住児童男子29名、女子41名、非団地男子43名、女子31名）および僻地校として兵庫県下某小学校生徒5年48名（男子28名、女子20名）である。

結果 各検査ならびに態度得点の平均でみるときは、適応性では団地児童は (E) を除いて僻地と一般の間に位し（僻地児童がもつとも適応がよい）、(E) では団地がよく僻地、一般となり、生活態度では団地がもつとも民主的、西洋的であり一般、僻地の順となっている。両検査を通じて、僻地を除いては女子が得点が高い。しかしこれらの傾向につき検定の結果、A、B、C、D、E 全検査の環境による差、および僻地、団地、一般の検査による差はいずれも5%水準で有意。僻地、団地、一般それぞれにおける各検査の結果での男女による差では検定結果いずれも有意な差は認められなかった。生活態度については民主的態度では、環境による差が5%水準で有意であったが、男女による差、さらには西洋的心性での環境による差、男女差はいずれも有意な差は認められなかった。なお各検査問題を各項目別に検定結果1%水準で有意な差が得られたものをその番号で示すと次の通りである。（牛島義友著 西欧と日本の人間形成 昭36を参照されたい）。適応性検査 (A) では、10, 12, 13, 14, 15, 18, 19, 21, 28, 29 (B) 4, 5, 6, 11, 13, 15, 20, 21, 25 (C) 9, 16, 17, 19, 20, 21, 24 (D) 3, 4, 6, 7, 16, 18, 20, 24, 25, 29 (E) 1, 20, 23, 24, 25, 26, 27, 28 民主的態度では 1, 2, 4, 5, 8, 9, 10 西洋的心性では 4, 5, 6, 8, 9, 10 であった。

# XII 社 会

## 158 児童集団間における個人間の親和反発 反応の偏倚傾向 (3)

—ダイアディック次元における社会的共感  
性の役割—

東京学芸大学 田中 熊次郎

### 問題

各種のソシオメトリック・マトリックスにつき、ダイアディック次元の分析を試みると、何れの集団(幼児・児童・青年・成人)の場合でも、相互的親和(選択)反応の類型がきわめて多くあらわれるが、相互的反発(排斥)反応の類型は意外に少なく、殆ど確率の期待値と有意差がない。このような傾向が示される原因は何か。主として、集団内の心理的要因について探究する。

### 研究の結果と考察

第1に、略画集団モデルのマトリックスでは相互的反応の類型が何れも確率の期待値と有意差がない。しかるに、現実の集団のマトリックスでは上述の如くなる。このことから、現実の集団のダイアドを媒介する社会的共感性の役割が、親和関係と反発関係において相違すると推論できる。複合反応総合マトリックスのダイアドの類型(45類型)の分布を細かくしらべてみると、親和関係では期待反応のまま残るものが少なく、反発関係では疑惑反応のまま残るものが多いことが示された。これから、集団内において親和的行動の認知が比較的正確であり、反発的行動の認知が比較的に不正確なことがわかる。

第2に、ソシオメトリック・テストの理由の応答をしらべてみると、親和反応の表出が明るく開放的で、そのため相互作用が反復されているのに対して、反発反応の表出が暗く閉鎖的で、そのため相互作用が一時的にとどまっていることが示されている。かように集団成員間の態度や行動において、親和的と反発的と異なる特色がある。このことが、前者ではその認知が正確に行われ、したがって相互的に一致する割合が多くなるのに比べ、後者ではその認知が正確に行われず、したがって相互的に一致する割合が少なくなるといえる。

なお、相互的反発反応の少ない原因には、構造次元の分析から、低位者の社会的共感性の未熟さも考えられる。このことは別の機会に詳細に報告する。

## 159 精薄児の証言の責任能力について (1)

東京都立青鳥養護学校 ○吉田 辰雄  
奈良家庭裁判所 犬馬 場 晃

目的 精薄児の供述について、その信憑性を問題にし、種々なる審判事件や、日常生活場面での発言(証言供述)がもたらす問題に対する為、彼等の発言が一体どの程度の採証の理由があり、又陥る危険に注意しなければならぬかを究めるため一連の実験調査を計画し、その第一として絵画テストを施行す。

方法 (対象) 都立青鳥養護学校及び大塚中学特殊学級生徒49名( $m=32$ ,  $f=17$ ) (手続) 刺戟提示図として縦80cm×横110cm大の模造紙に19項目からなる間に対応する内容を描写してあるものを提示する。各問は、Stem, Lipmann 等が明かにした決定問、完全選言問、認否問、認否前提問からなる。

結果と考察 各項目の採証から問題の傾向をみる場合に信憑力指数をとる。

$\left(\frac{r}{r+f} \times 100\right)$ 、但し  $r$ =正答、 $f$ =誤答) 不明とは、わかりませんと答えた場合で、そのこと自体は採証上の信憑性と関係ない。

第一に暗示問が証言に及ぼす度合として、各問に対する供述の性別平均信憑力をみると、指数が決定問  $m=41$ ,  $f=39$ . 完全選言問  $m=39$ ,  $f=34$ . 認否問  $m=47$ ,  $f=46$ . 認否、前提問  $m=21$ ,  $f=10$  の様になる。又、本実験項目中、2, 12, 14, 15 の色彩に関する問題から、同一色彩名の固執傾向を%でみると、出現頻度が4/4のもの、男子: 黒, 赤, 黄, 各々3.1%, 女子: 赤5.9%, 3/4回の者男子: 茶94%, 黒6.9%, 女子: 茶23.5%, 黒5.9%, その他は2回, 1回の割合で10色に分布している。暗示問の分析では、完全選言問は、肥: 普: 瘦 ( $\chi_0^2=5.2$ ,  $.05 < P < .10$ ) 大: 普: 小 ( $\chi_0^2=6.4$   $P < .05$ ) 高: 普: 低 ( $\chi_0^2=5.80$   $P < .10$ ) の如く各項目とも(普通)に答えるものが多い。認否問の有無、不明については、第9問(男子:  $\chi_0^2=22.6$   $P < .01$  女子:  $\chi_0^2=27.41$   $P < .01$ ) と、第11問(男子:  $\chi_0^2=7.79$   $P < .05$  女子:  $\chi_0^2=3.79$   $.01 < P < .20$ ) の如く、(無)と答えるものが多い。しかし、前提問を伴った場合の認否問では、第16問(男子:  $\chi_0^2=20.17$   $P < .01$  女子:  $\chi_0^2=7.27$   $P < .01$ )、第17問(男子:  $\chi_0^2=24.14$   $P < .01$  女子:  $\chi_0^2=32.50$   $P < .01$ ) で逆に(有)に傾く。最後に被験者の中での H. G. (I. Q. 76~85) と L. G. (I. Q. 46~55) を比較し暗示性をみると、男子は認否前提問を除き、各々  $P < .01$  で有意差が認められたが、女子においては、有意差が認められなかった。このことは、H. L. といっても問題(質問項目)に比して I. Q. が近いことによるとも一面考えられるので、なお一層の分析が必要と思う。

## 160 態度構造と購買行動 (1)

—保健薬使用に関する考察—

電通大阪支社 山本輝夫

広告活動の評価に関連して、広い意味で広告の受け手の心的準備態勢と直接的な購買行動との関係は、一つの連続的な行動のメカニズムの中で機能的に把握されなくてはならない。このような考え方のもとに、われわれは態度構造を購買行動との接点において解明することを究極的な目標として、主題の研究を企図したのであるが、本報告はその予備的な段階に位置づけられるものである。すなわち、われわれは、保健薬に関する調査に付帯した態度調査にもとづいて、本調査で明らかにされた範囲内で、保健薬の使用およびその広告に対する態度構造と保健薬の知名および使用状況との関連を究明し、今後の研究の指針を得ることを目標とした。

相互に積極的な関連を有することが確かめられた数個の態度調査の項目に関して、因子分析を行った結果は、独立した二種の要因が顕著に見出され、態度構造の主軸をなしていると判断された。一つは、新しい保健薬に対する関心を含めて広告活動に関連するものであり、今一つは、保健薬そのものの必要性に関する認識的態度である。

それぞれの因子に関して、好意的な反応を示すもの、中間的なもの、非好意的な反応を示すものを、態度構造上に差異を有するグループと見なして、社会的な指標、保健薬使用の実態などに対する関連の度合を検討した結果は、何れの因子に関しても、極めて顕著に態度の特質が反映されている。すなわち、学歴、年齢ともに高い方に積極的態度を示すものが多く、職業では、自由商工グループと労務系が著しい対照を示している。さらに、この態度の積極性に対するグループの差異がそのままのかたちで、保健薬の知名状況およびその使用経験の上に反映されていることも明らかにされた。

以上の予備的な考察は、態度構造の差異が具体的な購買行動の差異に反映されることを示唆する一つの事例として研究の今後の進展に対する有効な情報と共に方法論的な検討に役立てられるものである。

## 161 テレビコマーシャルの心理的評価について (II)

大阪大学 前田嘉明 難波精一郎

” 吉田光雄

万年社 〇阪久美

**目的** 従来のテレビ視聴率調査等の量的な調査では捕えることができなかったテレビコマーシャル (以下 TVCM と略す) の質的な側面を心理学的測定法を用いて捕えることが目的である。

**方法** 7~9 箇の TVCM 評定項目 (例えば楽しい—不愉快などの対語で、7 段階尺度) について、TVCM 視聴直後の印象を記入する。被調査者は、主婦と女子学生 100 名で、戸別訪問あるいは集団形式でインストラクションを行ない、自宅のテレビで指定番組を見て、その TVCM 印象を記入する。昭和 36 年 6 月から 37 年 7 月まで 6 回の調査を行なったが(注)1,2、そのたびごとに調査対象番組、被調査者、評定項目等を変えた。分析方法は、評定項目の相関係数、因子分析、系列範疇法処理等である。なお、第 6 回調査では、調査票回収時に記憶テスト等を附加し、TVCM が、消費者の会社に対するイメージやその購買行動にどのような影響を与えるかという問題の分析の第一歩の試みとした。なお今回は、第 6 回調査の結果を中心に報告する。

**結果** 因子分析によって、TVCM の印象を規定する 3 因子が抽出できた。すなわち、TVCM に対する感性的評価の因子、時間の因子、理解の因子である。今回を含めて 6 回の調査で、調査対象 TVCM、調査方法、被調査者、評定項目等を変えたにもかかわらず、毎回同じ 3 因子が抽出されたことは、因子の安定性を示すものとして極めて注目し得る。感性的評価の因子とは、TVCM のムード的情緒的側面を表わすもので、この因子は他の 3 因子に比べて一般因子的性格を持っている。時間の因子とは、TVCM が長く感じられるか否かということで、今回までの調査では放送時間が 60 秒を越えると長く感じられるようである。理解の因子とは、TVCM の内容や意図を理解できたかどうかを表わすものである。評定項目の度数分布を系列範疇法処理して TVCM のスタイルと評定の関係を求めたが、今回までの調査で分ったことは、動画や線画や音楽を主体とした TVCM は、感性的評価がよく、タレントが実物を示しつつその使用法や効果を説明する実演形式の TVCM は、理解的側面の評価がよくなるようである。

(注) 1. アドリポート 2. 日本心理学会発表論文。

## 162 主婦の生活時間とマスコミ接触との構造

(調査報告)

セールス・プロモーション・ビューロー

田 岡 信 夫

本報告は、本年8月、東京、大阪、名古屋の三地区に於て実施した団地世帯 1500 世帯の主婦に対して行った団地連合調査の中、「番組趣向調査」「生活時間調査」「マス・コミ接触時間調査」の3つの調査結果から、100 ケースの典型によるケーススターディーを中心として、その関連構造を仮設構成として提示するものである。

1. 一般にゴールデンアワーと考えられる時間を除いて、午前 11 時より、午後 6 時までの間の最もマス・コミ接触の稀薄と考えられる時間を中心として分析した。この分析によれば、団地の主婦は3つのタイプに分けることができる。即ち、育児中心型①、団地標準型②、レジャー指向型③、の3つである。しかし、この3つのタイプといえども、食事時間、食後休養時間、夕方買物炊事時間に於て共通しており、ここに生活慣習の伝統的な拘束労働時間の存在を知ることができる。3つのタイプは、その他の時間、11時より30分までと、3時より4時までの時間に於てそのタイプ分けが可能となる。

2. この生活時間区分とタイプ分けによって、団地主婦の生活時間のサイクルを、労働欲求、休息欲求、レジャー欲求の3つに分けることが考えられ、この3つのサイクルの連続構成によって生活時間内容が構成される。即ち、生活慣習(伝統的な生理的欲求に対応した文化として)に規定される労働欲求、肉体的な休息欲求、消費生活(趣向的な)によって生れるレジャー欲求の3つである。個人の趣味教養は、今日の如き消費文化の中では、第3の型態としてレジャー文化の意義を特性づける。

3. マス・コミとの接触習慣は、主婦が本来的にマス・コミとの接触を指向しているのではなく、マス・コミ環境の中にある個人の生活の一部として、休息欲求に対応してマス・コミの接触は存在する。したがって、その接触構造は、この時間内に於ては、多元的に分化しており、その指向欲求は、報導性と教養性(労働欲求に対応して)映画性(休息欲求に対応して)音楽性(レジャー欲求と対応して)の3つにその指向性がみられる。このことは、人間の本来的な生活欲求が、単なる娯楽の指向性をもつものではなく、高い文化の指向性への欲求を示す契機をもつてであり、本日のマス・コミのもつ娯楽性、消費性に対して鋭い反省の資料を提供する。

## 163 テレビ番組を中心とした媒体間の関係分析

早稲田大学生産研究所 ○木 下 敏  
兼 子 宙

### 分析の目的

この分析は、テレビ番組の視聴傾向を中心とし、ある番組をみる人が、どんな雑誌、新聞を読み、どんな音楽を好みどんな映画を見るか、などを調べ、それらの間に、どのようなクラスターが存在するかを見出すことを目的とした。

分析の資料は、東京放送により行なわれたラジオ・テレビ調査の資料の一部である。

### 分析の方法

一対の媒体間のクロス表に基いて期待頻度を算出し、それと実数との隔たりを求め、隔たりの大きいもの、小さいものを $\sigma$ 値との関連で、有意な隔たりにあると思われるものを拾い出すという方法をとった。

ここでは、 $1\sigma$  から  $2\sigma$  までの範囲に入るものを、やや有意な関係、 $2\sigma$  以上の範囲に入るものを、有意な関係として、それぞれ、相関的關係、反撥的關係を拾い出した。

この方法を6つの媒体をそれぞれ組み合わせる行ない、内部関係と併せて分析した。

### 結果

有意な関係のみを拾ったものを基本的クラスターと呼び、これを示すと、

(イ) スポーツ番組を中心としたSクラスター

この中には男性視聴者の多いプロレスを中心としたSmクラスター、プロ野球を中心とするSsクラスター、プロ野球と結びつくが、女性の多いと思われる、ジャズ番組を中心とし、週刊誌女性自身を含めるSfクラスターが、含まれる。

(ロ) クラシック音楽や歌舞伎などの含まれるCクラスター

この中には、日本の素顔、クラシック音楽などのCaクラスター、源平芸能合戦などのCpクラスター、アメリカ映画などのCsクラスターがある。

(ハ) その他に、主婦の雑誌、母もの映画、毎日新聞などのHクラスター、ドラマ番組のみのDクラスター、平凡、明星、歌謡曲のPクラスター、ララミー牧場、モーガン警部のGクラスターなどがある。

やや有意な関係を含めると、各クラスターの特徴は、なお明らかとなる。

なお、扱われた媒体は、テレビ、新聞、雑誌、映画演劇、各種催物、音楽、の6つである。



## 164 夫婦の態度尺度作成の試み

日本大学 ○妻 倉 昌太郎  
" 川 口 和 男

結婚幸福度の予測の研究において、もっとも重要であるとされるのは本人および配偶者の性格である。しかるにわれわれが研究したところでは、既存の性格検査を用いたのでは、性格と幸福度との関係を把握できなかつた。(日心26回大会発表)。そこでこの側面には別の角度からの接近が必要であると考える。本研究はそのような構想に基づく一連の研究の中の一つである。

夫婦の態度尺度を作成するに当って「夫の妻に対する態度尺度」と「妻の夫に対する態度尺度」との二つに分けることとし、尺度構成は Thurston の等間隔法によることにした。尺度構成のもととなる意見の蒐集は、大学生からまず男性に対する意見、女性に対する意見の提出を求めこれを夫婦間の態度を表現するように書き改めた。さらに、読売新聞社が昭和36年12月に実施した主婦アンケート「現代家族の意識構造ならびに存在型態調査」、家庭裁判所古谷氏の役割りテスト(夫用、妻用)、Termanの夫婦間の不満に関する研究その他を参考にして、われわれが意見を追加した。この手続によって夫の妻に対する態度に関する意見95項目、妻の夫に対する態度に関する意見97項目を決定した。

これらの意見を心理学専攻学生男子36名女子23名に依頼してそれぞれ夫または妻に好意的な意見から非好意的な意見まで11段階に分類させた。男子学生には夫の妻に対する態度に関する意見を分類させ、女子学生には妻の夫に対する態度に関する意見を分類させた。分類作業は各意見を別々に印刷したカードを与えて行なった。

このようにして分類された結果に基づいて各意見の階級別(11段階)の頻数と累積頻数を求め、さらに中間値を算出して各意見に配当されるべき尺度値とした。また各意見ごとに四分偏差を算出して、後に尺度構成の際当該意見取捨の一基準とした。

かくして、夫の態度に関する95項目、妻の態度に関する97項目中から、尺度値においてほぼ等間隔になるようにそれぞれ20個の意見を選択し、夫の妻に対する態度尺度、妻の夫に対する態度尺度を構成した。

ひきつづきこの尺度を多数の夫および妻に示して、各意見の類似度および信頼度を算出すべく研究中である。

## 165 大学生の宗教的意識と宗教的態度

熊本大学 葛 谷 隆 正

**研究目的と方法** 今日の道徳の頹廢・青少年非行の増大は欧米に比し日本の宗教教育の不徹底・日本人の宗教心の欠如がその重要な一因であると強調されている。そこでわれわれは特に大学生の宗教的態度とその意識との関係を明らかにしようと意図した。Ssは熊本教育学部・熊本女子大の2年次学生255名(M116, F139), 調査期はS37年5月の中・下旬であった。

**結果とその考察** 1. 親で信仰宗教をもつもの91%, 学生では僅かに17%。その宗教は前者では仏教94%, 神道6%, キリスト教1%・後者ではそれが46, 16, 39%の順となり、両者で信仰宗教の一致するもの50%(M67%, F41%)で、米国の資料(81%が一致)と著しく異っている。2. 宗教的態度尺度による最低値6.94, 最高値86.11, 平均値41.39(100点満点に換算して)、その上位群は下位群に比し、信仰の深さ・宗教の必要性・神仏への礼拝・教会・寺院・集会への出席・神仏の存否・神仏の加護・神罰・仏罰・祈りの効果・天国地獄観・靈魂不滅等の項目について、有意的により積極的により肯定的であり、更に幼少時よりの宗教々育をより重視(67点対21点)し、既成宗教に対して前者の過半数が“凡ての宗教はその根本の教えは同一である”とする(58%対38%)のに対し、後者はその40%が“今日の宗教は凡て形式化し墮落し、真の宗教は一つも存在しない”とする(前者10%)。3. 大学生の宗教観を全般的にみると、信仰的態度が10%内外、疑惑的態度が2~30%, 不信的無関心的態度が6~70%で、米国の資料ではこれがほぼ逆転している。4. 学生自身が家庭の宗教的しつけについて、“全然行われていない”とみるもの45%, “余り行われていない”とみるもの33%で、信教に関して家庭が全く無関心とするものが44%である。以上から宗教々育については、米国ではよりドグマティックであり抑圧的であるのに、日本では著るしく放任的無関心的でありすぎるという感じをうける。われわれは人間が心身のすべての面で幼少年期から青年期へ更に成人期へと成長発達し、変化成熟していくという根本原理を忘れず、宗教的概念や意識についても、より現実的の外部の客観的神秘の特殊の非個人的なものからより抽象的内部的の主観的合理一般的個性的なものへと変化することを理解して、青年の宗教に対する疑惑的不信的態度も新生の苦悩の現われとしてこれを認め、幼少年期青年期のそれぞれ独自の宗教的欲求を尊重し、それらが適切に満されるようもっとも積極的な指導援助激励を提供しなければならぬ。家庭学校社会がこの責任を十分果さない限り、多くの人々を虚無主義的利己主義的無神論的方向へと追いやることとなるであろう。

埼玉大学 山根 薫

埼玉県民の各地域、各階層にゆきわたるように配布された質問紙に対する回答 2394 枚を分析調査した。問10 男女共学をどう思いますかに賛成するものが多いことはいうまでもないが、男よりも女がやや高率である。「女らしさがなくなる」から反対というのが、率は低いが、第2位になっている。そのうちでも学歴が少ないほど高率の反対をしている。問11 男女の交際をどう思うかについては、未婚と既婚とのちがいで、はっきりと対立した考え方をしている。それは性別、年齢、学歴をとわず同じ傾向を示している。すなわち未婚者は「相手によってはよいと思う」ているのが 53.5—76.5% いるのに対し、既婚者も「反対」を表明しているのは極めて微々たるものであるが、やはり「親になんでも話してほしい」と考えているものが 48.1—70.0% になっている。前者後者とも女子の支持率が高い。年齢だけでみれば、20代30代において高率である。職業別にみて大きい差はないが、ただ学生群だけはとくに高い。若くて未婚である条件から当然であろう。問12 結婚の相手をどう選ぶかについて「相談してきめる」が、男女、未既婚のすべてを通じて最多にあげられている。53—89%である。このような数字の裏に「自分の考えで決める」のがよいと考えるものが、男、大学、高専卒のもの 42.3% に達している。問13 結婚届については「式をあげてすぐ届ける」べきだというのが、既婚者で 80—93%、未婚者で 66—87%、後者がやや低い。この低率であることに注目したい。問14 結婚式については「式は厳そかに祝宴は簡単に」を支持するものが男 63.0—91.8%、女 57.2—81.6%である。女子がやや低いのは、年齢の差ではない。女子に「世間から笑われぬ程度に」はやりたいと考えたり、未婚女子に「一生に一度、派手にやりたい」気持ちをもつものがあることから出てきた結果とみたい。問15 方角や日取りについて、男は学歴や未既婚に関係なくあまり「気にしていない」が、女の場合は「悪いという日取りや方角はさけたほうがよい」としている。以上に答えられているものは、回答者の現実の生活や内在する要求のからみ合いの結果として出てきたもので、答がそのまま現実の生活行動として具現されるわけではないであろう。それにしてもここにみる数字の背景になまの人間の姿が揺曳しているのを見ないわけにはいかない。

## 167 テレビ・ラジオ CM の実験的研究 (1)

—テロップ CM における

呈示の語数と時間について—

順天堂大学 ○加 賀 秀 夫  
東京教育大学 金 子 隆 芳  
" 水 野 欽 司  
" 服 部 政 夫  
東京放送 久保田 了 平  
" 上 村 忠

テロップ CM の有効呈示条件について、呈示する語数と時間の面から検討した。

方法 実際の広告文から選ばれた自立語を文脈なく配列した模擬テロップを、明室にて映写幕に投影し、単語の直後再生を求める。配列は、行数4条件(1~4行)と行長3条件(1~3語)の組合せよりなる。したがって呈示語数については1語から最大12語までとなる。連続2語の意味連鎖が強い場合と弱い場合を加え、合計20条件につき各8枚のテロップを用い、実験用テロップは全160枚。呈示時間条件は3, 5, 10秒。被験者は中学生192名を主体とし、他に女子短大生、大学生を加えて参考とした。

結果と考察(呈示語数の効果) 呈示語数に対して再生語数をプロットしたものを再生曲線といい、両者が一致する場合を完全再生直線と呼ぶと、呈示3語までは再生曲線は完全再生直線とほぼ一致するが、呈示4語あたりで急激に上昇を止め、再生のマキシマムに達すると曲線はしばらく横ばいを続けやがて下降の傾向を示した。この関係はいずれの時間条件にも平行的に現われた。(呈示時間の効果)一般に呈示時間を長くしても再生量はわずかしこ増加しない。3秒のとき最大再生量約2.7語に対して、5秒で約2.8語、10秒では約3.5語であった。時間が大となるにつれて単位時間当り再生量は低下しており情報伝達の効率は悪い。大学生に10秒間呈示したときでも最大再生語数は約4.5語(13.6字)であり、現行テロップ(平均約20字)は、あきらかにむだな語字が多すぎる。これの対策としては、実験結果から呈示時間を延ばすよりも語数を減らす方が得策であることが知られる。同じ時間をかけるならば、一度に多くの内容を呈示するよりも、内容を分割して数回に呈示する方が効率がよい。なお、単語間の意味連鎖の強弱は再生量にほとんど影響しなかった。この結果から、放送CMのことばは、多少意味的にバラバラでもアトラクティブな3~4個の単語を強力に打ち出す方が望ましいと思われる。

## XIII 文 化

168 テレビ・ラジオ CM の実験的研究 (2)

—ラジオのスポット CM の長さや反復の効果—

東京教育大学	○服部政夫
"	金子隆芳
"	水野欽司
順天堂大学	加賀秀夫
東京放送	久保田了平
"	上村忠

目的 ラジオのスポット CMの有効表示条件を求め、CMの長さ(使用語数、表示時間)および反復と語の再生量の関係を検討する。

方法 材料 テレビCMの実験で使用した語から聞き誤りの生じやすい語を除いた164語をランダムに配列し、テープに録音したものを用いる。条件 I. 語数条件と時間条件を組み合わせて、3語—5秒、5語—5秒、5語—10秒、8語—10秒、8語—20秒、12語—20秒の6種のCMを各2組、計12CMを1系列とする。II. くり返しの型2種(全語反復、各語反復)、反復回数2回および3回を、5語(5秒)、8語(10秒)の2種の語数条件と組み合わせ、計8CMを1系列とする。手続 各CMをランダムな順序で被験者に聞かせ、1CMごとに直後再生を求め、被験者は高校女子196名。

結果 (1) 各語あたりの平均再生率は、表示語数が増すにつれて著しく低下する。(2) 1CM当りの平均再生語数は、表示語数条件が3語から8語までの間では、わずかに増加の傾向を示すが、再生語数4語で横ばいとなる。この結果はテレビの場合と似ている。(3) 表示語数と同じならば、時間条件の変化(朗読の速さ)は再生量に影響しない。(4) CMの伝達効率を単位時間当りの平均再生語数で見ると、テレビの場合と同じく、表示時間が長くなると低下する。(5) くり返しの回数の効果は一応認められるが、あまり顕著ではなかった。また、各語反復よりも全語反復の方が、一般にやや高い再生率を示した。

考察 以上の結果を実際の放送CMの作成と関係づけて考察する。1CM中の聴取者に訴えたいポイントは3~4語にとどめるべきで、むしろこれら中心となる語を引き立てるような表現法を工夫すべきであろう。訴求ポイントをそれ以上増すことは、肝心な語の伝達を妨害しかえって逆効果となる。したがって、5秒スポット、10秒スポット、20秒スポットのどれがよいかの問題は、この中心の語に最も強く、魅力的な印象を与えるためには補助的な語をどの位使用すればよいかの問題におきかえることができる。反復については、聴取者が反撥を感じないような配慮が必要で、その回数も2~3回が適当ではないかと思われる。

169 テレビ・ラジオ CM の実験的研究 (3)

—ことばの種類別効果と配列位置効果—

東京教育大学	○水野欽司
"	金子隆芳
"	服部政夫
順天堂大学	加賀秀夫
東京放送	久保田了平
"	上村忠

実験用CMの各語についてことばの種類別に直後再生率を求め、次の所見を得た。テレビテロップでは、(1)「カタカナ語」が最も再生され易い。ついで「数字を含む語」「ひらがな語」、かなりおちて「漢字かな混り語」、さらに最も悪いのが「漢字語」であった。漢字語の再生率はカタカナ語の約半分でしかない。各文字種類の実験テロップ中の出現率は、放送テロップにおける各文字の混合比を忠実に代表しているため、この結果は現行テロップの実状を示しているときみなされる。(2) 現行テロップの漢字使用率は約38%であるが、これは各種の調査統計から知られる新聞、雑誌などの成人向 printing media の使用率に近く、実験結果からみて、現行の使用率はもっと下げるべきであると思われる。また、外来語(カタカナ語)は、目だち易く現状においては確かにその有効性が認められる。

ラジオCMでは、(1)「外来語」と「数字混り語」と「その他」の三つに大別すると、外来語はテレビ同様に再生成績がよい。(2) 数字混り語はやや再生率が低い。この点テレビと異なった。数字の伝達においては聴覚は視覚に劣ることが認められる。

ことばの配列位置による再生率を比較してみると、テレビテロップでは、(1)各単語を行列に並べたとき、最上行が最もよく、下へむかってわるくなる。ただし表示時間が増すと(10秒以上)、最下行も再生成績がよくなる。左右については上部では、左がよく下部では右側の再生がよい。一般に表示語数が多い程以上の効果が顕著に生ずる。(2) 結局放送テロップ作成に当っては、CMの重要部分を画面の左上に置くのがよく、中央部や左下方に配置するのは避けるべきであろう。

ラジオCMでは、各語の出現順に再生率をみると、(1)一般に最初と最後がよく中頃はわるい。CMの長さが増すと、初頭効果はうすれ終末効果のみが著しく強調されてくる。(2) したがってCMの訴求ポイントは、文の末尾に置くのが実際上有効な方法で、特に長いCMにおいてはこの点に対する配慮が肝要であろう。

## 170※ 外国人留学生の日本における生活適応に関する一調査

東京教育大学 入谷 敏 男

**目的** 留学という問題が内外を通じて次第にやかましく論じられつつある事情にかんがみて、現在来日中の六ヶ国の留学生(欧米三ヶ国; アメリカ・ドイツ(スイス)・スペインと東南アジア三ヶ国; 中国・インド(セイロン・パキスタンを含む), タイ)の中から男子学生10名をランダムに選び出し、日本という特殊な生活環境に6ヶ国のそれぞれ異った文化的背景をもった彼等がどのような留學生生活を送っているかについて調査を行った。

**方法** 質問紙法により(1)個人の経歴(質問15項目)(2)各個人の生活適応度(質問12項目)(3)現代の日本に関する意見(質問6項目)について英文で印刷したパンフレットを各留學生の寄宿する宿舎、下宿等に調査者が訪問して協力を依頼し、十日以内に回答を求めるという手続をとった。

**結果** 得られた結果を総括的に見ると大体予想したこと予想に反したこと、および今まで気づけなかった諸事実が発見され、今後の留學生の受入れ対策に重要な方向転換を促す機会を提供するものを含んでいるように思われる。

まづ留學生として共通的に見出された現象に、独身者が多いこと(全体の88%)、比較的裕福な家庭出のものが多いこと、兄弟姉妹の数が多くこと、および長期滞在を希望するものが多いこと等でこれはほぼ国籍、留學国の如何を問わず一般的に認められる事であろう。

次に日本における留學目的(日本で何を勉強するために来ているか)についてみると欧米系では人文科学、社会科学専攻者が圧倒的に多く(人文54.0%、社会39.0%)、東南アジア系では自然科学専攻者が大多数を占めている(86.7%)。これも欧米および東南アジア諸国の事情を考慮すれば当然うなづける事柄である。

この専攻科別に見られる違いも一因となってか両留學生間の日本における生活適応度に関して著るしいひらきが見出された。その主なものをのべると次の通りある。

(i)日本語の理解度。東南アジア系の学生が欧米等の学生(但しすでに長期滞在のスペイン人学生を除く)よりやや上廻る傾向にある。(ii)住居。東南アジア系の学生が都内の留學生会館に殺到している(全体の87%)のに対して欧米系の学生はここをさけてなるべく個別的なアパートや日本の下宿に寄宿する傾向にある(全体の75%) (iii)日本食の嗜好度。品等尺度法により非常に好きから嫌いの6段階の評定によって調べたところ、欧米系の学生は非常に好きからかなり好きの間に位し、東南アジア系の学生にあまり好きでない所に落ちており両者の間には統計的な有意差が見出された。(t=3.01, p<.01) 又郷土食の摂取度については西洋料理、中国料理等の比較的手に入りやすい米、麵、中国人の留學生と自国料理の手に入りにくい、タ

## 171 舞踊におけるフォルムの表現的意義について

一静的なフォルムによる表現とその観照—

日本大学 松井 三 雄  
東京学芸大学○渡 辺 江 津

**研究の目的** 一定の主題を静的なフォルムで表現する場合表現者はどのような意図でフォルムを形成し、観照者はその意図をどのように享受するかを分析し考察する。

**実験の方法** 第1実験—清潔、平和、勇氣、虫の声、光、おろかさの主題を与え、それを即興的に表現させそのフォルムを撮影した。第2実験—6つの主題を表現した6枚の写真を観照させ、それぞれのフォルムをどのようにうけとったかを、自由記録、主題とモチーフを指示しての記録、フォルムのどこを観、なぜそのように感じたかの記録によってしらべた。被験者—(表現)大学体育科生および舞踊部員45名、(観照)大学一般学生20名、大学舞踊部員30名、舞踊を専門的に行なっているもの20名、実験期日および場所—昭和36年6月—9月、教室、舞踊練習場。

**結果と考察** 表現—表現者がどのような意図でフォルムをつくったかの内省にもとずいて、主として意を用いた点を腕、脚、顔の向き、全体印象の項目にわけ、身体の部位がどのように使われているかを主題別に比較した。その結果、主題とモチーフによってそのあつかいはそれぞれ異なっており、主題によって一定の傾向のあることがみられた。観照—自由記録を、主題をえらんだ時のカテゴリーによって緊張—弛緩、明かるい—暗い、安定—不安定の情調によって分類すると、勇氣—緊張、平和—弛緩、平和—明かるい、おろかさ・虫の声—暗い、清潔—安定、勇氣・虫の声—不安定の情調を感じるものが多く、これにも一定の傾向が見られた。主題とモチーフを指示しての観照では、勇氣82%、虫の声60%、清潔・平和・光・おろかさ40%~48%の者がそれを感じるとしていた。その場合、観点となった部位は、勇氣—腕、おろかさ—脚と全身、清潔—顔、光—全身とフォルムによって異なっており、いわゆるデ・フォルムされた部位がひとつの観どころになっている。さらに、それらの部位のどのようなところから感じたかの記録では、フォルムの形態や動きと具体的に結びついてとらえているものと、いまだ抽象的な段階でとらえているものがある。しかし、表現者の意図するところは、観照者にも大体共通した意味でうけとられていることが知られた。

## 172 絵画における価値感情の問題 その1

日本大学 岸上 幸記

**目的** 絵画における色彩の作用を調べる。純色に対する判断と、その純色に相応する色彩相群に造型が加わった場合の判断の違いによって、絵画から受ける感のみようとするものである。

**手続** 刺激図形は 27.1×33cm の白紙に 18×26.5cm の絵の原色版を貼ったものである。4枚 (R, B, 色, 斉藤義重, G色, E, Matta, Y色, 江見絹子)。被験者は一般学生の男, 女各 20名, 年令 19才~26才, 方法は, Osgood の S.D法による。評定尺度は7段階で, Evaluation から 10個, Potency 8個, Activity 5個, その他から 2個, 計 25 の対形容詞を用いた。刺激提示はランダムで被験者は絵を見ながら評定した。

**結果** R色, 斉藤義重の作品に対しては, 積極的で, 強く, きびしい, 興奮的で熱く, 変わりやすく, 不潔である。B色, 斉藤義重の作品, 悲観的で, 圧縮されて重く, やや清潔である。G色, E. Matta, 病弱で, 暗く, 消極的で, 女性的で弱く, 意図的で冷たい。Y色, 江見絹子の作品, よく調和して, 優美で, やや自由で複雑である。

**評価** 潜在性, 活動性のそれぞれの平均値 (Factor Score) を算出すると, (男子) の場合, 評価: R色, -0.3 B色 -0.1, G色 -0.5, Y色 0.4, 潜在性: R色 0.5, B色 0.4, G色 -0.2, Y色 0。活動性: R色 1.0, B色 -0.2, G色 -0.3, Y色 0.1。女子の場合, 評価: R -0.1, B 0.3, G -0.5, Y 0 潜在性: R 0.4, B -0.2, G -0.5, Y -0.2。活動性: R 0.7, B -0.1, G -0.4 Y -0.1。

三次元の意味空間 (Semantic Space) の図から見ると, 個々の作品がしめる位置は, まちまちであるが, 男, 女の判断の仕方は同じ方向を示しているといえる。ただY色の作品に対しては違った方向を示している。女子は悲観的で強く, 大きいと見ている。

R色, に対しても, よく, 楽観的で暗いと, 男子とは異質な見方をしている。G色, 新しいと見ている。これは男女の感覚の相異からくるものである。

**考察** 1) 一般学生と画学生との比較, 男女の比較。2) 純色とその相群との比較, これらは Distance Score を求めることによって, 数量化できると思う。3) 対形容詞間の相関を求め, 因子分析をすることによって, もっと, 数量的に明らかになると思われる。

## 173 音の知覚恒常性の原理に基づく音響堂内の壁の構成方法

宇部短期大学 重永 幸男

本研究は自由空間に最も近い戸外屋上 (地上高 16m) で 12種の刺激音を VP より 5m から 60m まで 5m 間隔で, その提示布置を変化させず際, 音の強さ (Loudness) の恒常性が如何になるかを明らかにし, あわせて, より音響効果の優れた音響堂建設のために応用せんとするものである。

宇部短大三階建校舎屋上 (60m×10m, 地上高 12.7m) で 2個の Reflex Horn Type のスピーカーを高さ 3m の台上に取つけ (Voice Coil の中心軸は屋上 3.3m になる)。VP は鉄製台上でその耳軸が屋上 3.3m になる様に高さを調節し, 比較刺激音量調節用廻転式可変抵抗器で自製法により音の強さを判断する。標準刺激の提示位置は VP の斜右前方 3m, 比較刺激の提示位置は正中面前方 5m から 60m まで 5m 間隔で 12 個所である。使用した音刺激は, 言葉, 音楽のほか純音 10種すなわち, 100c/s, 200c/s, 400c/s, 700c/s, 1.5Kc/s, 3Kc/s, 4Kc/s, 6Kc/s, 8Kc/s, 10Kc/s, 計 12 種である。これらを Sony 製 777 型録音機に提示時間 3.9秒, 休止時間 1.3秒の組合せで録音し, 更に山水製 Q=50 で増幅し, 切換器を通してスピーカーに接続し, この回路に音量調節用抵抗器をいれた。VP の態度は開眼発信態度のみであった。標準刺激の強度 (Intensity) はスピーカー前方 30cm で 104dB, VP の耳軸の中点の位置で 90dB。使用した音圧測定用計器は日本電子測器製 SL-8B 型指示騒音計。VP は正常な聴力を有する大学生 15 名。判断回数各自 144 回, 計 2,160 回。

**結果** 5m から 20m まで (第一範囲) は恒常値の減衰が極めて著しい。特に 100c/s, 10Kc/s は極度に減衰する。20m から 40m まで (第二範囲) は全ての周波数の音刺激が安定しており, 400c/s, 700c/s, 3Kc/s, 1.5Kc/s, 6Kc/s, 8Kc/s, 4Kc/s, 200c/s, 10Kc/s, 100c/s, の順に恒常性が高い。40m から 50m (第三範囲) では 100c/s, 10Kc/s, 200c/s を除けば再び全体的に恒常値が下がる。50m から 60m (第四範囲) では全周波数の音刺激が再び安定する。ただ恒常性は 3Kc/s, 400c/s, 700c/s, 1.5Kc/s, 200c/s, 4Kc/s, 8Kc/s, 6Kc/s, 10Kc/s, 100c/s の順に高くなり第二範囲内とはその順位が変わる。残響時間が長くなると恒常性が上がる (第 27 回大会報告) ので, 音響堂内のステージからの距離に基き, その範囲内毎に異なった周波数特性をもった音響板を使用して知覚的に同一条件の空間構造を作ることが出来る。即ち物理的には異なった音響特性を有する空間構造であるが感覚的には, 奥行知覚が参与するから全く同一な空間条件となる。

## 174 少年鑑別所における処遇の研究

— 現実場面の分析を中心として —

### 1. 問題と方法

東京少年鑑別所	○中島 武二	台 利夫
〃	上芝 功博	大島 勲
〃	山田 晃一	三橋 潤二
〃	佐藤和喜雄	

我々は処遇という言葉をも、矯正機能として、その施設が荷っている役割を果たすための、施設側から、収容にむかう formal な働きかけの作用として考えている。処遇は本来意図的な作用であり、従って操作可能な変数と考えられるべきものである。このような観点にたつと、処遇は、従来「永年の経験」とか、「勘」とかに頼っていた蒙昧時代を脱し、科学の対象として、学問的にとりあげることが、可能となる。我々は、少年鑑別所が負わせられている矯正機能を果たすためには、どのような変数を操作することが、最も効果的であるか、でき得れば、操作が、より容易で、且つ効果のある変数を見出してゆきたいということに、我々の出発点を求めた。

鑑別所に課せられた法的、社会的な要請としては、次の三つの機能が、考えられる。

1. 少年を保護収容するという Detention の機能
2. 鑑別するという、診断的、分類的な機能
3. 収容少年の資質の改善を、はかるという治療的、教育的機能

である。

更に鑑別所は、他の矯正施設にない、特異な性格をもっている。その第一のものは、成員の流動性ということであり、その第二のものは、収容期間が、極めて、短期間であるということである。鑑別所における、より良き処遇とはかかる条件下において、先にかかげた三つの要請のより良き調和点を見出してゆくことにあるのではないかと考えられる。我々は、このような、共通の問題意識に立って、鑑別所における処遇のあり方を探求しようとするものであるが、正しい現実認識の上に立ってこそ、将来に対する展望も、またひらけてくるという観点から、先ず鑑別所における、現実の処遇がどのように行われ、それが、収容少年達にどのような効果を与えているかという、現実場面の分析に着手したのである。

## XIV 犯 罪

## 175 少年鑑別所における処遇の研究

—現実場面の分析を中心として—

### 2. 情報と認知構造の変容 (その1)

東京少年鑑別所	○三橋 潤二	中島 武二
〃	台 利夫	上芝 功博
〃	大島 勲	山田 晃一
〃	佐藤和喜雄	

鑑別所の新入少年は鑑別所に対してそれぞれ異った認知構造をもっている。その認知構造により、鑑別所に対する構え、鑑別所内における生活態度或いは拘禁の及ぼす影響が違ってくる。そして、それらが鑑別所の鑑別業務に、プラス或いはマイナスに作用してくる。

**目的** さまざまの情報と認知構造をもった少年が入所してきて、オリエンテーションによる formal な情報の提供を受け、更には家族の面会、調査官の面接及び同室少年からの informal な情報の提供を受け、その認知構造がどのように変容していくかを、4つの時点即ち入所前、入所後2日目、1週目、2週目において捉える。

**方法** 自由記述式の予備調査を行い、これに基づいて、項目を選び、少年に強制選択させる。

**対象** 当所入所の新入男子少年。14才から19才まで。人数は調査内容により、45名から163名まで。

**結果** 入所前の情報源は「警察の留置場で一緒になった少年」から(58%)と「交友関係での遊び友達」から(33%)とが多く、その内容は「暴力のたまり場」(40%)「懲罰の場」(24%)であるが、これを鑑別所の機能的側面に限定して、それに対する認知の仕方を、次の5項目に規定して強制選択させると、「懲罰の場」44%、「反省の場」31%、「治療の場」11%、「診断の場」10%、「預りの場」4%となる。入所後2日目では「懲罰の場」が0%となり「診断の場」39%、「反省の場」37%と変り、 $\chi^2$ 検定で1%水準で有意である。入所時のオリエンテーションが強く機能していることが認められる。

## 176 少年鑑別所における処遇の研究

—現実場面の分析を中心として—

### 2. 情報と認知構造の変容 (その2)

東京少年鑑別所	○佐藤和喜雄	中島 武二
〃	台 利夫	上芝 功博
〃	大島 勲	山田 晃一
〃	三橋 潤二	

第二発表者三橋の研究に引続き、同じ方法と目的を持って、少年が入所後、7日目と14日目とで、いかなる情報を得、いかなる認知構造を持つようになるかを追求するのがこのパートである。非公式の情報提供者は、同室の少年達、面会人(保護者又はそれ相当の者に限られている)、家庭裁判所の調査官である。同室の少年からは、審判に関する情報を得ることが最も多く、しかも誤った情報を、日が経つにつれて多く受ける様になる。家族等と面会した少年達の多くは、彼等から、家庭の消息をきき(82%)、審判の日について教えられ(75%)、所内ではおとなしくしなさい云々といわれ(70%)、仕事や学校の話を(63%)。家庭裁判所の調査官の面接を受けた少年達も、所内ではおとなしく云々といわれ(44%)、家族についての消息をきき(35%)、そして処分について或いは暗示的に或は断定的に、話されている(34%)。予備調査を基にして作られた、鑑別所に対する5つの認知の仕方のうち、一つだけを選ばせた結果、入所後7日目の少年と、14日目の少年では、その選択の仕方に有意な差は認められず、「反省の場」という見方と、「診断の場」という見方に大半が分れる。少年間で誤った情報が多くなされても、彼等の認知構造は、このカテゴリーの上では大きな変化を見せないで、更に別の方法を用いる必要を感じた。例えば同一集団の follow up とか、態度測定による認知構造の変容の捕捉などである。又「診断の場」という見方も、少年達の、診断に対する自発的な構えが醸成されているかどうかを測定する様な方法についても、今後研究したい。そして公式的情報である orientation, instruction などの質と量及び与える時機についての検討も加えなければならない。



## 177 少年鑑別所における処遇の研究

—現実場面の分析を中心として—

### 3. 各寮の少年と処遇の特質

東京少年鑑別所	○上芝	功博	中島	武二
"	台	利夫	大島	勲
"	山田	晃一	三橋	潤二
"	佐藤	和喜雄		

この研究は当所における処遇の現実の姿を捉えようとする共同研究の一環として、「新しく入所した少年をどう分類しているか、各寮の少年はどんな特質を持っていて、そこではどんな処遇がなされているか」などの点を分析検討することを目的としている。

まずアンケートによれば、少年の分類(寮指定)に当たる16名の技官はほぼ一致して、A寮よりはB寮、B寮よりはC寮の方が保安の面により多くの配慮をしていて厳しいと認知しており、そうした雰囲気の中に置く方が望ましい、或いはそれに耐えようと判断した少年即ち、より自己本位で外拡的、攻撃的で非行性も進んだ少年をここに指定し、他方、A寮の方にはかなり友好的で緩やかな雰囲気があることを予想して、気が弱く、周囲の強い圧力には耐えられそうもない少年やこうした雰囲気をこわしたりする惧れの少ない少年をこの寮に指定していることがわかった。

次に各寮の少年50名ずつについてみると、年齢やIQには差がないが、Y-Gテストの結果B・C寮特にC寮の少年はA寮の少年に較べて「社交的だが情緒不安定、攻撃的」であること、A寮の少年のプロフィールは高校生のそれに近いことなどが明らかになった。

最後に、各寮の処遇のあり方や雰囲気をつかむため面接により、寮長が自分の寮の少年を、少年が寮長や同寮の仲間をそれぞれどのように認知しているか調べてみた。

これによると、A寮では寮長は少年たちを「まじめ」とあると見る傾向があり、少年は寮長や仲間を「親切」「おとなしい」というように見ており、云わば+の感情を基にした相互信頼の関係があるが、C寮やB寮では寮長は少年を「表裏のある」「陰険な」と見がちで、少年は寮長や仲間を「規律がやかましい」「きびきびしているが抑えつけるようで怖いこともある」とか「短気」「はったりをきかす」などと感じていて、集団成員間の信頼度がうすく緊張の強い相互関係にあることが示唆された。

今後の課題は、寮の雰囲気を規定している要因を更に究明して、C・B寮におけるように少年の好ましくない特性がかなりの程度までそれを規定するとしても、できる限りA寮にみられるような雰囲気、対人関係をもたらしすることができる方法を探究することであると考える。

## 178 少年鑑別所における処遇の研究

—現実場面の分析を中心として—

### 4. 矯正機能としての処遇

東京少年鑑別所	○大島	勲	中島	武二
"	台	利夫	上芝	功博
"	山田	晃一	三橋	潤二
"	佐藤	和喜雄		

**目的** 少年鑑別所における矯正効果がどの程度期待できるかを問題にし、矯正的な働きかけの一例としてグループセラピーをとりあげ検討するにあつた。

**方法** イ. 概して資質的な問題の少ない、非行性の浅い少年を収容する寮(A寮)から12名を無作為に選択し、対象とした。グループは6名前後とし、週1、2回の会合をもった。時間は50~60分で1人の治療回数は2~5回であった。

ロ. 施設の特長性を考慮し、会合の目的、会のもち方、テープによる記録などについて詳しい場面構成を行い、その後、メンバーの自発的な発言をもとにして自由な話し合いをし、更に、臨機に心理劇の技法によるロール・プレイングを併用した。

ハ. 効果の測定は自己分類法によつた。自己概念、自己認知の変化という点からとらえたわけである。自己分類は入寮時と出寮時に実施した。比較のため対照群としてセラピーに参加しない少年12名をとり、同様にして、自己概念の変化をみた。

**結果と考察** イ. セラピーの過程としては、はじめ拘禁生活に密接した問題に話題が集中したが次第に自我、社会生活との関連に進んだ、しかし、メンバーの移動が激しいため、概して浅い段階に止まった。反面、同じ話題でも異なった考え方、感じ方があることを示唆し、皆が同じ問題で悩んでいるという共感を生んだ点は効果的だったと考えられる。

ロ. 自己概念は被治療群、対照群とも好ましい方向に変化した。その程度は被治療群が大で、傾向としてはセラピーの効果肯定の結果であった。

ハ. 内容的にみると、被治療群は「自分の問題は自分の力で責任をもって解決する」という方向に進み、対照群は「人間関係がうまくゆく」という方向に変化する者が多かった。

ニ. セラピー場面で自発的に発言し、活発に行動した者は効果が大きかった。同時にこれらの者は資質的に比較的問題の少ない者であった。沈黙には、考えこんだ状態ではなく場面に対する消極的な態度を示すものが多かったものとみられ、沈黙の多い少年には、自己概念の向上が少なかった。

## 179 少年鑑別所における処遇の研究

—現実場面の分析を中心として—

### 5. SCT にみられる認知・態度の変化について

東京少年鑑別所	○山田 晃一	中島 武二
"	台 利夫	上芝 功博
"	大島 勲	三橋 潤二
"	佐藤和喜雄	

SCT 形式の刺激語を利用し、同一刺激語にたいする反応が、処遇経過にともないどの様に変化するかをとらえようとした。処遇の効果を測定するために、かかる方法が有効であるかどうかの検討ということでもある。対象は男女収容少年(14~19才)各20名をえらび、男子では寮毎に平均した数になるようにした。この場合知能指数75以下の者を除く程度で、情意状態については全く考慮しなかった。施行の方法は、単独処遇の期間3日を経過して集団寮に移出された次の日、つまり入所後4日目にYG検査と共に集団テストとしてなされたものを第1回目とし、第2回目は寮毎に集団的にその後5日経過してからSCTのみを施行したものである。当鑑別で使用しているSCTは30項目の刺激語からなっており、ここで取上げた項目は、その中から7項目、すなわち「私の家庭は」「家の人は私を」「人々は私を」「世の中の人」「お金」「人にばかにされたら」「私がのぞむのは」である。結果として、第1回目の反応と第2回目のそれとの間で、とくに変化のみられなかったものは、項目によって違いはあるが、平均して41%となっている。この中には表現の違いと判断されるものも含まれている。「カットなる」と「頭にくる」といったものである。次に無反応のものについてであるが、第1回目は全部で24例であったものが、第2回目には4例に減少し、反応数の増大がみられた。これは情意状態の安定を示すものといえるかも知れない。なお好ましい適応的な方向への反応の変化は、全体としてはとらえられず、ケース毎にまちまちである。しかし内容分析的にみると、自分本位な反応から客観的なものへの移行、形式的記述的な反応から分化し、自己内省的なものへの移行、あるいは抑制的な反応から直接的な感情の表出への移行がみられるが、これ等を単に好ましい方向への反応とか、好ましからざる方向への反応と看做すことは、拘禁場面の問題や少年の側の情意状態を考慮に入れなくては決められないし、変化ということをみる場合、刺激語間の比較でなく、反応全体の変化の比較が必要であり、客観化という意味では文字によらないテストの利用ということも考える。

## 180 保護少年のものの考え方について(第1報)

—非行に対する保護少年自身による

動機づけと自己の非行についての考え方—  
大分少年鑑別所 市川 定三

**目的** 常習累犯者の行動の規範は、普通人に比べていちじるしくずれのあることが看取される。普通人は道德規範をわくとして行動しているが、常習累犯者の思惟するわくはもっと幅が広い。そのわくは大略すれば「非・触法」「非・逮捕」「非・拘禁」「非・受刑」「非・死刑」等だといえる。常習累犯者の行動の規範は、これらのわくが描く同心円のなかを、順次、中心から遠心的に広がってゆくものと解せられる。今回の研究の目的は、常習累犯者のこのような思惟の萌芽はすでに保護少年の中に見られるのではないかと考え、それを実証的に調べたものである。

**方法** 最近当所を退所した男子少年50名が、在所中一定の題目のもとに毎日書いた作文の内容を分析、検討する方法によった。各人の作文の内容全般を総合して、1) 自己の非行の動機づけを、(a) 主として自身に帰するもの(b) 自身と環境の双方に帰するもの、(c) 主として環境に帰するもの、(d) 記載のないもの(無反省、無回答)、の4つの型に分け、それらの型別に 2) 少年の審判結果、および 3) 自己の非行についての考え方の型(a) 非行そのものに対して反省しているもの(b) 非行の結果(失敗)がもたらすものについて後悔しているもの(c) 鑑別所に収容されたことや、少年院に送致されるかも知れないことに対して後悔しているもの)との関連について考察した。

**結果** 1) 少年が非行の動機づけを、(a) 主として自己に帰するか、(b) 自己と環境の双方に帰するか、(c) 主として環境に帰するか——ということと、その少年の非行の度が比較的進んでいるか、いないかとの間には、相当程度の関連のあることがわかった。2) 上記の動機づけの型と、その少年が、(a) 自身の非行そのものに対して反省しているのか、(b) 非行がもたらす結果に対して後悔しているのか、(c) 収容されたことに対して後悔しているのか——ということとの間に相当程度の関連のあることがわかった。3) 上記二つの結果からして、保護少年において、非行の度と非行に対する考え方との間には相当程度の関連のあることがわかった。自己の非行に対するこのような考え方は当然行動の規範に発展することが予想される。

法務総合研究所 遠藤辰雄  
" 〇安香宏

**目的** 27・8回応心ならびに 25回日心において、年少、年長の男女非行少年および無非行少年 1680 名の資料による、妥当性尺度・臨床尺度に加えて非行・再犯・正常性の各尺度についての得点平均の比較、ならびにそれらにもとづく非行者の識別因子の検討を公表したが、今回は、我が国の非行少年に適用さるべき非行性尺度の試作と、そのもつ臨床心理学的意味の検討を研究の目的とした。

**手続** 従来の我われの資料のうちから、非行の有無以外の条件が比較的合致していると考えられる年少男子非行および無非行少年それぞれ 89 名ずつの、いずれも妥当性尺度に偏倚をもたぬ資料をとり出し、10の臨床尺度を構成する 365 の質問の各おのにつき、非行群と無非行群の間でのそれを得点になるように選択した人数の差を求め、その差の程度に応じて各質問の識別力に重みをつけ、その高い質問 41 を得て仮にそれを非行性尺度と名付けた。次に、この 41 の質問のそれぞれがもつ臨床尺度上の意味を、その重みづけに応じて集計・検討し、ハサウエイ・モナケシの考案した非行性尺度の質問のもつそれと比較した。

**結果** 365 の質問が示す差は 0 から 89 までに分布し得る。これを 10 段階に分けると、214 の質問 (58.6%) が 1 段階に属し、2 段階には 104 (28.5%)、次いで 33 (9.0%)、6 (1.6%)、3 (0.8%)、3 (0.8%)、2 (0.6%) となる。

差 2 段階以上の質問 151 がもつ臨床尺度上の意味の総計は 362 であり、そのうち差が  $D > N \cdot D$  である質問のそれは 285、 $D < N \cdot D$  のそれは 77 である。尺度別にそれらの分布を求め、後者をいわば非行性の抑制要素と考えて、尺度ごとに前者から減じたものを % で示すと、Pd—23.1%、Sc—17.3%、Pa—14.4%、Ma—12.5%、Pt—12.0%、D—7.7%、Si—5.3%、Mf—4.8%、Hy—2.9%、Hs—0% となる。

以前の我われの研究では、Pd、Pa、Pt、Ma が最も識別力の高い尺度であり、Sc、D には顕著なものがみられなかったが、今回の結果は、Pd、Sc、Ma を非行性の刺激尺度としたハサウエイ・モナケシの結果と類似している。

また、彼等の考案した非行性尺度の質問から臨床尺度に関与する 22 の質問をとり出し、同様それのもつ意味を、我われの選んだ 41 の質問のそれと比較すると、我われのものにあっては Pd、Sc、Ma が減じ、D、Pa、Pt が昂じていることが認められ、興味深い。

—(その1) 適応状態の継時的考察—

信州大学 〇新井康祐 新海安彦  
" 中川大倫 五十嵐宵一  
" 長岡青遠

**目的と方法** 本研究の目的は、少年受刑者の所内適応の状態を明らかにし、さらにこれを手がかりとして、少年刑務所における問題行動発生メカニズムを解明しようとするものである。

われわれは、前回に、少年受刑者の所内適応状態を測定する尺度として、それぞれ 3 項目からなる「担当評定尺度」および「自己評定尺度」を公表し、その作成経過と尺度の妥当性および信頼性の検討結果を報告し、これが有効な尺度である事を明らかにした。

今回は、主として「担当評定尺度」を用いて、少年受刑者の所内適応状態の推移を継時的に追跡し、そこに、どのような変化が生じているかを明らかにしようとする。

対象の受刑者は 169 名で、前回報告の被験者と同じである。評定の実施時期は、第 1 回が昭和 36 年 4 月、第 2 回が同 8 月、第 3 回が同 12 月、第 4 回が昭和 37 年 4 月である。評定は、各回とも受刑者の担当の看守がおこなった。

**結果** (1) 各実施時期相互の間の得点の相関をみると担当評定尺度では、第 1 項目の第 2 回と第 4 回との相関を除いては、いづれの項目および総計点においても有意なプラスの相関を見出した。この結果から、得点の歩調が、各回相互の間に同じ傾向を示していることがわかる。自己評定尺度については、総計点のみについて吟味したが、いづれの間にも、かなりの相関がみられ、担当評定尺度の場合と同じ傾向を示している。

(2) 平均値の推移をみると (担当評定尺度)、総計点では、2 回目と 3 回目の間、および 2 回目と 4 回目の間に有意な差があり、いづれも良変化の傾向を顕著に示している。各項目においても同じ傾向を示している。

(3) 総計点について (担当評定尺度)、各個人の得点の変動傾向をしらべてみると、1 回目と 4 回目の間、および 2 回目と 4 回目の間において良変化を示す人数の割合が、悪変化のそれよりも有意に多くなっている。

以上の諸結果から、1 年間の適応状態の推移を吟味すると、良変化の傾向を辿っている事が明らかである。

## 183 少年受刑者の所内適応に関する研究 (第2報)

—(その2) 適応状態と環境その他の諸要因との関係—

信州大学 新海 安彦 中川 大倫  
 " 五十嵐齊一 新井 康祐  
 " 〇長岡 青遠

**目的** 本尺度は受刑者の所内における適応状態を測定するものであるが、その測定結果には多くの要因が関係しているように思われる。ここでは受刑者分類調査表を参考にして、次のような要因を取り上げた。在所期間、刑期、年齢、非行初発年齢、施設経験回数、生育歴、同胞順位、財産、在学中の勤怠、入所前職歴、転職回数、犯罪性、改善見込、知能指数(田中B式)、向性指数(淡路式)、文身、退所時の受け入れ者、受け入れ状態、受信回数。そして、これ等の要因がどの程度に、本尺度の得点に影響力をもつかを吟味しようと思う。

**手続** 1. 各要因内の段階付けならびに分類は、第1回調査時を基準にする。但し第4回時の受信回数は1年間の受信量を基準にする。

2. 要因に比較される尺度の得点は、各回とも総計点とする。各要因と得点との関係は、相関係数ならびにC値、 $x^2$ による。

**結果** 1. 各要因と得点との間に有意な関係のあったものは、知能指数(第1回、第2回)、退所時の受け入れ者(各回とも)、受信回数(第4回)であった。

2. 知能指数の低いものは、尺度の成績が悪く悪適応を示すものが多かった。尺度の上で等しく悪い得点となった項目は、不平不満、いらいら気分、行動の自主性がない、はったり、さぼり、暴力、なげやりな仕事ぶり、仕事のあきなどである。第3、4回目において、有意な相関関係の認められなかったことは、調査対象、特に不適応群が減少したことによるものと思われる。

3. 退所時の受け入れ者が両親(実父母、実父、実母)である場合には、良適応を示す者が多かった。

4. 受信回数では、多いものは年に30~40通も受けており、その多いもの程、良好な適応を示していた。特に、肉親の激励の言葉は、良適応への良い動機付けとなるように思われた。

5. 受刑者の所内における適応状態を吟味した結果、上述のように、受刑者に身近な要因が重要な影響力をもっていることが明らかになった。これは注目される事実である。

## 184 少年受刑者の所内適応に関する研究 (第2報)

—(その3) G.P.分析による適応状態推移の考察—

信州大学 〇五十嵐齊一 新海 安彦  
 " 中川 大倫 新井 康祐  
 " 長岡 青遠

I 1. Good group (良適応者群、以下G.gと略記) Poor group (不良適応者群、以下P.g.と略記) とでは、どのように4回を通して、所内適応尺度でとらえられた適応状態が変化するかを吟味した。

2. 調査対象者は、第1回調査時の得点順位によって選出した両群各35名の中、4回を通して調査対象となった者。該当者はG.g. 18名、P.g. 12名。

3. ① 各回毎の両群の平均点間に有意差があった。② G.g.の各回の平均点に変化はなかった。これに反し、P.g.の平均点に変化がみられ、第3回に激減していた。統計的にも、第1回と第2回との間および第3回と第4回との間を除いた他のいずれの場合にも有意差があった。③ 両群毎の各回間の相関の吟味では、G.g.で第1回と第4回の間のみ相関がなく、その他には相関が認められた。P.g.で相関のあったのは、第1回と第4回、第3回と第4回の間のみであった。④ 個人毎の得点変化の吟味では、G.g.の約90%は殆んど変化がみられなかった。つまり良適応を持続していた。他方、P.g.では、殆んど変化しなかった者はわずか総数の25%であってその他の多くの者は良適応状態へ変化していた。

II 1. 全体的考察でみられた第3回以後の良適応状態への変化は、P.g.の良適応状態への変化によるものと思われた。

2. 受刑者の所内での適応状態、そしてその変化には、家族からの受信回数や、出所時の引き受け者が誰か、といった、近親者との人間関係のあり方が関係していることが示唆された。

長野少年鑑別所 増田 米 男

〃 〇南雲 正義

**目的** SCTを拘禁場面で実施した場合、stereotypeな反応が多いので、これが解釈にあたっては十分考慮すべきであることは既に指摘されている処である。同一施設に二回三回と収容された場合、収容中や施設出所後の生活体験が少年の社会的態度にどのような変化をもたらし、その変化がSCTにどのような形で現われるかを検討しようとするものである。

**対象** 当鑑別所収容者中、出所後1年以上1年5カ月以内に、再び非行を犯して収容された少年6名。うち4名は中等少年院仮退院者、2名は保護観察。初回入所時の年齢は16才1月～17才2月。IQは74～102。

**方法** 入所後4～7日に実施した同一刺激語のSCTを対家庭、対社会、対自己、葛藤場面での行動様式の四側面に分類して、初入時と再入時をそれぞれ比較した。

**結果と考察** 個人別に変化をみると、Aは父の死亡による経済的負担、母への結び付きの強まりがみられる他は、特に顕著な差がみられない。B…葛藤場面で逃避的に構える反応が、再入時にやや多くなっている。C…初入時对人的な不信任、被害感がかなり強かったが、再入時には阻碍をそらそうとし、葛藤場面でも抑制が強まり、拘禁場面で多くみられるstereotypeな反応が多い。D、EもCと同様、葛藤場面ではより合理的な解決を求めようとする反応が再入時により多くみられる。F…対家庭的側面で疎外感が再入時により強まり、葛藤場面では、D、Eと同様である。

以上の結果を総合すると

1. 6例とも同様な形の非行によって再収容され、初入再入時に実施したSCTにも顕著な差のみられなかったのは、非行に至った過程が同様な心的機制によっていると考えられ、一旦形成された態度は、かなり長期に亘って維持される反応の傾向といえると思う。

2. 拘禁場面で実施したSCTのstereotypeな反応を継時的にみた場合、このstereotypeな反応を通して、個人の分化の度合いが把握できるのではないかとすることが予測される。

3. 中等少年院仮退院者4名がそれぞれ葛藤場面で合理的に解決を求めようとする反応が再入時により多くみられる一方劣位感が強まっているということから、少年院処遇との関係等についても更に継時的な研究を続けたい。

立教大学 山本 晴雄

潜在非行少年数の問題は二つの面から注目される。その一つは検挙統計による非行少年数の外にどの位の非行少年がいるかであり、今一つはコントロール群として公立中学校生徒をとる場合に彼等を無非行群と考えてよいかである。

本調査はそれらを解明する包括的な調査ではないが、その門口として行ったものである。環境は農漁工の多い東京都内の中学校の3年生について、昭和34、35、36年の3回にわたって、小学入学後どの学年にどんな非行が初めてあったかを無記名でチェックさせたものであり、調査人員は男458、女482、計940である。

その結果、次表の非行とその発生率%が見られた。対象者の年数は長いが検挙統計による同年令少年群の発生率である1.4%(14才以上)、0.13%(14才未満)よりも著しく多い。その中で検挙補導されたものの率は更に今後2年の追調査に譲りたいが、現在までの所では著しく少なく、潜在非行少年数が多いことを示している。

その初発の時期も追調査の結果によりたいが、現在までの調査では、中学生期に激増すること、ただし女子の粗暴犯的非行は小学生期に多く中学生期に減っていること、PT A費の使込みは男子は各学年に分布しているが女子では中学生期に激増している。等が見られる。

## 187 青年期非行の発生類型と現象類型

東北大学 安倍 淳 吉

犯(非)行現象は指適するまでもなく複雑多岐な現象である。それを理解し、treatment するためには、当然記述分類が必要となってくる。そこで、従来とも各種の青年期非行の分類が行はれてきているが、その基本的な問題点はその分類規準にある。従来基本的には三つの分類規準が存在する。その1は、法的な行動の違法性からくる分類である。これには二つの局面が存在する。1つは、その違法性の社会に及ぼす影響の重大さに対する評価と処置の仕方からくる分類である。重罪と軽罪、犯罪と非行、窃盗犯と暴力犯のような手口別分類等が存在する。しかし、この局面はどこまでも評価と処置に重点をおいた分類であり、これに対し、他の局面はそのように評価し処置する行為現実の非評価的な実証的な分類、即ち、犯罪社会学的法社会学的な分類が存在する。しかし、その何れであれ、19世紀においてみられたように、そこに人を見ないで、行動の反社会的意味のみを、確定分類しようとするのは犯(非)行の理解と処置を不慣化するものである。しかし、法的分類は必然的にそこに止らなければならないものではない。というのは、法を機能主義的に見れば、行為者を裁き、施設において処置し、また家庭の内で、両親がその行為を control し、医師やカウンセラーが臨牀的に処理する行為そのものの中のみ法の Norm は具体的に存在するのである。違法者とそれを control する者との間の Social Dynamics 以外に法は存在しない。従って、その中に、教育的、心理的医療的局面を重視した評価や control が浸透している場合、その法的 Norm は不慣化をまぬがれた法機能を発揮することになるであろう。またその実証的、社会学的把握も、social control の process に人を発見することによって、裁く者、教育し治療する者自身、養育する者自身をもふくめた犯(非)行現実の把握と処置への見透しが可能となる。法の社会学は当然法の社会心理学へ展開されなければならない。

さて、次に見られる第二の分類規準は人の行動の内的機制を中心においた分類である。しかし、第二次世界大戦以前の大部分のこの立場の人達のように、Social Dynamics の具体的な枠の構造を無視した Personality 内部の機制的抽象的抽出による分類もまた非行分類を歪曲する。というのは非行とは、一次的に法という特定の文化的、時代史の意味をもつ一つの Norm への一定の退脱行動を指すに外ならない。文化的、社会的局面を直接の課題追及から取り離し、別置した場合、非行そのものの追及は課題性を喪失し、きはく化する。そればかりではなく、裁く者、教育する者、治療教育する者自身の対象者に及ぼす人間関係の科学的反省、組織化を喪失する結果をひきおこすこととなる。当然非行の分類規準は、特定の文化・社会的体制を同時にとりあげた空間内における人の機制的把握分類でなければ

## 188 交通事犯関係少年の心理諸特性について

— 粗暴非行少年との比較を中心として —

千葉少年鑑別所 ○山川 博臣 佐竹 隆三  
" 原山 晶子 酒川靖一郎  
" 樋口 ひろ

粗暴非行と交通事犯の増加は、現在の日本における大きな社会問題である。

我々は、数年来粗暴非行少年についての衝動病理学的研究を続けて来たが、最近当局の要請によって、交通事犯関係少年の特別調査に参加し、両者を比較検討する機会を得たので、この機会に中間的な報告を試みたい。

L. Szondi は、既に 1952 年に、衝動爆発性格と運転を職業とするもののが、共に Pe-Kreis (てんかん圏) に属することを述べている。

我々の臨牀経験からも、著しい衝動爆発性格の非行少年に限って、職業の希望が運転手であることが多い。

以上の Szondi の学説と、我々の臨牀経験に基いて考察すると、両者の人格特徴にかなりの共通性の存在することが推察される。

調査対象は、違反3回以上の交通事犯少年 75 例と、当所収容少年中より抽出した粗暴非行少年 75 例で、年令は、両群とも 80 % 以上が年長少年である。

知能は、交通事犯群の平均 I. Q. 86.9、粗暴非行群の平均 I. Q. 84.4 で、殆んど差が認められなかったが、交通事犯群の中に I. Q. 60 以下が 5 例見られた。

クレペリン精神作業検査成績では、両群ともに初頭努力の低さが認められたが、粗暴非行群では、交通事犯群に比較して休憩効果の低い例が著しく多く、また誤答発現率の高いことも特徴的に認められた。更に粗暴非行群の疑問、異常型の発現率は、交通事犯群の 2 倍であった。

Szondi-test は、A. Friedmann の方法により、スライド映写による集団一回法を用いて実施した。まづ注目される所見は、P Vector 即ち感情生活において、e 欲求の著しい変動を示し、てんかん圏に属するといえるものが、粗暴非行群で 66 %、交通事犯群で 49 % を占め、両群とも衝動爆発への危険性がかなり高い傾向を示していることである。

次に C Vector 即ち接触生活において、粗暴非行群では快楽主義的傾向、意志不定性、及び現実からの離反の傾向が特徴的に認められ、交通事犯群では、注意集中障害を示す所見が特徴的に認められた。

以上 3 種のスクリーニングテスト所見から、両群の本質的類似性が推定された。

## 189 性格異常（暴力）者の特殊治療

神明医院 赤川 今朗  
国分寺三中 ○岡田 光生

治療者は開業医であるが、保ご司を兼ね青少年輔導では警察に密接に協力し、区会議員で土地の顔役でもある。空手と剣道に熟達し道場も持っている。発表者と共に催眠、呼吸法、心霊治療等を研究している。

以上の類型は左の観点から分析される。

最近の特徴と思われる点

1. 近親者や世話になった者に害を加える。
2. 罪悪感がなく責任を社会に転嫁する。たまたま法にひっかかったという感が強い。

治療法

1. 患者（便宜上、患者と称する）に治療者について知らせる。
2. 力を患者に示す。直接的な方法（出合頭の勝負、道場での勝負（ルールの下で）示威行動（抜刀術、空手、名刺で箸を切る。ビールの王冠をつぶす。呼吸法の圧迫）
3. 外力の利用（警察に追いかけてもらう。正統ヤクザに説教させる。）
4. 薬品の利用 バランス（安定剤）ウインタミン
5. 催眠暗示、性向を転換させる、暴力優越者へは脱力暗示、ノイローゼ劣等感者には力の発見暗示、自己催眠による呼吸法を教示して自信をつけさせる。
6. 環境整理 治療者による患者の洞察（読心）、心霊暗示（虫封じ、気合術等）環境、悪いつながりや劣等感の対象などと隔離し、学校や職場を変える。
7. 犯罪の流行伝染性の防止  
薬物（睡眠薬など）から遠ざける。  
カウンセリングによる勤務上、就学上の圧力の除去  
武術教授により中途半端な暴力の役に立たぬことを教える。

結論 要するに、この治療はよく患者の状態を観察し、力の示威による心理的指導により、暴力優越感を挫折せしめ、社会的にも、警察力、ヤクザ等の利用により環境を整理して、催眠、薬品服用等により本人の心境を鎮静せしめて、強い暗示により好転させ、また学校職場等をあつせんして、そのエネルギーを社会的に適応せしめたとと言える。

## 190 保護観察付執行猶予者の成行調査（第2報告）

法務総合研究所 中河原 通之  
〃 〃 〇小池 健二

目的及び対象 昭和 36 年の応用心理学会において報告したところであるが窃盗の者においては再逮捕率、再犯入所率とともに年令と逮捕前歴に密接な関係があることが見出された。そこでこれを基準にして昭和 33 年度東京保護観察所新受の保護観察付執行猶予者 1014 人のうち窃盗罪の者 455 人を 4 つのグループに分け、このグループを特徴づける要因を考察した。このグループはまず年令に関係なく本件以前の逮捕回数 0 のもの、同様に逮捕回数 1、2 回の者、逮捕回数 3、4 回で年令 30 才以上の者、逮捕回数 3、4 回で 25～29 才までの者と逮捕回数 5 回以上で年令 25 才以上の者、逮捕回数 3 回以上で年令 24 才以下の者、でそれぞれ、第 I、第 II、第 III、第 IV グループと呼ぶことにする。各グループの再逮捕率、再犯入所率については、I : 23.5%, 11.8%, II : 46.8%, 31.6%, III : 56.7%, 30.8%, IV : 80.5%, 62.5% で再逮捕率では I—II に 10% I—III に 5%, II—IV、III—IV に 1% の危険率で各有意差がみられ、再犯入所率においては、I—IV、II—IV、III—IV に危険率 1% で有意差がみられた。なおグループの対象者は I : 17 人、II : 190 人、III : 120 人、IV : 128 人で、I は対象者が少ない為考察から除外した。

結果 再逮捕率、再犯入所率共に II—III 間に有意差は認められなかったが、このグループを特徴づける要因としては、本件以前の処分歴、犯行時職業の有無、扶養家族、日収に有意差が認められ、この 2 グループの分布のことが示し、一概に同一グループであるとは断定しがたい。II—IV を特徴づけるものには、本件以前の処分歴、初逮捕時年令、犯行時職業の有無、扶養家族、日収の有無、共犯の有無、贓物処分等があり、II—IV を特徴づけるものとしては本件以前の処分歴、初逮捕時年令、日収の有無、共犯の有無、贓物処分等が見出された。III—IV 間に有意差の認められる要因が必ずしも II—IV、II—III 間に有意差を示すとは限らず、IV グループについていえば上記のような要因によって他グループと明らかな差が認められるが、II、III グループを特徴づけるような要因は見出されなかった。

## 191 仮出獄者の所在不明行動について

近畿地方更生保護委員会 小山 忠直

昭和 35 年 1 月以降、37 年 9 月末までに近畿地方更生保護委員会が仮出獄を許可し、それを取消した事件の中、男子成人でその期間中に所在不明となり、その所在不明中に犯罪行為があつて、同委員会が取消決定を行なつた事件 100 件を決定順にしたがつて抽出し所在不明行動に関し調査した。

**結論** 調査対象者は累犯傾向の強い者と判断されたが、その帰住先は保護観察所が調査調整を行ない受入可能と認められたところであつたにも拘わらず所在不明行動をとつた理由は本人の表面的な供述では種々であるが、共通した潜在意識として近畿管内においてはいわゆる釜が崎によって代表される大阪市西成区等を主地域とする労働者の密集地域社会に漫然と転出し、その社会の中で安定を得ようとする心理的傾向の強いことが認められる。所在不明中就業していた者 61 名中 43 名はこの地域に居住していた。また未就職のまま再犯にいたつた 39 名の者でこの地域に居住していた者も多かつた。

所在不明行動をおこす要因としては、まず Positive な面として家族の冷遇、近隣者職場等の白眼視、或いは本人の劣等感等のためその環境より逃避的行動をおこす心理機制をあげることができる。一方 Negative な面としては帰住先の保護者のもとをはなれても高賃金で容易に受入れる職場があり且つ安価な宿泊所があり、しかもそこは犯罪前歴者としての劣等感に苦しむことの少ない労働者だけの社会であるという逃避の場所を過去の体験により、或いは情報的にこれを知っているという場合、それが本人に家出行為を誘発させる心理機制を指摘することができる。近畿管内においては特にこの Negative な要素が強力に存在し、それが全国で最も高い所在不明率を示す一因となつていと判断する。しかし犯罪前歴者に強い魅力を感じさせるその社会も実際にはパーソナリティに欠陥を有する彼等にとっては弱肉強食の場であり適応失敗の危険の最も多い場所であり、再犯に陥る者も多いわけである。更生保護の分野における所在不明防止対策としては仮出獄直後の保護観察に慎重を期し、ワーカーはできるだけ友人的関係またはカウンセラー的態度をもって回数多く治療面談的接触を行ない対象者の精神的安定をはかりつつ職業指導に実効をあげることが必要でそれにはワーカーの体質改善も期待される。

## 192 当事者証言と目撃者証言の比較内容分析

—役割意識と実験的証言—

科学警察研究所 ○西村 春夫  
" 佐伯 茂雄

実験的に証言せしめ、その内容分析を行なう。「当事者証言は目撃者証言に比べて、より直截的でなく、状態表明的であり、その証言は長くなる傾向がある」と仮説される。

**手続** 人物（私或 A と B とに符号をあたえてある）と背景を含む、極めて簡単な線画を回答用紙に刷りこんで、刺激の情景とし、記述報告が求められた。時間制限なし。

**被験者群** 当事者、目撃者と云う供述者の条件を、事件に対する、実際の参画、不参画からでなく、役割意識から作り出した。当事者群は、「私は」と云う一人称主語をあたえて、当事者として証言するよう教示して証言せしめ、更にその記述文の主語を調べて、一定の比率以上で、一人称私を主語として使用している被験者から成っている。目撃者群は「A は」と云う三人称主語をあたえて、目撃者として証言せしめ、更にその記述文の A 三人称と云う主語の使用が、一定比率以下である被験者から成っている。当事者とは、「私は」と云う主体に強く動機づけられて証言している者であり、目撃者とは、A、A をとりまく人物、情景に散散的に動機づけられて証言している傾向が認められたので、上記の二段の手続きで被験者群を定義したのである。

**結果** 証言を生産性、統覚性、超越性の三視点から整理した。ここでは超越性については述べない。生産性は、記述字数、証言ポイント（これは証言の実質的価値）から分析された。当事者証言は、他の要因が等しければ、目撃者証言にくらべて、より量が多いことが認められた。しかしその証言内容を検討すると、当事者は、人物の行為の動機や理由、他の人物の消息や関係、行為の時日場処に多く言及するが、背景の事物、人物の外見的特徴については、却つて目撃者がより多く言及している。これは記述者の心的傾向や注意配分の問題であつて、証言能力とは直接関係がないであらう。

統覚性とは、刺激としての状景を、どのように知覚して構成するかと云うことである。目撃者は人物の行為よりも行為にまつわる物的条件、身体的環境の事情に敏感である。当事者は行為者の内的状態に多く言及し語り豊かな表明的記述をする。叙述の情緒調は、当事者の方がやや NEGATIVE であるらしい。これは、記述者の投影機制と関連があると思われる。



## 193 虚偽発見における生理的反応に関する研究(2)

—被検査者の構えについて—

科学警察研究所 ○山下 素 邦

〃 今村 義 正

**目的** Polygraphic Lie Detection における被検査者の構えについて、実験的に検討を試みる。

**手続** 20才前後の健康な学生46名に仮想事件(殺人または窃盗)を行わせ、Polygraphic Lie Detection を行う。検査中、各仮想事件の POT 質問(各3系列)を全被検査者に同様に行う。Polygraph training に参加している受講生12名が4実験班に分れ、それぞれ次の要領で検査に移る。被検査者に応答させない(G1)。質問を提示しつつ尋ね、返答は全て否定させる(G2)。カード検査2回、虚偽を適中してから、検査に移る(G3)。カード検査で虚偽の返答をしたとき電気ショックを与える(G4)。検査結果は、各実験班毎に、白、黒、不能の判定を提出し、被検査者には、検査後、所定の記録紙を渡し、記入提出させた。

**結果** 判定については、被検査者46名中、正判定34、誤判定5、不能7であった。

① 実験班別の判定については、特別に差はみられなかった。誤判定、判定不能についても25~30%で著しい差はみられない。

② 「判定を正確と思っている者」のうち「誤・不能」は40%。「判定を誤っている者」のうち実際に誤判定を示したものは1例もない。不能についても4例中1例に過ぎない。小数例のため結論することはできないが、判定に対する構えと、実際の判定とは、相違することがある。この詳細は次の研究にゆずる。

③ beating the machine については、半数以上の26名が、意識的にこの構えを示した。しかし実際に誤判定を示した例は、唯1例に過ぎない。逆にこのような構えを示さなかった後の半数には、判定不能33%、誤判定20%が示された。何らかの積極的関心、検査に対する意識的構えが、かえって生理反応をおこし、結果の判定が、し易くなったことを示していると思われる。

④ 検査中の血圧帯による不快、苦痛について、これを訴えた者は33名、検査の進行につれて、慣れた者9名、これを除いても約半数が、多少の訴えを示している。訴えを示さなかった者と比較し、誤判定や不能が、特に多くみられるということはないが、正しい判定に何らかの影響がある様に経験上感じられるので、更に詳しく検討する必要がある。さらに具体的な beating the machine, Question series, Critical Question などについての構えについても今後吟味しなければならない課題である。

(10) 示す。

この実験は職業適性検査に用いることが出来ると思う。

本研究は「自動制御に関する電子工学、生理学及び心理学的研究」の文部省科学研究費援助による。

(20) 電圧化, burst 化が見られた。Scy/P.S.  $\alpha$  波が、見性後の発現であるかどうかは、見性前の資料がなく、比較困難であった。呼吸数は 18~19回/分 で、変動は少く、典型的な正常呼吸型がみられた。一般参禅者 D (60才)は、過去に接心参加の経験があるもので、測定は数息観(閉眼)に於て施行した。閉眼時脳波の特徴は、低電圧, 9.5cy/P.S.  $\alpha$  波が出現し、第 1 例と同様、呼吸と吸気の交替期に筋電流の混入と  $\beta$  賦活波型が見られ、呼吸相中期より末期にかけて、 $\alpha$  波の出現が良好になるといつた経過をくり返すが、これは「次の数を考えることが気にかかる」の訴えと対応して面白い。この被験者は、第 1 段数息観に於ける測定であつた為、振幅、連続度の増加のみに止まつた。以上、短日数に於て、周期の延長迄に及ぶ脳波の変化の事実から、この療法の有効性を推察し得るが、尚各段階毎の変化、並に呼吸機能との関連等不明な点も多く、更に一般参禅者の見性体験内容である、印象の弱化、身体感覚喪失感、自我と環境の融合感、意識喪失感、情動の高揚感、等と脳波との対応は、一般参禅者が殆んど初心者であつたことの原因で測定を果し得ずこれらについては今後の課題として残されている。

(21) 感ぜられなくなる」「麻酔薬で全身の感じを全く失ってしまったような感じ、苦痛、接触感全くなし」「自己意識はわずかあるけれど、自己とまわりの環境との区別がつかなくなる」等の身体感覚喪失感、自我と環境の融合感が見られ、(3)「意識不明でファーツとしたフーツとした気持」「努力のない緊張がとけた状態になりそのままさめるまで、何も気づかない」といつた意識喪失感があらわれ、(4)「姿勢、重力が全く感ぜられなくなり、うしろにいくらか傾いて、どうしようもなく、そのままひっくり返つた」「体がうごかないのに気づきました」「顔面に痙攣が生じ、どうしても立てない」等、カタレプシー様状の身体機能異常が見られ、(5)最後に「急に情動がもり上り、前にうつぶして泣き出しました」「とうすい感がおこる」「禪定からさめましたとき、歓喜ともはつきりしない雨の様な眼から溢れるものに洗われて居る丈です」といつた情動の高揚が起る。

(V) 接心後、質問紙によって、感想を聞くと、「苦しみは河の流れの様に彼方から来り、あの方に到る」「日常生活の無駄に気付く」「気づかなかつた自己の内部に触れた感じ」「自己の甘さ、我執の強さを痛感」等がみられた。接心前後のダウニー式意志気質検査の比較では、接心後に於て、進行性の諸項目(拡張、衝動、自信、決定)に、得点の上昇を見たが、これらについては、今後更に検討を要

する。

(22) 44.5, 5分目が44.6, 6分目が44.7, 7分目が45.1, 8分目が 47.9, 9分目が 45.0, 10分目が 43.9, 11分目が 46.2, 12分目が 45.7, 13分目が 43.9, 14分目が 44.9, 15分目が 48.5 で平均が 45.9 であつた。これに対して N は、1分目が 40.6, 2分目が 36.9, 3分目が 38.4, 4分目が 36.7, 5分目が 37.0, 6分目が 35.9, 7分目が 37.1, 8分目が 36.8, 9分目が 36.5, 10分目が 34.4, 11分目が 33.6, 12分目が 36.5, 13分目が 36.9, 14分目が 39.1, 15分目が 36.4 で平均 36.4 であつた。

考案 ①作業量について 前期の作業量の平均が G の 40.0 に対して N は 32.6 でその差が約 7.4 あつた。後期の作業量の平均は G の 45.9 に対して N は 36.4 で約 9.5 の差が考えられる。前期・後期を通して約 8.45 の差があり、G の方がはるかにすぐれている。

② 平均曲線について G の曲線は a' で、N の曲線は b' であつた。特に G は初頭効果も大きく、その差は 5.9 であつた。このことから考えて、G は N に対して性格の上で平均してすぐれていることがわかつた。

③ 分類別について 平均曲線では一般的に G はすぐれていたが、個人別に分類別に見ると、その性格には千差万別あり、f (A) のような危険な者もあつた。ただし、C 段階以下はいなかつた。個人検査の必要性を感じられる。

④ 今後の課題 さらに、行とばせの者の検討を実施したり、内田クレペリン検査の個人のもと、従来試みて来た、ロールシヤツハ検査等プロジェクトイブ、テクニックによる検査結果とを比較してみたい。

(26) 因は、実験条件と不安徴向であり、その交互作用は有意でなかつたので、性と知能の要因を無視して、分散分析により賞讃と非難および不安徴向の高低とによる PS と d の差を検定した。その結果から、不安の要因が intolerance of ambiguity に効果を及ぼすとき、不安徴候の高い者には、賞讃によって intolerance of ambiguity が高く、非難をうけると低くなることわかる。

(28) 効用について述べている。一人の少年の吃音を矯正するのに、二つの人形を作って、それぞれに名前をつけ、それを隠しておいて、任意にその一つを取り出して、その名前をいわせるといふ一種遊戯めいた方法を採用したところ少年は容易にこのことに自己を投げ込み、そこへ出された人形の名前をらくにいうことができるようになり、これによって少年の吃音は矯正されたのである。客観性の原理と自由な表現の原理との密接な関係がそこにあらわれている。第三の原理の社会化は、自分を他人に関係づけ、他人を自分に関係づけることを、双方の価値を知つて、互いに承認し合い、信頼し合い、敬愛し合うという形で、実現することであると解していいから、社会化の原理は、この間

題の解決に密接に関係していることがわかる。

以上によって明らかのように、この三つの原理は、この問題の解決にあたっては融合して一つになっている。この書物は Direct Living に続いて、Good Will (善意)、Subjective and Objective Love (主観的愛と客観的愛) Endurance and Stability (耐久性と安定性) について述べている。そして Endurance and Stability の最後のところで、“Hierarchy of Purposes” という題目で、宗教の心理学的な面について述べている。ここでは深い感銘を覚える。目的の体系は Minor, Major, Master の三つのレベルの目的から成立しているとするのである。自他がともに幸福で平和な文化社会というような目的は、情操的な愛を以てしなければ実現できない目的であって、Master 級の目的である。自他をともに不幸にするような関係は目的から遠ざかったものであり、自分だけが利益をえて他人は損するというような関係は目的に近づいているものとはいえない。自他がともに幸福になれるような関係は目的に近づいているもので、これが最も適応的な関係である。Master 級の目的の実現には上の三原理が密接に関係している。心理学の役目の重要な一つが、相反対する二者を幸福な関係に結び合わせる際に、触媒の働きをする所にあると考えたい。

(30)

(4) 調査結果の考察—水とねんどの材料によって、保存の概念の発達になぜ相違がみられるか。保存の概念の発達には、ピアジェの言うようにたんに、論理的思考(形式的操作)の発達だけによるのではなく、子どものこれまでの材料に対する経験のし方や調査場面における経験のし方に左右されるのではなからうかと思われる。

(イ) 量の保存の発達概念では、水のように入れ物の形や水面の高さなどによっての視覚による判断に大きく左右され、そのため思考の発達(形式操作)の貧弱な下学年ほど影響されるのではなからうか。ねんどでは水のように、入れ物や高さなどによっての見せかけの量の増減の視覚的刺激が少ないため、水よりも良好となったのではなからうか。

(ロ) 重さの保存の発達概念では、これまでの子どもの経験のし方が水よりもねんどに対しての方が直接的であり、それだけにちょっとした形の変化による刺激で、重さの増減を感得しやすいためではなからうか。そのようなことがら、水に比べてねんどの重さの保存概念の発達が低くあらわれた理由ではなからうか。

(5) A. (4)の(イ)に対する全盲児による検証—水量の保存の概念の発達が入れ物や水面の高さなどによって左右されるかどうか。まず視覚的経験の全くない生れつきの全盲児に対して、普通児の実物による調査と全く同じし方で、直接実物を触察させながら実施した。その結果は次のようであった。

	水		ねんど	
	量	重さ	量	重さ
3年(4人)	75%	75%	50%	50%
4年(6人)	100	84	100	50
5年(6人)	84	100	68	84
6年(7人)	86	100	86	86

(注) パーセントは前と同じ

このような少数数では、はっきりした傾向はわからないが、普通児とは水の量の保存の概念の発達については相当違っているように思われる。

B. (4)の(ロ)に対する全盲児による検証—ねんどの重さの保存の概念が、ねんどでは水に比べて直接にしかも容易に経験できることから、ちょっとした形の変化に対しても敏感であるという普通児に見られる傾向が、やはり全盲児にも見られるように思われる。

全盲児は視覚的経験はできなくても、触察の容易なねんどに対しては普通児と同じように重さを感じやすいためにかえて、保存の概念の発達が阻止されるのではなからうか。今後はこれらの点について、(4)のイ、ロともにさらに多数の全盲児について検討したい。

(48) はっきりと示している。

なおこれについては親子の因子分析による比較が試みられている。

政治・経済生活の「みかた」学生は福祉国家、合理的経済主義、社会主義の3つを殆んど同じ程度に肯定して50%以上の学生がこの各々に1, 2位の順位をあたえている。共産主義及び国家主義は同程度に強く否定されて上の二つの「みかた」と双極をなしているが、自由資本主義はこの間に位している。親は福祉国家及び合理的経済主義を最初に選んでいるが資本主義と社会主義の順位は学生と逆になっているし、国家主義に関しては bimodal な分布を示している意見が分かれている。共産主義は強く否定される傾向にある。各「みかた」の順位の組合せをつってみると同じ順位でもその評価の内容が異なることがわかる。ICUの学生も他の多くの大学生と同様社会主義を主張するものが多いが内容的にはむしろ福祉国家や合理的経済主義又は修正資本主義に結びつくものが多い。

宗教倫理生活の「みかた」学問(人間の理性)と宗教を調和させて考えようとする「みかた」が親子とも一番多く宗教を相対的又は総合的にみてこの機能を肯定するものがこれに続く。特に学生にはこの傾向が強い。この二つの「みかた」の一位の相対度数は学生で71% 親で41%である。二つのキリスト教的な「いきかた」がかなり大きい分散を示しながら3位4位に来ていることはICUの宗教的背景を示している。親は自力本願的仏教にやや肯定的であり民族神としての神道には bimodal な分布を示し、それぞれ一位の相対度数は18%と9%を示しているが学生は

否定的でその頻度は0又は0に近い。科学万能主義の無神論は親子とも最も否定的である。なお家族単位による順位相関及び他の価値尺度との相関分析が試みられている。  
 ※本研究はロックフェラー財団の助成金によるものである

(72) 最後に私自身の Camp 経験のなさの故に Camp 前の調査 Camp 中の record, Camp 終了後の調査の準備が事前に計画出来ず、折角の機会を活かすことの出来なかったことを反省しつつ、次の機会には、更に合理的な配慮の下に、資料をとりたいと考えている。

(81) ①絵が全体としてまとまらず、各線が無関係で発達的に退行している。②線の描き方は神経質傾向を示す。③現実との関連はよいが、内部連結線が見られるので注意を要す。今後多数例について更に検討したい。

(98) 躰けが、生活場面にまで汎化して、行動が改善されたみること、不適当ではないと思われた。「宿題を忘れた」というテーマによって行った役割演技と、その後に行った学習意欲の向上との関連は、この状況に対する一つの示唆である。

2. 以上の経過とともに、母の本人に対する態度が寛容になり、自発性を促す努力がみられるようになったのは注目された。

3. 本人が問題児とは云え、小学生で、しかも被影響性の強い子供であった点。父が欠損していた点などは、役割演技の効果について、とくにその特殊な働き方について反省を与える。然し技法の工夫・変形によって、この方法のカウンセリングへの導入が、他の問題児にも効果を与えることが期待される。

- (137)
- |        |   |       |                 |
|--------|---|-------|-----------------|
| about  | { | Prep. | (14) ……001.     |
|        |   | Adv.  | (2) ……032.      |
| this   | { | Adj.  | (68) ……011.     |
|        |   | pron. | (34) ……013.     |
| one    | { | N.    | (8) ……016.      |
|        |   | pron. | (20) ……16.      |
| both   | { | Adj.  | (34) ……16.      |
|        |   | pron. | (3) ……013.      |
| three  | { | Adv.  | (4) ……030.      |
|        |   | N.    | (1) ……016.      |
| so     | { | Adj.  | (6) ……016.      |
|        |   | Conj. | (1) ……003.      |
| before | { | Adv.  | (11) ……004.     |
|        |   | prep. | (1) ……001.      |
|        |   | Conj. | (1) ……002. ……省略 |
|        | { | Adv.  | (1) ……032.      |

以上の如く、すべての言葉は意味をもち、機能を持っていると同様に位置を持つという原理より文脈による分類をすることにより Source language より target language に転移することを可能ならしめようとするにある。

(149) 34%の低率であった。

(170) イ、インド、スペインの留学生との摂取度の中に統計的に有意差が見出された。(t=6.8 p=.01) (iv) 交友関係。欧米系の学生は日本人の友人が最も多く、次いで自国からの友人を有し、他国の友人数は最下位であるのに対し、東南アジア系の学生は自国からの学生と先づ交友関係をつくり、次いで他国の留学生(同じ文化領域からの留学生)と友人となり、日本人の友人の数が最下位になっている。

(v) 民族的偏見。六ヶ国間に有意差は認められなかったが、日本の家庭への招待を比べると欧米等の留学生と東南アジア系の留学生間では有意差が認められた。(vi) 両学生の余暇活動。欧米系の学生と東南アジア系の学生では若干の差が見出された。例えば映画を見るのが前者では7%であるに対し、後者では66%のものがこれに費している。旅行が前者に比較的多く、53%、後者が22%となっている。(vii) ホーム・シックになる度合。東南アジア系の学生はしばしばから時々感ずるという所に落ちつくのに対し、欧米系の学生はごくまれにか、あるいは全く感じないという所に落ちつき、両者の間では有意差が認められた。

(viii) 生活上の困難を感ずる点についてみると言語の問題が最も多く両国系共約学生の半数が第一にあげている。ついで日本人の特異的性格が欧米系では第二位となり、東南アジア系では食物、経済上の問題、頼りのないことがさがり、欧米系では生活、勉強設備の不足をあげている。安易さを感ずる点では両国系共近代化された生活設備をあげ、次いで日本人の親切さをあげている。(xi) 日本の生活様式にどの程度影響されたか、帰国後それをどの程度取入れるか、又現在の生活にどの程度満足を感じているか、についての質問では、両者の学生間では有意差がみられ、欧米系の学生ではかなり影響されたからあまりされない。現在の生活に非常に満足しているのに対し、東南アジア系の学生ではあまり影響されないから殆んど影響されない。又現在の生活にあまり満足していないという所に落ちついている結果となった。

(187) ならない。

結局、第三の分類規準は社会心理学的な分類規準である。この立場は、法の立場のおち入りやすい行為抽象主義的傾向、ならびに第二の人の身体的内的機制の抽出的傾向に対し、人間の回復を目指す立場でなければならないのである。単なる「犯罪人」の立場から「犯罪を行う人間」の

恢復でなければならない。もちろん、社会心理学的立場の中には、人と社会、文化の単なる関係図式の発見に止る立場も多い。しかし、われわれは、犯行の問題に止らず、社会心理学的課題の基本的性格は、人と社会、文化の単なる関係図式の発見に止らず、それを手がかりした「人間性」の把握の科学であり、人間的 control の基礎科学でなければならないことを多年主張してきた。

青年期犯（非）行を問題にする場合、その分類規準として、「非行深度」を提出してきた。四つの非行深度段階は、犯行の反法的反社会的、手口的質と個人的内的機制の質を内につつま、それを基礎づける生活空間そのものの構造的質の基準的分類なのである。そして、青年期の場合、幼少年期、成人期、老年期と異って、被保護的生活空間から、保護者の立場、職業的立場への移行期準備期としてとらえられなければならない。そして、その場合、その全体の生活空間がどの程度の社会体進度をもちそのうちどこに問題が発生しているかをとらえなければならない。アマ的段階とプロ的段階の移行段階が重視されなければならない。というのは、それによって青年期の特質と犯行の全体的連関性が始めて明確化されるからである。またこの分化によってはじめて、われわれは community の一人としての control が臨床的にも刑事政策的にも方法的に明確化され、分化される基礎が可能となると考えている。また現象的類型化はさらにこの基礎類型にそって、歴史的類型化が分化されてこなければならない。

# 日本応用心理学会記事

## 常任運営委員会記録

(会場名を特記せぬ場合は立教大学タッカーホール会議室)

○昭和37年4月3日

出席者：林銈蔵、豊原恒男、小保内虎夫、児玉省、鶴田正一、中村弘道、長谷川貢、松井三雄、松村康平、三宅守一。

- (1) 心理技術者に関する委員会につき児玉委員より経過報告。心理技術者の資格及び名称につき意見交換。
- (2) 交通事故防止対策委員会につき豊原委員より報告。委員の任期終了にともなう再編成と今後の方針につき意見交換。委員選出は会長、副会長；前委員長に委託する。
- (3) 教育心理学部会の今後の方針につき長谷川委員より報告。
- (4) 産業心理学部会につき豊原委員より報告。部会事務局関西移転の申し出につき意見交換。
- (5) 第28回大会発表論文抄録集の発送につき開催校の小保内委員より提案。経費の関係上個々の会員への郵送取止めを決定。

○昭和37年6月5日

出席者：林銈蔵、豊原恒男、遠藤辰雄、小保内虎夫、児玉省、塩入円祐、鈴木清、鶴田正一、中野佐三、中村弘道、松井三雄、松村康平、山根薫。

- (1) 第29回大会開催につき開催校林会長より報告。大会に対する意見交換。
- (2) 第28回大会会計決算報告——小保内委員(別項第29回大会記録参照)全員承認。
- (3) 本学会機関誌出版につき豊原委員より経過報告。出版費及び販売方法につき審議。
- (4) 心理技術者に関する委員会につき児玉委員より経過報告。
- (5) 心理学会連絡懇談会発足の呼びかけにつき林会長より報告。本学会はその必要性を認め会議には代々の会長が出席することに決定。
- (6) 文部省科学研究費の現状につき結城錦一運営委員の説明、意見を聞く。

○昭和37年7月3日

出席者：林銈蔵、豊原恒男、植松正、遠藤辰雄、児玉省、中村弘道、松井三雄、松村康平、三宅守一、山根薫。

- (1) 本学会機関誌出版につき豊原委員より報告。出版実務担当松浦健児会員及び出版社井出氏より説明を聞き、1,000部印刷。紙型及び抜刷はとらず、価格については会員、一般を問わず一部250円送料50円と決定。
- (2) 塩入委員の紹介により、十仁病院長梅沢文雄氏より機関誌に対し寄附2万円の申出があり受諾することに決定。
- (3) 心理技術者に関する委員会につき児玉委員より経過報告。名称及び認定方法につき審議。
- (4) 死亡会員の取扱いにつき豊原委員より提案、過去一年間の該当会員に対し総会に於て黙禱をささげることにより決定。

○昭和37年7月23日

出席者：林銈蔵、豊原恒男、遠藤辰雄、小保内虎夫、児玉省、中村弘道、三宅守一。

- (1) 日本学術会議第6期会員選挙につき小保内委員より提案、学術会議の現状と候補者の推薦につき意見交換。

○昭和37年7月24日

出席者：林銈蔵、豊原恒男、小保内虎夫、兼子宙、中村弘道、松井三雄、松村康平、三宅守一。

- (1) 前日にひきつづき学術会議第6期会員選挙候補者推薦につき協議。

○昭和37年9月12日

出席者：林銈藏，豊原恒男，遠藤辰雄，小保内虎夫，児玉省，塩入円祐，鈴木清，長谷川貢，三宅守一，山根薫。

- (1) 会則変更につき豊原委員より提案。学会費値上げ及び賛助会員制度につき意見交換。
- (2) 退会会員の復帰取扱いにつき豊原委員より提案。再入会に際し自然退会者（過去二年間会費滞納者）は会費前二年分納入，退会届出者は新入会員として取扱うことに決定。
- (3) 機関誌「応用心理研究」の販売状況につき豊原委員より報告。
- (4) 第30回大会開催校につき意見交換。
- (5) 心理技術者に関する委員会につき児玉委員より経過報告。

○昭和37年10月1日

出席者：林銈藏，豊原恒男，小保内虎夫，児玉省，長谷川貢，松井三雄，三宅守一。

- (1) 第29回大会準備状況につき林会長より報告。
- (2) 学会会費値上げにつき豊原委員より提案。学会財政につき審議，資料として会員より値上げに関するアンケートを取ることに決定。
- (3) 日本学術会議第6期会員選挙につき小保内委員より提案。日本学術会議に対する関心をもたせ有権者には投票規則を示す印刷物を会員に配布することに決定。
- (4) 賛助会員制度設置につき審議。

○昭和37年10月22日

出席者：林銈藏，豊原恒男，植松正，小保内虎夫，児玉省，塩入円祐，中村弘道，長谷川貢，松村康平，三宅守一，山根薫。

- (1) 昭和37年度，昭和38年度予算につき審議。予算案を作成し総会にはかること。
- (2) 学会々則変更の件
  - a) 学会々費値上げに関しアンケートの結果にもとづき審議。
  - b) 賛助会員制度につき審議。学会々則変更の原案を作成，総会にはかること。
- (3) 第30回大会開催校は信州大学に内定。
- (4) 運営委員改選につき審議。
- (5) 心理学の将来計画につき小保内委員より提案。意見交換。

○昭和37年12月7日

出席者：中川大倫，林銈藏，豊原恒男，植松正，小保内虎夫，兼子宙，児玉省，塩入円祐，中野佐三，松村康平，三宅守一，本明寛。

- (1) 総会決議にもとづき第24期運営委員を決定，各新委員に就任の諾否を求める。
- (2) 常任運営委員選出方法につき討議，新運営委員の郵便投票（委員の互選）と決定。
- (3) 第30回大会につき意見交換。
- (4) 中学校のカウンセラー設置に関し中野委員より動議，本学会では相談部会と共に要望書を作成することに決定。

第 24 期運営委員及び常任運営委員

		○印 常任運営委員	◎印 会長, 副会長, 事務局長
秋重 義治	天 野 利 武	石川七五三二	乾 孝
今 田 恵	○植 松 正	牛 島 義 友	○遠 藤 辰 雄
太田垣瑞一郎	大 場 千 秋	大 脇 義 一	岡 部 弥 太 郎
小木曾 恩	小 熊 虎 之 助	○小保内 虎 夫	加 藤 正 英
金 子 秀 彬	○兼 子 宙	○狩 野 広 之	北 村 晴 朗
城 戸 幡 太 郎	○桐 原 葆 見	倉 石 精 一	古 賀 行 義
古 武 弥 正	○児 玉 省	相 良 守 次	佐 竹 隆 三
佐 藤 幸 治	○塩 入 円 祐	四 方 実 一	○鈴 木 清 勝
鈴 木 信	薄 田 司	竹 山 恒 寿	橋 寛 勝
塚 田 毅	続 有 恒	○鶴 田 正 一	戸 川 行 男
◎豊 原 恒 男	◎中 川 大 倫	○中 野 佐 三	中 村 弘 道
○長谷川 貢	波 多 野 完 治	◎林 銚 蔵	鱒 崎 徹
藤 本 喜 八	堀 内 敏 夫	○増 田 幸 一	松 井 三 雄
○松 村 康 平	宮 孝 一	○三 宅 守 一	三 好 稔
○本 明 寛	盛 永 四 郎	山 下 俊 郎	○山 根 薫
山 根 清 道	山 本 晴 雄	結 城 錦 一	横 瀬 善 正
依 田 新			(50 音順)

日本応用心理学会運営委員会記録

○昭和 37 年 11 月 2 日 午後 3 時～6 時

" 3 日 正午～1 時

○会場 慶応義塾大学日吉校舎

○出席者 会長以下 31 名

- (1) 教員養成問題委員会につき山根委員より報告。
- (2) 交通事故防止対策委員会につき豊原委員より報告。委員会の継続と委員の改選について承認。
- (3) 機関誌「応用心理研究第 1 集」の刊行状況について豊原委員より報告。
- (4) 国際応用心理学会につき会則変更と多数の入会を希望する旨、大脇委員より報告。
- (5) 昭和 36 年度学会会計決算報告 (承認)。
- (6) 第 28 回大会決算報告 (承認)。
- (7) 昭和 37 年度予算案に審議。

○機関誌「応用心理研究」の会計については赤字会計のまま本予算には組入れず、別途会計で処理し、赤字補填は本会計より多少の補助金を出すことに決定。尚学会費が現状のままであると昭和 37 年度予算は赤字を大中に含まねばならず、学会費の値上げは必至である旨、豊原委員より報告があり、会員に対して行った値上げに関するアンケートの結果にもとづき審議。

○昭和 38 年度予算案についても審議されたが、学会費値上げの件に関しては会員にはなるべく総会で決定することにし、資料として 1,000 円案、800 円案を提出することに決定。

- (8) 運営委員改選に関して従来の慣行通り、会長の推薦に依る候補者をたて総会で決定することにし、常任運営委員の選出については運営委員の互選で行ない、その方法については新運営委員で討議することに決定。
- (9) 学会々則改正 (賛助会員制度設置) に関し審議、この制度をもうけることに決定。
- (10) 次期大会開催校につき豊原委員より報告。昭和 38 年 10 月、長野県松本市信州大学文理学部校舎で開催することに承認。



- (11) 学会運営の基本的問題について考慮すべきことが、秋重委員、橋委員等より提案され、機関誌、大会発表論文抄録集の充実についての要望がなされた。

(以上別項第 29 回総会記録参照)

## 第 29 回大会総会記録

昭和 37 年 11 月 3 日 (土) 午後 3:30~5:30

会場：慶応義塾大学日吉校舎

### I. 報告事項

#### 1) 部会活動の報告

各部会の活動については、応用心理研究第一集に掲載されているが、従来の部会に加え新たに相談部会が誕生し、それぞれに活動している旨の報告が豊原委員からあった。

#### 2) 委員会報告

##### ○ 教員養成委員会

最近、教員養成の専門大学を作ろうとの動きが見られるが、この問題については今後さらに研究し、委員会として、ひとつの結論を出すべく努力したい、と山根委員より報告があった。

##### ○ 交通事故防止委員会

旧委員の任期が切れて、新しい会長のもとに、継続されて活動がなされていくものであるが、いままでのところでは、運転手のためのハンドブッカー学術的な根拠のあるものを作ってはどうかとの意見が出ている。文部省などの研究助成金を受けて、為になるものを作っていききたい、との報告が豊原委員よりあった。

#### 3) 日本学術会議に関する事柄

小保内委員より、次の三点につき報告ならびに要望があった。学術会議に「人間科学総合研究所」設置の動向があり、今後その実現に向けて努力していきたい。各学会に、将来計画が求められているということ。学術会議会員候補者に、結城錦一教授(専門)、城戸幡太郎教授(一般)、鈴木清教授(一般)が挙げられているが、投票に際しては、専門、一般の別を間違わないよう、また棄権しないよう、全員投票していただきたい。

#### 4) 応用心理研究の刊行状況

昨年の総会の承認に基づき、編集委員を任命して、委員会を重ね、本年 7 月に第 1 集が出た。経費は 1,000 部刷って 20 万円強要し、現在まで売れたのが 300 部その他代金未納 100 部で計 400 部は売れた勘定になる。会員は 970 名位いるから、全部売れるのではないかと思われる、と豊原委員より報告があった。

### II. 協議事項

#### 1) 昭和 36 年度決算に関する件(報告—豊原委員)

日本応用心理学会		昭和 36 年度 決算報告	
収入の部		支出の部	
35 年度からの繰越金	176,771	部会へ補助費	25,000
36 年度学会費	381,700	27 回大会(金沢大)への補助	184,917
(抄録刊行補助費を含む)		28 回大会(東教育大)への補助	170,000
(550 円×694 人)		印刷費	21,650
過年度分学会費	99,200	郵税	57,677
(抄録刊行補助費を含む)		電報・電話料	323
(550 円×184 人)		交通費・運搬費	3,850
37 年度分学会費先払い	7,700	消耗品費	2,449
(550 円×14 人)		講演会謝金等	10,474
預金利子	2,419	事務局員手当	94,960
雑収入(論文集売上代, その他)	12,920	アルバイト備人費	11,740
合計	680,710 円	合計	583,040 円
差引	残金	97,670 円	

第 28 回大会（東京教育大）のときから、開催校への補助金は 20 万円に決定をみている。

2) 第 28 回大会決算に関する件（報告者—豊原委員）

第 28 回大会会計決算報告（日本応用心理学会） 於 東京教育大学

収 入		支 出	
論文集掲載費 (150 円×211 人)	31,650 円	印刷費 (論文集・プログラム・その他)	322,300 円
大会会費・正会員（臨時会員） (400 円×353 人)	141,200	通信費	43,205
大会会費・学生会員 (200 円×45 人)	9,000	交通費	2,545
写真代 (150 円×70 人)	10,500	写真代	10,500
論文集出版費（本部から）	170,000	講師・用務員謝礼	28,500
本部からの補助金	30,000	運営委員会費	44,350
展示料	6,000	消耗品費	9,515
寄付（広告料）	102,000	労務費 (学生, アルバイト等)	31,720
		食事代	7,705
	500,350 円		500,350 円
	差 引 残 額		0

3) 昭和 37 年度予算に関する件（報告者—豊原委員）

日本応用心理学会 37 年度予算案 (37. 11. 3)

収 入		支 出	
繰越金	97,670 円	六部会補助	30,000 円
会費 (550 円×800 人分)	440,000	第 29 回大会補助	200,000
論文集売上代金等雑収入	5,000	通信費 { 会員へ (会員通信をも含む) 45,000 委員会 15,000 その他 2,000	
預金利子	1,500		
合 計	544,170		
		印刷費 { 事務用 (カード, 封筒等) 37,000 委員会各種案 25,000 会員への通信 (年 2 回) 20,000	
		講演会開催費	15,000
		事務局員手当	100,000
		アルバイト備人員	10,500
		事務用消耗品	15,000
		事務用雑費 (電話・電信料・交通費)	5,000
		予備費	24,670
		合 計	544,170
	差 引	引	0

別 途 会 計 (応用心理研究 No. 1 刊行に関する予算案)

(収 入)			
応用心理研究 No. 1 刊行寄附金	20,000 円	印刷費	200,000 円
" 売上金 (400 冊)	100,000	編集雑費	3,000
合 計	120,000	合 計	203,000
	差 引 赤 字		83,000

昭和37年度予算の目新しい点は、年2回会員通信を発行すること。

4) 昭和38年度予算案の審議 (提案者—豊原委員)

従来、年度半ばで、その年度予算を提出するのが慣例となっていたが、これは変則であるし、来年度の予算を考えてみたときに、かなりの赤字が予想されるので、何とか赤字を出さない、健全な会の運営を考えていきたい、との豊原委員の説明があり、合わせて、会費値上げに関するアンケートの結果ならびに A, B, C 各案について、同委員より提案説明がなされた。

会員に対する会費値上げに関するアンケート結果集計 (昭. 37. 11. 1 現在)

A 案賛成 (800 円会誌含まず)	89 名
B 案賛成 (1,000 円会誌含む、郵送料別)	118 名
C 案 (値上げ反対)	13 名
D (その他の案及び意見)	10 名
無 解 答 (本人海外のため)	1 名
計	231 名

日本応用心理学会昭和38年度予算案

§ 会費値上げをしない場合

収 入	学 会 費	440,000	支 出	6 部会補助費	30,000
	(500 円×800 人)			第30回大会補助	200,000
	論文集売上代金等	5,000		通 信 費	72,000
	預 金 利 子	2,000		印 刷 費	92,000
				講演会開催費	15,000
				事務局員手当	110,000
				アルバイト備入費	10,500
				事務用雑費	30,000
合 計		447,000	合 計		559,500

差 引 赤 字 -112,500 円

(尚 別に、別途会計 83,000 の赤字を残している)

§ A 案 (会費 800 円に値上げした場合)

収 入	学 会 費	640,000	支 出	「上記総計」	559,500
	(800 円×800 人)			応用心理研究 No. 1	50,000
	論文集売上代金等	5,000		補 助 費	
	預 金 利 子	2,500		予 備 費	38,000
合 計		647,500	合 計		647,500

別 途 会 計

収 入	応用心理研究 No. 1	12,500	支 出	応用心理研究 No. 2	10,000
	売上金 (50 冊)			編集雑費	
	賛助会員会費	20,000		応用心理研究	
	応用心理研究			No. 1 の前年度赤	
	No. 1 補助費	50,000		字 (83,000) のうち、	
				返 済	72,500
合 計		82,500	合 計		82,500

§ B 案 (会費 1,000 円に値上げした場合)

収入	学 会 費	800,000	支 出	「上記総計」	559,500
	(1,000 円×800 人)			応用心理研究 No. 1	
	賛助会員会費	20,000		赤字返済	83,000
	論文集売上代等	5,000		応用心理研究 No. 2	
	応用心理研究 No. 1			刊 行 費	200,000
	売上金 (200 冊分)	50,000		編 集 雑 費	10,000
	預 金 利 子	3,000		予 備 費	25,500
合 計		878,000	合 計		878,000

会費値上げについては、会員の活発な論議の末、全員の拍手のもとに値上げ (800 円) が議決された。

5) 学会会則の改正について

○学会会則第四条に次の 3 項を加える。

「本会の趣旨に賛同し運営委員会の承認を経て所定の会費をもって本会の事業に財政的援助をする者を賛助会員とする。本会員の会費は昭和 38 年度から当分の間年額 800 円とする。賛助会員の会費は昭和 37 年度から当分の間年額 1 万円以上とする。」

○学会会則附則 1. 及び 2. を削除し、あらためて次の附則 1. を加える。

「附則 1. 本会会則は昭和 37 年 11 月 3 日から実施する」

6) 心理技術者に関する委員会の提案に関する件 (提案者—児玉委員)

社会の要望にこたえ、心理技術者の技術面を強化しようとの意見に従い、認定制度を作るとすれば、認定機関の設立を日本心理学会、教育心理学会、本学会の三学会で考える、三学会合同の認定準備委員会の創設を承認願いたい。 (拍 手)

尚、委員会として何らかの結論を出しても次の総会までには間がある。委員会の決議は常任委員会に報告しなければならぬことは勿論だが、今迄通りに、委託された形で、日本心理学会、教育心理学会とも連けいをとって、意見、具申の心を生じたときには、それを行っていきたい旨、児玉委員より提案があり全員承認した。

7) 次期大会 (第 30 回大会) の開催に関する件

次期大会開催校の信州大学の中川教授よりあいさつがあり、昭和 38 年 10 月初旬に開く予定との報告があった。

8) 運営委員の選出に関する件

従来通り、会長の推せんの方法を採用することに決定。

新 入 会 員 氏 名

(昭和 37 年 2 月～昭和 37 年 12 月)

赤 川 今 夫	東 美紗子	阿 部 義 亮	荒 木 昭 好
飯 島 睦 子	飯 田 良 治	池 田 敏 久	石 垣 清 一 郎
磯 谷 昭 一	犬馬場 晃	今 井 秀 雄	伊 従 信 子
入 谷 敏 男	上 芝 功 博	畔 野 武 重	大 沢 武 志
大 沢 康 人	大 谷 澄 江	岡 堂 哲 雄	岡 部 祥 平
岡 部 宏 行	小 串 里 子	小 熊 多 恵 子	奥 村 水 沙 子
嘉 治 瑛 子	加 藤 寛 治	金 子 泰 雄	川 口 和 男
川 島 保 之 助	北 山 雅 子	木 下 敏	久 保 田 了 平
黒 田 実 郎	黒 田 淑 子	小 阪 久 美	小 水 流 勝 行
小 館 和 夫	後 藤 倬 男	小 牧 玲 子	小 松 信 重

行雄仁年子夫弘生満璽要治郎武子子郎  
章喜和桂津卓恵忠太澄和太  
間藤取橋本勢村卓恵田原浦里崎本  
久藤白高田中西平藤堀町松三宮矢山  
佐白高田中西平藤堀町松三宮矢山

子二義茂要男敬子郎平郎基智二住  
慶美足忠祥滿文静英一博忠建真  
口喜田内井村坊方島野山永本館島根  
坂藤重関竹中中南土福星増松南八重山  
坂佐重関竹中中南土福星増松南八重山

き功子男子治夫博子雄武子夫蕃二雄郎雄  
み美助尚真隆敦久津潤久一光  
藤登本橋口妻木田井木田本橋田中田  
齊藤田本橋口妻木田井木田本橋田中田  
齊佐塩杉高豊長並原福二増松松三村山吉

昭章彦一也晋子子男吾子明郎子幸祐雄伸  
正建俊哲良公喜彰紋嘉一清武健哲  
藤間藤橋田島花崎木田岡本木井岡岡  
齊久塩進高戸長浪林広藤前松松溝村山吉

(以上)

## 第29回大会 研究発表論文抄録集

---

昭和38年9月発行（非売品）

発行者 日本応用心理学会  
会長 林 銈 藏

編集者 第29回大会準備委員  
横浜市港北区日吉町  
慶応義塾大学心理学研究室(日吉)

---

印刷所 東京都港区芝三田  
慶応義塾大学印刷部